魂を縛られし者　IS編

ルージュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魂を縛られし者　ＩＳ編

【Ｎコード】
Ｎ５８８１Ｓ

【作者名】
ルージュ

【あらすじ】
特別な魂を持った人がいたその人は死ぬことによってさまざまな世界及び時間をわたる呪いをかけられていた。そしてその人が死ぬとき新たな世界の扉が開く。・・・衝動に駆られて自分の頭の中にあったのを小説にしちゃいました。処女作の上文才もありませんが暖かい目で見守ってくださったらうれしいです（＿＿）ちなみにオリ主以外にもオリキャラを出す予定です。

序章　ひとつの終わりと新たなる始まりへ（前書き）

注意事項　今回ＩＳ関係はまったく出てきません。ただ主人公の敵を最初に書きたかっただけですのでご了承ください（＿＿）

序章　ひとつの終わりと新たなる始まりへ

とある世界のとある場所にて

荒廃し滅びようとしている世界そこにそこにたった二つの人影だけが動き回っていた

ドゴーーーーーン　ドカ　バキ　ボキ

「ハハハ、さすが○○　この滅び行く世界に残された最後のわずかな時間でワガハイをここまで追い詰めるとは流石ですね。しかし世界の崩壊を止めることはもうできませんよ？」

「・・・確かに世界の崩壊を防ぐことはもうできないところまできてしまった。だけどあなたは今ここで倒す。それが死んでいった仲間たちに託された願いであり俺に与えられた使命なんだよ～～～」

ぶつかり合う二つの人
片方はポッチャリとした体付きに黒い巨大な剣を携えた男性
もう片方は銀色に輝く長髪をなびかせて背中には3対の羽、両の手にはそれぞれ漆黒と純白の刀を携えた女性
お互いに服装はボロボロであるがまだ余裕はあるようであった。
そして再びぶつかり合う2つの影

ザシュッ

「クッ・・・流石にやりますね～～しかしその程度ではワガハイは倒せませんよ。」

ドゴ～～～～ン

「グハッ」

2本の刀が男性を切り裂くがそのお返しとばかりに男性から漆黒の球体が全方位を覆うように放たれて女性を遠くへ吹き飛ばす。
そのまま女性は地面に叩きつけられて武器を手放してしまう。

「どうやら今回はワガハイの勝ちのようですね。」

そういって男性は女性の前に降り立った。

「さて時間もないことですしワガハイの長年の目的を果たしましょ」
ドス「ナンデスト・・・」

勝利を確信した男性の胸に刺さる1本の刀

「油断大敵だ・・・そしてこれでおしまいだ～～～～」

刺さった刀からあふれ出る膨大な力
それとともに限界を迎える世界
白い光は2人を包み込みそれと同時に世界は消滅した

序章　ひとつの終わりと新たなる始まりへ（後書き）

初めましてルージュといいます。このたびはこの小説を読んでいただきありがとうございます。

今回はラスボスを出したかっただけなので意味がわからない人が多いでしょう。

今回出てきたラスボスは倒しましたが条件を満たしていないため復活する設定です。

ＩＳの世界で出てくるかはまだ未定ですが。

ラスボスの元ネタはある漫画に出てくる敵キャラですが原作よりもさらに強くなっています。まあ、詳しい人なら誰がラスボスかわかってしまう気がしますが（＾＾；）

ちなみに原作よりも色々な設定がありますが明らかにするかは私にもわかりません。

気が向いたら別な世界編でだすかＩＳで出すかですかね。

そもそもそこまで続くかどうかも謎ですが。

ちなみにＩＳ編にはあと2話ほどで入る予定です。

稚拙な文章ですが楽しんでいただければうれしいです。誤字脱字・指摘あればドンドンお願いします（＿＿）

第０話　プロローグ　（前書き）

今回は主人公がなぜＩＳの世界に行くかについての説明回なのですが一言言うならあれです・・・・・・ドウシテコウナッタ？
（文字数的な意味で）

なぜか色々書いてたら４５００字超えましたからね～
プロローグなのにこんな長くていいのでしょうかね？

まあ、それはさておき本編をお楽しみください～～（´Д｀）ノ

第0話　プロローグ

場所：？？？

「く～～～～」

すべてが真っ白な空間で1人の銀髪の少女が床？に横になり眠っていた。
となりではそれを起こそうと女性が少女を揺さぶっていた。

「いつまで寝てるんですか？早く起きてください」

「うにゅ～～誰ですか？人が気持ちよく寝ているところを邪魔するなんて、それにここはどこですか？何で私はここにいるんですか？」

そういって少女は自分を起こそうとしていた人物を見た。
目の前にいるは長い金髪を揺らして１７０ｃｍくらいの身長にでるとこはでて引っ込むべきところは引っ込んでいる俗に言う美人さんがいい笑顔を浮かべて立っていた。

「やっとおきましたか。ちなみにここは神界というところです。あなたには用事があってここにつれてきました。」

「・・・え？神界？・・・じゃあ、あなたは神様か何かですか？」

「そうです。私は神様の1人でゼウスといいます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ちょっと状況を整理させてくださいなのですよ～」

（混乱中につき口調がおかしくなっています）
「（神様？神界？しかもゼウス？どういうことですか？どうなのですか？？意味がわからないですよ～～～？？？とりあえず素数を数えて落ち着きましょう・・・1、2、3、5、7、11、13・・・）」

「あら1は素数じゃないわよ」

「ハ・・・そういえばそうですね・・・あれ？声に出てましたか？」

「いいえ、私は神様だから心をよんだだけよ。それで状況は整理できた？」

「心をよんだ？いやそもそも心読めるならまだ整理できてないってわかるんじゃ？「うん、わかってるけどあえて聞いてみた」・・・なんなんですか～～～」

・・・10分後・・・

「それで？落ち着いた？」

「ハイ、落ち着きはしましたが状況整理がまだなのでもうちょっと待ってください。・・・後くれぐれも心をよまないでくださいね。」

「OK、わかったわ心は読まないわ（というのは嘘でしっかり読ませてもらうけどねw）」

「（なにかいやな予感がしますが気にしても仕方ありませんね）
ハァ・・・（えっと記憶の最後にあるのは〇〇〇の戦いが起こる世界ですべての決着がついて世界をいざ救おうとしたときに〇〇〇〇

がなにか細工をしていたらしく世界を救う方法が逆に世界崩壊の引き金になってそのまま世界は崩壊仲間も次々に死んでいったんでしたね。そして、あの人と決着をつけるために戦って相打ちになってその後世界ごと消滅ですか。そして生きているということはまた呪いを解くことができなかったということですか）まあ結局いつも道理の転生ですか気にしても仕方ありませんね・・・ハァ・・・」

大体の状況を理解してひとつため息を吐いた少女にゼウスが話しかけてきた

「まあ、大体そんな感じねそれで本題なんだけ　チャキ「人の心を読まないでくださいって先ほどいいましたよね?神様（笑）？」ど・・・」

どこからともなく取り出した小太刀を神様（笑）に突きつける少女

「いやいや神様（笑）って何よさっきゼウスっていうちゃんとした名前教えてあげたのにそんなよｂ「人の心を勝手に読んだんですから神様（笑）で十分です」うう～～ひどいよ～〇〇ちゃん。とりあえず落ち着いてそんな物騒なものしまったしまったｗｗ」

笑いながら武器をしまうように言うゼウス
それに納得はしていないだろうが渋々武器をしまう少女

「ハア～～本題もいいですがこちらの質問にも答えていただけるとうれしいのですが？」

「仕方ないな～〇〇ちゃんは、まあ急ぐ必要もないし質問に答えてあげるよ～さあ、お姉さんに聞きたいことを言ってみなさい」

「まず一つ目ですがなぜ私の名前を知っているのですか？まだ自己紹介もしていないのに」

「それは私が神様で最高神であるゼウスさんだからだよ～～」

そういって胸を張るゼウス

「理由になっていない気がしますがまあいいでしょう。しかし、自分でもきちんと自己紹介しないと気がすまないので名前は言わせていただきます。」

「しかたないな～～まあいいよ。それでは自己紹介をおねがいします～～～～～～」

パチパチパチ

そういってゼウスは拍手をしていた

「（本当に調子が狂いますね）・・・それでは改めまして私の名前は“ユウ”といいます。よろしくお願いしますね・・・ゼウス」

「おお～～～ユウちゃんが名前で呼んでくれたお姉さん感激だよ～～よ～しハグしよう、そうしよう」

そういって飛びついてくるゼウス

スパッ

それをユウは刀で一閃した

「ひどいな～私じゃなきゃ死んでるよ～」

傷がすぐに治っていきながらゼウスは言う

「それで死なないほうが私は不思議なのですが・・・まあ、いいでしょう。それでは二つ目の質問です。なぜ私は死んだときの姿のままここにいるのでしょうか本来あのような状況で死んだ場合転赤ん坊の姿になって新しい生を受けるのですが今回は成長した姿のままなので疑問に思ったのですが？」

「それは、あれよあなたの魂が転生してしまう前に一時的に呪いをごまかして捕獲してからここによびよせてその後ある世界に転生させるためよ」

「・・・・・・・・・・・え？ちょっと待ってください前に会った神様はのろいが強すぎるから魂の状態じゃ逆に難しいから肉体ごと別な世界に移動させてことがすんだ後に元の世界に戻す方法しか取れないといっていたのですが？」

「フフフ・・・確かにそこらへんの神じゃその程度が限界でしょうが私はクラスで言ったら最高神しかも力は歴代のゼウスの中でも最強なんだよ～」

「歴代のゼウス？」

「そう、ゼウスというのは代々受け継がれる称号みたいなものなんだよ～そして今のゼウスがお姉さんなわけなのだ～」

「では呼び方はゼウスのままでかまわないんですか？」

「そうだね～ゼウスを名乗っている間は本当の名前を教えられないからね～それでいいよ～」

「じゃあ、ゼウスあなたほどの力があればこの呪いを解くこともできるんじゃ「ごめんね～、呪いが強すぎて私の力でも一時的にしかごまかせないんだ。呪いをかけられた最初期のころであれば何とかなったかもしれないけど何度も転生して呪いが強くなって言ってるからもう無理なんだ」そんな～～～（泣き）」

そういってユウは崩れ落ちていったｗｗ

・・・・・・・・・・少々お待ちください・・・・・・・・・・・・

「それでそろそろ本題に入ってもいい？」

「・・・ハイ、取り乱して申し訳ございませんでした。どうぞ本題に入ってくださいませ」

あれからしばらくたってようやく復活したユウにゼウスが本題を言い始める

「実はついこの間ある世界で１つの綻びができてしまったのよ。それはとても小さいものだったけれどもその影響でいくつかの魂がその世界に入ってしまったの」

「つまりその魂たちを回収するために私を呼んだわけなのですね」

「いえ、そういうわけではないのよ。「・・・え？今のってそういう流れじゃないですか？」実はこの話には続きがあってね。綻びができたときに一部の神が暴走してその世界に干渉できないようにした上に自分の力の一部と特殊な力を持たせた転生者数人をその世界に混入させてしまったの。」

「えっとそれってかなりまずくないですか？」

「ええ、偶然その世界に入った魂は記憶もリセットされてその世界にあった形で転生するから問題ないのだけれども、神の力は一部とはいえ世界を滅ぼしてしまう可能性があるし、力を与えられた転生者は野心や悪意を持ったものなら何をするかわからないから危険なのよ。そこであなたにはこれらが危険だと感じたら排除を行ってほしいのよ」

「内容はわかりましたし排除をすることも了承しますが大丈夫なんですか？」

「何がかな？」

「その世界には干渉できないのでしょうどうやって私はその世界に行くのですか？」

「それなら問題ないよ。私の力を使って世界が閉じる前の時間軸に1回だけなら送ることができるから」

そういってまた胸を張るゼウスであった

「そうですかなら問題ないですね。ちなみにその世界はどのような世界なのですか？」

「フフフ・・・聞いて驚いちゃだめだよ。なんとその世界は・・・・・・・通称ＩＳ正式名称インフィニット・ストラトスの世界なのだよ～～～どう？驚いた？」

「？？？それで？？？そこはどのような世界なのですか？」

首をかしげながらゼウスに説明を求めるユウ

「え？もしかして知らないの？ＩＳを？」

「はい。まったくわかりません。というか～の世界のように呼称が世界には付いているのですか？」

「ええ～～～だってユウちゃん今までリリカルなのはの世界とかで結構色々原作ブレイクしたり他の神様に頼まれて行ったりしてるんじゃないの？そういうの何度もみてきたよ？」

なのはという単語と今まで経験した世界を照合していく

・・・少女考え中・・・

「そのリリカルなのはというのはもしかして高町なのはがいた世界のことですか？」

「うんそうだよ」

「それは、私にかけられた呪いが作用しているからだと思います」

「どういうこと？」

どうやらゼウスは完全には呪いについて知らないようであった

「呪いにより私は死ぬと転生して別な世界に行くというところは理解していますよね？「うん」正確には多少違うんですよ。「え？どういうこと？」正確に言いますと死んだ場合まったく別な世界もし

くは限りなく近い世界に移動するというのに加えて同一世界の別時間にトリップしてしまうことがあるんです。そのためブレイクした世界というのは最善の結果のみが反映された世界のことだと思います。」

「そ～なのか～」

「ネタに走らないでください」

「まあ、いいやそれじゃあこれから行ってもらう世界について説明するね・・・（長いため省略）・・・大まかに言うとこんなところだね。わかった？」

「ＩＳという機械に女尊男卑という状況ですか理解しました。転生するのはＩＳ学園に生徒という形で入学するときにと考えてでよろしいですか？」

「残念ながらちがうよ～「え？」ユウちゃんにはちゃんと赤ちゃんの状態からはじめてもらいます。」

「なんでそうなるんですか～～～～」

「その理由は簡単今は呪いをごまかしてるから大丈夫だけどＩＳの世界に行くとごまかせなくなってその世界に転生したと認識されて赤ちゃんになっちゃうから。あとこれは神の力の一部や他の転生者が近くに来た場合反応するやつね」

そういってブレスレットを渡してくるゼウス

「これって転生したら消えるんじゃないですか？」

「大丈夫今のうちに渡しておけばユウちゃんの魂に記憶されると思うから」

「そういうことですか、しかしかくじつではないですよ？」

「ダメだったらそのときということでいいんじゃないかな？」

「そういう問題じゃない気がしますが・・・まあ、いいでしょう」

なにか釈然としないが無理やり自分を納得させる

「それじゃあそろそろ出発してもらうね。準備はいい？」

「準備も何も準備するものがほとんどないですけどね」

そういいながらだんだんと消えていくユウの体

「それはいっちゃだめだよ～～」

そして、完全に体が消える直前にゼウスが一言言った

「あ、そうそう向こうに転生したら特別なＩＳを用意できると思うから期待してねてね～～」

「え？それってどうい」

その言葉は最後まで続くことはなかった

そして誰もいなくなった白い空間で１人佇むゼウス

「さあ、これからこの物語がどうなるかはわからない。前と同じかも知れないし違う結末になるかも知れないだからゼウスさんを楽しませてくれる物語にしてね。ユウちゃん？」

そうつぶやいて最後の人物もその場から去っていった

後には真っ白い空間だけが残っていた

第0話　プロローグ　（後書き）

というわけで～～主人公の名前はユウとなりまして次回からいよいよＩＳの世界に突入です。まあ、学園に行くまでに幼少期を何話かはさんでいく予定です。

ちなみにゼウスさんのキャラが途中から軽いノリな状態になったのは最初から考えていたのでよかったのですが最終的に完全にＩＳのあるキャラみたくなっちゃいましたね。もうちょっと抑えるつもりだったんですが・・・

ドウシテコウナッタ？

もう書いてる途中でＩＳ編のラスボスこの人でいいんじゃないかという状況になりましたからねｗｗ
まあ、どうなるかはわかりませんがね。

ちなみに設定上この小説ではゼウスは本編でいったようにその力を示す称号のようなものです。ちなみに神とはここの小説では最初期にいた神々とその子孫は別ですがほとんどの神や天使といったものは生前人だったものが認められてなったのが大半です。当然生前とは違う姿ですがねｗｗ

というわけでゼウスさんも生前は別な人でした。
その正体はまさしくあの人なんですが正体隠すつもりがぜんぜん隠せてなかったという罠でしたｗｗ

それでは、また次回の更新でお会いしましょう。
ごらん下さりありがとうございました。（＿＿）

第1話　生誕・・・・・・・・・・ってなんであなたがたがいるんですか～～

はい、というわけで（どういうわけかはわかりませんが）
いよいよ第１話＝ＩＳの世界にやってまいりました。

しかし今回は４つくらい自己解釈と捏造と暴走をしちゃいましたｗｗ
まあ、そこらへんはあとがきで多少解説すると思います。（きちん
とした解説になるかは別ですがね）

というわけで第１話の本編始まります。

第1話　生誕・・・・・・・・・ってなんであなたがたがいるんですか～～

「・・・・・・（どうやらきちんと転生したようですね。しかも、ゼウスが言っていたとおり本当に赤ん坊の姿ですし）」

ユウが目を覚ますとどうやらそこは病院の一室のようであった。
ちなみに自分はベットの上で寝かされていたようであった。
そんな中

「・・・・・・（さて今回はどのような方が両親になるのでしょうかね？しかしなぜ生まれた直後の記憶がないのでしょうか？・・・）」

そのようにユウが物思いにふけっていると入り口のほうから男性と女性の話す声が聞こえ扉が開けられた。

「おお～、ここに僕たちの娘がいるんだね、アイリ？」

「ええそうですよ、切嗣。ですが、あの子は生まれてすぐに生死をさまよったんですからあまり大きな声を出さないでください。」

「ああ、そうだったね。すまないねアイリ」

そういいながら近づいてきてベットの上に横になっているユウを抱きかかえる切嗣と呼ばれた男性

「ああ、起きてたのかい。僕は君のお父さんだよ。そして君の名前はユウナスフィール・フォン・アインツベルンだよ。」

「オギャ～～～～～（何でこの世界にいるんですか～～～お父様～～～お母様～～～）　ゴホッゲホッ」

そこにいたのはまさしく某運命の外伝作品にでてくる衛宮切嗣とアイリスフィール・フォン・アインツベルンであった。
そのあまりの衝撃でユウの視界はブラック・アウトしてしまうのであった。
大慌てで医者を呼ぶ両親の声をＢＧＭにしながら・・・・・・・・・

・・・・・・そして5年の月日がたった・・・・・・・・・・・・

ＳＩＤＥ　ユウ

はい、皆様初めましてユウ改めユウナスフィール・フォン・アイン

ツベルンでございます。
あれから5年の月日がたちました。
いや～早いものですね～～ｗ

え?飛ばしすぎ?特に述べるようなことなんてありませんよ?
生まれてからまともに動けるようになるまでなんて書くことなんて
ほとんどありませんからね。
決して作者が書くのが面倒だったわけじゃないですよ?

（そういうことはいっちゃだめだよ～～～）

なにか変な電波を受信した気がしますが気にしないでおきましょう。

ゴホン改めてこの世界に生を受けて5年がたちました。
簡単に自分と自分の周りの状況を説明いたしますかね。

まず、お父様の名前は衛宮切嗣、お母様の名前はアイリスフィール・
フォン・アインツベルンといいます。
いや～それにしても驚きましたね。　モゾモゾ
まさか、別世界で私を生んでくださった方々がまったく別の世界で
もまた生んでくださるなんて驚きですね。　ピコピコ
この分だと他にも別世界であったことのある方に会いそうですね。

ちなみにお家のほうは普通の2階建ての一軒家です。
どこぞの武家屋敷ではないのであしからずです。　キュ～～

次に私の体について説明しましょう。
私の体は普段はいたって健康で体を動かしたり能力を使う分には5
歳児の体にしては問題はありません。　ミャ～～
しかし、時々突発的に血を吐いて倒れてしまうという原因不明の病

のようなものを抱えている。といった感じです。
まあ、力を使えば普通に体が動くくらいまでは回復するので問題はありませんがね。
さすがにその後1時間は貧血で激しい運動はできませんが。

あ、紹介が遅れましたが先ほどからモゾモゾと動いているのは、私の使い魔さんで白レッサーパンダのシロちゃんです。

え？名前が安直すぎるですって？かわいくてこの娘にあっているからいいんです。

「なぁ・・・・・ぞ、・・・・・・・ユウ・・・・」

ほかになにか説明することはありましたかね？

「お・・・てば、・・・・・ウ」

「スゥゥ～～～（大きく息を吸い込んで）　オイ、ユウさっきから呼んでるんだから反応しろ～～～～」

「ムキュ～～～いったいなんですか～～～」

ＳＩＤＥ？？？

俺の名前は織斑一夏
さっきから目の前にいる幼馴染を呼んでいるんだけどまったく反応

がないから今耳元で大声を出したところだ

「むきゅ～～～いったいなんですか～～～」

そういって目の前の少女はこちらを向く。

「さっきから俺や雪が呼んでるのに反応しないから大声を出したんだよ」

「ムゥ、呼ばれていましたか、すみません気づかなかったです。」

「それで、何を考えてたんだ?」

「いえ、ちょっと皆様に自己紹介を「皆様?」・・・いえなんでもないです。忘れてください。」

そういって普段どおりに振舞うユウであった

「（相変わらずなにかよくわからないことを言ってるな。まあ、こいつは頭いいから俺にはわからないことでも考えてたんだろう」

「一夏途中から声に出てますよ?」

「え?マジか?」

そういって驚きの声を上げる一夏

それを冷めた目で見るユウ

「ハァ、まあいいです。それで?何か用事でも?」

「ああそうだった、ユウのお母さんがそろそろお昼だから呼んできてって頼まれたんだよ」

「あ、そうなんですか。では早く行きましょうか」

そういって自分の家に向かうユウ
それを俺も追いかける。

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

ＳＩＤＥ　ユウ

一夏に呼ばれて家に帰って居間につくと見知った5人がすでに座って食事をとっていた。
各々はユウが帰ってきたのをみるとそれぞれ言葉を発した。

「帰ってきたかユウ。はやく食べないと食事が冷めてしまうぞ」

「ユウちゃ～ん、おかえり～さあ、束さんと一緒にご飯を食べようよ～」

「あ、おかえりなさいユウちゃん。早く座ってご飯食べようよ～」

「あら、おかえりなさいユウ。ちゃんと食べる前に手を洗うのよ？」

「あ～う～～」

そういわれて手を洗ってから食卓につく私と一夏であった。

最初にしゃべったのは織斑千冬さん、一夏のお姉さんで剣道がとて

も強くて家族思いのひとです。

2人目が篠ノ之束さん、千冬さんのお友達で天才さんでありお隣さんです。興味を持った人としか接しないらしいですが私はなぜか気に入られているようです。なぜでしょうか？

3人目は織斑雪奈ちゃん、千冬さんの妹で一夏とは双子の妹です。そして、私の友達一号さんです。

4人目は私のお母様です。お母様は料理が得意で私の自慢のお母様です。

最後はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。私の妹でまだ生まれたばかりですがとてもかわいいんですよ。うふふ・・・

ここから、束さんを除いて私と一夏とここにいないお父様を加えた7人が我が家の家族構成です。

さてきちんとご飯を食べて午後からはみんなで遊びましょうかね。・・・・・・吐血には注意しながらですが。

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

こうして今日も平和に過ぎていくのであった。

第1話　生誕・・・・・・・・・ってなんであなたがたがいるんですか～～

というわけで第1話から思いっきり暴走してしまった回でございました～～。
果たしてこんな調子でこれからの話持つかどうかはとても怪しいです。

それはおいておくとしましてちょっとした解説を行っていこうかと思います。

1つ目　主人公の家族について

はい、某運命から正義の味方と聖杯さんを出させていただきました。
うん、やっちゃったね。

一応他にも案あったんですけどね。色々悩んでたら急にこの3人を出して幸せな家庭を書いてみたいな～と思っちゃったわけですよ。

ちなみに3人ともプロローグにあった綻びができたときに巻き込まれた魂たちですがこの設定がこの3人に生きることはありません。

最初の案としては、オリジナルの家に生まれる
←
一夏と知り合う
←
一夏が誘拐されるときに親が庇おうとして殺される
←
力完全覚醒
←

犯人瞬殺
←
目撃してた更識の人が対暗部用暗部として育てようとして養子にって流れだったんですがこれだとなんか重いということで突如浮かび上がったイリヤさん家団欒させようかということになりました。
あまり本編で絡ませることはないと思いますがね。
あまりにも色々いわれたら最初の案に戻るかもしれませんが・・・

ちなみにこの世界には魔術的要素はないので魔術は使えません。
主人公や力をもらった転生者は別ですがね。

２つ目　織斑家の事情について

織斑家は一夏が2，3歳のころに両親がなぞの失踪をしてしまい、その直前に2人の両親が古くからの知り合いである切嗣とアイリに託したという形になっております。
養子というわけではないので千冬の要望もあり苗字はそのままになっております。

３つ目　雪奈について

はい、オリキャラです。
双子の妹をＩＳ学園に入れて一夏のハーレムを見てうらやましそうにしたり膨れたりするキャラを書きたかったから生み出しました。
ちなみにお兄ちゃん娘です。

このキャラを書くに当たっての心配点は6巻にでてきたあの人がこのポジションになるのかどうかですね。
一夏のハーレム具合を見るとあの人と和解したあとにそのままハーレムにっていうのがありそうですからね。

まあ、そうなるとしてもまだ先でしょうから今から気にしても意味はないんですけどね（笑）。

４つ目　束さんとの関係

これは、
千冬さんがアイリの家に住んでいるから千冬さんに会うためにユウの家にいく、アイリさんからユウの話を聞いて興味を持ち会いに行ってみる。はなしてみると興味が沸く要素があった。そして今に至るといった感じです。

ちなみにアイリの話を聞いているのはアイリが昔に魔術がない代わりに科学方面で色々やって天才といわれていたからです。

まあ、所詮ご都合主義ですよ（笑）。

もうちょっと詳しいことは次回更新を設定集にするのでもうちょっと詳しく書くと思います。

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました（＿）

設定集1　世界と主人公の周りのキャラについて（前書き）

今回は設定集でございます。
ご都合主義・捏造・自己解釈があります。

文才がないのでわかりにくいかもしれませんがご了承ください（＿）

設定集１　世界と主人公の周りのキャラについて

この小説でのＩＳ世界における原作までの大まかな流れ

オリキャラ及び一夏の年齢	そのときにおきた主な出来事
０歳	オリキャラ及び一夏たち生誕
２歳	一夏の両親失踪 それに伴い一夏と千冬はアインツベルン家へ
５歳	イリヤ生誕 このころから一夏は道場へ通う
６歳（小１）	箒が虐められるイベント
１０歳（小４）	ＩＳ発表ならびに白騎士事件 箒の引越し
１１歳（小５）	鈴音転入
１２歳	第１回モンド・グロッソにて千冬優勝

（小６）

１３歳　　一夏誘拐事件発生
（中１）　　第２回モンド・グロッソにて千冬一夏がさらわれたため決勝を放棄

１４歳　　千冬情報の見返りとしてドイツ軍に１年間出向
（中２）　　鈴音の転校

１５歳　　一夏試験会場でＩＳを動かす
（中３）

１６歳　　原作開始

まあ、大まかに書くとこのような感じでしょうかね？
ちなみにＩＳの発表に関しては大体
１１月に発表する→１ヵ月後の１２月に白騎士事件→束さんの影響で箒は冬休み終了と同時に転校
という感じにしました。

そして、一番悩んだモンド・グロッソ
何年おきに開催されるとか
一夏が何歳のときに誘拐されるとかがわからないのでとりあえず毎年開催という設定にしました。
本当は毎年じゃなく２年おきくらいにしたかったのですがさすがにコアを渡されてすぐにＩＳができました。
というわけでもないでしょうから、開発期間に１年、代表決定にも多少時間がかかるでしょうし、大会の会場設営その他諸々も必要でしょう。それ＋千冬が１年間ドイツに行くってのもありますからね。

さらにコミック見た感じでは一夏がさらわれたのは小学校高学年から中学のはじめまでという感じでしたから第2回を開催するには毎年の開催じゃなければまずいんじゃないか？ということになりました。

原作でもその辺まだあかされてませんので完全に自己解釈ですね。

続きましては主人公以外のキャラの設定になります。

1人目
衛宮切嗣

運命に出てくる主人公の義理の父にして魔術使いさんです。

原作との相違点は
1、この世界には魔術を使うという概念がないので固有時制御は使えませんが身体能力は訓練された軍人よりも高いです。ついでにいうと気配を消すことと射撃の腕は一流という設定です。
2、性格はどこかだらしない感じだが仕事のときは公私をきちんとわけてしっかりとした態度になる。ただし、愛妻家で親馬鹿なので家族が絡むとすぐに暴走してしまうのが欠点。

仕事は基本、護衛関係の仕事をしている。といっても対象の近くで護衛するのではなく隠れて依頼人を狙うものを始末していく感じである。

2人目
アイリスフィール・フォン・アインツベルン

運命外伝に出てくる切嗣の奥さん

原作との相違点は

1、原作のように魔術的要因は存在しないためホムンクルスではないし当然聖杯の器でもないため普通の人間である。

2、性格は原作よりも天真爛漫である。特に娘に対してのスキンシップは半端ではなく時々束と一緒になってユウや雪奈に抱きついたりしている。

3、この小説内の独自設定だがアイリはかなりの天才で色々と画期的な発明を今までしていてあの束ですら尊敬している。（天才としては束のほうが上）

4、また、この小説にはセラたちはいないので料理などの家事は普通にやることができる。

現在は専業主婦で家でのんびりと自由気ままに生活している。

アインツベルンの家は昔は栄えていた貴族だったがもう没落している設定。

3人目

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

運命に出てくる悪魔っ子

主人公の妹で5歳差である

原作との相違点は

1、アイリと同じ理由できちんとした人間である。

2、原作よりも表情豊かで活発で元気な娘である。成長した後の小学校ではなぜか突っ込み役になっているらしい（この設定に意味があるかどうかは謎である）

現在０歳
ただし将来的にはお姉ちゃん娘になる予定
一夏は優しいお兄ちゃんという立ち位置でフラグが立つ予定はない

４人目
織斑雪奈

この小説のオリキャラ２人目ただし主人公よりもはやく紹介されるのであった。

顔は千冬と一夏を足して２で割って癒し系にした感じである。
髪は黒く肩に少しだけかかるくらいである。

スタイルは将来的には千冬のようになる予定
性格に関しては家族大好きなちょっと臆病系ただし怒ると一番怖い。
なぜかネコに好かれやすい体質

好きなもの　家族　ネコ　優しい人

嫌いなもの　家族を傷つけるもの　偉そうにしている人　ネズミ

ちなみに名前は千冬や一夏のように春か秋を入れようとしたけど姉が冬だから妹は季節つながりにしようと思って、冬といったら雪でしょうとなって語呂がいいから雪奈にしよう。という感じで決まりました。
ちなみに私は名前をつけるとき意味をあまり気にせず言いやすさと直感で決めていますので適当になるときがあります。

５人目

織斑千冬

原作からほとんど変更なし
あえて言うならアイリの説得によってブラコン度が下がった変わりにシスコンが新たに加わった

6人目
織斑一夏

こちらもほとんど変更がなく守りたい対象が増えたためその思いが原作より増した感じです。

7人目
篠ノ之束

またまたこちらもあまり変更なし
あえていうならアイリを尊敬していて千冬に会うために色々話をしているため興味対象が少し多いくらい。
それでも興味のないものに対しての態度は薄いですが。

第1話での束の興味度は
箒、千冬、アイリ＞ユウ、一夏、雪奈＞両親＞＞＞＞（越えられない壁）＞＞＞＞＞＞＞＞その他
といった感じです。ちなみに一夏たちに関しては千冬の兄妹だからといった感じです。
私としては箒のイベントがあってから一夏は箒が好意を持った子として束に興味もたれた気がしたので。

原作開始直前だと
箒、千冬、アイリ、ユウ、一夏、雪奈、イリヤ＞＞＞＞両親＞＞＞

＞＞（越えられない壁）＞＞＞＞＞＞＞その他

といった感じですかね。

３人とも箒の友達として興味を強く持ち始めたって感じです。イリヤは箒が妹のように接したため同じく興味を持ったという設定です。

ＩＳに関しては本編で出てきたときにという感じで紹介していくとお思います。

設定集1　世界と主人公の周りのキャラについて（後書き）

以上設定集第1弾をお送りいたしました。

どうも皆様作者のルージュでございます。

今回の設定はかなり無理やりな上に色々おかしいですが多少なりとも読者の皆様に伝わっていてくれたらうれしいです。

いや～前書きにも書きましたように文才がない上に加えて全部頭の中で考えてることですので文章にするのって大変なんですよね。

特にオリキャラ設定とかが・・・・・・・・・・

とりあえず今のところ書く必要がある設定はこれくらいですかね？

何か忘れてる気もｓ　ガシャ～～ン・・・なんですか？いったい？

？「何の設定が書き終わったのですか？私のこと忘れてますよね？そこのところしっかりと説明していただきたいものなんですが？」

ルージュ（以下ル）「あ・・・・・・、ハハハ、ナニヲイッテルンダイ？ユウチャンソンナコトアルハズガナイジャナイカ・・・ハハハ・・・」

ユウ（以下ユ）「今、『あ』って言いましたよね。やっぱり忘れていたんですね？そうなんですね？」

ル「ちがうよ？オリキャラは後に回そうと思っただけだよ？ほんとだよ？」

ユ「ではなぜ雪奈の説明はあったんですか？」

ル「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ユ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ダッ　あけられた穴から逃げようと走るルージュ

バッ　しかし回り込まれた

ユ「残念ですが逃がしません。そしてお仕置きです」ニコッ

そういって糸を巻きつけてくるのであった

ル「あれ？切れない？何で？」

ユ「それはそうですよだってアリシアの糸ですもん」

そういって手甲を装備してそれに雷をまとわせていくユウ

ル「ちょっとそれは洒落にならないんだけどユウちゃん？」

ユ「大丈夫ですよ。マリアの力で直しますから。では、行きますよ？右腕装填　雷帝・ヴォルト・千の雷　融合そして開放　雷極の閃撃～～～」

ドガラシャ～～～ン

ユ「さてすっきりしましたね。というわけで次回は私についての設定です。よろしければまたごらんになってくださいね」

設定集2　主人公設定　11月9日色々追加（前書き）

今回は設定集第2弾オリキャラよりも紹介の遅れた主人公編です。

11月9日追記
守護者の部分削除
能力に関して伝えたいことが書かれていなかった可能性あるので色々修正
武器追加
他色々追加

設定集2　主人公設定　11月9日色々追加

オリ主設定

名前：ユウナスフィール・フォン・アインツベルン（ただしこれはＩＳの世界での名前であるため他の世界では変わる）

他人からの呼ばれ方：ユウ・ユウナ・ユナ・ユニャｅｔｃ・・・

容姿：銀の髪にきれいな顔立ちに細い手足、抜群のプロポーション・・・・・簡単に言うとリリカルなのはＡ's に出てくる初代リインフォース。

違いは目の色が左目が赤で右目が紫である点

ちなみに現在は髪が銀色だが一番最初に生まれたときは黒髪だった。

髪の色が変わっている理由は、魔力の一部が髪に蓄積され反応が起こっているためである。

そのため、髪に宿った魔力を使いきったり髪に対して封印が施されてしまうと髪の色は黒に戻る。

本編における

通常時の性格：冷静で物静かだが表情がないわけではなくよく笑ったりする。

驚いたりするとなぜかかわいい叫び声をあげる。例：「むきゅ」「にゃ」等・・・

かわいいものが好きでかわいいものをみると時々暴走する。

口調は「私」

戦闘中は敵には容赦はせず攻撃的になる。力を完全に解放し

て戦闘を行うと口調が「私」から「俺」になる。
　開放しなくても口調は変化します。

趣味：鍛錬、読書、かわいいものの収集

好きなもの：家族、かわいいもの、人形、仲間

嫌いなもの：呪い、家族と仲間に手を出すもの、害虫、G

この小説の主人公。
ある世界で普通に生活していたが、その世界を守るべき存在がある人物によって負の感情を異常に与えられたことによって破壊の化身となってしまいそれによって起こった世界崩壊に巻き込まれて死亡。
（負の感情を与えた人物は、世界崩壊にまで自体が発展すると思っていなくあっさりと消滅）
本来であれば、そのままその世界の他の魂と同じように、世界を破壊した人物によって魂ごと吸収されるはずだったが、魂がそれを拒絶。さらに自分に親しい人の魂を取り込み融合してしまった。
そのため、世界を破壊した人物はその魂に興味を持ちいつか自分がより強大になった時にその魂を吸収できるようにと永遠に魂が初期化しない呪いと死ぬたびに世界を渡る呪いをかけられた。
すでに転生した回数は万を軽く超える。

ちなみに不老である

ちなみにこの小説では死ねば神や天使になる素質を持った魂は神界に行き神になる試験を受ける。
普通の魂であれば天国に行き魂を初期化されて新たな世界に新たな生を受ける。

矯正が必要と判断された魂は地獄に送られて矯正させられた後に魂を初期化されて天国に送られる。
このとき天国において極稀に初期化に不具合が生じた魂は転生後前世の記憶が残っていたりする。
ちなみに転生者が発生する原因は他の小説のように神の手違いや面白半分によるものである。
その場合転生者の魂は転生先で死んだ後に善か悪かに分けられ善は天国で悪は地獄の送られた後に初期化されて生まれ変わる。
このとき悪ふざけが好きな神の元に送られた場合また転生される可能性がある。

ちなみに神のランクは
創造神（１人）＞絶対神（神界・天国・地獄に各１人の計３人）＞最高神（１０人）＞最上級神（１０人）＞上級神（３０人）＞中級神（１００人）＞下級神（たくさん）＞天使（いっぱい）
という形になっている。これは完全実力主義で実力さえあれば下位の神が上位の神を倒してランクを入れ替えることができる。
絶対神以下はたびたび入れ替えが起こっているが創造神のみ今まで１度も入れ替えはおきたことがない。
主人公の呪いをごまかせるのは実力により多少異なるが大体最高神のＴＯＰ３より上くらいからである。ちなみに創造神でもかけた相手が強大すぎるのと年月がたちすぎて強固になったため呪いは解けない。

呪いの解除条件はかけた本人を倒すことだと思われていたが倒しても開放されず、逆に倒しても別世界で何度も現れる。

今でこそ表情豊かだが転生を繰り返してしばらくたったころには絶望のふちにたっていたりもした。しかしそれもある人物の一言によって救われて今では「今を生き続ける」ために前向きに進んでいる。

呪いによる転生先に関してはランダムであるため、ほとんど似たようなパラレルワールドのときもあれば時間を逆行してしまうパターンに加えて極稀にトリップしてしまう場合などがある。
例：なのはの世界でいえば、パラレルワールドはなのはに双子の姉がいたりアリシアが生きていたりなどである。
　時間逆行に関してはなのはに双子の姉がいる世界に転生したとする。そのときの立場が一般の家に生まれたとすると時間逆行した場合、同じ立場で逆行する場合と逆行前と全く違う立場で逆行する場合の2パターンある
　他にも上と同じ状況のパラレルワールドでも以前と違いはやての姉として転生する場合もある。
　また同一世界上に別時間軸の『ユウ』が同時に複数存在することもある。

能力解説

『あらゆるものを習得し魂に刻み付けて改造する程度の能力』（仮）

東方風な名前なのは、いい名前が思いつかなかったから。そのうち変えるかもしれない。
詳しい説明をいうとそれぞれの世界特有の力を実際に体験することによって習得しそれを魂に刻むことによって本来その力が使えない世界でも使うことができるようになる。
例外として魂のみの存在のものの同意の上で自らの魂の中に封じ込めそのものの力を使ったり共に数多の世界を渡ったりすることもある。
ちなみに技術に関しては関してはこれに含まない。
簡単に言うとネギまの魔法を他の世界で使うにはその世界の魔力の運用方法を魂に刻む必要があるが呪文自体は1度覚えれば転生して

も再び練習等をすれば使用可能になるため魂の容量は使わない

ただし、これにも欠点が２つあり、１つ目はその名のとおり１度自らで習得しなければ魂に刻まれない。

例：写輪眼を他の世界で使うには一度ＮＡＲＵＴＯの世界で手に入れなければ他の世界で使えない。この場合はうちは一族として一度でも生まれるかカカシのように分け与えられなければならない。

２つ目は魂に力を刻む為にはある一定の魂の容量が必要であることである。その容量も刻み込む力によってバラバラである。容量がいっぱいのときに新しい力を入れようとするとそのとき持っている力を消して容量をあけなければならない。しかも一度消してしまうともう一度その世界に行って手に入れる条件を満たさなければならない。

（どこの世界のどの時代にどのような立場で転生するかはランダムなのでまた手に入るとも限らない。）

後半の改造に関してはそのまま手に入れた力を改造できる。ただし、改造度によってその分容量を使う。

例：ただの刀に対して炎を付与したり切れ味をかなり上げる。

魂の容量に関しては死ぬたびにほんの少しづつだが増えていく。

ちなみに現在の魂の容量はある能力？人物？が８割くらい占めている状態です。

その他の力

主人公は普段から自身にリミッターをかけている。また、そのリミッターは0~8に分けられている。
リミッターによって制限しようがかけられているのは、魔力・気・霊力・妖力・神力（以降5式）・使用可能な能力である。
リミッターは1つはずすごとに使用可能な能力の開放・5式のランクが上がる。
リミッターをはずす条件は自身の体を自らの手で傷つけて流れる血を使用して開放する。そのため敵に与えられた傷によって流れた血は使えず開放するとき隙ができる。
それぞれの力を個別に封印することも可能
さらにそれぞれの力は別な力に変換可能

例：気を魔力に変換等ただし神力のみ別なものに変換できるが他の物を神力には変換できない
　変換比率は神力以外は1対1の変換だが神力のみ神力を変換に1使用すると100倍になって他の力へと変換させる

それぞれの使用用途等
魔力：なのはやネギまなどに出てくる魔法全般に使用。テイルズの魔法もこちら
気：主に身体強化に特化、『居合い拳』や『神鳴流』に使用。ハンターハンターでいうオーラに該当
霊力：『斬魄刀』『鬼道』、他霊に関することに使用。ブリーチや東方の霊力と同等
妖力：妖怪が使用する力。東方のあれと同等。現時点で変換以外に使用用途が作者に想像できない唯一の力
神力：神に関することに使用する。神聖な儀式等に使用。

普段は4段階目くらいでとどめている。

６段階目以降を開放すると１段階ごとに背中に余剰分の力が１対づつ羽となって現れる。
そのため６段階目以降は戦闘中にしか開放しない。

ちなみに現在はゼウスによってほとんどの能力を封印されている。
現時点で使えるのは一部の武器と眼の力の一部のみリミッターも解放できない。
ちなみに普段のリミッターは２で固定。（ただし後書内では制限なし）
ある方法で力の開放はできる。

それぞれの封印による能力の制限
０：魔力・妖力・神力のみ完全に封印されているためこの状態だと強制的に黒髪になる。
　気・霊力は人並みで使えるのは身体強化くらい
　数値にすると魔力・妖力・神力が０、気・霊力が１０００

１：５式すべてが使用可能になる。ただしその容量は少ない。
　解析眼の使用可能

２：精霊の実体化が可能になる
　守護者の顕現可能（ただし戦闘までは不可能）

３：武器の顕現可能（ただし特殊能力使用不可）
　１７騎士の使用（ただし憑依のみ）
　斬魄刀の使用可能（始解のみ）

４：１７騎士の使用（武装顕現まで）
　すべての眼の使用可能
　守護者の完全顕現可能

5：武器の真名解放可能
　17騎士の完全使用可能
　斬魄刀の卍解まで使用可能
　十刀の憑依ならびに顕現可能

6以降は各能力の効率化ならびに威力上昇、各容量の増加のみ
さらにユニゾンすると1人に付きその時点での各容量が倍加していく
3人全員とユニゾンすると2×2×2で8倍

今までに行った世界（簡略版）

リリカルなのは

1回目・古代ベルカ時代に初代聖王として誕生。夜天の書・蒼天の書・アギトを製作。その後死去。その後夜天の書改悪ならびに暴走
2回目・古代ベルカ時代最後の聖王オリヴィエの生きた時代に転生。各王ならびにイレギュラーと交戦。その後死去
3回目以降・原作突入。原作の時代を中心に何度も転生済み。この時代にランスロット製作。以下略

その他の世界

まだ秘密

使い魔設定

シロちゃん

シロレッサーパンダでこの作品に出てきた使い魔1号。
サイズは手のひらサイズでよくユウの頭の上に乗っている。
能力は回復系や防御系を使う。
ちなみに、しゃべることはできないがユウと意思疎通は可。
本編に中々出番を作れない子。
理由：寮のため

デバイス設定

ランスロット

ユウがなのはの世界で作ったインテリジェントデバイス。
性能はかなり高く情報処理能力はデバイスの中でも最高クラス。
マスター思いだが心配性すぎるのがたまに傷、性格はユウと一緒にさまざまな世界を回ってきたことによりかなり人間くさくなっている。
武器の状態は3つのモードが存在するが他の力と被るためめったなことでは使わない。
形態は手甲・杖・大剣の3つ
特殊技能である『エンゲージ』を行うことによって魔力が切れるまで人型になることができる。
人型形態は金髪で出てるところは出て引っ込んでるとこは引っ込んでる。
最近の使用法は武器よりも人型での情報処理のほうが多い。

使ったことのある能力

千の雷
ネギまの魔法。雷系では最強クラスの魔法である。その威力はあたり一面を焦土と化してしまうほどである。

失楽せし楽園
ネギまにおける闇のオリジナル魔法
放たれた一撃はすべてを飲み込み消滅させる

闇の魔法
ネギまの魔法。自らの体に魔法を取り込み取り込んだ魔法によってさまざまな効果が発動する。
闇の眷属以外が使うと闇に飲み込まれる可能性がある。
ユウの場合は1回制御に失敗して死亡した後闇の力を手に入れて再び使用したところ暴走はせずに完全に制御することができた。

雷華闇姫
闇の魔法で『千の雷』と『雷華闇姫』を両手両足に装填した闇の魔法。
特性は完全雷化と闇化が可能

巨神殺し?
巨神殺しに闇の属性の力をこめたもので槍の先は3つ又に分かれている

咸卦法
魔力と気を融合させた究極技法本来は反発するがユウの場合反発させないが威力は従来のものより上

貫殺・居合い拳
本来は握りこぶしで放つものを突きの形にして放つことにより殴る
よりも抉ることに重点を置いている

咸卦法・無の型
ユウが使う5種類の力を融合させたもの
出力はかなり高いが燃費がとてつもなく悪い

神鳴流奥儀～～～参の太刀
自らの気を圧縮することにより空間内のものに放った奥儀の特性を
叩き込む
また弐の太刀に似た特性も持ち対象外のものは空間外に弾かれる

神鳴流奥儀　四（死）の太刀
参の太刀のように気を極限まで圧縮し放つ奥儀
陽と陰、そして終の3種類存在し
陽は最初広範囲に展開しそこから一気に収縮し空間内の敵を圧殺する

陰と終はまだ秘密

その他多数

特殊な眼の力
共通点はすべて魔力を消費すること

解析眼
使用時は眼の色が白くなる左右どちらの眼でも使用可能
その眼で見たものの情報を瞬時に理解できる
魔力の消費量はほとんどないに等しい

天照
使用時は左目が黒くなる
すべてを燃やす黒炎を任意の空間に出現させる
ただし若干のタイムラグがあるため勘のいいものならかわすことができる
原作ほど眼に負担はかからないがそれでも連続で使用した場合眼から血が流れる
魔力の消費量はかなり高い

イザナミ
自分にとって不利な事柄を夢としてなかったことにできる
使用すると両目に縦に1本左右から斜めに2本の線が入る
1度使用すると3本あるうちの1本が消えすべて消えると失明してしまうため両目あわせて6回しか使えない
使用回数は原作より増えたが効果の適用時間はわずか15秒にまで減ってしまった

斬魄刀

神槍
つかさどる属性は“無”
始解形態は原作と変わりなし
卍解形態では原作において語られた嘘の能力と本来の能力が合わさ

った形になり完全に『最速の斬魄刀』となっている

斬月
つかさどる属性は“闇”
刀の形は変わらないが“月牙天衝”は最初から黒く闇の属性を纏っている

武器（というよりも宝具に近い）

アラストール
身の丈ほどもある巨大な太刀
真名を解放すると自身の体を炎としあらゆるものを燃やし尽くす

雛桜
上から下まですべてが漆黒の刀で妖刀である
元はとある2本の刀が融合したもの
その特性は使用者の力を吸い取り威力を上げていくもの

白蓮
雛桜とは対照的に上から下まですべてが純白の刀で退魔刀である
こちらもとある2本の刀が融合してできたもの
その特性はあらゆる魔を断ち切る力

守天
形状はナイフで魔力をこめることにより盾を発生させることができる
また、魔力をこめると量に比例して最大１００にまで分裂する。
これらは自由自在に動かせて複数同時盾を発生させることにより強度が上がる

双銃　必中せし魔銃　すべてを貫きし魔銃

黒と白の2種類の魔銃
撃てば必ず当たる魔銃とあらゆるものを抉っていく魔銃

罪姫・正義の柱（マルグリット・ボワ・ジュスティス）
通称マリィ
触れたものすべての首を落とすといわれた少女
この作品では切れ味と強度が高く自由に顕現できるようになっている
創造などの使用は可能
形状は右腕から生える巨大な刃

破慟弓　フェイタル・アロー
左腕にくっつく形で現れる弓
真名開放時の特性は装填したものを3倍の速度で打ち出すものである
装填可能なものは普通の矢から魔法などのものまで何でもおk

他に2種類あり
1つは武器ではない

17騎士

元ネタは「私の救世主様」あちらでは13騎士だったが新たにオリジナルの4騎士を追加
詳細が不明な騎士は名前、能力にかなり捏造あり
使用方法は自身に憑依させて使役するのと武器化して使用する2種類ある。
ただし一部の騎士は別である

聖母マリア
癒しをつかさどる女性の騎士。他人の傷を徐々に治すことができる。
また、1日1回限定の完全修復が可能だがそのときにその時点の残
っている5式をすべて消費してしまう
さらに原作のように死者に対して使用者の命を分け与えることで蘇
生することができ　　る。
自分を治すときは顕現させ他人を治すときは憑依させる
対になる騎士は預言者

白師アリシア
技をつかさどる女性の騎士。武器化のみ可能。
憑依はできないが顕現は可能
使用すると手に純白のグローブが現れて布や糸を出すことが可能。
布は主に防御に糸は攻撃に使う。また、魔力をこめればこめるほど
長さと強度が上がる。
対になる騎士は黒師

黒師ミュール
力をつかさどる女性の騎士。武器化のみ可能
憑依はできないが権限は可能
使用すると手甲が両手に現れ足には黒いロングブーツが装着される
自らの体の重さや触れたものの重さを変化させることにより一撃の
威力に優れる
対になる騎士は白師

雷帝イシュテルテ
雷をつかさどる男性の騎士。両方の使用が可能。
その名のとおり雷を自由自在に操れ広範囲に使用できる。

武器の状態は雷をまとった剣。憑依と違い一点集中による雷の使用が得意。
対になる騎士は炎帝

精霊について・・・ほとんどテイルズ・オブ・シンフォニアから一部精霊に能力と属性の捏造あり

雷の精霊ヴォルト

雷の化身で帯電した球体に大きな眼がついた姿をしている。

設定集2　主人公設定　11月9日色々追加（後書き）

ル「以上ユウちゃんの設定になりました」

ユ「なにか設定が色々抜けてないですか？」

ル「実は書いてる途中でめんどうｎ　チャキ　ごめんなさい～～嘘ですからそんな物騒なものしまってください～～（泣）」

ユ「それで本当の理由は何ですか？」

ル「本当のことを言うと書くことがありすぎて大変だったから省略した」

ユ「何ですかそれは・・・」

ル「とりあえず、新しく出てきた能力や技は最初はあとがきのほうに簡単に書いてそのうちまとめて設定集のほうに書いていく予定です。」

ユ「それならば、今回はいいでしょう」

ル「というわけで今回はここまでです。次回は本編になります。」

ル・ユ「「それでは次回もごらんください」」

第2話　一夏誘拐事件　前編（前書き）

今回は一夏誘拐のお話です。
それではどうぞ～

第2話　一夏誘拐事件　前編

ワァァァァァァァァ

『勝者　織斑千冬』

歓声が上がり1つの戦いに決着がついたことを示すコールが叫ばれる。

戦いの舞台は、第2回モンド・グロッソ。
その中の総合部門の準決勝が今終わったのである。

モンド・グロッソとは、毎年、２１の国と地域が参加してＩＳ同士で戦いを行う世界大会である。
総合部門の名が指し示すとおり、格闘部門などさまざまな部門に分かれている。

また、ＩＳとは3年前に天才篠ノ之束によって製作され、とある事件をきっかけに世界中にその存在を知らしめたマルチフォーム・スーツである。
その性能は、本来宇宙空間における活動を目的として作られたものであるにもかかわらず当時現存していた兵器をはるかに凌駕する圧倒的な物である。

また、ＩＳのコアは原則として開発者である篠ノ之束にしか作ることができず、その数もある時期を境に開発をやめてしまったため世間には４６７しかコアは存在していないと思われている。

Ｓｉｄｅ　ユウ

どうも皆様ユウです。

今目の前では千冬姉さまが相手を倒して決勝進出を決めたところです。

それにしても早いものですね～、ＩＳが発表され早３年の月日がたちましたからね。

え？前回から時間が飛びすぎじゃないか？ですって？

いいじゃないですか別に。・・・・・ダメですかわかりました。

簡単に起こったことについて説明しましょう。

まず最初に述べるとしたら、私が小学校に上がってすぐに篠ノ之箒ちゃんとお友達になったことでしょうかね。

あ、箒ちゃんはその苗字からもわかるように束姉さまの妹さんで私と同い年の娘です。

友達になった経緯としましては、箒ちゃんが男子にいじめられてたところに一夏が乱入しそこに雪奈ちゃんによばれてやってきた私も加わっていじめっ子達を撃退したのがきっかけですね。そのときに、私が血を吐いたりして別な騒ぎにもなりましたがそれもいい思い出

です。

［血を吐いたことをいい思い出の一部として扱えるマスターがある意味恐ろしいのですが・・・］

［もう慣れてしまいましたからいいんですよ。］

ちなみに今の念話の相手は私のデバイスであるランスロットのランです。

とても優秀でいい子なのですがちょっと心配性何ですよね。

ちなみに形状は桜の花びらの形をした髪留めで前髪に止めてあります。

次に起こったことといえばＩＳの発表と白騎士事件それに伴う篠ノ之家のお引越しですかね。

ＩＳの発表は箒姉さまが作った新しい発明ですね。

その後起きた白騎士事件とは、なぜか日本周辺に存在するミサイル発射施設のコンピューターがハッキングされてしまい日本に２３４１発以上のミサイルが発射されてしまい、それを白騎士といわれるＩＳがほとんど撃墜した上にその後現れた大量の軍事兵器までも撃墜したというものです。

この事件によりＩＳの関心度は上がりました。

まあ、状況的に誰がハッキングして誰が撃墜したかは予想できますけどね。

そして、その後束姉さまは各国にＩＳのコアを渡して失踪。箒ちゃ

んたちも名目上は保護という形で政府によって引越しその後監視状態にされました。

ちなみに束姉さまに失踪前にペンダントを渡されましたがこれは何なのでしょうね？ランに解析してもらおうにも解析できないですし、まったくのなぞです。まあ、きれいですし気に入ってますけどね。

他に起こったことといえば新しく転入してきた子と友達になったことですかね。

新しく友達になった子は凰鈴音（ファン　リンイン）ちゃんです。私は鈴ちゃんと呼んでいますね。箒ちゃんと入れ替わりで転入してきたのですが私や一夏たちともすぐに仲良くなりました。

それと彼女の家は中華料理屋だったのでよく家族みんなで食べに行ったりもしています。

大体今までのことを簡潔にまとめるとこんな感じですかね。

今はモンド・グロッソ総合部門の準決勝を家族みんなと鈴ちゃんで見て家に帰るところです。

「やっぱり、千冬姉は最強だなこのまま明日の決勝もきっと勝ってくれるぜ」

「そうだね～。お姉ちゃんならきっと明日も勝ってくれるよね」

「確かに千冬さんは、強いわね。けど、相手も決勝に上がってくるほどの実力者なんだから勝てるとも限らないんじゃない？」

「まあまあ、鈴ちゃん確かに相手もここまで上がってくるほどの実

力者だけど私たちは私たちで千冬姉さまが勝てるようにがんばって応援しましょう？」

「う・・・。そうねユウの言うとおりしっかり千冬さんを応援しないといけないわね」

そういってみんなで千冬が明日勝つことを信じてそれぞれの家路についていくのであった。

Ｓｉｄｅ　ＥＮＤ

次の日

「ほら一夏早くしてください。もうみんな会場についているころですよ。」

「もうちょっとまってくれ、もう少しで準備終わるから」

「はぁ～～、何でこんな日に限って一夏は寝坊するんでしょうかね？しかもお母様たちは私に一夏を押し付けて先に行っちゃいますし。はぁ～面倒です。」

そういってため息を吐くユウ。

普段であればこういうときにランあたりが念話で話し相手にでもなるのだが今日に限っては雪奈が間違ってつけていってしまったため今はいない。

そうこうしているうちに一夏が準備を整えて家から出てきた。

「お待たせユウ」

「遅いんですけど？それに早くしないと決勝始まっちゃいますよ？」

「それは、平気だろ。決勝の前に3位決定戦もあるし決勝自体昼からなんだから」

ちなみに現在の時刻は朝１０時。
試合開始時間は3位決定戦が１１時から決勝はお昼をはさんで1時からである。

「だからといって遅れていいわけではないでしょう。みんなで千冬姉さまを試合前に激励しようって言ったのは一夏なんですよ」

「だから、寝坊して悪かったって謝るからはやくいこうぜ」

「仕方ないですね。それでは早く行きましょうか」

そういって一夏とユウは歩き出す。

そうしてしばらく歩いていると目の前に急に黒服を着た男性が数人現れ2人の行く道をふさいでいた。

そして、その中の先頭に立つ人物が最初に口を開いた。

「君が織斑一夏君かね？」

「そうだけど、あんたたち俺に何か用か？」

そういいながら警戒する一夏とユウ。

「わけあって私たちの正体を明かすことはできないが、目的だけは告げておこう」

「目的？」

「そうだよ。私たちの目的は織斑一夏君、きみだよ。抵抗せずに一緒についてきてくれるというならそちらの彼女ともども命の保障はしよう。」

そういって2人に近づいてくる黒服たち

「（どうするユウ？このままだとどこかに連れ去られてどうなるかわからないぞ）」

「（そうですね。このままだとまずいですから私が隙を作りますからその間に路地に逃げ込みましょう。そうすればこちらに地の利がありますし警察に連絡することもできます。）」

「（わかった。ごめんななんか巻き込んじゃったみたいで）」

「（大丈夫です。それに家族なのですから気にしないでください）」

そういって小声で相談する2人にだんだんと近寄ってくる男たち

「では私たちと一緒に来てもらおうか？お二人さん」

そして男が手を伸ばしてきた瞬間

バタン

ユウは相手の手をとりそのまま投げたのであった

そのことにしばし呆然とする男たち

「今です。一夏逃げますよ」

「おう」

そういってすぐに反対方向に駆け出そうとする一夏とユウ。このままうまくいけば逃げ切れるであろう。

・・・・・ただしその場にイレギュラーが現れなければだが・・・・・

ヒュウン

駆け出そうとした2人の目の前に突如謎の青いＩＳが現れる

「まったく、お前たちはたかが子供2人満足に捕まえられないのかい？」

「申し訳ありません、まさかたかが子供に投げられるとは思っていなかったもので」

そういって再び2人を包囲する男たち

「なぜここにＩＳが？・・・まさか最初から上空で待機していたと

いうんですか」

「そうだよお嬢ちゃん。まさか、わたしが出てくる必要になるとは思わなかったけどね」

そういって不適に笑う目の前のＩＳ操縦者

「そういうことで、いい加減おとなしくつかまってくれないかね？まあ、そっちのお嬢ちゃんは無傷で連れて行くってのは無理だがね」

「（ユウ、こうなったらおとなしくつかまるべきなんじゃないか？さすがにＩＳには勝てないだろう）」

もう無理だと考えあきらめようという一夏。それに対してユウは

「（確かに普通であれば投降すべきですが、私はまだあきらめたわけではありません。なので一夏は私がこれから何をしても抵抗しないでください）」

「（え？ユウなにをするつもりだよ？）」

「（こうするんですよ）残念ですが一夏はともかく私は身の安全がすでに保障されていないので抵抗させてもらいます・・・よ」

シュッ

そういって袖からナイフを取り出しＩＳに向けてそれを投げつける。

「そうかい私もそう簡単にことが進むとは思ってないよ」

そういって投げられたナイフを展開していた剣ではじく相手
その瞬間にはユウはすでに敵に接近して両手にナイフを持って切りかかっていた
それを相手は右手の剣と左手のＩＳの装甲で防ぐ

「チッ・・・なんて速さだい一瞬で接近するなんてやるじゃないかお嬢ちゃん。あんたたち手を出すんじゃないよ」

カンッ　キンッ　カキンッ

音を立てて何合も打ち合い続ける両者。
その姿に周りの人間は見とれていた

「クッ　さすがＩＳそう簡単に落ちてくれませんね。（かといって今の状態じゃ使える力も限られていますからこのままじゃジリ貧です）」

「お嬢ちゃんもやるじゃないか近接武器しか使えないとはいえＩＳ相手にここまでやるなんて」

そういいながらも打ち合い続ける両者
それはいつまでも続くかと思われたがその戦いは唐突に終わりを迎えた

ゴプッ

そう音を立ててユウの口から漏れ出る血の塊

「そんな・・・このタイミングで・・・」
血を吐き出したことで動きが一瞬止まってしまう
当然それを相手が見逃すわけでもなく
「何か知らないけどチャンスのようだね。くらいなお嬢ちゃん」
ザンッ
相手から放たれた一撃がユウを左肩から斜めに切りつける。
血が飛び散り首からかけていたペンダントも一緒に砕け散る。
「あ・・・・・・」
そういって倒れ伏してしまうユウ
「ユウ～～～～～～～～～～～～～～～～」
自らの名前を叫ぶ一夏の声を聞きながらユウの意識は闇へと沈んでいった。

第2話　一夏誘拐事件　前編（後書き）

というわけで今回はここまでです。

いきなり主人公やられてますがおきにせず～

今回は、一夏誘拐について書きましたが一夏を亡国機業がなぜ誘拐したかは謎なのでそこらへんは飛ばして主人公のＩＳ登場まで次回書く予定です。

主人公のＩＳについては考えていますが普通じゃないです。
原作入れば普通のも出しますが次回は普通じゃないです。
大事なことなので2回言いました。

かなりの捏造入るので本来のＩＳではこんなこと絶対ないと思います。

一部ネタバレをいうと主人公の一部がＩＳとして顕現します。
見た目もＩＳには見えないです。
さらに今回ユウが死にかけになってるのも関係しています。

ではまた次回出会いましょう。

以下今回出た主人公の力　簡易表記版

ランスロット（デバイス）ユウが造ったデバイスの一体

守天　今回使ったナイフで魔力をこめることにより盾を発生させることができる。

また、魔力をこめると量に比例して最大１００にまで分裂する。

これらは自由自在に動かせて複数同時盾を発生させることにより強度が上がる

第3話　一夏誘拐事件　後編　終結そして覚醒（前書き）

今回もご都合主義全開でお送りいたします

それではどうぞ

第3話　一夏誘拐事件　後編　終結そして覚醒

Ｓｉｄｅ　一夏

今目の前でユウが、相手のＩＳにきりつけられて崩れ落ちていったそれを俺はただ眺めているしかできず気がつけばユウの名前を叫んでいた

「ユウ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～」

そうして叫んでいるところに黒服の男たちが周りを囲んで俺を捕まえ口を塞がれる

それと同時にさっきまで戦っていたＩＳ操縦者がＩＳを解除してやってくる

「ふぅ、危なかったね。お嬢ちゃんに決定的な隙ができなきゃやられてたかもしれないね」

「それほどだったのですか？あの少女は？」

「ああ、それほどお嬢ちゃんは強かった。まあ、それは置いておいて早くここから離れるよ。さっきの声を聞いて誰かがくる可能性があるからね」

「わかりました。目的の人物は手に入れたことですしね。ところで今倒した少女はどうします？」

「そうだね、まだ息があるみたいだし一応連れて行こうかこの戦闘

力思わぬ拾いものだろうしね」

「了解しました。〇〇様」

「応急手当は忘れるなよ?そのまま生きてるんだったら色々とその子自身にも使いようがあるからね」

そういって部下と思われる人物に回収されるユウ

そしてそのまま俺とユウは車に乗せられてどこかに連れて行かれた。

Ｓｉｅｄ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　???

一夏とユウが連れ去られた後近くの茂みが揺れ白い影が飛び出した

?「キュ〜〜〜」

その白い影は一声だけなくとその姿に似合わないスピードで駆けていった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　千冬

今私の前には一夏とユウを除いた家族が揃っている。

「いや～とうとう決勝だね。千冬ちゃん緊張してないかい？」

「いえ前にも一度経験してますのでそこまでの緊張はないですよ、切嗣さん」

「そうかい？ならいいんだけどね。こういう時大事なのは平常心だからね」

そういって気遣ってくれる切嗣さん
そして私はふと疑問に思ったことをたずねてみた

「はい、わかっています。ところで一夏とユウの姿が見えないのですがどこにいったのですか？」

「あの子たちはね、一夏君が寝坊しちゃったからユウをお目付け役としておいてきたのよ」

そういって微笑むアイリさん

「そうなんですか。まあ、ユウがいれば多少の問題は大丈夫でしょうね」

「まったく何でこんな大事な日に一兄は寝坊するかな？信じられないよ。ねぇ～イリヤちゃん」

「ほんとよまったく一夏はいつも大事なところで失敗してお姉ちゃんに迷惑かけるんだから」

そういっているのは私の妹の雪奈と切嗣さんとアイリさんの娘でユ

ウの妹のイリヤだ。
このメンバーに一夏とユウを加えたのが私の大切な家族だ。

「それにしても2人とも遅いわね。もうそろそろ着くころだと思うのだけど」

「確かに遅いね。それじゃあ、僕がちょっと迎えに行ってくるよ」

「よろしくお願いねキリツグ」

そういって切嗣さんが出て行こうとしたとき1つの影が現れた

「キュ～～～～」

「え？シロ？どうしたのあなただけで来るなんて？お姉ちゃんは？」

現れた影の正体はユウのペットのシロだった
しかしその様子はどこか切羽詰っているようだった

「いったいどうしたんだいシロ？」

「キュ、キュキュ、キュ～～」

「何だってそれは大変だ！！」

「何でお父様はシロの言ってることがわかるのよ・・・」

確かにそのとおりだ。
なぜ切嗣さんはシロの言葉がわかるんだろう？そういえばユウもわかってる感じだったな。

と思っていると切嗣さんがまじめそうな顔つきでこちらを向いた。

「みんな落ち着いて聞いてくれ・・・・・・ユウと一夏が何者かにさらわれたらしい」

・・・・・え?今切嗣さんはなんといった?イチカガサラワレタ?ドウイウコトダ

「とにかく僕はこれから2人を探しに行く。だからみんなはここで待っていてくれ」

そういって外に飛び出していく切嗣さん
私はそれをただ黙って見送るしかできなかった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

「ううー・・、ここは?」

俺は目を覚ますと辺りを見渡した
見渡したかんじどうやらここは何かの研究施設らしかった
その証拠に当たりに見慣れない機械やなにかの培養器のようなものまである。

「おや。目が覚めたかい?どうだい今の気分は?」

そういったのは俺とユウをさらった女が立っていた

「いいわけないだろ。ここはどこだ?何でこんなことするんだ?それにユウはどうしたんだ?」

「質問ばっかりかい、まあいいだろう質問に答えてあげるよ。ここはある研究を行っている施設さ」

「ある研究?」

「ああ、だがそれを教える気はないよ。次になぜこんなことをするかだけどある目的のためさ」

「目的って何だよ?」

「ハハハ、教えるわけないだろうよ。そして最後にあのお嬢ちゃんだけど今のところ生きてるよ。いつ死ぬかわからない状態だけどね」

「クッ・・・ユウに何かあってみろ絶対に許さないからな」

「ハハハ今のあんたに何ができるっていうのさお笑い種だね」

(たしかに相手の言うとおり今の俺は両手を縛られて柱に固定されて身動きできないだけどチャンスを待ってればきっと何とかできるはずだ・・・)

一夏がそう考えているとそれは突然起こった

ドカ～～ン　パラパラ

そう音を立てて研究所全体が揺れる

「うわ、なんだいったい」

「・・・いったいどうしたっていうんだい？まさかもう誰かに嗅ぎつけられたのか」

『非常事態発生非常事態発生、第７区画にて異常発生館内の人員は速やかに退去せよ。またＩＳ操縦者は現場に向かえ』

そのようなアナウンスが流れてきて目の前の女もＩＳを展開しようとする

ドカン

そのとき壁が爆発してその向こうから何かがあらわれた

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　千冬

今私は暮桜を使ってある場所へ向かっている。

その場所とは一夏たちが監禁されていると思われる場所である。

なぜ私がその場所を知っているかというと切嗣さんが２人を探しに飛び出して言った後、いてもたってもいられなくなった私は決勝を棄権して２人を探すために飛び出したのだ。

そして、約１日探し回って途方にくれていたところにどこからこの

話を聞きつけたのかドイツ軍が協力すると言い出して協力して捜索をしていた結果ある場所が怪しいと出たからだ。

そうしてその場所が見えてくるとその監禁されてると思われる場所は黒い煙を上げていた
それを見て私はいったん空中に止まった

「私のほかにも襲撃者がいたのか？・・・だがそれでもすぐに助けるぞ。一夏、ユウ」

そのように叫ぶと黒い煙を上げる研究所に向かっていった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

ゴポッ

そこには1人の少女がカプセルのようなものの中に入れられていた

「（ここはどこですか？なぜ私はここにいるのですか？）」

いまだ記憶が戻っていない状態で少女が自問自答していると目の前で研究者とおもしき人たちが何か話していた

「・・・・・・・・成功だ。これで〇〇は完全なものになる。それに思わぬ副産物も手に入った。これで我々の目的に近づくぞ」

そのような研究者たちを前にして少女の意識と記憶はだんだんと戻ってきていた

「（たしか・・・・・そうです。一夏と一緒にさらわれそうになって相手のＩＳと戦って・・・負けたんですね。それにしても何が目的なのでしょうね？てっきり私は殺されると思ったのですが）」

ユウがそのように考えていると頭の中に何かが響いた

「（・・・・・・・・にん）」

「（え？今頭の中に何か響いたような？）」

謎の声が頭に響きその声が次の瞬間にははっきり聞こえた

「（適合者の目覚めを確認。生体融合型ＩＳ起動可能。ＩＳの起動を行いますか？）」

「（生体融合型ＩＳ？よくわかりませんがこの状況を打破するには使うしかないようですね。起動を承認します）」

「（起動承認確認起動します）」

その声が聞こえた瞬間私はさっきまで動かなかった手を動かして目の前の壁を叩く

パリーン

たった一度腕を叩きつけただけで砕け散るカプセル

その様子を見た研究者たちは驚きの声を上げる

「何だと!!なぜこいつは動いている。薬のおかげで動けないはずなのに、このままではまずい急いで緊急事態発生と上に伝えろ!!」

あわてる研究者を前にユウは冷静に自らの前に表示される情報を眺めていた

「どうやらＩＳと融合したことにより身体能力の上昇と今まで使えなかった一部の力が使えるようになったようですね。この世界ではリミッターを解除できなかったのでどうなるかと思いましたがこういう風に使えるようにしたようですねゼウスは」

そのようにしゃべるユウその姿は
先ほどまで何もきていなかった体には漆黒のドレスを着ていてその背中には白と黒の羽が一対存在していた

「それでは力の確認といろいろとされた腹いせでもさせてもらいましょうかね」

そういって近づいてくるＩＳ数機を眺めながらユウは攻撃に転じた

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

衝撃とともに近くにあった壁が崩れだした

「ッ!?いったいなにごとだい!?」

突然の出来事に俺と目の前の女性が驚いていると崩れた壁の向こうから聞きなれた声が聞こえた

「ここに一夏がいる気配がしたので来てみましたがどうやら当たりだったようですね。」

そこにいたのは真っ黒なドレスを着て白と黒の翼を持ったユウだった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

今私の目の前には一夏が驚きの表情でこちらを見ている

そして、その近くには・・・

「ハハハ・・・驚いたよお嬢ちゃん。そんな姿で来るとはね、もしかして今起こっている騒ぎもお嬢ちゃんの仕業かい？」

驚きながらもこちらに対してＩＳを向けている女性がいた

「フフフ・・・ええ、この騒ぎの原因は私ですよお姉さん」

「そうかい、ちなみにその姿はなんだい？ずいぶん変わった格好だね」

「そのようなことを私が教えるとお思いで？」

「いや、そうは思っていないけど一応ね」

そういってお互いににらみ合いながら対峙する両者

そして次の瞬間両者に動きがあった

ガキン

ぶつかり合う両者の武器
女性のほうは右に長刀左に短刀を持ち
ユウは右に漆黒の刀、左に純白の刀を持ってつばぜり合いの状態になっていた

「クッ・・・なんて力だい私と同等の力なんて」

「こちらも驚きですよ。一瞬で終わると思っていたのに防がれましたからね」

そういってお互いに剣と剣で切りあい始める
その様子は先の両者の戦いで見られたものよりも激しいものであった
そして、その戦いにも終局が訪れる・・・

「ハハハ　ここまで楽しめるのも久しぶりだよお嬢ちゃん」

「確かに楽しいですがわたしはそろそろおわりにしたいですね」

「そういわないでもっと楽しみましょ!?・・・・・・わかったわ。ごめんね、お嬢ちゃん。時間切れみたい」

「私がそう簡単に逃がすとでも?」

「そうは思ってないけどそっちもそろそろ限界じゃないの?さっきまで薬で動けなくされてたはずでしょ?」

確かに先ほどまで動けなかったのに動けるようになったため体はまだボロボロのままですね・・・

「あなたとはまた会いたいわ。」

「私はもう会いたくないのですがね」

「ハハハ　そっちがそう思ってもきっとまたいつか会うことになるわよ。それじゃあね。お嬢ちゃん」

そういってここから離脱していく女性

「まあ、今回は仕方ないですね「ユウ!!」一夏も無事ですし良しとしましょう。それに千冬姉さまも来たようですしね」

その言葉とともに現れる暮桜

「無事か!!一夏!!ユウ!!」

その声を聞きながらユウの意識は落ちていった

第3話　一夏誘拐事件　後編　終結そして覚醒（後書き）

というわけで第3話をお送りいたしました

今回は主人公の最初のＩＳが登場しました。
生体融合型ＩＳとはその名のとおり人体とＩＳのコアが融合したものです。
これは主人公以外に持たせるつもりはまったくないものです。
これを展開することで主人公は自分のリミッターを一部開放した状態と同じになれます。具体的に言うと普段が1としてＩＳを纏うと5まで使えるといったところですかね。
またこのＩＳは普通と違い装甲は纏いませんその代わりに漆黒のドレスを纏い一対の羽が生えます。
羽のイメージとしては東方に出てくるレミリアの羽をイメージください。
そして、装甲はないですが全身を薄いバリアで覆っていてそのさらに内側に絶対防御が存在します。薄いためその2つの強度はそれほどではないですが他にも防御手段はあります。
そして、ＩＳの武装の変わりに主人公の力を使うことができます。

このＩＳができた理由は、亡国機業はあまり関係なく首から下げていたペンダントが関係しております。
正確にはゼウスのいた世界でもらった転生者などを探すコアのようなものが実は未完成なコアの半分でＩＳ世界で束からもらったのが残り半分の未完成コアだったというわけです。
ペンダント砕ける→切られた部分からその一部が入り込む→その結果、体の中で融合
しさらにユウの特殊な魂と反応＝ＩＳ完成
というわけです。

なんというご都合主義！！だけど自重はしないｗｗ

というわけでこんな感じです。
詳しくはもう１つの主人公のＩＳが出てきたときにまとめる予定です。

そして次回はこの話の後日談的な話です。
早く原作に入りたいんですがね・・・
一応予定では、次々回に原作突入予定です。

それではまた次回お会いいたしましょう

第４話　後日談（前書き）

なかなかいいタイトルが思いつかずそのまんまになってしまいました。

まあ、何はともあれ第４話をどうぞ

第4話　後日談

とある病院の一室

その中におかれたベットの上で1人の少女が目を覚ました

「うう～ん、知らない天井です・・・」

「ようやく目を覚ましたかユウ」

目を覚ましたユウに見舞いに来ていた千冬が話しかける

「あれ?千冬姉さま何でここにいるんですか?」

「お前の見舞いに来たんだがもう平気のようだな。ちなみにユウ」

「ハイなんですか?」

「お前がさらわれた後のことを覚えているか?」

「・・・・・ええ、全部覚えていますよ。そして自分の体がどうなっているかもわかっています」

「・・・そうか、私はこれからみんなに連絡を入れてここに来てもらうように言っておく。そのときお前がどうするかは自由だ」

そういって千冬は病室を出て行った。

「（千冬姉さまのことですから1時間くらいたったら戻ってくるで

しょうね。さて、みんなに体のことを言うのは構いませんがそうなると転生のことなども言わないといけませんね。果たしてどんな反応をするのでしょうね・・・まあ、拒絶されるのは今までの経験で慣れているのでそうなった場合は世界を回って頼まれたことを終わらせましょうかね。）」

そう考えたユウの姿はどこかさびしそうだった・・・

・・・・・そして1時間後病室のドアが開いた

「「「ユウ（ちゃん）（お姉ちゃん）もう起きて平気なのか？（（なの？））」」」

そういって一夏たち3人が扉から入ってきた

「ええ、もう体は平気よみんな」

そしてその後ろからさらに3人が入ってきた
その人物は両親と千冬であった

「あらあら、みんな元気ね。でも病院では静かにしないとダメよ。」

「まあまあ、アイリ、みんなユウが心配だったんだから多めに見ようよ」

「そうですよアイリさん。ここにいるみんなユウを心配していたのですから多めに見ましょう」

そういってくる切嗣と千冬に対して

「まあ、私も心配だったからあまり人のことといえないのよね～」

アイリはいつものように答えた

そしてユウはそんなみんなを見ながら

「お母様、お父様、千冬姉さま、一夏、雪ちゃん、イリヤちゃん心配かけてごめんなさい」ペコリ

そういって頭を下げたのであった

そして意を決して次の言葉をいうのであった

「実は皆さんに聞いてもらいたいことがあるんです」

その言葉を聞いて周りのみんなは息を呑んだ

「実は私、みんなに秘密にしていましたが～～～～～～～転生のこと・現在の体のことについて説明中～～～～～～～というわけなんです。」

説明をするとみんなが黙ってしまった

そしてそんな中切嗣が口を開いた

「今の話は本当なのかいユウ？」

「ええ、信じられないでしょうが本当です。一部は推測も入っていますがおそらく当たっているでしょう。こんな話をした理由はこの事を伝えたうえでみんなとサヨウナラしようと思ったからです。みんなもこんな存在と一緒に居たくはないでしょうからね」

そういってユウは悲しそうな顔をしていた
そして、ここから去ろうとして立ち上がろうとすると誰かがユウの体を優しく包み込んだ

「そんな悲しい事をいわないでユウ。あなたは私のかわいい娘よ。そんなことで母親である私は拒絶しないわ」

「え？」

母親であるアイリの言葉に思わず驚きの声を上げるユウ
そしてアイリの発言を聞いて他のみんながそれぞれ思いを口にする

「そうだよユウ、君は僕とアイリの娘なんだ、こんなことで君を拒絶したりしないよ」

「お父様・・・」

「そうだぞユウ、お前のその力のおかげでお前も一夏も助かったんだ。感謝こそしても拒絶などしないさ。・・・もっともその神とやらは許せんがな」

「千冬姉さま・・・」

「俺はそこらへんよくわからないけどユウは俺を命がけで守ってく

れたんだ。だから今度は俺がユウを守ってやる!!」

「一・夏・・・」

「私がユウちゃんを拒絶するわけないじゃない。私たちは家族なんだからね!!」

「ゆ・・き・ちゃん・・・」

「私もよくわからないけどお姉ちゃんはどんな風になっても私の大好きなお姉ちゃんだよ」

「イ・・・リ・・ヤ・・・ちゃん」

「みんなもこういっているんだからあなたはここに居ていいのよユウ。」

「ウワーーーンみん・・な〝あ・・り・・がどう」

そういって涙を流しながらユウは感謝の言葉を言い続けた

・・・10分後・・・

「落ち着いたかしらユウ?」

「はい、落ち着きました。お母様」

そう言ったユウの眼元は赤くなっていたが表情は明るくなっていた

そして次に千冬が口を開いた

「それではユウの現状について説明しよう」

「現状について？」

そういって不思議そうな顔をするユウ

「そうだ、まずユウの体についてはさらわれたときに何かされたという風に説明しておいた」

「それって大丈夫なんですか？」

「ああ、あの研究所ではもともと非合法な研究を行っていたようなのでそのせいにしておいた。それとユウとユウのＩＳについての扱いについても話をつけてきた」

「いつの間にそんな話になってたんですか！？」

「まあ、お前が目覚めるまで１週間も時間があったからなその間にいろいろとな」

「え？一週間もたってるんですか！？」

「そういえばどのくらい時間がたったか説明してなかったな。まあ、そこはいいとして「よくないですよ！！」お前の扱いについてだが「あれ？私のことについてなのに本人無視ですか！？」この事件については世間には公表せしないことなった。そしてそのときに国際ＩＳ委員会でユウの扱いについて決定した」

「ううん、いったいどうなるんでしょうか・・・やはりモルモットですかね・・・」

目に見えて落ち込むユウであった

「いや、このことについては束が委員会を脅したらしくてな「何してるんですか束姉さま!?」静かにしろ「・・・はい」とりあえず扱いとしてはライセンスを持たせることとなった」

「それこそ大丈夫なんですか?」

ちなみにライセンスとはどの国の命令にもとらわれず自らの考えで動くことができるものである。わかりやすく言うと少々違うがガンダム００のものと考えてください

「ああ、問題はない。その条件として半年ほど私とともにドイツ軍に行くことになっている」

「それこそ、どういうことですか!?」

「私は捜索に協力したドイツ軍に一年間出向することが決まっているんだが、そのときにまだ完全にＩＳを使えないだろうということでユウも一緒にいくことになったんだ」

「・・・・・あのＩＳは私の一部ですからそういう心配はないと思うんですが」

「そこらへんは建前だな後は束が作っているお前用のもう１つのＩＳの試運転なども兼ねてるんだろう」

「ええ～～、何回も言いますけどそれっていいんですか?」

「まあ、束が認めないとハッキングしてさまざまな情報を全世界に公開すると脅したからな」

「・・・・・もういいです。それで他に何かありますか？」

「後伝えることといえばドイツ軍で半年ほど出向した後はそのまま各国を2年ほどかけて回るらしい「え？2年もですか？」ああ、いくら束でもそこらへんは無理だったようだ。まあ、ライセンスの研修期間と各国への顔見せといってところだな。その後はＩＳ学園で学ぶことになるだろう」

「そうなるとみんなとは2年半も会えないんですね。じゃあ、今のうちに家族に甘えて起きましょうかね」

「ああ、そうしておけちなみに出発は2日後だ」

「ずいぶん急ですねほんとに！？」

そうして家族との団欒の日も過ぎて千冬とユウはドイツに旅立っていった・・・

そして2年半後・・・

空港に1人の人物が銀に輝く髪をなびかせて立っていた

「さて久しぶりの日本ですね。それにしても一夏がＩＳを動かせるとテレビで見たときは驚きましたが詳しいことは家に帰ってから聞くとしましょう。何はともあれいったん家に帰ってあさってからは学校も始まりますしがんばりますか」

こうして少女のＩＳ学園での生活は幕を開けるのであった

第４話　後日談（後書き）

というわけでいよいよ原作前の話が終わりました。

今回は後日談でユウの秘密などを家族に打ち明けました。
内容は大体
転生者であること・ＩＳについて・力について
です。

補足としてユウが家族に打ち明けた後に泣いた理由は、他の世界に居たときにその強すぎる力を拒絶されたことが多々あったからです。いくつかの世界でも拒絶されなかったことはありましたが拒絶された世界はそれよりも圧倒的に多いのです。
さらにユウの場合やさしくされるよりも相手に対して優しくする側なので慣れていないんです。

ちなみにユウにライセンスを持たせた理由としては最初は日本あたりの代表候補生にしようと思いましたがそれだと他の国が何か言ってくる可能性があるということで考えた結果ライセンスにしました。ライセンス持ちの情報は報道はされていません。そういう存在がいるというくらいにしか世間では知られていない設定です。

ちなみに代表候補生に関しては日本にしていた場合簪と被ってしまいますが私の考えとしては所詮候補生であって代表にまだなってないので複数いてもいいんじゃないかという考えです。

ちなみにユウが回る国では主にラウラのいるような特殊部隊を回るので基本代表候補生とは出会いません。特殊部隊を回る関係上原作前の時点でラウラと家の特殊性ゆえに楯無と簪にはすでにあってる

設定です。
あとはあるイベントでシャルには会いますがそこらへんはいずれ。
すなわちユウは原作前にセシリア以外の原作ヒロインと出会っているのです。
ちなみにセシリアは原作のイベントで知らないほうがいいだろうと思ってです。

そして時間は飛んで次回から原作突入です。
軍でのことはそのうち書くかも?という状態です。

また、感想・誤字脱字などはいつでも受け付けております

それでは皆様また次回出会いましょう

第5話　ＩＳ学園入学そして再会（前書き）

それでは第５話です。

どうぞ～

第5話　ＩＳ学園入学そして再会

Ｓｉｄｅ　一夏

「皆さん揃ってますね～。それではこれからＳＨＲをはじめたいと思います～」

そういって黒板の前でにっこりと微笑んでいる緑色の髪の女性はこのクラスの副担任らしい山田真耶先生

まあ、一言言うなら童顔で巨乳って本当にいるんだな。
服のサイズもあってないし胸が・・・ゾクッ　なんだ急に寒気が・・・
まあとにかく中学生にも間違われそうな人だ

「それでは、皆さん、一年間一緒にがんばりましょうね」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

しかし教室からは返事はないみんな変な緊張感に包まれているからだ（１名除く）

かくいう俺も他の人とは別の意味で緊張している。
その理由はこのクラスにいる男子が俺だけだからだ・・・

ちなみにここはＩＳ学園、ＩＳについて世界中から学生が集まって勉強していくところであり本来女子高である。
そんなところになぜここに俺がいるかと

あれは中学3年の受験まったただｎ・・・・・・原作道理のため割愛・・・・・・というわけだ。

「（これは・・・想像以上につらい）」

一応クラスには見知った顔が2人と幼馴染が1人いるので視線を向けると1人は声を殺して笑っていて他の2人にいたっては目をやった瞬間に目をそらされた。

・・・・・・さすがにそれは地味にへこむよ

と考えていると。

「・・・くん。織斑一夏くん」

「は、はいっ!?」

目の前で大声を出されて思わず声が裏返ってしまった。

「え、え～と、お、大声出しちゃって、ご、ごめんなさいね。でも、今、じ、自己紹介が『あ』からはじまって、今『お』の人まで来て次が織斑君なんだよね。だから、お、お願いだから自己紹介してくれないかな?だ、ダメかな?」

そういって泣きそうになっている山田先生。

それに対して俺は

「わ、わかりました。自己紹介しますから落ち着いてください。」

と言って自己紹介するために後ろを向くすると当然今まで背中に受けていた視線を正面から受けることになるため余計に緊張する。

そして、チラッと周りを見てみると窓際ではさっき目をそらした俺の妹の雪奈と6年ぶりに再会した箒が横目でこっちを見ている。
また正面、すなわち俺の席の真後ろに座っているユウは目で『何を語ってくれるのかな?』という目をしていた。
そんな中で俺は意を決して口を開く

「え〜〜〜・・・えっとですね。織斑一夏といいます。よろしくお願いします」

そういって礼をして頭を上げるとほとんどの女子が『まさか今ので終わりじゃないよね?』的な空気を感じた。
どうすればいいんだもうしゃべることなんてほとんどないのに・・・
そうだ!箒・雪奈・ユウ助けてくれ!!
そう思って3人に目線を向けると箒と雪奈はまた目をそらし、ユウにいたっては少し笑いながら『助ける気はないよ』という顔をしている。
どうする、助けはないという状況で何をしゃべればいいんだ・・・・・よしこうなったら。
そう思って俺は息を吸いこうしゃべって

「以上です」

ガタタッ

そういった瞬間何人かの女子が崩れ落ちユウにいたっては思いっきり笑っていた。
そんな中俺があれ?失敗したか?と思っているとパアンッ!と誰かに頭を叩かれた

誰だと思い後ろを振り返るとそこにたっていた人物を見て思わず叫んでしまった

「げえっ、関羽!?」

パアンッそして再び頭を叩かれた

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

アハハッ　やっぱり一夏は面白いですね。
現在目の前で一夏が千冬姉様に本日2度目の出席簿アタックを食らっているところになります。

「誰が三国志の英雄か、まったくこの馬鹿たれが」

一夏は千冬姉様を見て混乱しているようですね。
あらら雪ちゃんも唖然としていますね。
どうやら2人とも教えてもらっていなかったようです。
え?私ですか?私は最初から知ってましたよ。ＩＳ学園入学の手続きのときに連絡をして教えてもらいましたからね。

「あ、織斑先生。会議のほうはもう終わったんですか?」

「ああ、山田君クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったね」

そして、2人の会話が終わったようで千冬姉さまが挨拶を始めます

「諸君、私がこのクラスの担任の織斑千冬だ。私の仕事は君たち新

人を1年で使い物になるように育てることだ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。逆らうのは構わないが、私の言うことは絶対に聞け。いいな?」

・・・千冬姉さまそれはさすがに横暴だと思うのですが、などと私が思っているとクラスの女子たちが
「キャァァァァァァァ~~~~~~~」と歓声を上げて千冬様といったり千冬お姉さまなどと言ったりしています。
それに対して千冬姉様がうっとうしそうにしながら

「毎年よくもまあこれだけの馬鹿者が集まるものだ。それとも、私のクラスにそういう輩を集めているのか?」

といっています。それに関しては後者だと私は思いますよ千冬姉様・・・
などと私が思っているとそれに対しても罵って~や躾して~などといった声が聞こえてきます。
・・・・・このクラス大丈夫でしょうか?私は激しく不安です。

「それで?挨拶も満足にできないのか、お前は?」

「いや、千冬姉、俺は・・・」

スパァンッ　はい本日3回目ですね。

「織斑先生と呼べ、この馬鹿者が」

「はい・・・織斑先生・・・」

というか今の発言はまずいですよ一夏・・・

「あれ？今織斑君千冬様のことを千冬姉って言ったよね。ということは千冬様の弟？」

「じゃあ、男でＩＳを動かせるのもそれが関係してるの？」

ほら、みんなに知られちゃいましたよ。どうするんですか？まったく。

「はあ、仕方ないこうなったら織斑妹、アインツベルンお前たちも自己紹介しろ」

「は、はい。わかりました」

「って何でちゃっかり私も入ってるんですか！？」

スパァンッ　「むきゅっ」

「後でやるより関係者はまとめてやったほうがいいからだ。あと口答えするな」

「・・・はい」

「では織斑妹からはじめろ」

「は、はい。え～、お、織斑雪奈といいます。苗字でもわかるように織斑先生と織斑一夏とは兄弟です。す、好きなものは猫で趣味は裁縫です。皆さんよろしくお願いします。」

そういってお辞儀をする雪ちゃん。

「よしいいだろう。次だ」

そして私の番が来ました

「え～、ユウナスフィール・フォン・アインツベルンといいます。名前が長いので気楽にユウやユナなどに縮めて呼んでもらって構いません。織斑先生たちとはある事情で小さいころから一緒に住んでいるので家族同然です。ちなみに趣味は体を動かすことと読書です。それでは皆さんよろしくお願いいたします」

そういってお辞儀をする私

「まあ、いいだろう。ではこれでＳＨＲは終わりだ。諸君には半月でＩＳの基礎知識を覚えてもらう。その後は実習になるが基本動作は半月で物にしろ。いいな？よければ返事をしろ。よくなくても返事をするんだ。とにかく私の言葉には返事をしろいいな！！」

千冬姉様さすがにそれは無茶があると思いますよ・・・・・・思っても言いませんがね。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　雪奈

今は一時間目の授業が終わって休み時間に入ったんだけど、今目の前で一兄が机に突っ伏していてそれをユウちゃんが面白がって突っついています。

「それにしてもユウちゃん？ＩＳ学園に入学するなら教えてくれて

もよかったんじゃないの？」

「そうだぞユウなんで教えてくれなかったんだ？」

「いや～、本当は教えようと思ったんですが、びっくりさせたくて今日の朝まで黙ってました」

そう、ユウちゃんは昨日急に帰ってきたかと思うと今日の朝にいきなり「私もＩＳ学園通いますから」といったんだよ。あれには驚かされたね。

などと雑談をしていると今までこっちを見ているだけだった箒ちゃんがこちらに近づいてきた。

「・・・・・ちょっといいか？」

「ん？箒？どうかしたのか？」

「少し話があるついてきてくれ」

そういって一兄は箒ちゃんについていくその後にもちろん私たちもついていく

～～～～～廊下にて～～～～～～

廊下についた瞬間に一兄が何かを思い出したかのように話し始める

「そういえば、箒」

「な、なんだ？」

「去年、剣道の全国大会で優勝したんだってな。おめでとう」

「そういえばそうだったね。箒ちゃん優勝おめでとう」

「そうですね、優勝おめでとうございます。箒ちゃん」

上から一兄・私・ユウちゃんの順に言い出した。

それを聞いて箒ちゃんは顔を赤くしながら

「な、何で3人とも、そ、そんなことを知っているんだ?」

「それは、新聞に載ってたからだよ。箒ちゃん」

「な、何で新聞なんて見てるんだ!!」

「さすがに新聞くらいは好きに読ませてほしいのですが・・・」

「そうだよね~新聞くらい好きに読みたいよ」

などといっていると一兄が再び口を開いた。

「それにしても6年ぶりになるが、箒のことはすぐにわかったぞ」

「・・・・・え?」

「だって髪型が一緒だもんな」

「よくも覚えているものだな。そんな昔のこと・・・」

「いや、幼馴染のことくらい忘れないと思うぞ」

そういって一兄を睨む箒ちゃん。
でも私にはそれが照れ隠しなのがわかる。
なので私は箒ちゃんの耳に小声で話しかける

「（まだ箒ちゃんは一兄のことがすきなんだよね？）」

「（な、何を言っている雪奈。）」

「（素直じゃないなあ、箒ちゃんはまあ、素直になっても一兄を渡すつもりはないけどね）」

そういって私たちは話し続ける
それをみながらユウちゃんと一兄は

「いや～～、学園生活は一夏にとって修羅場になりそうですね」

「どういうことだ？ユウ？」

「・・・・・やっぱり一夏はある意味大物ですね」

などといっている。

そしてチャイムが鳴りここでの話はいったん終了となるのでした・・・

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

第5話　ＩＳ学園入学そして再会（後書き）

ル「以上、第5話をお送りいたしました」

ユ「今回から学園編突入ですか」

ル「そうだよ、とりあえず今回は自己紹介と箒との再会になりました」

ユ「それにしても千冬姉様の攻撃なぜか反応できないんですよね」

ル「あの人は生身でも十分チートだから仕方ないよ」

ユ「そうですね。あきらめましょう」

ル「次回は金髪ドリルさんが出てくる予定です」

ユ「ああ、あの人が出てくるんですか」

ル「それでは、今回はこの辺にしておきますかほとんど原作道理でしたしね」

ユ「感想などはいつでも受け付けております」

ル・ユ「「それでは次回もお楽しみに～～～」」

第6話　やっぱり一夏は馬鹿ですね・・・・・・金髪？誰ですかそれ？

Ｓｉｄｅ　ユウ

「～～であるからして、現在ＩＳの運用に関しては国家による認証が必要であり、許可を取らずに枠内を逸脱した運用を行った場合、刑法によって罰せられますので注意してくださいね～」

そういってスラスラと教科書を読んでいる山田先生。
先ほどまではどこか頼りありませんでしたが、今の姿はさすがといった感じになっていますね。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

それにしても目の前に座っている一夏がさきほどからソワソワしたり隣の子を覗き込んだりしてますね。

「な、なに？」

隣の子がきづきましたね。
まあ、あれだけ凝視してれば気づきますよね、普通。

「あ、いや。なんでもないんだ。ごめんな」

それにしてもどうしたんでしょうかね一夏は？
昔からどこか変なのは知ってましたが今日は一段と変ですね

［それはさすがに言い過ぎではないですかマスター？］

［いえいえ、一夏にはこのくらい普通ですよ。ラン］

［そういうものなのですか？］

［そ～なのだ～］

［・・・・・・・・・・・・］

［無視はひどいよ～～（ＴｏＴ）］

などと、私のデバイスであるランと会話をしているとどうやら山田先生が一夏の様子がおかしいことに気づいたようです。

「織斑君、どこかわからないところがありましたか？わからないところがあれば聞いてくださいね。だって私は先生ですからね」

そういって胸を張る山田先生・・・・・やっぱり大きいですね。
（なにがだ！！ｂｙ作者）

「あ～、実は先生」

「はい、織斑君」

「何もかも全部わかりません！！」

ドゴン　↑ユウが机に頭をぶつけた音

「え・・・・・、ぜ、全部ですか？　そ、それと、アインツベルンさん、大丈夫ですか！？」

「は、はい、大丈夫です。ご心配かけました・・・」

ま、まったく一夏は何を言ってるんですか！？
さすがに馬鹿すぎますよ！！

「そ、そうですか。そ、それじゃあ、織斑君以外で現段階でついてこれていない人はいますか？」

シ～～～ン・・・・・・

誰も手を上げないですね。それはそうでしょう入学前に渡される参考書をみればこのあたりなら大体わかりますからね。
あ、千冬姉様がため息をつきながら一夏に声をかけましたね。

「・・・・・・・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パアンッX２

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

「昨日帰ったときどこにもないと思ったら捨ててたんですか！？この馬鹿一夏！！」

ハッ　あまりにも一夏が馬鹿なことというからつい突っ込んでしまいました・・・・・・

パアンッ

「むきゅ」

「勝手に席を立つな」

「す、すみませんでした・・・織斑先生・・・」

い、痛いです～これも一夏のせいですよ。

「まったく後で再発行してやるから1週間以内に覚えろ。わかったな」

「い、いや、さすがにあの量を1週間ではきついかと・・・」

「やれといっているんだ。いいな!!」

「は、はい、わかりました」

「それと、アインツベルン勉強をこの馬鹿に教えてやってくれ」

そ、そこで私に振りますか!?

「う、う～～ち、ちなみに理由をお聞きしても?」

「簡単だ。このクラスの生徒の中でお前が一番ＩＳについて詳しく強いからだ」

それを今ここで言いますか。たしかに世界を回ってるときに束姉様に色々教わったり、自分のＩＳの整備などをやっていますから詳しいですけど・・・

それよりも今の発言で一部の女性が私に殺気を送ってきてるんです

が・・・・・

「ハァ　納得はできませんが了承はします。ちなみに地獄を見せるくらいにやってもいいのですか？あ、あと参考書は使ってないのがありますので再発行は大丈夫です」

「ああ、構わん。参考書のほうも了承した。」

よし、許可は取りましたから一夏にこの怒りをぶつけるとしますかフフフ・・・一夏覚悟していてくださいよ。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

な、なんだかとてもまずいことになった気がするぞ。さっきから後ろから恐ろしい気配しか感じない・・・死んだかな、俺・・・

と、とりあえず、ほ、箒や雪奈にも頼んで教えてもらおう。あの２人ならユウを多少は抑えてくれるはずだ・・・・・・たぶん。

なんとも他力本願なことを考えている一夏であった。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

今は2時間目が終わって休み時間に入っています。
とりあえず一夏に私と雪ちゃんで貸した参考書を開かせて勉強を見ているのですが・・・目の前で一夏が灰になってますね。

「ダメだ、ぜんぜんわからん」

「自業自得だよ一兄本来入学前にやってることなんだから」

「そうです。それにしても雪ちゃんは一夏が参考書を捨てたときに止めなかったのですか？」

「じつは、ちょうど出かけてるときに捨てたみたいでね。気づかなかったんだよ～」

「それは仕方ないですね。そうそう、一夏」

「な、何だ？」

「ＩＳを使った訓練になったらもっと厳しくしていくのでそのつもりで」

「俺を殺す気かユウ！！」

「・・・・・・」

「なに、『そのとおりですが何か？』って顔してるんだよ！！」

「あきらめたほういいよ？一兄」

「うう～じゃ、じゃあせめて雪奈と箒も訓練に加えてくれよ」

「な、なにちゃっかり人を巻き込んでるんですか!?この馬鹿兄は!!」

そういって喧嘩を始める2人。
相変わらず仲がいいですね～。
しかし周りの迷惑ですので止めましょう

「まあ、それに関しては最初から決めていたことなのでいいですが」

「ほんとか!?」「う、うそ。地獄が始まるの・・・」

一夏は喜び雪ちゃんは絶望しています。
でも・・・

「安心してください。2人増えても厳しくするのは一夏のみで雪ちゃんは普通に訓練しますので」

そういうと2人の顔色が見事に逆になります。
おもしろいですね～。

などと話していると私たちに近づいてくる影が1つありますね。

「あなた方、ちょっとよろしくて?」

そういって私たちに話しかけてきた金髪ロールの少女

「へ?」

「え？」

「・・・」

上から一夏・雪ちゃん・わたしです。
え？返事してないだろって？気にしちゃいけませんよ。
それにしてもぱっと見た感じ「女子は男子より偉くて当然」と、考えてそうな今時の女子ですね。

「訊いているのですか？お返事がないようですけれど？」

「あ、ああ。訊いてるけど・・・いったい何の用だよ？」

ダメですよ一夏。そういう受け答えは相手を付け上がらせるだけです。
こういう偉そうな方は完全に無視したほうがいいんです。」

「ユウちゃん途中から声に出てたよ・・・」

「・・・・・失礼しました」

「あなたもいったい何なんですの！？人が話しかけて差し上げましたのに無視すればいいなんて失礼ですわよ！！」

「・・・・・・・・・」

「無視しないで下さる！？」

などとやっていると一夏が

「それで、さっきも言ったけどいったい何の用だ？」

「まあ！そういうあなたもこのわたくしが話しかけて差し上げましたのにそのような態度をとるなんて？あなたたちはわたくしに話しかけられるだけでも光栄なことですからそれ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「悪いな、俺は君の事知らないから」

「そもそも、私たちが話していたところにいきなりやってきて話しかけてきたのですから、そちらから自己紹介するのが筋じゃありませんか？」

というと相手は少し悔しそうな顔をして

「クッ　確かにあなたのいうことにも一理ありますわね。いいでしょう名乗って差し上げますわ。わたくしの名前はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生にして、入試主席を取ったものですわ！！」

何かどうでもいい情報も入っていた気がしますね。
この人自己主張が激しいんでしょうかね？

「あ、ユウちょっと質問いいか？」

・・・今のどこに質問をする要素があったのですか一夏？

「いったいなんですか一夏？」

「代表候補生って何だ？」

・・・・・・・・・・・本当に馬鹿ですか一夏？
話しかけてきたセシリアも周りの女子たちもみんな固まってますよ・・・

「本当に知らないんですか？」

「おう、知らん」

「いや、胸を張っていうことじゃないですからね。代表候補生っていうのは、各国が選出するＩＳ操縦者の代表になる可能性がある候補生たちのことです。そもそも字でわかるでしょうに」

「おお！！そういえばそうだな」

ああ、千冬姉様。私は一夏に勉強を教える自信がなくなってきましたよ・・・
というか本当にどうしましょうかね？
などと私が考えていると・・・

「そう、すなわちエリートなのですわ！！」

と、復活した彼女が言っています。

「本来ならわたくしのようなエリートと同じクラスになるだけでも奇跡であり、さらに話しかけられることは幸運なんですのよ。そこのところ理解してますの？」

「そうか、それはラッキーだ」

「・・・馬鹿にしてますの？」

いやいやあなたが幸運といったから一夏はそれに答えたんでしょうが、という突っ込みは心の中にしまっておきますがね

「そもそもＩＳのことを何も知らないあなたがよくこの学園にこれましたはね。ハッキリ言って期待はずれにもほどがありますが」

「俺に何か期待されても困るんだが・・・」

「まあ、ＩＳでわからないことがありましたら優しいわたくしが教えて差し上げなくもないですわよ？なにせ入試で唯一教官を倒したのですから」

それは優しさとは違う気がしますがね。

「入試ってあれか？ＩＳを動かして戦うやつ？」

「それ以外にありませんわ」

「それなら、俺も倒したぞ。教官」

「は・・・・・？」

どうやらショックで凍りついたようですね

「そういえば雪奈とユウはどうだったんだ？」

「私は負けちゃったよ。結構いいところまで行ったんだけどね」

「へ～、ユウは？」

「私が本来使うＩＳならまだしも打鉄じゃ、千冬姉様に勝てませんよ」

「そりゃそうだよな」

などといっているとショックから抜け出したらしいセシリアが

「わたくしだけと聞きましたが？」

「女子だけではってオチじゃないのか？」

あ、また固まりましたね。

それにしてもずいぶん笑えるオチですねｗｗ

「いったいどういう事ですの！？それにあなた本当に倒したんですの？」

「と、とりあえず落ち着けって、な？」

「これが落ち着いていられますか～～～」

（そろそろうるさいですね沈めましょうかね？）

と思っていると　キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン

チャイムが鳴ってしまいましたね

それを訊いて彼女は

「ッ！また後できますわ！あなたたち逃げないことですわね！いいですか！！」

といって席に戻る彼女・・・というかちゃっかり『あなたたち』って私も含めましたね。

まったく面倒なことは嫌いだというのに・・・・・・面倒です。

第6話　やっぱり一夏は馬鹿ですね・・・・・・金髪？誰ですかそれ？　（後書き）

ル「以上第６話をお送りいたしました」

ユ「それにしても今回一夏のせいで色々と大変でしたよ・・・」

ル「気にしない気にしない」

ユ「気にしますよ！！それよりいつ私のＩＳはまともに出てくるのでしょうかね？」

ル「そうだね～@3～４話位かな？」

ユ「何で疑問系なのですか・・・」

ル「大まかな話は頭にあるけどどこで区切るか決めてないから早くなるかもしれないし遅くなるかもしれないから」

チャキ　ユウが剣を構える音

ユ「なるべく早く書いてくださいねいいですか？」

ル「は、はい、わかりました！！」

ユ「わかればいいんです」

ル「そういえばＰＶがいつの間にか１万超えてました。この作品を呼んでくださった皆さん、ありがとうございます。」

ユ「ありがとうございます」

ル「感想のほうもお待ちしていますのでよろしければどうぞ～」

ル・ユ「それでは、また次回でお会いしましょう」

第7話　クラス代表決め　そして決闘決定　なんでこうなるんでしょうかね？

注意事項
今回は7巻に出てくるキャラがかなり先立って登場します。
ネタバレがいやな方こんなの嫁じゃないという方は戻るボタンを押すことを推奨します

ネタバレ平気という方や別に嫁じゃないからいいという方はどうぞお楽しみください

それではお楽しみください～～

第7話　クラス代表決め　そして決闘決定　なんでこうなるんでしょうかね？

Ｓｉｄｅ　一夏

今の時間の授業は3時間目この時間は前の1，2時間目と違って山田先生じゃなく千冬姉が教壇に立っている。
そして教室の隅ではよほど大事なことなのか山田先生までノートをてに取っていた。

「それでは、この時間はＩＳの実践において使用する各種装備の基本的な特性について説明を行う。・・・ああ、その前に今度行われるクラス代表戦に出る代表者を決めなければならないな」

クラス代表？いったい何のことだ？

「ちなみにクラス代表とは簡単に言うとクラス長のようなものだ。また、クラス代表戦とは入学時点での各クラスの大体の実力を測るものだ」

へ～そんなのを決めなきゃいけないのか、まあ、俺はそんな面倒なことやりたくないけどな

「は～い、私は織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思いま～す」

雪奈が推薦されてるのか、まあ、あいつなら頭もいいしきっと大丈夫だろ

「では、1人目の候補者は織斑一夏・・・他にはいないか?自薦他薦問わないぞ」

そうそう織斑一夏でいいんじゃ・・・って俺かよ!!雪奈じゃないのかよ!!

「待ってくれ千冬姉　スパァン　「織斑先生だ馬鹿者」・・・はい、織斑先生・・・じゃなくて何で俺なんですか!?推薦されたのは雪奈のほうじゃないんですか?」

「何を言っている「織斑君」といっていただろうがすなわちお前のことだ」

なん・・・だと・・・

「で、でも、俺はそんなのやりたくないんですけど!?」

「自薦多選問わないといっただろう。他薦されたものに拒否権はない!!」

クッどうすればいいんだ俺はこんなのやりたくないのに・・・・・・

そうだ!拒否権がないんだったら。

「じゃ、じゃあ、織斑先生。俺はユウを推薦します!!」

「ちょっ、そこでなんで自分がやりたくないからって私を推薦するんですか馬鹿一夏は!!」

「さっきまでのことに対する少しばかりの仕返しだ!!」

「性格悪すぎですよ一夏！！そもそも、ほとんどが一夏の自業自得でしょうが！！」

そういっているユウと言い争いをしていると

「納得がいきませんわ！」

さっき話しかけてきたセシリア？が何か言い出してきた

「そのような選出は認められません。なぜこのようなＩＳに関してズブの素人を代表にしなければならないのですか、それに男がクラス代表なんて恥さらしもいいところですわ！」

素人に関しては否定しないけど言い過ぎじゃね？

「それに実力からいってクラス代表にはわたくしのほうが適任ですわ！このような極東のお猿さんに代表は務まりませんもの。大体このような文化としても後進的な極東の島国で生活しなければいけないこと事態わたくしにとっては苦痛でしてよ」

ブチッ

「イギリスだって日本と同じ島国な上に世界一まずい料理で何年覇者だよまったく」

「あなたのようなクズが代表候補生だなんてイギリスのレベルも多寡が知れてますね。」

俺は切れてつい口出ししてしまった。

それにユウも同じ気持ちだったようだ。

そして、後ろを見るとセシリア？が怒髪天をつく勢いで顔を真っ赤にしていた

「あなた方わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「「そっちが先に侮辱してきたんだろうが（でしょうが）」」

俺とユウの声が被った。

どうやらそれがさらに相手の癇に障ったようで

「決闘ですわ。あなた方2人に決闘を申し込みますわ。」

「いいぜ、四の五の言うよりそっちのほうがわかりやすい」

「いいでしょう。ただし無様な姿をさらしても知りませんよ？」

「いっておきますけどわざと負けたりしたら私の小間使い・・・・・いえ奴隷にして差し上げますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜く気はない」

「変態さんに容赦する気などありません」

ユウ変態って言いすぎじゃないか？

おかげでまた、セシリアが怒り出したし

「誰が変態だというのです！誰が！！」

「いきなり奴隷とか言う特殊性癖を持つものを変態といわずなんというんですか？」

「いい加減にしてくださいませんかね！！このセシリア・オルコットは決して変態ではありませんわよ」

「そ～なのか～（笑）」

ユウさすがに馬鹿にしすぎだぞ

「もうないて謝っても許しませんですわよ！！後悔するとよろしいですわ！！」

「別に許してもらわなくても結構ですから、それとその傲慢な態度すぐに壊してあげますよ」

完全に一触即発な状況で対峙している二人それを眺めながら千冬が

「盛り上がっているところ悪いが話を進めるぞ。決闘するのは構わんが日時の指定等はこちらでするからな」

「「「わかりました（わ）」」」

「よし、では1週間後の月曜の放課後、第三アリーナで三人による総当たり戦を行う。また試合の順番は当日に発表する。」

そういってそのまま授業を再開するのであった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

現在の時刻はすでに放課後になり教室には私たち3人以外誰もいない

そしてそんな中、一夏が机の上でうなだれている

「だ、だめだ。意味がわからん・・・」

「まったく、このままじゃまともに決闘もできないですよ？」

「う、ううん、仕方ないだろ専門用語の羅列ばっかりなんだから」

「参考書を捨てるからこうなるんですよ。自業自得です。それに雪ちゃんはついてこれてますよ」

「まあ、私は参考書読んでおいたしお姉ちゃんから少しだけなら教わったからね～」

そういって机の上で力尽きかけている一夏に言う雪奈

「う、うそだろ？なんで雪奈だけ教わってるんだよ！？俺には何も教えてくれなかったのに！？」

そういって落ち込む一夏に笑いかけながら話し出すユウ

「それは、一夏がＩＳを動かせると思っていなかったからでしょうね。雪ちゃんならＩＳ関係のことに進む可能性があるから教えたけ

ど、まさか一夏も動かせるとは誰も予想できませんでしたからね」

「たしかにそうだけどさ。それにしても少しくらい教えてくれてもよかったのに・・・」

などと3人で話していると教室の扉が開き山田先生が入ってきた

「ああ、織斑君達まだ居たんですね。よかったです」

「はい？」

一夏が疑問の声を上げながら顔を上げる

「えっとですね皆さんの部屋が決まったのでお知らせにきました」

そういって部屋の番号が書かれた紙と鍵を渡してきた

「あれ？俺の部屋ってまだ決まってなくてしばらく自宅通学じゃなかったんですか？」

「そうなんですけど、事情が事情ですので無理やり部屋割りを変えたんですよ。ただ今回は緊急だったのでしばらく相部屋になってしまいますけど1月くらいたてば個室のほうに移動できますので我慢してください」

「はい、わかりました。・・・でも、荷物はやっぱり家にとりに行かないとまずいですよね？」

「い、いえ、荷物のほうでしたら・・・」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え。まあ、とりあえずは着替えと携帯の充電器くらいだがな」

「・・・あ、ありがとうございます・・・」

「（あの感じだと本当に生活必需品だけのようですね。ご愁傷様です・・・）」

「（そうだね～、まあ、私達は色々と準備はしてたからよかったけど）」

などと話しているとどうやら寮に関する説明は終わったようだその証拠に千冬姉様が寮に行くように催促している

～～～～～～～～～～寮へと移動中～～～～～～～～～～

「そういえば2人はどこの部屋なんだ？ちなみに俺は１０２５室だ」

そういって部屋の番号を聞いてくる一夏

「私は１０２６室だね。一兄とはお隣さんだよ」

「私は１０４０室ですね。少し離れちゃいましたか」

どうやらみんな別々らしい

そうこうしていると一夏の部屋の前に着いた

「それじゃあ、一夏今日はゆっくりしていいけど明日から勉強を始めますからね」

「わかってるよ、ユウ。頼むから加減してくれよ？」

「・・・・・・・・考えておきます。あと、同室の子を襲っちゃダメですよ？」

「何だよ今の間は！？それに誰が襲うか！！」

「とりあえずは信じましょうかね。それではまた明日ですね。一夏に雪ちゃん」

「おう、また明日な！」

「それじゃあ、また明日ねユウちゃん！」

そういって各自自分の部屋に入っていくのであった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　雪奈

今私は部屋の前で2人と別れて部屋に入ったのですが目の前に謎の黄色い物体がいます・・・

「え～と、同室の方ですか？」

意を決して話しかけるとその物体は起き上がってこちらを向いた

「うん～そ～だよ～ゆっき～」

「まさか。ゆっきーって私のこと？」

「そうだよ～雪奈だから～ゆっき～」

そういって笑いかけてくる同室さん

「それで、あなたの名前は何？確か同じクラスだよね？」

「おお～知っててくれたんだ～じゃあ改めて自己紹介するね～私の名前は～布仏本音だよ～」

そういって抱きついてくる本音

「ちょ、ちょっと、何で抱きついてくるの布仏さん！？」

「え～？なんとなく？それよりも～私も愛称で呼んでほしいな～」

「え、名前じゃなくて愛称ですか？」

「うん～その方が親しくなれる気がするから～」

「え～と、それじゃあ・・・・・（考え中）・・・・・のほほんさんでどう？雰囲気と名前を合わせたんだけど」

「おお～のほほん。いいよ～気に入ったよ～ありがとう～」

「喜んでもらえたら何よりだよ。のほほんさん」

そういって2人は色々と話し始めるのであった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

「ここが私の部屋ですかどんな方が同室でしょうかね」

そういって扉を開けると机でディスプレイを開いて何かをしている水色の髪のおとなしそうな少女が居た

少女はこちらに気がつくとこっちに近づいてきた

「は、初めまして・・・この部屋で同室になった・・・更識簪です」

そういって自己紹介する少女。

それを見てユウは

「簪ちゃんだ～～～」

と言って簪に抱きつくのであった

「え、え、え、ゆ、ユウちゃん？・・・ユウちゃんが同室なの？？？」

「そうだよ～私が簪ちゃんの同室だよ～～～」

ユウは設定上かわいいもの（人）に目がないため簪のかわいさに暴走中です

・・・・・・10分後・・・・・・

「お、落ち着いた・・・ユウちゃん?」

「うん、ごめんね。急に抱きついちゃって」

「久々にあえて・・・私もうれしかったから大丈夫・・・」

「本当に久しぶりだね~元気だった?」

そう何を隠そう、ユウは世界中を回ってたときに更識家にも少しお世話になったので更識姉妹と布仏姉妹とは友達なのだ

「うん・・・元気だったよ。ユウちゃんも元気だった?」

「元気元気。それにしても簪ちゃんまたかわいくなったね~」

「そ、そんなことないよ・・・それに、姉さんのほうがスタイルいいし・・・」

「ま~たそんなこと言うんですか?簪ちゃんは簪ちゃん楯無さんは楯無さんで違うのは当然なんですよ?」

「う、うん、わかってるんだけど・・・まだちょっと・・・ね」

「まあ、今の状態でもはじめてあったときよりはマシなようですからいいですけど、きちんと話し合わないとダメですよ?2人が仲が悪いと悲しいですからね」

そういって微笑むユウであった

「うん・・・がんばってみるね」

それに答えるように微笑み合う簪

そして、思い出したように話を切り出すユウ

「そういえば、簪ちゃんの専用機は完成しましたか？」

専用機とはＩＳの４６７しかないコアを完全に一個人専用に仕立て上げたものである。

ちなみに専用機は特別な場合を除き大体が国家代表や代表候補が持っている

そして、簪は日本代表候補なので当然持っているのである

「じ、じつは・・・まだ完成してないんだ・・・」

そういって少し落ち込む簪

その様子を見てユウは

「じゃあさ、簪ちゃんがよければ私も専用機作りに協力してもいいですか？」

「え？いいの？」

「ええ、もちろんですよ。簪ちゃんがよければですけどね」

「じゃあ・・・お願いしても・・・いいかな？」

「もちろんですよ。私達は友達ですからね」

「うん・・・とも・・だち・・だもんね・・・」

こうして久しぶりに再会した2人は消灯時間まで話に花を咲かせるのであった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ちなみにそのころの一夏は原作のように箒に追い立てられるのであった

また、妹達に救援を頼んだが自業自得といわれて助けてはもらえなかった

「不幸だ～～～～～～～～～」

その後どこかの不幸主人公のセリフを叫んだとか叫ばなかったとか・

第7話　クラス代表決め　そして決闘決定　なんでこうなるんでしょうかね？

ル「以上第7話でした～」

ユ「今回は決闘をやるということと部屋割りについてでしたね」

ル「そう、これは結構悩んだんだよね～」

ユ「そうなんですか？」

ル「そうそう、原作道理にいくか兄妹一緒の部屋にするかをね」

ユ「ということは私のルームメイトは・・」

ル「うん、一番最初に決まったよ。そして悩んだ結果、別々にしてのほほんさんを出してみた」

ユ「まあ、私は簪ちゃんと久しぶりに会えてうれしかったですがね」

ル「この二人を出したのは好きなキャラだからなんだよね～。ちなみに簪はユウの仲介のおかげで楯無に対して原作ほどはコンプレックスを抱いてはいません。それでも、原作のように仲直りはまだしてませんけどね。それと専用機も自分ひとりで完成させようとは思っておらずユウと協力して作っていく予定です」

ユ「簪ちゃんと2人で・・・えへへ～」

ル「戻ってきなさい！！」

ユ「ハッ　いまなにを」

ル「戻ってきましたか、それでは今回はこれまでです。感想等はいつでもお待ちしておりますのでよろしければどうぞ。それにしても次回予告っていりますかね?今更ですがつけようと思えばつけれますからどうしましょう?つけるとしたら全部に改めて追加かな?」

ユ「まあ、それはおいておきましょう」

ル「そうだね～」

ル・ユ「それではまた会いましょう～～～」

第8話　専用機　　さすがにこの仕事量は私でも死ねますよ？（前書き）

今回はあとがきに需要があるかわかりませんがアンケートがあります。

よければご協力お願いいたします。

第8話　専用機　　さすがにこの仕事量は私でも死ねますよ？

Ｓｉｄｅ　ユウ

入学式が終わった翌日の朝私は簪ちゃんと一緒に食堂に向かい席を探していると食事をしている一夏と雪ちゃんを見つけた。

そして向こうもこりらに気づいたのか話しかけてきた。

「ユウは今から飯か？」

「そうですよ。ところで2人だけなんですか？箒ちゃんや雪ちゃんのルームメイトさんがいませんけど」

そういうと一夏は苦笑いしながら

「あ、ああ、箒はさっさと食べてもう行っちゃったぜ。ところでそっちの子はルームメイトか？」

「私のところの子はまだ寝てるから先に食べに来たんだ。ところでそっちの子は？」

そういって私の隣にいる子について聞いてくる2人

「え、えっと、・・・私はユウちゃんのルームメイトの・・・更識簪です・・・」

そういって自己紹介するとオロオロとしながらも席について食事を取り始める簪であった

「へ～、ねえ簪ちゃんて呼んでもいい？」

「う、うん。・・・いいよ・・・」

そういって話し始める2人。どうやら仲良くなれそうだ

そうこうしていると一夏が

「じゃあ、俺も簪って呼んでもいいか？」

と言って簪ちゃんがおびえてしまったのでとりあえず叩いておいた

「痛い！？いきなり何するんだよユウ！？」

「簪ちゃんは内気で臆病なの。だから一夏みたいなのが急に話しかけたらおびえるでしょうが！！」

「だからって叩くことないだろ！？」

「ユ、ユウちゃん落ち着いて・・・」

「むぅ、簪ちゃんがそういうなら仕方ないですねぇ・・・」

「じゃあ、簪って呼んでもいいか？」

「・・・男の人にいきなり名前で・・・しかも呼び捨てで呼ばれるのはちょっと・・・いや・・・」

「そ、そうか・・・じゃあ、簪さんって呼ぶのはダメか？」

「そ、それなら・・・たぶん平気・・・」

そういって４人で話していると時間が近付いてきたので急いでご飯を食べてそれぞれの教室に向かうのであった

余談だが一夏によると1年の寮長は千冬姉さまらしい・・・

～～教室にて～～

ただいまの時間は2時間目終了後の休み時間で一夏は相変わらず授業内容についていけてないようなので机に伏している

そんな状態でいる一夏とこちらにやってきた雪ちゃんにクラスの女子が質問を投げかけている

「ねえねえ、千冬お姉さまって家ではどんな感じにしてるの？」

「そうだな～、意外とだらしな　スパンッ」

「けっこうだらしな　スパンッ」

と音を立てて叩かれる一夏と雪ちゃん当然叩いたのは千冬姉様です。

いくら本当のこととはいえいきなり叩くのはどうかと思いますよ？

スパァッン

「い、痛いです～（泣）」

「考えが顔に出ていたぞ。それと休み時間は終わりだ席につけ」

そういうとみんなが席に戻っていきます。

それにしても顔に出てましたか、今度からは注意しましょう

「そうだ。織斑兄、お前の乗るＩＳについてだがもう少し時間がかかる」

「え？」

「予備機がないため学園側が用意することになった。織斑妹についても同様だ」

「え？私もですか？」

「そうだ。織斑兄のＩＳを開発しているところがいい機会だからと実験機に使っていたコアを使って製作したらしい」

へ～一夏は予想できましたが雪ちゃんもですかそれにしても周りはとてもうらやましがってますね

そして一夏、また意味がわかってないんですか？

「お、織斑先生専用機ってなんですか？」

「まったく専用機とは４６７しかないコアを個人に合わせて調整し

たものだ。大雑把だがわかったか？わからなかったら教科書を読んでおけ」

「とりあえずすごいことなのはわかりました・・・」

それってわかってないってことですよね

ハァ・・・先行きが不安です・・・

などと思っていると話を聞いていた女子が話しかけてきた

「と、ところで織斑先生篠ノ之さんって篠ノ之博士の関係者なんですか？」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

まあ、珍しい苗字ですし疑問に思いますよね。それにしても教師がそんな簡単に個人の情報を流してしまっていいんでしょうか？

などと考えていると

バアンッ「あの人は関係ない！！」

机を叩いて箒ちゃんが大声で言っていました

「・・・大声を出してすまないだけど私はあの人とは違うんだ。だからみんなに教えられることはない」

そういって席に座る箒ちゃん箒ちゃんは束姉様のせいでいろいろなことがありましたから仕方ないでしょうね

授業が終わるとセシリア・オルコットがまた話しかけてきました。

「安心しましたわ。まさか訓練機とやることになるのではないかと心配していましたから。おかげでこちらも全力でやれますわ」

「？どういうことだ？」

また一夏はわかっていないようですね

「一夏代表候補というのは一応エリートですからほとんどが専用機をもっていりゅ・・・いるんですよ」

「そうなのか。ところで今噛んだよな」

「う、うるさいです　／／／／　一夏が馬鹿だから噛んだんですよ！！」

「いや、俺関係ないだろう・・・」

いいえ絶対今のは一夏が悪いんです！！そうに決まってます

「ところでもう1人の対戦相手であるあなたは専用機を持っているんですの？」

「ええ、もってますよ。というか昨日本来のＩＳじゃない打鉄で戦ったって言いましたよね？人の話を訊いてないんですか？」

「う・・・わ、忘れてただけですわ」

「はいはいわかりましたよ」

「クッ馬鹿にして・・・来週を楽しみにしていなさい！！」

そういって去った

「ところで一夏そろそろご飯食べに行きませんか？」

「そうだな。じゃあ俺は箒を呼んでくるから雪奈と先に行っててくれ」

「はい」

そういって先に食堂に向かうのであった

～食堂にて～

４人で食事を取っていると一夏が突然

「お願いなんだけどさ、箒か雪奈かユウ誰でもいいんだけどＩＳの訓練手伝ってくれないか？」

と言ってきた

「突然なんだ。人を無理やり連れてきたくせに」

「だからそれは悪かったって機嫌直してくれよ箒」

「それで？突然どうしたんですか？」

「ほら、基礎知識に関してはユウが教えてくれるけど実際にＩＳを動かすとなると話は別だから教えてもらおうと思ってな」

「それは構いませんが私の場合は一夏に勉強を教えるのに加えて自分のＩＳの調整も来週までにしないといけませんからあまり時間は取れませんよ？」

「ああ、それでもいいよ。ところで、箒と雪奈はどうだ？」

「私は平気だよ～一兄の頼みだしね～」

「私も一夏がどうしてもというなら訓練を手伝ってやるぞ」

「ああ、２人ともよろしく頼む」

そしてみんなで食事を取り終えて教室に戻っていった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

今俺は箒と雪奈と一緒に剣道場に居る・・・なんでいるかって？訓練機の貸し出し要請が間に合わなかったからだよ

ちなみにユウにこれは意味があるのかと訊いたら「ＩＳは所詮人のが状況を見て判断するんだからいい練習方法ですよ」といわれた

そしてユウは現在このあとに行う勉強と自分のＩＳの調整で別なところにいる

「どうやら腕は鈍っていないようだな。それどころか昔より強くなってるようだ」

「そりゃそうだよ、お前と別れてからもいろいろあって特訓は続けてたからな」

「いろいろ？」

「まあ、それについてはいつか話すよ」

そういうと箒はどこか残念そうな顔をした。

だけどあのことについてはいくらお前にでもまだいえないんでな

それにしても俺はまだまだ弱いもっと強くならないとな。それこそ大切な人達を自分の力で守れるように

そう思いつつ一夏は放棄との訓練を続けるのであった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

一夏たちが剣道場で戦っているころユウはというと学園の整備室で何かを操作していた

「ふう、大体今日の機体調整はこんなところですかね。機体は7割

終了といったところですか、あとは武装関係ですね」

なぜいまさら調整しているかというとＩＳ学園に来る前に受けた依頼で頭にきて全力全壊でＩＳを稼動したためオーバーホールを行ったからだ

「そうだ武装に関しては現在開発中のあれを新しく突っ込みましょうかね。・・・となるとまた本体を調整しないといけませんね」

ちなみにユウの２つめのＩＳは１つめの生体ＩＳがユウが使う力を反映させるのに対していろいろな世界の技術を使っているため無駄に高性能である。

～～そして時間は過ぎ場所も変わって食堂～～

「では一夏の勉強については食事終了後時間を置いて８時から１０時にやることにします。ビシビシ行きますからね覚悟してください」

「わ、わかったお手柔らかに頼む・・・」

そして夕食を食べていると入り口のほうから千冬姉様がやってきました

「ここにいたかアインツベルン」

「ふえ?・・・何か御用ですか織斑先生?」

「ああ、お前に政府から依頼があってな」

「政府からですか？」

「そうだ、内容については明日納品される織斑兄妹の専用機を完成させろというものだ」

・・・・・・・・・・・・・え？

「あ、あれってＩＳ学園で用意するって話では？」

「ああ、そのはずだったんだが元々２人の専用機はある研究所で作られて欠陥品として凍結されていたものをある人物が引き取って作り直したんだがそいつから連絡があって機体そのもの関してはほとんど完成しているから残りはアインツベルンが近くにいるんだからそっちに作らせたほうがいいだろうと考えたらしく機体と一緒にお前に作らせろという脅迫に近いメッセージを送ってきてな。ちなみにその後の専用装備やＩＳスーツについては元々開発をしていた研究所で作るそうなのでこれは今回だけだ」

ある人物？しかも凍結した機体をわざわざ貰い受けて開発するなんてそんな物好き１人しか知りませんよ・・・

「・・・・・拒否権は？」

「本来であればライセンス持ちは断れるが今回に限ってはこう言わせてもらう・・・姉としての命令だ作れ」

ｏｒｚ

逆らえるわけがありませんよ～～

「・・・ううん、わかりました・・・ちなみに授業に関してはどうなります？」

「当然出ろ・・・といいたいが今回は1週間もないからお前は完成させることに専念しろ」

「了解です。」

「ちなみにやりすぎるなよ・・・」

「善処します」

「わかった。食事中に悪かったな」

そういってスタスタと歩いていく千冬姉様・・・それにしても大変ですね～

「というわけで一夏明日からあなた達の機体を作らなきゃいけないので明日以降は勉強はなしでお願いします」

「ああ、そういうことなら仕方ないよな。それどころかこっちがお礼言わなきゃならないくらいだし」

「まあ、安心してください。今日は予定を変更して時間を3時間に延長、さらに徹底的にやってあげますよ」　ニッコリ

「な、何でそうなるんだ！？」

「安心してくださいただの八つ当たりですから」

「安心できるか～～～～！！」

次の日の一夏が真っ白だったのは言うまでもない・・・

そして一夜明けた水曜日の放課後

「これが一夏と雪ちゃんの専用機ですか」

「そうだ。織斑兄専用機は『白式』といって送られてきたデータによると高機動と接近戦主体らしい。そして、織斑妹の専用機は『白雪』、こちらは逆に頑丈さと遠距離戦主体の機体らしいぞ」

「きれいですね。この子達を完成させればいいんですね？」

「そうだ。ちなみにすでに初期設定は終わっているらしいので一次移行後の武装や基本設定を造ってくれ」

「わかりました。それでは早速開発室で作り始めますね」

「ああ、よろしく頼む」

～～開発室～～

「ではやりましょうかね。フムフム、初期設定と一次移行後の基本的なスペックはこんなところですかここにそれぞれ専用の武装などが追加されるんですね」

そういいながらパソコンをいじっていくユウ

「とりあえず両方にいえますが拡張領域に空きがありませんね。これはあれですか、まさか第一形態からワン・オフ・アビリティーが発動するとでもいうんですか？そういえばこの２機はほぼ確実にあの人が開発に携わっていますからありえますね」

そういって何かを取り出しそれをＩＳにつないでいく

「まずは、私が作ったこれで拡張領域を増やしますかね。コア１つにつき１回しか使えませんがある意味十分でしょう」

～～拡張中～～

「そうだ、武装はあの機体たちを参考に追加していきましょうかね。一夏や雪ちゃんには強くなってほしいですからがんばりますよ～～」

そうして黙々と作業を繰り返していくのであった

～～２日後の金曜日～～

現在徹夜中

「・・・・・・・・ま、まずいですね‥　このままだと終わる気配がありません・・・。さすがに３機同時開発はまずかったですね。せめてもう少し人手があれば何とかなるのですがこの世界外の技術ですから理解できないでしょうし、ど、どうすれば」

といいながらも手を止めないのはすごいところである

しかし、不意に手を止めて

「あ、ああ～～～～いるじゃないですか最高の助手達が！！何で忘れてたんでしょうか！？馬鹿ですね」

そういって魔方陣を展開させるユウ

「我が元に集え我を守護せし１０の守護者　その中の夜天・蒼天・剣　さらに我と契約しその姿を現せ　『エンゲージ』ランスロット」

そういうと彼女の目の前に４人の人影が見える

１人目はユウと瓜二つで身長がユウよりも少し高い女性

２人目は水色の髪でユウよりも年下に見える少女

３人目は赤い髪で２人目と同じくらいの身長をした少女

最後４人目は金髪で１人目の女性と同じくらいの身長をした女性

「夜天の守護者リインフォース？（アインス）」

「蒼天の守護者リインフォース？（ツヴァイ）」

「剣の守護者アギト」

「インテリジェントデバイス、ランスロット」

「「「「ここに参上しました。マスター」」」」

そういって頭を下げる４人

「毎回言うけど別に普通に話していいんですけどね」

「では、いつもどうりにさせてもらいます。それでなぜいまさら呼び出したんですかユウ？」

「そうですよ～呼ぶならもっとはやく呼んでほしいですよ～ユウちゃん」

「そうだぜ姉御大体の事情はわかるけど呼ぶの遅いと思うぜ」

「マスターあなたはなんでどこか抜けてるんですか？」

そういって言葉攻めにする４人

「みんなしてひどくないですか！？確かに忘れてたのは謝りますけど」

「「「「自業自得です」」」」

「う～～～」

ちなみにそれぞれの愛称は

リインフォース？はアインス

リインフォース？はリィン

アギトはそのままアギト

ランスロットはランである

「それで私達はこれの製作を手伝えばいいんですね？」

「うん、お願い」

「「「わかりました」」」

そういって作業を開始するアギトを除いた3人

「それで姉御～私は何をするんだ？あの3人と違って機械関係は得意じゃないぜ」

「アギトはコーヒーでも入れておいてくれる」

「・・・いったい何のために私は呼ばれたんだ」

「え？なんとなく？」

「もういいよ・・・」

そういってコーヒーを淹れにいくアギト

「よ～しこのまま一気に終わらせるぞ～～」

・・・そして日曜日の夜遅く・・・

「や、やっと終わったよ。さすがに眠い・・・」

「こちらももう限界です・・・」

「「「「「おやすみなさい」」」」」

そういって全員が眠ってしまった

傍らに佇む２つのＩＳはそれをみて一瞬光ったようだった

第8話　専用機　　さすがにこの仕事量は私でも死ねますよ？（後書き）

ル「以上第8話をお送りいたしました」

ユ「ク～～～～～」

ル「あらら寝ちゃってますね。まあ、疲れたでしょうしそっとしておきましょう」

そういって静かに布団をかける

ル「今回は主人公を守護する存在を出させていただきました。ちなみになぜあの3人なのかというとこの小説の設定ではこの3人はユウが作ったことになっています。経緯としては」

ユウなのはの世界の古代ベルカ時代に初代聖王として生まれる

←

自分専用のユニゾンデバイスとして3人を作る

←

死去　その後夜天の書改悪されるそして悲劇が始まる

←

A's本編へ

ル「といった感じです。ただしなのはに出てくる3人はコピー的な感じです。本来の3人は創造主であるユウの力の一部といった感じです。性格に関してはリィンとアギトは変わりませんがアインスは原作より物腰が柔らかく表情豊かです。ランに関してはただ擬人化させただけです」

ル「そして次回はいよいよＩＳ戦が始まります。一夏の白式は魔改造して全体的に強化されています。それこそやりたい放題ですね。ｗｗ」

ル「そしてユウのＩＳはまだ出ません。次回は一夏対セシリアです。また下に需要があるかわかりませんがアンケートがありますのでよろしければご協力ください」

需要があるかわからないアンケート

今回出したリインフォースたちを転校生として転入させるかどうかです。

出してほしい方がいればそれぞれリインフォース？・リインフォース？・アギト・ランスロットの名前を書いてください。複数書いていただいても構いません。

期限は５月１０日です。

なおタイミングについてはシャルルがシャルロットとして転入しなおすときです。

タイミングは悪いですけどね。

それではまた次回でお会いしましょう

第9話　決闘開始　・・・あれ?私の試合は?（前書き）

ようやくＩＳ戦が始まりました。

戦闘シーンがうまくかけてるかわかりませんがどうぞ楽しんでみていってください。

需要があるかないかわからないアンケート実施中
詳しくは前話にて回答は感想のほうにお願いします

第9話　決闘開始　・・・あれ？私の試合は？

Ｓｉｄｅ　一夏

～～決闘当日のアリーナ～～

今俺はセシリアと決闘を行うためにアリーナに来ていた。

「なあ、箒、雪奈」

「なぁに？」

「なんだ？」

「気のせいかもしれないがこの１週間ＩＳの訓練をしてない気がするんだけど？」

そういうと２人は無言のまま目を逸らした

「「・・・・・・」」

「おい！！目を逸らすな！！」

「仕方ないでしょ！！一夏のＩＳがまだできてないんだから！！」

「そうだ！！ＩＳができてないんじゃ何もできないだろう！！」

なぜか逆切れされました・・・

「いや、それでも訓練機を借りるとかできたと思うんだが・・・」

「訓練機の貸し出し許可がいっぱいで取れなかったんだから仕方ないでしょ！！」

「それにしたって基礎知識とかでもいいから教えてくれてもよかったんじゃないか？」

「「それはユウ（ちゃん）の役目だ（よ）」

そういって話し込んでいると入り口から誰かがやってきた

「お、織斑君織斑君織斑君」

3回も人の名前を呼びながらやってきたのは山田先生。

はっきり言ってみてるこっちがハラハラするような足取りだった

「とりあえず山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ、す～～～は～～～、す～～～～は～～～」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

なんとなくそういって息を止めさせると先生の顔がみるみると赤くなっていった

「・・・・・・・・」

「・・・・・ぷはっ、ま、まだですか？」

スパァンッ

「目上の人は敬え馬鹿者が」

「ち、千冬姉・・・」

スパァンッ

本日２回目である

「いい加減に学習しろ。さもなくば死ね」

「すみませんでした」

「え、え～っと。あ、そうです織斑君のＩＳが完成したそうですよ！！」

「そうなんでスか？」

「ああ、そうだ。それと時間が限られているから早く準備しろ」

そういわれてピットまでいくとそこにあったのは『白』だった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

さて一夏たちの機体が完成して眠っていたら気づいたらお昼で危うく決闘に間に合わないところでしたよ。

ピットの搬入口のほうでは千冬姉様が一夏に機体の説明を行っているところですね・・・え?私ですか?眼いので説明は任せましたよ。

そうこう考えていると一夏が白式を装着して

「ユウこいつを完成させてくれてありがとうな」

と言ってきましたので私は

「まあ、がんばってください。」

といっておきます。

そういうと一夏はピットから出て行きました。

そして、2人が何かを話した後いよいよ試合が始まります。

さてさてどうなるでしょうね?

~~試合開始から27分~~

一夏はがんばりましたけどそろそろ限界ですかね~

相手はイギリスが開発した第3世代型IS『ブルー・ティアーズ』

大型のレーザーライフルに加えてビットを使って中~遠距離で戦

うタイプです。

はっきりいって現段階で近接武器しか持っていない一夏では不利すぎますね。

そのように考えていると千冬姉様に

「お前はこの試合どう見る？」

と、きかれました

「そうですね。まあ、ＩＳに乗るのが２回目ならがんばったほうでしょうね。一次移行が終わっていれば話は変わったでしょうが」

「まあ、それもそうだな」

そうなんです。せめて一次移行が終わっていれば私が追加した武装が使えるので少しは何とかなるんですがタイミングが悪かったですね。

そのように今回完成が遅れたことを悔やんでいると、いつの間にか一夏がセシリアのビットを２つ落としていた

「はぁ～、それにしてもすごいですね織斑君は、とてもＩＳに乗るのが２回目だとは思えないですよ」

そういって感心する山田先生

「でも、あの状態の一夏じゃまだ勝てないと思いますよ山田先生」

「どうしてですか？」

私の言ったことに疑問を感じる山田先生、それに答えようとすると千冬姉様が

「あの馬鹿者が浮かれているからだよ山田先生」

「え？何でわかるんですか？」

なぜ一夏が浮かれているかわからない山田先生に私たち2人が答えます。

「さっきから一夏は左手を閉じたり開いたりしてますよね。」

「ああ、そういわれればそうですね」

「あれは昔からのあいつの癖でなあれが出るとたいてい簡単なミスをするんだ」

「へ～お2人ともそんな細かいところまでわかるなんてさすがですね」

そう言っている山田先生から一旦目線を箒ちゃんと雪ちゃんのほうに視線を向けると2人して一夏のことが心配なのかずっとモニターを見つめていた。

「（まったく2人とも心配性ですね～まあ、好きな人が戦っていれば仕方ないですかね。それにしても何か変な音がしはじめましたね）」

そう思ってギリギリと変な音が聞こえる方向に目を向けてみると千冬姉様が山田先生になぜかヘッドロックを決めていた。

・・・・・え？何ですかこの状況は？

「山田先生、私はからかわれるのが嫌いだ。わかったかな？」

「は、はい！わ、わかりました、わかりましたから離してください～～～～！」

・・・どうやら山田先生が千冬姉様をからかったようですね。

・・・なんて命知らずな山田先生あなたのことは忘れません。

「まだ、死んでないですよ～～～（泣）」

「そんな状況でよく心が読めますね！？」

などと漫才のようなことをやっているといきなり何かが爆発したような音が聞こえてきました。

私たち3人が驚いてモニターに目を向けるとどうやら一夏がブルー・ティアーズのミサイルをもろに食らったようです。

そして心配して思わず「「一夏（兄）」」と声を漏らす2人

しかし、私は煙の中に存在するであろう機体を想像すると笑いが止まりません。

何せこのタイミングであれが起こったんですからね。

「ふんっ、機体に救われたな、馬鹿者め」

どうやら千冬姉様もわかっているようで鼻を鳴らしていました。

そして突然、煙が吹き飛んだかと思うとその中心には一夏の乗っている白式が真の姿で佇んでいた。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

『フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください』

そういわれて確認のボタンを押すと白式が光の粒子となって消えて新たな姿を現す。

すなわちこのＩＳはこれでやっと俺専用になったのである。

手足の装甲はより洗練され背中にはウイング型スラスターが2基、さらにその下に少し小型のスラスターが2基装着されている。

そしてその右手には先ほどまでとは違った新しい武器が握られていた。

その名を・・・『雪片弐型』

かつて千冬姉が使っていた雪片と同系統の武器である。
それを見て俺は思わず口に出してしまった。
「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」
あの人はいつでも俺のことを心配してくれて守ってくれていた。
だけど、もう守られてるだけじゃない俺も誰かを守れる力を得ることができたんだ。
だから・・・
「俺は、俺の家族を守る」
「・・・は?あなた何を言っているんですの?」
「とりあえずは千冬姉の名前を守らせてもらう!!行くぞ!!」
そういって白式を加速させてセシリアに突撃する一夏
「いくら一次移行したからといってわたくしをなめるのもいい加減にしなさい!!」
セシリアは手に持ったスターライトｍｋ?を使い一夏にレーザー砲の嵐を浴びせる。
しかし一夏はそれを紙一重でかわしていき徐々に距離をつめていく
「クッ速い!!（このまま接近されたらまずいですわね・・・ここ

は一つ賭けをさせてもらいますわ）・・・ならばこれでも喰らいなさい！！」

そういって今度は先ほど放った弾頭を再装填させたミサイルタイプのビットを一夏に向けて放つ。

一夏に向かってまっすぐに飛ぶ2つのミサイルしかしそれを一夏は

「残念だが見えてるんだよ！！」

そういって両方とも真っ二つにする。

原作と違い一夏は中学校でも自らを鍛えていたため動体視力はよくＩＳの補助もあってミサイルを切ることができた。

しかし、セシリアはミサイルがきられたにも関わらずわずかに笑みを浮かべていた

「かかりましたわね！！まだ、ブルー・ティアーズは1機残っていましてよ！！」

そういって爆風のせいで死角になっている左側から発射される一筋のレーザーが一夏を襲う。

「あなたのＳ・Ｅ（シールド・エネルギー）がもうほとんど残っていないのはわかっていますわ！！ですからこの一撃でわたくしの勝ちですわ！！」

そうしてレーザーは一夏に当たりＳ・Ｅを０に・・・・・・・・・しなかった。

一夏に当たる直前に左腕から突如シールドが現れレーザーを防いだのである。

「な、なぜですの!?いくらなんでもあのタイミングでシールドなど出せるはずありませんわ!!」

本来であれば一次移行したばかりでいったいどんな武装があるか確認する暇がなかった一夏にはあのタイミングでシールドを出すなどという芸当はできないだろう。

そう・・・1人ならば。

「た、助かったのか?」

《はい、マスターのS・Eはまだ尽きてはいません》

突然聞こえてくる声、当然戸惑う一夏

「だ、誰だ!?」

《わたしは白式に搭載された人工AIです。》

「じ、人工AI?」

《そうです。しかし今はそのことよりも対戦に集中されたほうがよろしいですよ。》

「そうだな。じゃあ、一気に行くぞ!!」

《了解です。マスター》

そういって４基のスラスターを全開にして一気にセシリアに近づく一夏

「クッ　は、速いですわ！？回避できない！？」

「うおおお～～～～～～～～～～」

一夏の闘志に反応して光り輝く雪片弐型

《え？な、何でワン・オフ・アビリティーが発動してるんですか！？今の状態で発動したら》

そしてその刃がセシリアに当たる直前・・・

『勝者　セシリア・オルコット』

セシリアの勝利を告げるアナウンスが鳴り響いた

第9話　決闘開始　・・・あれ？私の試合は？（後書き）

ル「やっとＩＳという作品の最大の見せ場であるＩＳによる戦闘シーンがかけましたよ」

ユ「やっと戦闘ですね。でも私は戦闘してないんですが？」

ル「ユウの戦闘シーンは次回に回したんだよ。だって起きてすぐの戦闘ってきついでしょ？」

ユ「まあそうですけど。ところで何で戦闘シーンの前半を飛ばしたんですか？」

ル「初戦闘シーンだし原作と同じところは飛ばして少し改変させたところからにしてみました。」

ユ「それじゃあダメでしょうが！？」

ル「だってあの戦闘の見せ場は２７分経過してからだと思ってるからあそこだけは原作の一部を飛ばしてみた。」

ユ「・・・・・・」

ル「大丈夫次回以降はそういうところもちゃんと書く予定だから」

ユ「ほんとうですか？」

ル「・・・そんなことよりとうとうでた一夏の魔改造　白式！！」

ユ「今回の話じゃ白式ほとんど原作と違いないじゃないですか！？」

ル「そうなんだよね～今のところの違いは増設されたスラスターとシールド、後は人口ＡＩくらいだね～」

ユ「スラスターとシールドはいいですけどなんでＡＩをつけたんです？」

ル「趣味です！！」

ユ「・・・・・・・・・」

冷たいまなざし

ル「そんな目で見ないで～～～」

ユ「本当の理由は何ですか？」

ル「いや、さっきのも理由なんだけどね。他にもいうなら原作よりも白式は武装も多くて機動力もスラスターが増えたぶん高い、ユウは設定上リリカルな世界にも行っている。そして、魔改造の参考にした作品には戦闘補助用のロボットが一緒に機体に乗ってた。・・・よし、白式にＡＩ乗せよう。て感じかな」

ユ「むりやりすぎませんか～～～！？」

ル「最初からＩＳにはいろいろな作品のネタを使うと書いてあるから問題はない・・・はず。まあ、生体ＩＳとか言ってる時点で設定上ありえないからね」

ユ「ああ、いったい私のＩＳはどうなるんでしょう・・・」

ル「まあ、生体ＩＳは装甲ついてないからね～完全にユウの能力をＩＳの世界で使うために考えたから」

ユ「じゃあ、もう１つのほうは？」

ル「ちゃんと装甲ある普通のＩＳだよ。武器はいろいろと鬼畜な気がするけどね」

ユ「・・・もういいです」

ル「次回は一夏の敗北原因と各武装についての説明そしていよいよ始まるユウ対セシリア　果たして勝つのはどっち！！」

ユ「また、感想、誤字脱字報告、アンケートの回答等ありましたら感想のほうにお願いいたします」

ル・ユ「「それではまた次回でお会いしましょう」」

第１０話　決闘２　蒼と黒の激突（前書き）

気がついたらＰＶが２万超えてました。

読んで下さった皆様本当にありがとうございます。

文章構成は下手ですがこれからもよろしくお願いいたします。

そして今回はようやく主人公が戦います。

戦闘シーンうまく書けてるかが心配です。

それでは本編をどうぞ～。

第１０話　決闘２　蒼と黒の激突

Ｓｉｄｅ　一夏

「まったく、あれだけ持ち上げておいてこのざまとは情けないぞ。この大馬鹿者が！」

セシリアとの試合が俺の敗北という結果に終わって俺は今ピットに戻ってきている。

ちなみにセシリアは次のユウとの試合に備えてＩＳの補給と３０分の休憩を取っている。

そして俺は絶賛千冬姉のお説教を食らっている最中だ。

しかも呼び方が馬鹿者から大馬鹿者にランクアップするおまけつき・・・・・うれしくねぇ。

「武器の特性も考えずに感情だけで使うからああなるのだ。せっかく高性能なＡＩが搭載されているというのにこれでは宝の持ち腐れだぞ。いいな、明日からは訓練に励め。暇があればＩＳを起動しろ、いいな！！」

「・・・はい」

こういわれてはもう頷くしかない。

それにしても俺は何で負けたんだろうか、あの時は攻撃も食らってないしＳ・Ｅがなくなった原因がわからん。

「どうして負けたか不思議そうな顔をしているな。いいだろう今回は特別に教えてやる。お前の使っていた雪片にはバリア無効化攻撃という特殊能力がついている」

「バリア無効化攻撃？」

「そうだ。その名のごとく相手のバリア残量に関係なく相手本体に直接ダメージを与えられる。そして、そうなるとどうなる？篠ノ之」

「は、はい。ＩＳの絶対防御が発動して大幅にＳ・Ｅを減らすことができます」

「そうだ。私がかつて世界一の座に輝いたのもこの特殊能力によるところが大きい」

「ってことは無敵ってことですか？」

「残念だがそれはない。なぜなら雪片の特殊能力を使うには自らのＳ・Ｅを消費して発動するからだ」

「あ～、だから最後エネルギーが足りなくて負けたんですね」

「そうだ。あれは一種の欠陥機だからな」

「欠陥機！？欠陥機って言ったよな今！？」

バシンッ

教師に対する言葉使いは気をつけましょう。

「だが今は違う。本来であれば拡張領域がすべて雪片によって埋まっているがアインツベルンが作った拡張領域を拡張させる装置のおかげで少しだが武器が増設されてる」

ということはあのシールドがそうなのか

「その辺は本人に説明させる」

そういって白式の調整をしていたユウがこちらにやってきた

「では、簡単に説明しますね。」

「ああ、頼む」

「まずは白式に搭載したＡＩについてですがこの子は一夏をサポートするために組み込んだものです。主に高速戦闘時の機体制御や射撃のサポートなどをしてあげます。ちなみに名前はないので一夏がつけてあげてください」

「なんだ、名前がないのかそれじゃあ・・・・・・・・・白鳳なんてどうだ」

《名称　白鳳　登録完了しました。改めてよろしくお願いします。マスター》

「ああ、よろしく頼むぞ。相棒」

「それでは、名前も決まったようですので時間もないですしそろそ

ろ説明を始めますね」

そう実は試合時間まであと15分くらいしかないのである。

「まず機体に関しては、高速戦闘に特化してますので装甲や防御力は低めです。その代わりに背中には大型のウイングスラスターと小型のスラスターの4基ついていますのでスピードに関しては現存するISの中でもトップクラスです。また、S・Eとは別に機体ならびに雪片以外の武器にそれぞれ貯蔵型の特殊エネルギーが内蔵されています。」

「す、すごいんだな。でも、これじゃあおれ、扱いきれる自信がないんだけど・・・」

「そのための白鳳ですよ一夏。さすがに補助を行ってもらわないとまともに扱える人がいませんから。ちなみに特殊エネルギーのほうは使いきった場合電力によってチャージできます」

試合中に補充はできないのか気をつけて使わないとな。

「次に武装に関してですが雪片に関しては先ほど説明があったようなので飛ばします」

「いやいや、そこは説明するべきではないか？」

「箒ちゃん。今はそこまで時間がないので仕方ないんですよ」

「あ・・・そうだったなすまない」

「いえいえ、では再開します。他の武装に関しては私が拡張領域を

拡げたのでいくつかふえています。」

そういってモニターに武装を表示させていく。

「まず試合でも使ったシールドですがこれは物理・レーザーともに防ぐことができますので結構万能です。それに加えてちょっとした隠し要素がありますがそこはあとで白鳳にこっそりとでも訊いてください」

「今教えてくれないのか？」

「せっかくの隠しだまなのですから知ってる人は少ないほうがいいでしょう？まあ、私は知っていますがね」

「・・・わかった。あとで訊いておく」

「次はこの大型ソードですね。これは、展開すると右手に固定されます。そして刃の部分はコーティングされていますのでレーザーなどの攻撃をはじくことができます。そして内蔵エネルギーを使うことによってビームを撃つことができます」

「ビーム！？それじゃあこの武器だけでもすごいじゃないか！？」

「そうでもないですよ。これにも欠点がありますからね。ソードは大型ですので隙が大きいですし、ビームのほうは１回撃とうとすると絶対に３回連射されますのでこの武器に内蔵されているエネルギー量的に１５発すなわち５回使用すると使えなくなります。そのため使うとしたら気をつけないといけませんね」

「万能ってわけじゃないんだな」

「では次です」

そういって次に表示させたのはマシンガンだった。

「これはビームマシンガンで連射性に優れていますが1発の威力は低いです。また、この武器の内蔵エネルギーは１００発も撃てば尽きますので撃ちすぎには注意ですよ」

「ああ、わかった気をつける」

「最後はこれですね」

最後に表示されたのは2本の短めの剣だった。

「これはショートブレイドで最初から2本装備されています。まあ、これは予備みたいなもので武器がはじかれたり破損した場合に使用する感じですね。あと他にも2つほど隠し要素がありますがそのへんは時間がないので私の試合中に白鳳から聞いておいてください」

「わかった。いろいろとやってもらってありがとうな。ユウ」

「いえいえ、気にしないでください。それでは時間ですので行って来ますね」

「ああ、行ってこい。俺の敵をとってくれよ」

「はいはい。わかりましたよ」

そういってアリーナに向かって歩いていくユウ・・・・・あれ？

カタパルトにのらないのか？

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

今私はアリーナの中央に立ってセシリア・オルコットを待っています。

しばらくするとピットの入り口が開きそこからセシリア・オルコットが飛び出してきた。

「お待たせしましたか？」

「いえいえそんなに待ってないですよ。」

「それでは、早速始めたいのですがなぜＩＳを展開なさらないのかしら？」

そう、私は未だにＩＳを展開していない

「安心してください、すぐに展開しますから。それにしても先ほどと違って少し顔つきが変わりましたね、セシリア・オルコット」

「そうですかしら。さきほど織斑一夏に負けそうになったのでもう慢心をしないで誰であろうと全力で戦うと決めただけですわ」

「・・・（まあ、それだけじゃなさそうですけどね）そうですか、

それでも私はあなたを倒すだけですよ」

そういったユウの体を光が包み込むとそこには『漆黒』が存在した。

両手両足は漆黒の薄い装甲に覆われて頭には目元を隠す漆黒のバイザー、そして髪はポニーテールになっていた。

「それがあなたのＩＳですのね。では、試合の前にきちんと名乗らせていただきましょう。わたくしはイギリス代表候補生　セシリア・オルコット、そしてわたくしの愛機　ブルー・ティアーズですわ」

「名乗られたら名乗り返さないといけませんね。私は　ユウナスフィール・フォン・アインツベルン、そしてこの子は　漆黒の龍（ドラッヘン・ペヒシュヴァルツ）です」

「「あなたには負けません!!（わよ!!）」」

両者がそういうと同時に鳴り響く試合開始のブザー今ここに二人の戦いは始まった。

「くらいなさい!!」

そういって先手を取ったのはセシリア、自らのレーザーライフルをユウに向けて発射する。

「その程度じゃ当たりませんよ」

それをユウは地を蹴って後退しながら回避する。

それを追うように連射されるレーザー

しかしそれはユウに当たることなく回避されていく

「クッ　当たりませんわ！！でも回避だけでは試合に勝つことはできなくってよ！！」

そういいながらなおもレーザーを放ち続けるセシリア。

「ではそろそろ攻撃に移らせてもらいましょうかね」

そういってユウはレーザーが撃たれる隙を見て腰を低く構えた

「フッ！！」

そのようにユウが言うと同時にその姿は掻き消えた。

「き、消えた！？いったいどｋ　『バキ』　きゃぁ～～～～！？」

ドカッ

消えたユウの姿を探そうとしたセシリアは突然吹き飛ばされてアリーナの壁にぶつかった。

『バリア貫通、ダメージ８７。シールド残量５１３』

そして、ＩＳからのメッセージによって自分が攻撃されたことに気がついた

そして、視線を向けた先には先ほどまでセシリアがいた場所に漆黒の翼を広げ両手には肘まで装甲に覆われその先には３本の爪のような刃がついていた。

「まだまだ行きますよッ！！」

そういうと再びその姿は掻き消えた

しかし今度は危険を察知してかセシリアは上空に飛び上がり何とかかわした。

「あ、危なかったですわ。（でも、このままではまずいですわね・・・こうなったら一か八か・・・）」

そう考えるとセシリアはビットを射出してユウを攻撃した。

「いくらビットを使っても弱点を克服していなければ当たりませんよ！！」

そういってビットによる攻撃を地上スレスレで避けてセシリアに近づいていくユウ。

「まだですわ！！」

そういって今度はミサイルを発射する。

「そんな攻撃切り捨てる！！」

そういって真正面から切ろうと右腕を振る。

しかしそれは空を切ることになり逆に爆風が襲う。

そうミサイルが突如軌道を変えて地面にあたり爆発したのである。

そして、煙の中に身を包まれるユウ

「（まさか、私じゃなくて地面を狙ってこちらの視界を塞いでくるとは予想外ですね。でもこの煙に乗じて配置されているであろうビットからの攻撃ならこの距離でもかわせますよ！！）」

「・・・・・・・・・プター！！」

そのように考えていると遠くで何かが聞こえた、そして急に目の前の煙が晴れた。

「はぁぁ～～～～～～！！」

「なっ！？」

ガキンッ

激突する爪とブレード。

突然の強襲にかわすことができずに鍔迫り合いの状態になる2人

「クッ！？まさか、ここで近接戦闘をしてくるなんて予想外ですよ！！」

「この方法くらいでしかあなたの不意をつけそうにありませんでしたから仕方ないですわ！！」

「でも、接近戦なら左手が空いている私のほうが有利ですよ！！」

そういって左手で切りつけようとするがその左手は何かにはじかれた。

「そんな!?」

ユウの左手をはじいたのはビットによる攻撃だった。

「いくら普通に攻撃している最中にビットが操作できないといっても今のような状況なら攻撃を命ずることくらいできましたよ!!」

そう、セシリアは煙で覆われている間にビットをいつでも攻撃できる状態にしてユウの周りに配置しておいたのだ。

そして、鍔迫り合いの状況に持ち込みビットに命令できないと考えていたユウを攻撃したのである。

「さあ!ブルー・ティアーズの一斉掃射をくらいなさい!!」

その声とともに動揺していたユウに襲い掛かるレーザー。

それをユウはまともに喰らいバランスを崩す。

「今ですわ!!」

その隙を見逃さず腹部に蹴りを入れて吹き飛ばし再装填の終わったミサイルを2発とも放つ。

ドカ～～ン!!!!!

盛大な音を立てて爆発するミサイル。それを見てセシリアは

「（ふう、何とか賭けに勝ちましたわね。この賭けは煙の中からすぐに抜け出されたり近接攻撃をかわされていたら失敗していましたわ。でも、これなら倒せないまでもそれなりのダメージを与えられたはずですわ）」

そして晴れていく煙の中には多少のダメージを負ったユウの姿があった。

「やはりこの程度で倒せるほど甘くはありませんか！」

今ので決まっていれば、と思うセシリア。

それに対してユウは

「あはっ」

「？」

「ア～ハッハッハッ」

笑っていたのであった

「いいよ、いいよ、セシリア・オルコット！！まさかこんな方法でくるなんて思わなかったよ。敬意を表して全力全壊でやってあげるよ！！！」

そういうと先ほどまでの笑いをやめ代わりに圧倒的な殺気を放つ

それに対してセシリアはひるんでしまうが次の瞬間にはビットで攻

撃していた。

「く、くらいなさい！！」

しかし、その攻撃はわずかな動きで避けられ次の瞬間にはビットがすべて破壊されていた。

「そ、そんななぜわたくしのブルー・ティアーズが破壊されているのですか！？」

そんなセシリアの疑問に答えるようにユウの周りには４つの剣が浮かんでいた。

それとともにユウの機体のほうにも変化があらわれていた。

先ほどまでと違って左右から後ろの腰にかけて何かが装着されていて周りに浮かんでいた剣はその中にすべて収納されていった。

「な、なんですの！？その武器は！？」

「これはブレードビット。その名のとおり相手を切り裂く自立軌道兵器。もっとも今はもう使う気はないけどね」

「それは、わたくしをなめてるんですの！？」

「そんなことはないよ。ただいまは必要ないだけ・・・」

そういって左手をこちらに向けたかと思うとそこから爪が飛び出してきた。

「なっ！？」

それをセシリアは避けようとするが避けられず爪が激突し吹き飛んでいく

それでもすぐに体勢を立て直してユウのほうを向きなおすがそこに彼女はいなかった。

「残念だけどこっち」

そういわれて後ろを向くとそこには巨大な腕があった

「黒龍の爪　威力重視モード・・・安心して手加減はしてあげる」

そう言って振り下ろされる一撃、それはセシリアに命中しそのまま吹き飛ばす

ズガンッ

「な、なんて威力ですの今の一撃で一気にエネルギーが2桁にまで減りましたわ！？」

ユウに手加減されたのでセシリア自身と機体にはそれほどのダメージはないがエネルギーだけは根こそぎ持っていかれた。

そして、まだ試合が終わっていないことに気がつきユウの方を向くと今度はその右手に光り輝く槍のようなものがあった。

「エネルギー収束完了。これで、終わり・・・『神槍　スピア・ザ・グングニル』」

そう言って投げられた槍はすさまじい速度でセシリアに迫り着弾、
そして、爆発した。

「設定で人体と機体にはほとんどダメージが行かないように設定したから平気なはず・・・？」

そうつぶやくと同時に煙が晴れその中から五体満足のセシリアとブルー・ティアーズがあらわれた。

『しょ、勝者　ユウナスフィール・フォン・アインツベルン』

そして、静かに勝者を伝えるアナウンスが流れた。

第１０話　決闘２　蒼と黒の激突（後書き）

ル「今回やっとユウのＩＳを出すことができました！！それにしても戦闘描写うまく言ったか本当に心配だよ」

ユ「・・・・・・」

ル「どしたの？」

ユ「いろいろと突っ込みたいことがあるんですが・・・」

ル「それは白式のこと？ユウのＩＳのこと？口調のこと？」

ユ「全部です！！」

ル「仕方ないな～まず白式についてだけど、ぶっちゃけガンダムＯＯのエクシアとキュリオスの武装を合わせました」

ユ「何でそうなったんですか！？」

ル「高機動と近接戦闘について考えたらこの２機が思いついたから使ってみた」

ユ「ま、まさかＧＮドライヴ積んでるとか言いませんよね？」

ル「さすがにそれはないよ～。代わりに擬似ＧＮドライヴみたいに電力で補充するタイプだし」

ユ「人体に影響あるんじゃないですか？」

ル「ないよ～。あれと違って粒子は緑、ビームはピンクだからね」

ユ「じゃあ、白式の隠し要素って・・・」

ル「うん。あれです。まだ言わないけどみてる人にはたぶんわかってると思う」

ユ「・・・・・・」

ル「さらについでに言うと粒子は機体の制御に使うこともできるけど通信遮断はできないよ～。そこまで粒子の貯蔵量も多くないからあれの使用時間もアニメより粒子量がフルの状態でも短いしね」

ユ「十分強いと思いますが・・・」

ル「ユウの機体に関しては次々回に掲載予定の機体設定で行います」

ユ「飛ばすんですか！？」

ル「さすがに今書くと長くなっちゃうからね」

ユ「その代わりちゃんと書いてくださいよ」

ル「はいはい。ちゃんと書きますよ～。それでは今回はこの辺でお別れです。次回はいよいよ白と黒が激突します」

ユ「アンケートのほうも実施中ですので詳しくは８話あとがきをごらんください。感想や指摘等も含めてお待ちしております」

ル・ユ「「それでは、またお会いしましょう！！」」

第１１話　決闘３　激突！！白と黒（前書き）

いいタイトルが思いつきませんね～

なぜか簡単なのになってしまいます。

そして、戦闘描写はやっぱり難しい。

文才がないのでうまく伝わってることを祈ります。

それでは本編をどうぞ～

第１１話　決闘３　激突！！白と黒

Ｓｉｄｅ　一夏

今ユウとセシリアの戦いが終了したことを知らせるアナウンスが鳴り響いている。

はっきり言って先ほどの試合はすさまじいとしかいえないものだった。

セシリアも善戦したみたいだが最後は結局圧倒的力の元倒されたのだ。

「みたかあれがユウとそのＩＳの力だ。そして、織斑兄が次に戦う相手でもある」

そうあの圧倒的力と次は俺が戦わないといけないんだ。

そう考えると自然と俺は震えていた。

「大丈夫？一兄？」

「怖いのか一夏？」

そういって心配してくれる雪奈と箒。

だけど俺には自分が震えている理由がわかっていた、確かに圧倒的強さの前に多少恐怖もある。

だけどそれ以上にあいつと全力で戦って俺と白鳳の力がどこまで通用するか試したいという気持ちが強いのだ。

「大丈夫だ2人ともこれはただの武者震いだからな。じゃあ、早速行ってくるよ」

そういってカタパルトに乗ろうとする一夏、しかしその前に鉄槌が下る。

パコンッ!!

「馬鹿者が先ほどと同じように休憩や補給を挟んでからに決まってるだろうが!!」

す、すっかり休憩とかのことを忘れてたぜ・・・。

そんなことを思っているとなぜかセシリアがこちらのピットに戻ってきた。

どうやらユウは無効のピットで補給をするようだ。

休憩は大体３０分、なら俺はその間に白鳳と次の戦闘について相談をしよう。

「なあ、白鳳俺たちってユウに勝てるか?」

《はっきり言いますと厳しいです。母様は強いですしあのＩＳに関してもおそらくまだ隠し要素があるでしょうし》

「だよなぁ、さてどうしたものか・・・」

《・・・1つだけ母様に勝てる可能性があるんです》

「なに!?そうなのか!?」

《ただしそれを行うには危険が付きまといますし何より一撃で仕留められないとこちらが一気に不利になります》

「それでも、可能性があるなら俺はそれにかけたい。それにお前のことも信じてるしな」

《マスター　／／／／　わかりました、方法としては・・・・・・・・》

～～～～～～～～20分後～～～～～～～～

「よしこの作戦で行こう」

《はい、わかりました。粒子残量には気をつけてくださいね》

「わかってるよ」

作戦会議を終わらせた2人は試合の準備を終えてカタパルトに乗りアリーナに飛び出した。

そしてその先にはすでに黒がただずんでいた。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

今、私の目の前には右手に大型ソード、左手に雪片弐型とシールドを纏った白式と一夏がいる。

「来ましたね。一夏」

「ああ、ユウには悪いが勝たせてもらうぞ！！」

「いい意気込みですね。ですが負けてあげる気は更々ありませんよ？」

「それはこっちも同じだ！！俺と白鳳の力見せてやるよ！！」

「そうですかそれは楽しみです！！」

そういうと同時に両者の姿は掻き消えアリーナ中央で激突する。

「おおおおおおっ！！」

「はあああああああっ！！」

一夏がブレードを振るえばそれをユウが片方の爪で弾きすぐさまもう片方の爪で攻撃すれば負けじと一夏も雪片弐型で受け止める。

ドカッ　バキッ　ガキンッ

そのまま何度も打ち合う両者、しかし突然一夏が後方に下がる。

それを追いかけようとするユウ
だがそれは3発のビームライフルと多数のビームマシンガンによって阻まれる。
それを回避したり爪で弾いていくユウ。
「クッ!?うっとうしいですね!!」
そういいながらも右手では何かをしている。
「（このままじゃ、すぐに粒子が尽きる!!その前に一旦近づかないと、白鳳!!）」
《了解です、マスター!!粒子のチャージを始めます》
粒子のチャージをして加速する用意をしながらも弾幕を張っていく一夏。
そしていざ加速しようとしたときに突如ユウが距離を開けたのである
「（いったいなにを!?）」
不思議に思う一夏だがその答えはすぐに出た、ユウの右手にエネルギーが収束していたのである。
「あ、あれは!?」
「収束完了!!『神槍　スピア・ザ・グングニル』!!」

そういって放たれた必中にして神速の槍、それはすさまじい速度で一夏を襲う

「クッ　あれはかわせない！！だけどそれがエネルギーならこっちには対応策があるんだよ！！（でもこれはエネルギーをかなり使うからそんなに使用できないんだよな。頼むからもう使わないでくれ）」

そして、雪片弐型を振りかざし白式のワン・オフ・アビリティーである零落白夜でエネルギーの塊である槍を切り裂いた

しかし、槍を切り裂いたときにはなんと目の前にユウが移動してきていてその爪を振りかぶって攻撃をしてきた。

「残念ですがその程度は予想済みですよ」

ドカッ

「ガハッ」

「ついでにおまけです。『アサルト・レイ』」

そういって左手を突き出したユウ、するとその爪先から無数のエネルギー弾が放たれた

それは吸い込まれるように一夏に命中しエネルギーを削っていく。

「クソッ！！まだまだ！！」

左手に再びマシンガンを呼び出し残った弾を連射し体勢を立て直そうとする。

それに対しユウは左手に再びエネルギーを収束させていた。

「また、あの槍かよ！？」

また、槍が来ると思い再び身構える一夏、しかしその手に握られていたのは槍ではなく剣だった。

「収束完了、くらいなさい。『禁忌　レーヴァテイン』」

そういって放たれたのはすべてを飲み込む光だった。

「うわぁ～～～～！？」

衝撃に耐え切れず吹き飛ばされる一夏。そしてそれを追って急接近するユウ。

「これで終わりです！」

そういって振り下ろされる一撃

しかし、その止めを刺すための一撃こそが一夏たちが待っていた瞬間でもあった。

「（今だ！！白鳳！！）」

《はい！マスター！！》

「《トランザム！！》」

そういうと同時に白式は今までの『白』から粒子を纏った『赤』になっていた。

そして、そのまま紙一重で必殺の一撃をかわし背後に回りこむ。

そのまま、左手のシールドをクローモードにしてユウを押さえつけクローの中に存在する短剣を何度も打ち付ける。

「くらえええ～～～！！」

そして、雪片弐型を振りかぶり零落白夜を発動させてそれをユウに叩きつけた吹き飛ばす。

ドゴ～～～ン

壮大な音を立てて地面に激突するユウ

その様子を眺めていると白式の色が『白』に戻っていく

「はあ、はあ、危なかったもう少し攻撃を喰らっていたら粒子残量が足りなくなるところだったぜ」

《しかし、マスターまだ試合は終わっていませんので油断は禁物ですよ》

「ああ、わかってる。ここからが勝負だ！！」

そのままいつ攻撃されてもいいように構えていると突然煙が晴れた。

そしてその中には頭から多少血を流し装甲にも亀裂が入っているがまだ戦闘可能なユウの姿があった。

「やっぱりそう簡単に終わらないか」

改めて気合を入れなおす一夏

しかし、突然笑い声が響く

「あ～～はっはっはっ！！まさかあんな危険な方法で私に一撃を与えてくるとは思わなかったよ。今度はこっちの番だ！！」

そういって先ほどのセシリアとの試合と同等いやそれ以上の殺気を撒き散らすユウ

「さっきも思ったけどなんて殺気を撒き散らすんだよ、あいつは！？」

「いくぞ？『トランザム』！！」

そういうと同時に機体から『漆黒』粒子があふれ出て煌めいている。

「なっ、なんでユウがそれを！？」

まさかのトランザム発動に驚く一夏

「何を驚いている？そもそもこれを白式につけたのは私だ。なら使えてもおかしくはないだろう」

そのまま掻き消える姿そして同時に一夏を襲う衝撃。

「ほらほらどうした一夏？その程度か！！」

「ぐわぁぁぁ～～～！？」

攻撃して吹き飛ばしては回り込みまた吹き飛ばしては回り込むの繰り返しでドンドン減らされていくエネルギー

何とか反撃しようと剣を振るうがそれは圧倒的スピードでかわされる。

せめて、一夏もトランザムが使えれば別であっただろうが今は粒子を使い切って発動できない。

そうこうしているうちにきつい一撃をもらい地面に叩きつけられる。

「グハッ！？く、クソッまだ俺は負けてないぞ！！」

そういって顔を上げるとそこには槍でも剣でもない丸で太陽のような光を放つ巨大なものがあった。

「な、なんだよ・・・それ・・・」

「これで終わりだ一夏！！『エターナル・ブレイカー』！！」

その一撃はすべてを飲み込み残っていたエネルギーを一瞬で０にした。

そして、その一撃で意識が沈んでいく中一夏は思った。

「（ああ、お前はこんなにも強いのか・・・いつか絶対お前と肩を並べて戦ってお前や俺の守りたいものを守れるように強くなってやるからな。まって・ろ・・よ・・・）」

そう心に誓ってそのまま一夏の意識は落ちていった。

『試合終了　勝者　ユウナスフィール・フォン・アインツベルン』

「・・・・・・・・・やりすぎちゃいましたかね？」

そうつぶやき一夏を回収してピットに戻っていくのであった。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

～～～～～～決闘の翌日～～～～～～

「それじゃあ、一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決まりました。あ、一繋がりでいいですね♪」

翌日嬉々としている山田先生にそのことを告げられて一夏は思った。

「なんでさっ！？」

結論：現実は非情である。

第１１話　決闘３　激突！！白と黒（後書き）

ル「やっと決闘が全部終わった。素直に２試合だけにしておけばよかった・・・」

ユ「まあ、お疲れ様でした。それにしてもこっちも疲れましたよ。」

ル「お疲れ～。それでは、ちょっとした解説をしていきたいと思います。といっても次がＩＳ設定ですので簡単にですけどね」

ユ「そういえば、何か前回と今回試合中に口調が変わった気がするんですけど？」

ル「あれはね。戦闘中にテンションが上がると変わるんだ。最初は普通だけど少しテンションが上がると逆に少し寡黙になります。さらにテンションがあげると口調が攻撃的になっていきます。それでもまだ一人称は『私』だけどね」

ユ「まるで私が戦闘狂みたいですね」

ル「え、そうだけど。」

ユ「そ、そんな・・・」ｏｒｚ

ル「自覚がないって怖いね～。次は白式ですが特殊機能にトランザムを追加しましたやっぱりＯＯといったらこれでしょ。ちなみにあれは途中での任意解除はできないのと一度使用すると機体と武器の粒子をすべて使いきりますから粒子がいくら補助的な役割でも性能は落ちますよ。」

ユ「あれは一試合に一度しか使えなくてもかなり強いですからね」

ル「あ、復活したんだ。まあ、あれは一瞬でも発動できれば原作のケルディムみたく背後に回って奇襲ができるからね」

ユ「ところで私が決闘で使用したあの技は・・・」

ル「想像通り東方のレミリアとフランのスペカから取りました。あの2人は東方キャラで好きなほうだからねたぶんＴＯＰ１０前後には入ると思うよ。明確な順位はあんまり決めてないからわかんないけど」

ユ「技使っておいてＴＯＰ3とかじゃないんですか。」

ル「それにはいろいろあるから仕方ないの。ちなみにこの2つは技としては文中でも書いたとおりエネルギーを収束させて放ちます。分類としてはグングニルは一点突破、レーヴァテインは広域攻撃型です。レーヴァテインはある程度調整できますがね。」

ル「あといまさらの一夏の原作との相違点。原作と違って誘拐事件のときに自分が原因でユウが傷ついたため自分でユウや仲間や家族を守れるようにと特訓はしていたため原作より強いです。特に原作にはないユウを守りたいという気持ちが。」

ユ「本当にいまさらですね！？」

ル「本気で忘れてたからね。まあ、そのうち設定1にでも追加するかもしれない」

ユ「今回はこんなところですかね？」

ル「そうかな？あ、そういえば！」

ユ「どうかしたんですか？」

ル「いや～たいしたことじゃないんだけど一夏の恋人どうしようかなって思ってね」

ユ「まだ決めてなかったんですか！？」

ル「うん。このまま、原作のようにハーレムでドタバタを書いてもいいんだけどね。ちなみにハーレムにユウを入れる予定はないです。たぶん」

ユ「ないんですよね！？そうはっきりいってください！？」

ル「最初は一夏とユウの恋愛なんか書く気はなかったけどなんか例の誘拐事件以降ユウの事を強く守りたいと思うようになったという設定なんだけどそれ考えてたらいつか恋愛感情をあの鈍感な一夏が持つ可能性あるんじゃないかなと思ってね。ハーレムじゃなくて完全に恋人でもいいんじゃないかと思って。そこらへんは未定だけどね。」

ユ「いったいどうなるんでしょうか・・・・」

ル「とりあえず今回はここまでにしておいて次回はＩＳの設定の予定です」

ユ「アンケートや感想・誤字脱字・指摘等はいつでも受け付けてお

りますので簡素ウランのほうにお願いします」

ル「文才ない上に駄文なのはわかってますがよろしければ感想お願いいたします」

ル・ユ「「それではまた次回お会いしましょう」」

設定集３　オリジナル機体設定　オリキャラ４人分の機体とルナ追加

オリジナルＩＳと原作との違いがあるＩＳの設定

オリジナルＩＳ

１、名称不明↓ルナ

分類：特殊生体ＩＳ

待機状態：なし　ユウが思うことによって発動

発動状態：最初：白と黒の一対の羽（レミリアの羽のような感じ）に漆黒のドレスを着ている

　現状：羽は変わらず服装のみ変化。変化後の服装は上は黒い着物に近いものだが背中の部分は大きく開いていて肩から肘の近くまで布はなく肘から手首まで東方の霊夢がつけているような袖に近いものをつけている。下は白のミニスカートで黒のニーソックスをはいている。さらに腰の部分にはロングコートの腰から下の部分のようなものを帯で止めて巻きつけている（イメージは闇の書暴走時のリインフォースの腰のやつ）

ユウがＩＳの世界に転生する前にゼウスによって渡された物と転生後に束にもらったペンダントが一夏誘拐事件の際に融合したもの。

その力は普通のＩＳと違いこの世界においてなぜか封じられている力を開放することができる。

一応シールドと絶対防御が薄く張られているがほとんど無意味。
絶対防御があるため一応この状態で試合はできるが鬼畜過ぎるのでよほどのことがないと使わない。
エネルギーは魔力などを変換して使う。
現在使用した力
アラストール：かなりの長さを誇る大太刀で真名開放すると全身を炎そのものとして自在に炎を操れるようになる
2、漆黒の龍　ドラッヘン・ペヒシュヴァルツ
分類：先行試作型第４世代機
待機状態：黒いブレスレット
発動状態：両手両足が漆黒の装甲に覆われて目元には黒いバイザー、髪はポニーテール背中には漆黒の翼（イメージはフリーダムの翼を黒くしてビーム砲をはずした感じ）
束とユウが隙を見つけて共同で作り上げた機体。
試作型なのは紅椿のように展開装甲ではなく最初から装備されている武器のみですべてに対応できるようにしているため。あとやりすぎてユウ以外まともに乗れないから

通常戦闘から高機動戦闘、さらにはすべての距離に対して有効な武装がある。

また機体にはシールド・エネルギーとは別に特殊な粒子エネルギーを貯蔵している。

これは本来機体制御にも使われるがユウは攻撃にしか使用していない。

ワン・オフ・アビリティー：？？？

武装

近接武器（設定少し変更）
近接武器は3種類あるが1つの武器が完全に破壊されると他の武器も使用できなくなる
例）大剣「バルムンク」が完全に破壊されると他の2種は完全に使用不可能ただし分離状態なら片方が破壊されてももう片方を別な武器に変えることができる

龍の爪：一番使う武器で小回りが利くため使いやすい。形状としては元々ある装甲をさらに覆いそこから3本の爪が生えている。ちなみにこの爪は飛ばすことが可能で飛ばしたあとでも繋がっているワイヤーを使ってある程度の操作と巻取りが可能。

巨龍の鉄拳：龍の爪と違い大型の装甲で覆われた本物の龍のような大きさの腕が現れ攻撃する。ただしこれは大きくて威力がある分動きが遅く隙も大きいのであまり使わない。

大剣「バルムンク」：分離させることで2本の剣の状態にすること

が可能。また、分離させてもさせなくても剣の先からエネルギー弾を撃つことが可能

中・遠距離武器

？？？：？？？

特殊武器

ブレードビット：展開すると腰の左右と後ろにスカート上のものが現れる。ビットは左右各４本後ろは８本の計１６本ある。さらにこれは相手を切り裂くだけでなくレーザーやビームを切り裂くことができる。
元ネタはＤのリアル系主人公機の技から。そのため、クアンタのように手に持ったり合体させたりはできない。完全に切りつけることに特化している。

特殊能力

これはワン・オフ・アビリティーではなく龍砲やＡＩＣのようなもの

トランザム：機体に残っている粒子エネルギーを完全開放して発動。機体性能が大幅に上がる（さすがに3倍は無理である）。残っている粒子の量に応じて発動時間は変動し使った後は粒子は完全に使い切られる。ちなみに発動時の粒子の色は赤ではなく黒

技

この機体の技は基本通常エネルギーか粒子エネルギーどちらを使うかを選択できる。

アサルト・レイ：両手の先から小型のエネルギーの塊を連射する。威力は低いがエネルギー消費量・速度ともに優秀で使い勝手はいい。

神槍　スピア・ザ・グングニル：東方のレミリアの技。エネルギーを収束させて相手を貫く一点突破型の攻撃。その速度はありえないほど速く一度放たれれば回避は難しい。また、任意のタイミングで爆発させることが可能。

禁忌　レーヴァテイン：東方のフランの技。エネルギーを剣の形に収束して好きな範囲に放つことができる広域攻撃型。範囲に関しては全方位に放つこともできるし相手を切り裂くように狭めることもできる。当然範囲が広くなればなるほど威力は下がる。

エターナル・ブレイカー：球体状に収束したエネルギーをさらに圧縮して攻撃を放つ瞬間に膨張させて絶大な破壊力を生む。

ちなみにグングニル以下の3つの技は一回の戦闘では粒子量的に合計5回が限界である。

3．白雪

ユウが白式とともに調整をした機体。
色は白式と同じ白が主体
白式が近接主体の高機動戦闘を想定しているのに対してこちらは主に防御と射撃に主眼を置いている
また補助ＡＩ「雪風」を搭載している

ワン・オフ・アビリティー
不明

武装

弾丸選択型スナイパーライフル：その名のとおり実弾かビームを選択して使用可能。主に遠距離での使用が想定されており射程距離は長い

ビームピストル：威力は低いが連射性に優れた近～中距離用のビーム兵器。通常使用用に2つ予備にさらに2つ装備されている

大型ビームバズーカ：通常モードとバーストモードの2種類に使い分けることができる。ただし使用回数は多くなく通常モードは1試合4回、バーストモードは通常モードを使わずにいれば1回とそれに加えて通常モードを1回使用可能

追尾式ミサイル：そのまま相手を追尾するミサイルで着弾すると普通のものよりも視界をさえぎることができる

ショートブレイド：白雪唯一の近接武器2本装備されているが特に特別なものではない

特殊能力
トランザム：漆黒の龍と同じ。使用中は赤く染まる

モルガナ

結の専用機で元はラファール・リヴァイブ　カスタム?だったが研

究所ならびに結の魔改造によって面影ほとんどなし。機体コンセプトとしては高速戦闘を想定して作られている

ワン・オフ・アビリティ
不明

武装

オクスタン・ランチャー：実弾とレーザーを発射可能な武器。元ネタはスパロボＯＧのヴァイス・リッター

サヴァイシブ・クレイモア：使用すると武装が両肩に展開されてそこから大量のベアリング弾を発射する。欠点としてはかなりの範囲に放つため下手をすると味方を巻き込んでしまう。元ネタはスパロボＯＧのアルト

リボルビング・ステーク：右腕に展開されるパイルバンカーで装填数は６発。元ネタは同じくアルト

？天絶刀：結が実際に持つ刀をＩＳ用に調整したもの本来のものよりも大きい。何本存在するかは不明で現在使用したのは「月影」と「月華」の２本のみである。

その他

現時点では一切不明

カスタム・フラッグ

グレイシア専用機で第2世代機。
アメリカで使用されている量産型のフラッグと違って彼女用にチェーンされた上にエンジンのリミッターは解除されているためその速度は白式と同等かそれ以上である。

ワン・オフ・アビリティ
不明

武装

ソニックブレイド：超高硬度カーボン製の折り畳み式アサルトナイフで刀身からプラズマを剣のように収束させることが可能。装備数は2本

試作リニアライフル「ＸＬＲ－０４」：弾丸を電磁力で高速射出するもので状況によって破壊力の大きい単射モードと、高速戦闘に対応した連射モードを使い分けることができる

ディフェンスロッド：回転するローターに、適切な傾斜角で敵弾を着弾させ跳弾させるもので着弾の瞬間にプラズマフィールドを発生させることが可能である。

ミサイル：両足部にそれぞれ隠された武装で威力はそれほどないがつばぜり合いなどの最中には不意打ちに使える

ケルベロス：展開すると腰の脇に大型の砲身が現れて高エネルギーレーザー砲を放つことができる。砲撃はしばらく発射され続けるのでわずかだが軌道の修正は可能である。

エクスカリバー：機体に2本装備されている大型のレーザー対艦刀。大型ながらそれぞれ片手で振るうことが可能で連結させることもできる

6．リインカーネーション

クリスティナの専用機で万能型
この機体の特徴は機体各部に搭載された小型のブースターを使用することよってクイックブーストのように瞬間的に機体速度を上げて移動することができることである。

ワン・オフ・アビリティ
不明

武装

腕部武器
大型ブレード×1
アサルトライフル×2
マシンガン×2
グレネード×1
ガンブレード×1
レーザークロー：これは両手の指にそれぞれ装備されていてそのまま爪のように相手を切り裂くこともできるし1本にまとめて出力を上げることもできる

肩部武器

フレア：発射することで多数の熱源を撃ちだしミサイル系の武器を無効化する
大型レーザーカノン×2：両肩にそれぞれ1門づつ展開される。

原作機体の相違点

白式

織斑一夏専用機

外見はほとんど原作と変わらないが背中に小型のスラスターを追加したことにより機動力がさらにアップ。

さらに、補助ＡＩ『白鳳』を搭載している。

本来であれば拡張領域はいっぱいのはずだがユウが作り上げた強制的に拡張領域を拡げるそうちにより多少増加

漆黒の龍と同じように粒子エネルギーを機体と武器にそれぞれ内蔵
機体のほうは主に移動・機体制御の補助に、武器に関してはビーム兵器使用時に消費。

ワン・オフ・アビリティー

零落白夜：相手のエネルギー関係の攻撃ならびにシールドを無効にして直接攻撃ができる。ただし使用には自身のシールド・エネルギーを使用してしまう。なお、雪片弐型でのみ使用可能。

武装

雪片弐型：零落白夜を使用するために使う刀発動時には刀身を光が覆う。

大型ソード：展開すると右腕に展開されるビームライフル搭載の武器。大型のため取り扱いは難しいが威力は白式の中で零落白夜を除けば最強。また、ビームライフルは1回3連射固定で合計15発しか撃てない。

シールドクロー：展開後は左腕に装備される盾。防御力に優れ実体・粒子攻撃どちらも防ぐことができる。シールドは変形させるとクローのようになり相手を捕獲することが可能。さらに内蔵されている短剣を打ち付けることでさらにダメージを与えられる。

ビームマシンガン：威力は低いが連射性に優れる武器。ただし、フルオートにするとすぐに粒子を使い切ってしまう。

ショートブレイド：白式に搭載された2本の剣、特別なことはなく主に投擲や緊急時に使う。

特殊能力

トランザム：漆黒の龍と同じ。粒子の色は赤

第１２話　クラス代表決定　そして起動するもう１つの白（前書き）

約3日ぶりですがお久しぶりです。

おかしいですね?予定だと一昨日くらいには上げれたはずなんですけど・・・

まあ、そこはおいておきまして本編をどうぞ

第１２話　クラス代表決定　そして起動するもう１つの白

Ｓｉｄｅ　一夏

山田先生が嬉しそうに俺がクラス代表になったことを伝え、それに呼応するようにクラスの女子も大いに盛り上がっている。

だけどちょっと待とうか・・・

「先生、質問いいですか？」

とりあえず納得できないし聞いておこう。

「はい、織斑君なんですか？」

「俺は昨日の試合でセシリアとユウに両方負けたんですが何でクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは「それはわたくしたちがクラス代表を辞退したからですわ！！」う～～セリフ捕らないでください～（泣）」

急に立ち上がり山田先生のセリフを捕りながら腰に手を当てるポーズをとっているセシリア。

いや、それよりもなんで辞退なんかしたんだ？いやな予感がするが一応聞いておこう

「なあユウ何でクラス代表辞退したんだ？」

「理由としては、今の一夏は専用機を得たとはいえＩＳの操縦に関しては初心者ですからね。とりあえず訓練はしていきますがせっかくクラス代表戦があるんですから実戦を経験したほうが力になりますから一夏に代表を譲ったんですよ」

ああ、もっともらしい理由だな。だけど・・・

「それで本音は？」

「まあ、クラス代表なんてめんどくさいですし勝手に代表に推薦してくれた仕返しですかね・・・ハッ、何を言わせるんですか！？」

「それが本音かぁぁぁぁぁ！！」

「あきらめろ織斑兄。そもそも２人が最初に辞退した時点で消去法で貴様しか残っていないんだからな」

「で、でも」

「一夏。」

「な、なんだユウ？」

「敗者は黙って勝者に従いなさい」

「理不尽だぁぁぁぁ！？」

「それではクラス代表は織斑一夏に決定だ。依存はないな」

俺の叫びを無視して話を進めていく千冬姉の言葉に俺以外のクラス

全員が返事をした。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

～～その日の放課後～～

Ｓｉｄｅ　雪奈

今私はユウちゃんに呼ばれてアリーナに来てるんだけど何のようだろう？

「ああ、来ましたね雪ちゃんそれでは早速はじめましょうか」

「始めるって何をするのユウちゃん？」

「何って雪ちゃんのＩＳ『白雪』の初期化と最適化ですよ」

「・・・・・ああ、そういえば専用機があるっていってたっけ、あれ冗談じゃなかったんだ」

てっきり冗談だと思ったんですけどね～

「それじゃあ、速く装着してください。そのまま、初期化と最適化をやってしまいますので」

「うん、わかった」

～～１５分後～～

《初期化と最適化が終わりました。確認ボタンを押してください》

「え～っとこれだね。ポチッとな」

《起動を確認。おはようございます。マスター》

「・・・・・・ねえ、ユウちゃんこの子って？」

「ええ、一夏と同じ人工ＡＩですよ。当然名前はありませんのでつけてあげてください」

やっぱり一兄と同じなんだ。

それにしても名前か～なんて付けてあげようかな。

～～５分後～～

「よし決まったよ！！」

「なんて名前にしたんですか？」

「『雪風』だよ」

《認証完了しました》

「それじゃあ、早速機体について説明をはじめましょうか」

そういってディスプレイを展開させる。

「機体の特性としては射撃型になります。一部の武器に関しては威

力が高すぎますがね」

「何でそんな武器つけたのさ・・・」

「なんとなくですかね？」

「・・・もういいよ。」

ユウちゃんは暴走するといろいろと恐ろしいもの作るからな～。

「それとこの機体にも私や一夏の機体と同じように粒子エネルギーを内蔵していますのでトランザムを使うことができますよ」

「本当にやりすぎじゃないかな！？」

「次は武器についてですが・・・」

「無視！？無視するの！？」

「何ですか？せっかく雪ちゃんのことを思って作ったのに文句あるんですか？」

「あ、え～と、ご、ごめんなさい・・・」

あれ？何で私が謝ってるんだろう？

「では改めて武器に関してですが武器は主に5種類あってそのうち1つが近接用です」

「もう、いいです・・・」

こうなると私じゃもう止められないから・・・

そうこう思っているうちに画面にはライフル・ハンドガン・ミサイル・剣・バズーカ?が映っていた。

「まずはライフルですがこれはビームと実弾どちらかを選択して撃つことができる遠距離用の武器です。そして隣のハンドガンのようなものはビームピストルで威力はライフルほどないですが近・中距離で使えます」

「ねえ、ユウちゃん私銃なんて使ったことないんだけど」

「その辺は練習あるのみですよ!まあ、雪風が少しは補助してくれますけどね」

うう~がんばるしかないのか~大変だよ~。

「次はミサイルですがこれはそのままなので省略しますね。４つ目のこれはビームバズーカで通常モードとバーストモードの２つがあります。ただしバーストモードは威力がある代わりにエネルギーの消費量がかなり多いのでそんなには撃つことができません」

なんですかその恐ろしい武器は使用状況限られてくるじゃないですか。

などと思っている間にも話しは進んでいくのであった。

「最後はこの剣ですがこれは一夏の白雪に搭載されているショートブレイドと同じもので2本装備されています。といっても近づかれ

たときの緊急用位に考えておいてください」

「あと、機体の両肩にはシールドがついていますから防御面も安心ですよ。大体説明するのはこんなところですかね」

そういって画面を消していく。

どうやら説明は終わったようだ。

なんにしても私のためにこの子を完成させてくれたんだからきちんとお礼を言わないとね。

「ユウちゃん私のためにこの子を作ってくれてありがとうね」

「私がやったのは最終調整と武器の強化くらいですので御礼を言われるようなものではないですよ？」

「それでもこの子を作ってくれたんだからお礼がいいたいの」

「そうですか。」

さ～てこれからは練習とかで大変になる気がするけど早く強くなってみんなと一緒に戦えるようにがんばるぞ～！！

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

４月も下旬に入り遅咲きの桜も散ってしまった今日この頃。

私はグラウンドでＩＳの実習授業を受けています。

「では、これよりＩＳの基本的な飛行訓練を行う。織斑兄妹・オルコット・アインツベルンためしに飛んでみろ」

千冬姉様にいわれてすぐさまＩＳを展開します。そして隣を見てみると一夏が白式を呼び出すのに苦労をしていました。

「速くしろ。熟練のＩＳ乗りは展開まで１秒もかからないぞ」

そういわれて急いでＩＳを展開する一夏。

これは更なる訓練が必要ですね・・・。

ちなみにそれぞれのＩＳの待機状態は一夏がなぜかガントレット。男だから防具なんでしょうかね？

セシリアは左耳のイヤーカフス。

雪ちゃんは右手についている指輪。

そして私は黒いブレスレットです。

と、思っているうちにみんなの用意が整ったらしく飛ぶようにいわれたので翼を広げて飛び立ちます。

そしてすぐに上空に到達し後ろを見てみるとセシリア・雪ちゃん・一夏の順でやってきました。

それにしても一夏スペック上の出力的には白式が私の機体を除いた中では一番なんですよ。

それなのに一番遅いなんてやっぱりもっと鍛えないといけませんね。

などとどのように一夏をいじｍ　ゲフンゲフン　鍛えようか考えていると千冬姉様が急降下と完全停止をやるようにいってきました。

しかし、何で私だけ地上５ｃｍ何でしょう？他のみんなは１０ｃｍなのに。

「それではお先に」

そういって地上に向かうセシリア。

難なくクリアですか代表候補生の名は伊達ではないようですね。

「じゃあ、次行かせてもらいますね。雪ちゃん、一夏」

「うん、がんばってね」

「落ちるなよ？」

「一夏じゃないんですから平気ですよ」

そういって翼をたたみ地面に向かって加速していく。

（さてそろそろですね）

そう思い地面すれすれで翼を開いて速度を殺して急停止さて結果は

「５ｃｍジャストかさすがだな」

「ありがとうございます」

そして次には雪ちゃんが降りてきました。

サポートがあるとはいえ成功させるとはさすがですね。

さて次は一夏ですがＡＩのサポートがあっても不安ですね。

などと思っていると急に周りが「う、上！！」と言ってきました。

どうかしたんでしょうか？と思いつつ上を見ると一夏がなぜかこちらに向かって急降下してきました。

「え？な、なんでこっちにくるんですか！？」

ズドォォォォン

い、一夏・・・あとで・・・覚えておきなさいよ・・・

そうつぶやきながら私は意識を手放しました。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

第１２話　クラス代表決定　そして起動するもう１つの白（後書き）

ル　ｏｒｚ

ユ「え～と、大丈夫ですか？というか何があったんですか！？」

ル「いやね。前に募集したアンケートあるじゃない」

ユ「ああ、あの突発的にやったあれですか。そういえば結果はどうなったんですか？」

ル「・・・誰もアンケートに答えてくれなかった。」

ユ「・・・ど、ドンマイですよ・・・」

ル「まあ、確かに小説投稿してから大して時間たってないしホント思いつきでやったから需要がないだろうとは思ったけどやっぱり０だとちょっとショックでね」

ユ「き、きっとこれから感想とか書いてくれる人出てきてくれるでしょうから元気出してくださいよ」

ル「そうだね。こんな小説でもお気に入り登録してくれてる人もいるからこれからもがんばっていくよ」

ユ「そうですよ。私も応援しますからがんばりましょう」

ル「ふう、とりあえず落ち着きましたし本編の補足でもしましょうか」

ユ「そうですね」

ル「ちなみに今回出てきた雪奈の白雪はガンダムOOのデュナメスとヴァーチェを合わせてみました」

ユ「ナドレは組み合わせなかったんですか？」

ル「それはまだ内緒だよ～」

ユ「そ、そうですか。それよりも今回のラストはどういうことですか！？」

ル「ちょっとギャグっぽくしてみました。ちなみにユウが気絶したのは一夏が原作よりもスピードを出したためモロに直撃して地面と一夏にサンドイッチにされたからです。」

ユ「次回には復活しますよね？」

ル「大丈夫、ちゃんと最初に復活するから。それと時々気絶するようなことがあるかもしれないから気をつけてね」

ユ「なんでそうなるんですか～～～～！？」

ル「次回はいよいよ中国娘が登場します。感想・指摘・誤字脱字報告などはいつでも受け付けております。特に感想は下さるととても嬉しいです」

ユ「無視しないでください！？」

ル「それではまた次回でお会いしましょう～～～ノシ」

第１３話　セカンド幼馴染襲来　あれ？これって私の立場はどうなるんでしょう？

どうも、前回に引き続きまた3日たってしまいました。

やっぱり小説は書くのが難しいですね。

それにしても戦闘のない日常のほうが戦闘がある話より書くのが遅いのはどうなんでしょうね？（クオリティーは別です）

それにしても簪の口調はあんな感じでいいのかな？

まだ1巻しか出てないから口調はおかしいかもしれません。

そして、やっぱり原作の時系列がわかりにくいです。

なんで入学式のときに対抗戦が再来週にあるといっているのに鈴を怒らせたあとに数週間たっているのだろう？

私がおかしいんですかね？それとも突っ込んではいけないことなんでしょうかね？その辺について皆さんがどう思っているかが気になります。

あと、この間３００００ＰＶとユニーク５０００突破いたしました。

文才のない身が書いた小説ですが読んで下さってありがとうございます。

これからもがんばっていきたいと思っておりますので応援のほうよろしくお願いいたします。

それでは本編のほうをお楽しみください。

第１３話　セカンド幼馴染襲来　あれ？これって私の立場はどうなるんでしょう？

～～保健室～～

Ｓｉｄｅ　ユウ

「う、う～ん、あれ？ここはどこですか？」

周りを見渡すと白いベットに薬品の詰まれた棚がありました。

・・・・・・・・・・・・・・・

どうやらここは保健室のようですね。

「何でここにいるんでしょうか？」

なぜここにいるのか考えていると入り口のドアが開きそこから保健室の先生が入ってきました。

「ああ、目が覚めたんだね。よかった、よかった」

「え～えっと、おはようございます。ところで何で私はここにいるんでしょうか？」

「あれ？覚えてないのかい。あんたはＩＳの実技の途中に気絶してここに運ばれたんだよ。ちなみに今はもう夜だよ」

「気絶して運ばれた？・・・・・・・・・あ！思い出しました！」

一夏が原因ですね。フフフ・・・

「とりあえず目が覚めたなら説明しておくけど特に体のほうには問題ないけど一応今日は激しいことはせずおとなしくしておきなよ」

「はい、わかりました。ご迷惑おかけしました。」

とりあえずあの馬鹿一夏を見つけないといけませんね。

「そうそう、あんたのクラスの子がさっき目が覚めたら伝えてほしいっていってたんだけど、なんか食堂でパーティーやるらしいよ。たぶんこの時間ならまだやってると思うからいってみな」

「そうですかありがとうございます。早速いってみますね」

そうですか食堂ですか、まってなさいよ一夏!!

そして、ユウが出て行った

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

今俺は食堂で行われている『織斑一夏クラス代表就任パーティー』なるものに出ている。

俺としてはユウのほうが心配であまりでたくはなかったのだが、みんながＩＳ装着してたからそんな大きな怪我などはしないというの

でとりあえずこっちに出ている。

これが終わったら様子でも見に行こう・・・・・あとが怖いしな。

などと思っていると目の前にリボンの色からして先輩だと思われる人がやってきた。

「はいは～い、新聞部の2年黛薫子で～す。新聞部の副部長やってます。今日は話題の織斑君に特別インタビューに来ました」

周りからはオ～～という声。

いや、俺としては嬉しくないからね。

「それでは早速これからの意気込みをどうぞ!!」

そういってボイスレコーダーを俺に向けてくる。

意気込みっていわれてもな～。

「まあ、とりあえずがんばっていきたいと思います」

「もっといいコメントないの?俺に触れるとヤケドするぜ、的なのとか」

そりゃまたずいぶんと懐かしいセリフだな

「自分不器用ですから」

「仕方ないな～それじゃあ適当に捏造するとしましょうかね～」

いやまて、人に聞いておいて捏造とかするな。

「ところでこのクラスにはあと2人専用機持ちがいるって聞いたんだけどセシリアちゃんはいるけどもう1人の子は？」

「あ～ちょっとした事故があって保健室で寝てます」

「そうなんだ、じゃあセシリアちゃんコメント頂戴」

「仕方ないですわね。ではなぜわたくしがクラス代表を辞退しようと思ったかについてから説明を・・・」

「なんだか長くなりそうだから写真だけでいいよ」

「ちょ、ちょっとそちらから話を振っておいてそれはないのではありませんか！？」

「大丈夫、大丈夫適当に織斑君に惚れたからとかって捏造しておくから」

「な、な、なな・・・・！？」

とても動揺しながら顔を赤くするセシリア。

いったいどうしたんだ？

「それじゃあ、1人足りないけど専用機持ちで写真をとらせてね～。あ、握手とかもしてるといいかもね～」

そういわれてセシリアと握手をしたんだがなんだかセシリアはまた顔を赤くしているいったいどうしたっていうんだ?

「それじゃあ、撮るよ~3,2,1・・・」

パシャッとシャッターが切られる。

しかし・・・

「っていつの間にか全員写真に入ってるし!?ずいぶんと動き速いな!?」

しかも、箒と雪奈はちゃっかり俺の横に来てるし。

このクラスの行動力は半端無いな、ある意味恐怖を覚えるぞ!!

こうして写真を撮ったあともパーティーは続いたわけだがしばらくしたら食堂の入り口のほうから誰かがやってきた。

「ん?誰か来たな。ちょっと騒ぎすぎたか・・・な・・・」

その人物を見て俺は絶句した。

「どうしたの一兄?」

「どうかしたのか一夏?」

「どうかなさいました一夏さん?」

3人が心配そうに聞いてくるが答えることができない。

だって入り口のほうから見えたのは銀色の髪をなびかせた俺がよく知る人物だったのだから・・・

しかもその人物は顔は笑っているが目が笑っていない・・・これは俺死んだかも

その人物は俺の姿を見つけると一瞬で俺の前までやってきた。

「ユ、ユウ、お、起きたんだな。も、もういいのか!?」

「ええ、誰かさんのおかげでぐっすりと寝かせていただきましたよ?」

こ、怖い、怖すぎるぞこれは!?

「ユ、ユウ?もしかしなくても怒ってるよな!?」

「フフフ・・・ナニヲイッテルンデスカ?オコッテナドイマセンヨ?」

う、うそつけ~~!?

絶対怒ってるじゃねえか!?

ちなみに雪奈たちはすでにここから離れている。

この薄情もの!!

「サテイチカカクゴハイイデスカ?」

「ゆ、許してくれたりなんかは？・・・」

「問答無用です！！死になさい一夏～～～～！！

そういってＩＳの腕を部分展開してその爪をこちらに向けて振り下ろそうとするユウ。

ああ・・・これは終わったな、みんなごめん・・・。

目を閉じて衝撃に備えていると

バキッという音がした。

しかし、衝撃はいつまでたってもやってこない、不思議に思って目を開けるとそこには頭にお盆が直撃しているユウの姿があった。

そして、そのまま崩れ落ちるユウ。

いったい何があったんだ？

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　簪

今日ユウちゃんが授業中に気絶して保健室で寝ていると織斑先生に教えられた。

それを聞いたときは心配だったけどただ気絶しただけで怪我などはないと聞いてひとまず安心した。

そんな私は今保健室で寝ているユウちゃんのお見舞いを終えて部屋に帰る途中だったんだけど私の横を何かが走り去って行った。

「あの銀髪は・・・ユウちゃん?食堂のほうに走っていったみたいだけど・・・どうしたんだろう?起きても今日は安静にさせなさいって先生言ってたのに・・・行ってみよう」

そう思ってユウちゃんを追いかけて食堂に行ってみると黒いオーラのようなものを出しているユウちゃんがいた・・・

とりあえず本音が近くにいるし状況を聞いてみよう。

「ねえ、本音・・・これってどういう状況?」

「あ、かんちゃんこれはね~(ユウが怒っている原因を説明中)・・・というわけなんだよ~」

「・・・とりあえず原因はわかった・・・なんとかして・・・ユウちゃんを止めないと・・・」

「でも~どうやって止めるの~?」

「・・・今のユウちゃんは・・・後ろに注意がいってないみたいだから・・・後ろから不意打ちすれば・・・」

「おお~わかったよ~かんちゃん。私も協力するよ~。でも不意打ちなんていいの?」

「今は・・・ユウちゃんを止めるのが先。止めないと大変なことに

なりそうだから・・・」

近くのテーブルの上にあったお盆を持って2人はユウの後ろに近づきそのまま振り下ろす。

バキッという音を立てて後ろから不意を突かれたユウはそのまま気絶して床に倒れ付す。

あっけにとられる一夏たち、それを尻目に2人は

「え～っと・・・お騒がせしました・・・」

「ごめんね～みんなは気にしないでそのまま続けてていいよ～」

「あれ?・・・意外とユウちゃんって軽いんだ・・・うらやましい・・・」

そういってユウを引きずっていく2人。

それを見てほかの人たちはポカ～ンとするだけであった。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

「ハッ!?ここは?」

目を覚ましてあたりを確認するとどうやら自分の部屋のようだった。

「また、気絶したんですか。それにしても何でしょう?たしか食

堂に行って一夏を倒そうとして・・・そこから記憶がないですね」

「え～っと・・・ごめん。私たちが原因・・・」

声がしたほうを向くとそこには簪ちゃんと本音がいました。

「どういうことですか？」

「ユンユンが食堂で暴走しておりむ～を殴ろうとしたから～かんちゃんと協力して気絶させたんだよ～」

「だれがユンユンですか、だれが。まあ、名前に関してはもうあきらめましたが、暴走した私を止めてくれたんですね。ありがとうございます」

ちなみにユンユンというのは私の名前のユウナスフィール・フォン・アインツベルンのユウのユとフォンのンを合わせて2回繰り返しただけらしいです・・・なぜかパンダを思い出しますね。

「そ、それでもういいの？・・・ユウちゃん」

心配そうに聞いてくる簪ちゃん。

不謹慎ですがやっぱりかわいいですね。

「ええ、もう大丈夫です。落ち着きました」

「そ、そうなんだ・・・よかった・・・」

「でも～ユンユン。もうおりむ～とのことはいいの？」

「それに関しては問題ないですよ。今度一夏との訓練のときに憂さ晴らしをしますから」

「うわ～おりむ～ドンマイだよ～」

本音は失礼ですね、そこまでひどいことはしませんよ・・・たぶん。

「それで・・・今日はどうするの・・・」

「そうですね。もう１０時過ぎてますし今日のところはもう寝ようかとおもってます。」

「そうなんだ～じゃあ、わたしは部屋に戻るね～２人ともおやすみ～」

「ええ、おやすみなさい」

「うん・・・おやすみ・・・」

さて本音も帰りましたしそろそろ寝ましょうか。

「じゃあ、簪ちゃん。おやすみなさい」

「おやすみ・・・」

そういえば、先週一夏たちの専用機調整に時間をとられて約束してた簪ちゃんの専用機開発を手伝えませんでしたね。

約束ですし今週は手伝わないといけませんね。

まあ、一夏のほうはあの3人がいればたぶん大丈夫でしょう。

そう考えながら意識を落としていくのであった。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

昨日の就任パーティーならびに『一夏殺害未遂事件（仮）』が終わって一夜明けた朝の教室。

俺は自分の机に座っているユウの姿を見つけるとすぐに近づいた。

「ユウ！昨日はいろいろと悪かった！！このとおりだ許してくれなんでもするから！！」

本気で謝る一夏その様子にすでに教室に来ていたクラスメートは事情を知っているので驚きながらも見守っていた。

これで許されなかったらおそらく俺に待っているのは死だけだろう。

「ああ、昨日のあれですか。もう怒ってないのでいいですよ」

「本当か！？」

「ええ、ただし訓練は厳しくするので覚悟してくださいね」

・・・・・果たして許されてよかったのだろうか悪かったのだろうか・・・

「といっても私にも用事ができてしまったので一夏の訓練に参加できるのはクラス代表戦以降になってしまいますがね」

「用事？何かあるのか？」

「まえまえから約束していたことなのですが一夏たちの専用機作りに先週使ってしまったのでその埋め合わせ的な意味で付き合おうと思ったんですよ」

約束！？付き合う！？まさか男か！？

「・・・何を想像しているかわかるので今のうちにいっておきますが男関係じゃないですよ。そもそも学園に男性なんてほとんどいないじゃないですか」

そういわれればそうだったな。

あれ？何で俺はこんなに心配に思ったんだ？

などと考えていると他のクラスメートもだんだん集まってきてある話が出てきた。

「ねえねえ、織斑君。転校生の噂聞いた？」

「転校生？まだ４月なのにか？」

「うん、何でも中国の代表候補生らしいよ」

ふ～ん中国ね～そう聞くと1年前に中国に帰ったあいつを思い出すな。

「ユウ何か知ってるか？」

「いえ、私も知りませんでした」

そうかユウも知らなかったのか意外だな。

「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら？」

そういって腰に手を当てたポーズを取っているセシリア。

それはさすがに自意識過剰じゃないのか？

「このクラスに転校してくるわけではないのだからそれほど気にする必要もないのではないか？」

今度は箒か、というかいつの間にここまで来た。さっきまで自分の席にいただろうが。

「それに今の一兄には他のクラスの事を気にしてる余裕はないと思うよ～ただでさえ訓練しなきゃいけないんだから」

雪奈それは言い過ぎだと思うぞ。

俺が弱いのはわかってるけどさ・・・

「それに今のところ専用機持ちがクラス代表やってるのはここと4

組だけらしいからよほどのことがないと負けないと思うぞ」

「あ、そのｚｙ「その情報、古いよ！！」・・・」

ユウが何か言いかけたのをさえぎって響き渡る声、そして当のユウはショックで机に突っ伏していた。

あれ？この声ってどこかで聞いたことがあるような。

そう思い振り返るとそこにはツインテールがトレードマークのセカンド幼馴染が立っていた。

「お前、鈴だよな」

「あれ？リンリン？」

「そうよ！中国代表候補生、凰鈴音。今日はこのクラスに宣戦布告にきたのよ一夏！あと雪奈ちゃっかり人のことをパンダみたいに呼ばないで！！」

宣戦布告か、それはいいんだが鈴よ後ろを見たほうがいいぞ。

「おい、鈴後ろ、後ろ」

「後ろ？いったい何があるっていうのよ」

後ろを振り向いた鈴は一瞬で固まりそして・・・

バシンッ

「入り口に立つな！邪魔になる。あともうＳＨＲの時間だ。教室にさっさと帰れ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ、さっさと戻らないともう一度叩くことになるぞ」

「す、すみません。とりあえず一夏！昼に食堂で待ってるからね。逃げないでよ！！」

そのまま2組に向かって帰っていく鈴であった。

そして

「おい！一夏さっきの女子はいったい誰だ？ずいぶんと親しそうだったが」

「そうですわ、一夏さんさっきの方とはどのような関係ですの！？」

急に鈴のことについて聞いてくる箒とセシリアそれに釣られて他の女子もこちらにやってくる。

おいおい、そんなことしたら・・・

バシンバシンバシンバシンバシン！！

「席に着かんか馬鹿者共が」

再び火を噴く千冬姉の出席簿。

ほら言わんこっちゃない・・・言ってはいないけどな。

第１３話　セカンド幼馴染襲来　あれ？これって私の立場はどうなるんでしょう

ル「前書きのほうでも書きましたがＰＶが３００００、ユニークアクセスが５０００突破しました。本当にありがとうございました」

ユ「ありがとうございました」

ル「では今回のあとがきですが簪についてです」

ユ「原作と少し違うみたいですね」

ル「違いとしては、ユウの介入のおかげで姉妹仲が最初からいいです。そのおかげで自分の力だけでなく他人の力も借りるようになっています」

ユ「そういえば、簪ちゃんのＩＳ開発を私が手伝ってますがそのおかげで早くできたりするんですか？」

ル「今のところどうしようか本当に考え中。一応早く完成させた場合と原作どおりに完成させた場合の両方の案は考えてるけど悩むんだよね～」

ユ「それにしてもやっと鈴ちゃんが登場ですか」

ル「うん。ラストにちょっとだけどやっと登場。次回で一夏対鈴までいければいいんだけどね。どうなることやら」

ユ「計画立てて書かないからですよ」

ル「返す言葉もありません」

ユ「それではそろそろ終了の時間ですね」

ル「ここまで読んで下さった皆様ありがとうございます。いつものように感想・指摘・誤字脱字はいつでも受け付けておりますのでどうぞよろしくお願いいたします」

ル・ユ「「それではまた次回でお会いいたしましょう」」

第１４話　クラス対抗戦開始　飛来する悪意（前書き）

今回は一気にクラス対抗戦まで行きました。

そして０時に間に合わなかった！！

なんで間に合わせられないかな～今度からはもうちょっと余裕を持てるようにがんばります。

あと、感想がほしい・・・やっぱり文才なくて駄文なのがいけないのかな・・・

まあ、感想をせがんでも仕方ないですよね。皆さんが感想書いてくれるような文をかけるようにこれからもがんばっていきます。

なんか後半関係ありませんでしたが本編をお楽しみください。

第１４話　クラス対抗戦開始　飛来する悪意

Ｓｉｄｅ　一夏

現在午前の授業が終わってこれから食堂に行こうとしたのだが授業が終わると同時に箒とセシリアがこちらにやってきて

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

などと言ってきた。

俺としては怒られるようなことをした記憶はないんだけどな。

ちなみにこの２人は午前中だけでそれぞれ山田先生に注意５回、千冬姉に３回仲良く叩かれている。

このことをもし言ってるんだとしたらはっきり言ってお前らの自業自得だと思うんだが

「自業自得な人たちは置いておいて早く食堂に行きませんか？」

「そうだよ～早く行こうよ。お腹空いたしさ」

ユウ、雪奈お前らさすがにこの２人をそのままにしておくのはひどいと思うんだが・・・

「でも確かに腹も減ったし話なら飯食いながら聞くから早く行こう

ぜ」

とりあえず食堂に行くといって2人を黙らせておくそして俺たちについてくるようにクラスメートが数人ついてくる。

～～移動中～～

「待ってたわよ一夏！！」

俺たちが食堂に着くとそこにはお盆にラーメンを載せてたっている鈴がいた。

「どうでもいいけど麺伸びるぞ？」

「わかってるわよ！？それにしても何で早く来ないのよ、朝食堂で待ってるって言ったのに遅かったじゃない？」

「いや、お前が早いだけだろ。別に時間の指定とかもなかったし」

「う・・・」

「とりあえず、俺たちも食券買うから先に席でもとっておいてくれないか」

「わかったわよ。今度こそ逃げるんじゃないわよ」

別にさっきも逃げたわけではないんだけどな。

そして、食事をもらって席に着いた俺たちだが席に着くと同時に両隣から質問が飛んできた。

「おい！一夏彼女はいったい誰なんだそろそろ説明してほしいんだが」

「そうですわ！まさかこの方と付き合ってらっしゃるんですの！？」

ちなみにどうでもいいが席順としては俺の隣に箒とセシリア、その反対側に鈴、その隣はユウと雪奈だ。

他のクラスメートたちは近くの席に座っている。

「べべべ、別に付き合ってるわけじゃ・・・」

「そうだぞ。ただの幼馴染の１人だ」

「・・・・・・・・・」

「ん？どうした鈴？」

「別に！！」

「ハァ～まったく一夏は相変わらず鈍感ですね・・・」

「ドンマイだよ鈴ちゃん・・・（私としてはそっちのほうがいいし）」

なぜか鈴に睨まれ、ユウたちにはあきれられた。いったいなんだっていうんだ？

「幼馴染とはどういう事だ？私は彼女を知らんぞ」

「それは、箒は少雨４の終わりに転校しただろ、鈴はそれと入れ違いに小５のはじめに転校してきたんだよ。さしずめセカンド幼馴染ってやつだ」

「セカンド幼馴染だと・・・」

「それで鈴、こっちが箒で前に話した箒でファースト幼馴染だ」

「へぇ～そうなんだ。初めまして、よろしくね」

「ああ、こちらこそよろしくな」

あれ？きのせいか２人の間に火花のようなものが散ってるように見えるんだが・・・などと考えているといつの間にか移動してきたユウに肩をつかまれた。

「一夏気のせいかな、今の話聞いてると２人の事をファーストとかセカンドとか言ってるけど私の存在忘れてない？」

こわ！昨日のあれほどではないけど結構怖いぞ！！

「さあ、説明してもらいましょうか？」

「いやいや、忘れてたんじゃなくて俺にとってユウはもう千冬姉や雪奈と同じように家族のようなものだから幼馴染扱いしてないだけだ！！決して忘れてなんかいない！」

そういうとユウは肩から手を離して雰囲気も元に戻っていく。

「そういうことですか、まったくあせらせないでください一夏」

お前はいったい何にあせったというんだ。

ちなみに今の騒動の間に鈴のほうでは素でセシリアを怒らせたようだ。

あいつ自身かだからな、仕方ない。

そのまま食事の続きを食べていると

「そういえば一夏。あんたクラス代表なんでしょ。せっかくだし私がＩＳの操縦見てあげようか？」

まじかこっちとしてはまだ下手だから教えてくれるなら助かるぜ。

ダンッ×２

「残念だが一夏に教える役はもう決まっている！！私がすでに頼まれたからな」

「あなたは２組でしょう！！敵の施しは受けませんわ！！」

まて、箒確かに頼みはしたがそれは代表決定戦前の話だぞ。

今はお前もほとんど一緒にユウから操縦法学んでるだろうが！！

そしてセシリア、確かに敵ではあるがそこまで強く言わなくてもいいんじゃないか？

「ふ～ん、じゃあさ一夏放課後あいてる？久々にどっか行こうよ。」

「残念だが放課後はクラス対抗戦に向けての特訓をしているからなどこかに一夏を行かせる余裕はない！！」

箒確かにそうだけどもっと言い方ってものがないか。

「あっそ。じゃあ一夏そのあとでいいから少し空けといてね」

そういって教室に戻っていく鈴。

「じゃあ、一夏私は今日からしばらく放課後の特訓は付き合えないですから」

「ああ、わかってるよ」

でもユウがいないと3人が暴走したときとめられるか不安だな。

まあ、そこらへんは放課後に考えるとしよう。

そうして全員教室に戻っていくのであった。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

時間は過ぎて放課後

今私は整備室で簪ちゃんの専用機作りを手伝って今日の作業が終了したので一夏の部屋に今日の訓練がどうだったか聞きに来たのだけれど

「最ッッッ低！！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて犬に噛まれて死ね！！」

そういって部屋から出て行く鈴ちゃん・・・どういう状況ですか・・・

「一夏。馬に蹴られて死ね！」

「箒までいったい何なんだよ」

箒ちゃんも怒っていますねとりあえず事情を聞きましょうか。

「一夏いったいどういう状況なんですかこれは？」

「ユウか、実はな昔した約束のことを鈴に聴かれてその内容を言ったら急に鈴が怒って出て行ったんだよ」

・・・約束というとあの酢豚のやつですかね。

あの時は偶然聞いていましたから知ってますが約束を覚えてたのに鈴ちゃんが怒った？

「一応聞きますが約束の内容を教えてもらってもいいですか？」

「ああ、鈴が料理がうまくなったら俺に酢豚をおごってくれるってやつだよ」

・・・

～～クラス対抗戦　当日～～

さてあれから少し時間がたちました。

あれからしばらくした後に雪ちゃんから聞いた話ですが一夏がまた鈴ちゃんのことを怒らせたらしいです。

同じことを何度も繰り返すなんて学習能力がないんでしょうかね？

ああ！いつも千冬姉様に同じことで叩かれますからきっとないんですね。納得です。

［何気にひどいこと言ってますね］

ムッ　何か電波を捉えましたね。無視しておきましょう。

［ちょっとマスター無視しないでくださいよ！！］

・・・・・・・・・

［ねえ！？聞いてますかマスター！？］

［この念話は現在使われておりません］

［思いっきりつかってるじゃないですか！？］

［それでいったい何のようですか？］

［なんか私の扱いがドンドン酷くなってる様な気がします・・・そ

れよりもなんで凰鈴音のピットに来ているんですか？」

そう今私は一夏のほうではなく鈴ちゃんのほうのピットに来ているのだ。

［それは簡単ですよ。鈴ちゃんを励ますためです］

［そうですか・・・］

それっきり黙りこむランいったい何なんでしょうかね？

「それで、なんで1組のあんたがここにいるのよ？」

「鈴ちゃんを励ますためですよ？友達なんだから当然じゃないですか」

「一夏のほうはいいわけ？」

「まあ、あっちには3人も応援がいますし、何より鈴ちゃんには馬鹿一夏に鉄槌を下してもらいたいですからね」

「そ、そうなの。ありがとねユウ。それじゃあ、一夏の馬鹿をぶっ飛ばしてくるわ！！」

「ハイッ！行ってらっしゃい鈴ちゃん」

カタパルトに乗ってアリーナに飛び出していく鈴ちゃん。

がんばってください。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

今俺は箒・雪奈・セシリアに見送られてアリーナの中央に浮かんでいる鈴と対峙していた。

「逃げないで来たのね。悪いけどユウにも言われたから手加減はしないで全力で行かせてもらうわよ！！」

「ユウのやつこっちにいないと思ったらそっちにいたのか。だけど俺も手加減なんてしてほしくないからな。こっちも全力で行かせてもらう！！」

お互いに武器を構えて試合開始の時間を待つ

『それでは試合・・・開始！！』

その言葉と同時に俺は前に突撃する。

どうやら鈴も同じことを考えていたようで俺たちの武器が激突した。

「やるじゃない一夏。ならこっちはもっとスピードを上げるわよ！！」

そういって手にもった青竜刀のようなものを自由自在に扱って攻撃をしてくる。

「（攻撃が早いこのままじゃ捌けなくなる何とか距離をとらないと

！？）」

「考え事なんて余裕じゃないの一夏！！これでも喰らいなさい！！」

鈴のＩＳの肩の部分が開きその中心が光った瞬間俺はそのまま吹き飛ばされた。

「今のはジャブよ。こっちが本命！！」

再び肩が光さっきよりやばいのが来ると思った俺はとっさに左手のシールドを目の前に持ってくる。

ドンッ

しかしその衝撃はすさまじく直撃したシールドを吹き飛ばすだけではなく威力を殺しきれなかった残りの衝撃が俺を襲う。

「ぐわぁぁぁ」

なんて威力だ！！防ぐのに使ったシールドをどっかに吹っ飛ばすなんて・・・

とりあえず体勢を立て直して距離をとる。

「白鳳鈴が使ったあれがなんだかわかるか！？」

《待ってください・・・検索終了。あれは衝撃砲という空間に圧力をかけてそれを打ち出すというものです》

「見えない砲弾ってわけか厄介だな。何とかならないか？」

《ある程度距離をとっていれば私が発射の瞬間を知らせますので回避は可能ですが近距離ですと回避はきついです》

「そうか、なら隙を見つけるまでは距離をとってマシンガンを使うしかないか・・・」

《マスター来ます！！》

その声とともに機体を横にずらす、ここからは我慢比べってとこか。

～～～

「来なさい一夏！！」

ソードをライフルモードにして少しずらしながら3連射。

当然鈴はそれをよけるが少し隙ができた。

「今だ！！」

その瞬間スラスターを全開にして集中させていた粒子も開放し瞬間加速も組合わせて一気に加速する。

「なっ！？は、早い！！」

「うおおおおおおっ」

そして、その攻撃が鈴に当たりそうになった直前に

ズドォォォォン

突然アリーナ全体に大きな衝撃が走った。

そして、煙を上げているアリーナの中央には全身装甲のＩＳが2体いた・・・

「い、いったいなんだ！？」

「一夏試合は中止よ。あんたは早くピットに戻りなさい。あいつらは私が食い止めるから」

「おい、さすがにあの2体相手にするのは代表候補生でもきついだろ。俺も残るぞ」

「まったくあんたは残るのはいいけど足引っ張らないでよね」

「それはこっちのセリフだ！！」

そういって武器を構えると通信が入ってくる。

『織斑君・凰さん早くアリーナから逃げてください。すぐに先生たちが制圧に行きますので』

「ダメだ先生俺たちが逃げたらあいつの攻撃が今度は客席の生徒に行く可能性があります。アリーナの遮断フィールドを簡単に突き破ったんだ客席も安全じゃないです」

『ちょっとだめですよ。あなたたちに何か・・・』

突然切れる通信どうやらあの2体が通信を妨害したらしい。

「どっちにしろここから逃がしてくれる気はなかったみたいだな」

「仕方ないわね。協力して一気に叩くわよ一夏！！」

「おう！！」

そういって謎のＩＳに向かっていく2人

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　千冬

「織斑君！？凰さん！？聞いてますか！？」

目の前では山田先生が２人に呼びかけているがおそらくあの謎のＩＳが妨害しているのだろう通信は届いていないようだ。

「落ち着きたまえ山田先生。そして、これを見ろ」

モニターを操作してアリーナの状況を山田先生に見せる。

「そんな・・・遮断シールドがレベル４に設定されてる。まさか・・・あのＩＳが！？」

「おそらくそうだろうこのままでは救助にいけない。３年の精鋭に解除をさせてはいるが時間がかかるだろう。政府にも連絡はしたがこちらもさすがに時間がかかる」

問題はあの２人があの２機相手に耐えることができるかということだな。

１機ならまだしもさすがに２機はきついだろう。

などと思っているとオルコットがやってきた

「織斑先生！！わたくしにＩＳの使用許可をください」

「残念ながらそれは不可能だ、オルコット」

「なぜですか！？」

「それは突入自体が現時点では不可能だからだ。それにできたとしてもお前を突入させることはない」

「そ、そんな」

『織斑先生。聞こえますか？』

突然響き渡る声その声の主は

「なんだアインツベルン。今忙しいのだから後にしろ」

『いえ、織斑先生にアリーナへの突入許可をもらうために連絡したんです』

「残念だが今は遮断シールドのレベルが４になっていて突入は不可能だ」

『いえ、私ならシールドを破って突入することができます。さらにそのあと破った場所から部隊を突入させることもできます』

「・・・・・・・・・わかった。ただし無茶はするなよ」

『わかりました。善処します』

そういって通信がきられる。

「聞いていたなオルコットお前も突入するなら準備をして向かえ」

「はい！わかりましたわ」

そのまま出て行くオルコット、果たしてどうなることやら。

できれば全員無事でいてもらいたいものだがな。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

さて許可ももらいましたし一夏たちを助けに行きましょうかね。

でもその前に

「“解析眼”発動」

そうつぶやくと同時に私の左目は赤から白に変わる。

この眼の力はその名のとおり見たものの情報を自由に読み取ることができる、魔力の消費量も少なくて今の私の状態でも使えるから扱いやすい。

さて読み取った情報はっと・・・無人ＩＳですかしかも製作者・・・・・ってあの人はいったい何がしたいのでしょう？

「まあ、今はそんなことより一夏たちの援護ですね。ＩＳ起動、ならびにエネルギー収束開始。さらに翼にも粒子の圧縮を開始」

《チャージ完了》

「では行きますか！『グングニル』すべてを貫きなさい！！」

放たれた槍はそのまま遮断シールドにぶつかり一瞬で破壊してそのままアリーナまで突き抜ける。

それと同時に翼を広げてアリーナに飛び出して行った。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

「はあああああっ」

ガキンッ

ぶつかりう3つの刃その直後に飛んでくるビーム砲それを俺達は後ろに下がることでよける

「クソッ　さっきから厄介だなあのビーム砲は！」

「ほんとにね。せめてどっちか1体だけならもうちょっと何とかなるのに」

そう俺達はさっきから謎のＩＳ2体に攻撃を仕掛けているのだが攻撃しても近接型と思しきほうが防御に回って俺達2人の攻撃を防ぐのだ。

ご丁寧にそのあとにはもう1体のほうがビーム砲を撃ってくるから

厄介だ。

「一夏そっちのエネルギーはまだ平気？」

「ああ、こっちはまだ持つぞ。鈴のほうは大丈夫か」

「ええ、まだ平気だけどこのままじゃいずれやられるわ」

どうしたものかこのままじゃ周りにも被害が出ちまう。

ドカァァァァン

突然鳴り響く2度目の爆音。

「なんだ！？また、敵の増援か！？」

敵の増援かと思い身構える俺と鈴

「まだ、生きてましたかよかったです」

現れたのは漆黒のＩＳを展開したユウだった。

「ユ、ユウ！？」

「そうですよ。あなた達を助けに来ました。では早速で悪いですがあの無人ＩＳの片方は2人に任せますね」

「え？ちょ、ちょっと待ちなさい。あれは無人機なの！？」

「ええ。ですから一夏思いっきりやっても問題ないですからね」

「本当に無人機なんだな？」

「はい」

「わかった。なら片方は俺達に任せてくれ」

そういうとユウは少し離れたところに移動した。

そしてそれを追うように離れていく剣を持った無人機

「い、一夏！？ユウが１人になっちゃったけどいいの！？」」

「ああ、あいつは強いから問題ない。それよりも鈴俺がこれからあの無人機に攻撃を加えるからとどめはお前の龍砲をフルパワーで叩き込んでくれ」

「わかったけどそんなことできるの？」

「相手が一体だけなら回りを気にせずに使えるやつがあるからな」

そして、俺がいざあれを使おうとした瞬間だった。

『一夏ぁーーー』

突然アリーナのスピーカーから箒の声が聞こえた。

「ば、馬鹿、箒お前そんなところで何を・・・」

『男なら・・・男ならそのくらいの敵に勝てなくてどうする！！』

響き渡る箒の声

しかし今は状況が悪かった。

箒の声に反応したのか無人機がビーム砲を内蔵した腕を中継室に向けていた

「クソッ　白鳳『トランザム』だ!!」

《トランザム》

それを見て俺はすぐに白鳳にトランザムを発動させて赤い粒子を撒き散らしながら一気に近づく

「うおおおおお」

両手にショートブレイドを持って相手を何回も切りつけてそのままショートブレイドを2本とも突き刺し今度は右手に大型ソードを出現させて横になぎ払う。最後は雪片弐型を呼び出し零落白夜を発動させて上段から振り下ろしてその場から離脱。

それでもまだ無人機はわずかに動いていたが

「鈴!!雪奈!!セシリア!!今だ」

その掛け声とともに龍砲をチャージし終えた鈴とユウがあけた穴から突入してきた雪奈とセシリアがそれぞれの最大の攻撃を放つ。

当然その攻撃に耐えられるはずもなく盛大に爆発する無人機。

「ふう、終わったか」

そして、攻撃を放った後いつの間にか鈴たちがこっちに集まってきていた。

「こら一夏！さっきのあれは一体何よ。説明しなさい！！」

「落ち着いて鈴ちゃんまだもう一機残ってるんだよ」

「そうですわ。落ち着いてくださいな」

そうだ！まだユウが相手していたやつが残ってるんだ！

そう思いユウが戦っているほうを見ると無人機が落ちていくのが見えた。

「はは・・・無傷で勝っちゃったよあいつ。やっぱり強いな」

あいつに追いつけるようにもっと強くなれるようにがんばっていこう。

その姿を見て決意を新たにするのであった。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

私の目の前には無人機の剣を持ったほうが佇んでいます。

「さて、一夏たちから引き離しましたしさっさと終わらせましょうか」

そういう私の手には龍の爪が漆黒に染まった両刃の大剣の形で収まっている。

そしてぶつかり合う剣と剣

「なかなかやりますね。でも、これでも喰らいなさい」

突然大剣が光だしそれを警戒したのか無人機が後退する。

「残念ながらそれは悪手です！！」

そういった瞬間振り下ろされる剣、その先からはエネルギーの塊が飛びだし無人機に直撃する

しかし無人機も喰らったことを気にも留めずにユウに再び向かってくる

「さすがにあの人が作ったやつですね。なかなか硬いですよ」

再び打ち合っていると突如スピーカーから響き渡る声

「まったく何をしているんですか箒ちゃんは・・・」

あきれてしまうがなぜか無人機が声のほうを向いている

「所詮は無人機ですか、私を前にして別なほうを向くとはいい度胸

ですよ！！」

そういって無人機に近づき大剣を２つに分離させて双剣のように扱い無人機を切り裂く

「これはおまけです！ブレードビット！！」

さらに切り裂かれていく無人機

「では、とどめです。『レーヴァティン』」

とどめにエネルギーに切り裂かれて落ちていく無人機・・・どう考えてもオーバーキルである・・・

「一夏のほうも終わったようですね」

周りを見ると一夏たちがにぎやかに話しているのが見えた。

それを見て安堵していると突如謎の感覚が襲ってくる

「・・・ウッ、この感覚は！？まさか、例に神の力の一部か悪意を持った転生者がいるんですか！？」

そう思いあたりを見渡す

そして突然

《アリーナ外に高エネルギー反応確認》

「なんですって！？」

ドカァァァン

３度目の爆音とともにユウは閃光に飲み込まれてしまった。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

第１４話　クラス対抗戦開始　飛来する悪意（後書き）

ル「さあ、今回は一気に話をすっ飛ばしてしましたが反省はしていますが後悔はしていません。だって早く戦闘シーン書きたかったんですもん」

ユ「その割りに私の戦闘シーン少なすぎませんか？」

ル「大丈夫次回はユウが大活躍する予定だから」

ユ「今回の最後見た感じ戦える気がしないんですけど！？」

ル「安心したまえそこらへんはちゃんと考えてるよ」

ユ「信じてますからね」

ル「あと今回出てきた“解析眼”は本編で説明したように見たものを解析するだけの戦闘においてまったく役に立たないものです。でも知ることのできる内容ははっきり言って半端ない量です。たとえば作られたものなら誰がどのように作ったとか材料名さらには評価までわかります。人に使えば性格とか病気、スリーサイズなどもわかります」

ユ「そのわりに魔力消費も少なくて使いやすいんですけどねって人に使ったらただの変態になるような気がするんですが！？」

ル「大丈夫普段は使ってないはずだから。あと、自分で書いておいてなんだけどこれって元ネタあるのかな？一応オリジナルのつもりで書いたけど」

ユ「自分でわかってないんですか!?」

ル「まあ、戦闘に役に立たないけど使えそうなのって考えたからね～昔にパッと頭に浮かんだのが能力としてレギュラー化したから本当にわかってない」

ユ「威張れることではないと思いますが」

ル「それでは今回はこの辺で失礼いたします」

ユ「感想・誤字脱字・指摘などありましたら感想のほうにお願いします」

ル「感想まってま～す」

ル・ユ「「ではまた次回お会いしましょう」」

ル「そろそろこの締めも変えたほうがいいかな?」

ユ「急ですね」

ル「気が向いたらあの子達でも出そうかな?」

ユ「ちょ、あの子達って誰ですか一体!?」

ル「気にしない気にしない」

ユ「気になりますってば～～～」

第１５話　現れる更なる悪意　そして落ちる銀（前書き）

いいタイトルが思い浮かびません。

よってタイトルが適当になってますが気にしないでください。

今回やっとこの世界でのユウの倒すべき敵が出てきます。

まあ、名前は直感で決めたから適当なんですけどね・・・

敵のＩＳについてもまんまですしね～

まあ、前置きはこのくらいにして

今回も本編をお楽しみください

第１５話　現れる更なる悪意　そして落ちる銀

Ｓｉｄｅ　？？？

ユウたちが無人機を撃破する少し前のアリーナ上空そこに４つの影が存在していた。

「お～ずいぶん派手にやってるじゃないか。それにしてもあの無人機原作と違って２機いやがるな」

「それに関しては仕方ないだろうなにせ向こうにはイレギュラーが２人もいるんだからな」

「でもさ～あいつが言ってたイレギュラーってさ１人だけでしょ？なんで２人もいるのさ」

「君達はあの人の話を聞いて無かったのかい？最初にこの世界はＩＳのパラレルワールドだから原作側にも多少の違いがあるって言ってたじゃないか」

青髪の少女が呆れながら言ってくる

「「「その辺は聞いてなかった（ぜ）（な）」」」

声をそろえてそう答える茶髪・深緑の髪・赤い髪の少女達

「ハァッ・・・とりあえず僕達の標的は銀髪のほうを殺すこと、後は織斑一夏の確保だよ」

ため息をつきながら作戦目標を告げる青髪の少女

「ハイハイ、わかってるっつーのアキ」

本当にわかっているのか不安に感じる返事をすしながら青髪の少女の名前を呼ぶ茶髪の少女

「でも織斑のほうは今回それほど重要じゃないんでしょ？逃げたらどうするの？」

深緑の髪をした少女がまた疑問の声を上げる

「今回は無理をせず逃げ出したのならほうっておいて言いそうだぞ。そのためにシールド遮断装置も設置してあるしな。わかったかカルラ」

「了解だよ～アルト！」

赤髪の少女アルトに言われて返事をする深緑の髪の少女カルラ

「今アルトがいったとおりだからお願いだから無駄な殺しはやめてよねエトラ」

「覚えておいたら抑えておくぜ～」

まったく抑える気が合い声で返す茶髪の少女

「ムッそろそろ無人機が落とされるみたいだな。カルラ準備はいいか？」

「ＯＫだよ～チャージも終わってるしいつでも撃てるよ～」

そうこうしているうちにユウが無人機を落とした

「よし今だよカルラ遮断シールドごとあのイレギュラーを打ち抜くんだ」

「よ～し、狙い打つぜ～」

発射されるエネルギーの奔流それはそのままユウの元に向かい直撃したようだ

「よし突入だ」

「さ～て楽しませろよイレギュラー！！」

「任務を開始する」

「あれ～？今の私のセリフに突っ込みはなしなの～？」

なぜかしまらないまま突入していく４人だった（笑）

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

無人機を撃墜したら謎のエネルギーの奔流に巻き込まれて危うく死ぬところでしたよ。

ちなみに現在私はさっきまで無人機の相手をしていた場所から移動して一夏たちのところにいます。

「いや～危なかったですね～」

「ユウ！？いつの間に移動してきたんだよ！？」

「それはあれですよ。左手の爪を威力重視形態にしてパージしてとっさにぶつけたんですよ」

「そんなことあの一瞬でできるあんたがすごいわよ・・・」

「そうですわね」

「そうだよね～もう人間業じゃないよね～」

鈴ちゃん・セシリア・雪ちゃん失礼ですよ。

さて上空から敵が来ますね。まずは・・・

「一夏・鈴ちゃん早くピットに戻ってください」

「ふざけるな！あれは敵だろう俺達も戦うぞ」

「そうよ！逃げるなんてできるわけないじゃない！」

「でも一夏はトランザムと零落白夜を使って粒子もエネルギーもほとんど残ってないでしょ。それに鈴ちゃんもここまで連戦でしたからそれほどエネルギーはないでしょうし」

「「それでも！！」

はぁ～2人とも頑固ですね。仕方ありません。

「では2人とも一旦ピットに戻ってエネルギーを補充してから教師の方々と一緒に戻ってきてください。それが私にできる最大の譲歩です」

「わかったすぐ戻ってくるから待ってろよ」

「じゃあ、雪ちゃん・セシリア2人の撤退の援護をお願いしますね」

「わかったよ」

「わかりましたわ」

そしてピットに戻っていく4人エネルギーの補給には多少時間がかかりますしおそらく敵が妨害用の遮断シールドあたり張るでしょうから戻ってくるのに時間がかかるでしょう

その間に敵を倒すだけですよ！！

そして、上空から現れる4つの機影

「さあ、あなた達の相手は私ですよ。転生者の方々」

「やっぱりわかってるようだね。じゃあ、こちらも最初から全開で行かせてもらうよ。イレギュラー！！」

答えるのはリーダーと思しき青髪の少女

そして始まる戦い

～～～

思いっきりνガンじゃないですか！！

他の機体も武装を見た感じX・フリーダム・スローネっぽいですしとりあえずXだけでもつぶさないとまずいですね。

唯一の救いは相手の動力は普通のISと変わらないというところですかスローネも粒子は放ってないですしね。

ちなみにユウはガ〇ダムの世界というかGジ〇ネの世界にも行っているので武装で大体判断できる。

ついでに敵の4機は全身装甲ではなく普通のISと同じタイプです。

「この！ブレードビット！！」

「甘いですよ！ディバイダー発射！！」

深緑の少女の放ったビームの嵐がユウの放った8つのブレードビットを破壊してそのまま襲い掛かってくるがそれを上昇して回避する。

しかし、相手も予想していたのかスローネと青髪の少女のフリーダムらしきものが高速で突っ込んでくる。

それを避けようとするがファンネルからの攻撃が当たってしまいバランスを崩してしまう

「しまっ！？」

「くらいな！！」「落ちろ！！」

そのまま直撃してしまい地面に向かって落下していくユウ
地面にぶつかる直前に何とか体勢を立て直して着地
「さすがに強いですね・・・ならこれを使うとしますか」
その瞬間剣は消えて両手には龍の頭を模した様な銃身の赤と白の双銃が握られていた。
「《ヴォルジャック》と《ヴォルメテウス》これを使うのも久しぶりですね。腕が鈍ってないか心配ですよ」
そして翼を広げて再び空に飛び上がる
「いまさら新しい武器を出してきたところでそのダメージじゃ僕達には勝てないよ」
「勝手に決めないでほしいですね。油断してると足元をすくわれますよ？」
「安心しな！油断する前にお前を殺してやるからよ！！」
その言葉を皮切りにスローネが突っ込んできて他の3機は後方で援護体勢に入っていた
横になぎ払われる大型ソードそれに対してユウはソードに向けて銃を構えた
「そんな銃なんかで私の一撃を防げると思うんじゃねえぞ！！」

「誰も防ぐ気はないですよ」

そのままユウを横に断ち切る一撃が入ったように誰の眼にも映った。
しかし・・・

「（なんで手ごたえがないんだ!?確かにきったはずなのに!?）」

そう手ごたえが存在しなかったのだそしてその答えは武器を見ればすぐにわかった

折れていたのだそれも根元からポッキリと・・・

「な、何で折れてやがるんだよ!?」

「簡単ですよある一点に直列上に弾を１２発打ち込んだだけですから」

「ば、馬鹿な!?だ、だけどまだ武器があるんだよ!!」

そういって腰から自立軌道兵器を発射するのだがそれは一瞬で砕け散る

「さようなら・・・」

そしてそのまま銃口をスローネに向ける

しかしそれがスローネを打ち抜くことはなく後方にいた3人がそれぞれ攻撃を加えてスローネを逃がす。

それを避けながらユウは

「うっとうしいですね・・・あれの使用時間は約8秒ですか・・・十分ですね。『トランザム』」

トランザムを発動させて一気にけりをつけようとするユウ

「な!?まさかあれはトランザム!?まずいみんな散開してっ!?」

しかし声をかけると同時に4人は吹き飛ばされ全員が展開していた武器を破壊されてしまう

「は、早すぎる!?」

「武、武器が壊された!?」

「ちっくしょ～～～～」

フリーダム・ν・スローネは武器が常時展開されているためすべて破壊される。

しかし、チャージのために武装をしまっていたXだけはまだ1つだけ武器がある。

「まだ私にはこれがあるよ!!いっけーーーサテライトキャノン!!」

放たれる最強の一撃相手は動こうとしていない。

それをみて襲撃者達は自分達の勝ちだと思った、しかしその希望はあっさり打ち砕かれる。

「甘いですよ。『グングニル』」

ビームの奔流は放たれた槍によってあっさりと消し去られそのまま槍は襲撃者達の近くに刺さり爆発を起こす。

ドカーーーーーン

「ではこのまま捕らえていろいろと洗いざらい吐いてもらいましょうかね」

そのとき後ろから聞きなれた声がした

「ユウーーー無事か!?」

「あれ?一夏なんで来たんですか?しかも1人でなんて」

「ああ、エネルギーの補給が終わったから遮断シールドを破って俺だけ先に来たんだよ」

「そうなんですか、ならあの4人を捕らえるのを手伝ってくれますかさすがに4人ももてないので」

「ああ、その位いいぞ」

「(まあ、一夏の話だと他の人たちもすぐに来るでしょうからそんなにあせる必要は・・・・・・)」

「・・・ユウあいつらを捕らえる前にちょっといいか」

「何ですか？」

そういわれて振り返ると

「死んでくれ」

「え？」

ドスッ

その一言とともに一夏は雪片をユウに突き刺す

「い、一夏？な、なんで・・・」

そのまま一夏？は雪片を引き抜く

そして、そのままユウは重力にしたがって落ちていき地面にぶつかる。

一夏の背後ではいつの間にか現れた巨大な球体上の存在がこちらに砲身を向けていてそのまま火を噴いた・・・

「（そ・・・んな・・・あれ・・・は・・・・A・・・・KU・・・・）」

そのまま、銃弾の嵐にユウは包まれていった。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

第15話　現れる更なる悪意　そして落ちる銀（後書き）

ユ「・・・・・・・・・・・・・・・」

→ショックで呆然としてる

ル「お～い。ユウ戻っておいで～」

ユ「ハッ私は何を・・・」

ル「戻ってきたねよかったよかった」

ユ「そうです！何ですか最後のあれは!?私死んでませんよね!?」

ル「安心するといいよ～さすがに殺しはしないから」

ユ「そもそも、私があんなふうになるのってほかの作品でもそうですけど普通福音戦あたりでなるんじゃないんですか!?」

ル「そんなのつまらないじゃないか。まあ、普通は無双かちょっと苦戦するくらいに書くのがいいんだろうけど意表をついてみたんだよ。呼んでくださってる皆さんが少しでも驚いてくれると嬉しいですね」

ユ「そんなに私のこと嫌いなんですか!?」

ル「何を言う。私がユウのことを嫌ってるわけないじゃないか。ただちょっとかわいい子ほどいじめたくなるだけだよ」

ユ「そっちのほうがたち悪いんですが！？」

ル「まあ、今回はこの辺にしておくとしようなんかこのままだと色々とネタバレしそうだし」

ユ「いまさらな気がしますが、まあ、いいでしょう。それではいつものように感想・誤字脱字報告・指摘などはいつでも待っていますのでドシドシ投稿ください」

ル「結局今回もいつもと同じ締めだよね～」

ユ「ならあなたがもっとがんばってくださいよ！！」

ル「それではまた次回お会いしましょう」

ユ「また無視ですか～～～～」

第１６話　忍び寄る死　現れる黒い疾風（前書き）

今回は少し流血要素などを含んでいますので苦手な方はご注意ください。

タイトルに書いてある黒い疾風は別に黒いラファールが今回出るというわけではないのであしからずです。

それにしても今回ＩＳのＳＳなのにＩＳ戦してないな～

今回出てくるの久々登場のあれだけだし戦闘というよりも説明回っていったほうがいいのかな・・・

それでは本編をどうぞ～

第１６話　忍び寄る死　現れる黒い疾風

Ｓｉｄｅ　一夏

今俺はピット内から遮断シールド越しにありえない光景を呆然としながら目の当たりにしている。

雪奈たちや突入しようとして遮断シールドに邪魔された先生たちも同様だ

なぜなら遮断されたアリーナ内でどこからか現れた“白式を纏った俺”がユウに剣を刺してそのまま切り裂き謎の機体がその銃弾をユウに向けて撃ち続けているからだ。

「な、何だよ・・・なんであそこに俺がいるんだよ白式まであるし・・・どうして俺がユウを指してるんだーーーーーー」

突然の出来事とありえない光景に俺は頭が混乱し精神的にもやばくなっていた

「落ち着け一夏！あれはお前ではない、お前はここにいるだろう」

「そうだよ！あれは一兄じゃない、だって一兄はあんなことしないもの」

とりあえず、箒と雪奈にそういわれて多少は持ち直したがそれでも動揺は大きい

「早く遮断シールドをなんとかしませんとこのままではユウさんが

死んでしまいますわ！」

「そうよ一夏動揺してるところ悪いけど早く遮断シールドを破壊して！！」

そ、そうだ早く遮断シールドを破壊してアリーナに向かわないと

「『零落白夜』発動！！切り裂けーーーーー！！」

振り下ろされた雪片弐型はそのまま遮断シールドにあたりシールドを破壊・・・しなかった。

「な、なんで破壊できないんだよ！？」

何度も何度も零落白夜を発動させてシールドに雪片をぶつけるが破壊することはできない。

「壊れろ壊れろよ！！早くしないとユウが死んじまうよ！」

《マスター！解析結果が出ました。どうやら零落白夜が当たった瞬間にそのエネルギーが吸収されているようです。そのため破壊することができないようです》

「そ、そんなどうにかして破壊できないのかよ！？」

《残念ながらエネルギーの攻撃では吸収されてしまうため実弾系しか効果がない上現状の戦力では破壊は厳しいです》

「なら限界までエネルギーをぶつけるとかはダメなのか？」

《残念ながらぶつけたエネルギーはすぐに他のシールドにまわされるようで白雪のビームバズーカのみでは厳しいです。せめてあと２機同じ規模の攻撃ができる機体がいれば何とかなるでしょうが・・・》

「そ、そんな・・・ユウーーーーーーーー」

ピット内には一夏の悲痛な叫びが響くのであった。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

～～～アリーナ内～～～

（ここからＳｉｄｅは無しでお送りします）

シュ～～～～～

つい数秒前まで撃ち続けられていた銃声が止みユウがいた場所からは煙が立ち上っている。

「い、いったい何だって言うんだよ・・・」

「あれは何なんだ・・・」

「ま、まさか回りに浮いているあの２機は・・・」

「ああ・・・こ、怖いよ・・・」

突然の出来事にさすがに転生者の４人も驚愕しある種の恐怖を覚え

ている。

そんな４人に話しかけてくる一夏の姿をしたもの

「いや～ご苦労様だったね。君たちのおかげでこいつを簡単にだますことができたよ。」

そういい歪な笑みを浮かべながら狂気を振りまく

「まあ、本当は君たちがこいつを殺してくれれば一番楽だったんだけどね～」

その狂気に転生者４人はただ震えるだけであった

「安心しなよ。君たちに手を出すつもりはこれっぽっちもないからね。だって僕は君たちを転生させたものの僕みたいなものだもの。それに僕の目的はこいつの力だから」

「ち、力？」

力のない声で唯一声を絞り出すことができたアキが質問をする

「そうこいつを殺してその力を手に入れるのが僕の主の目的。本来ならそんなことできないけどこの閉じられた世界でならそれも可能だからね」

「と、閉じられた世界？一体どういう事なんだ！？」

「残念だけど君たちには関係ないことさ例え死んだとしてもこの世界の現状じゃ意味はないからね」

そして、一夏の姿をしたものはユウが倒れている場所まで行き頭をつかんで持ち上げる。

その姿は酷くボロボロで全身からは血が流れて綺麗だった銀髪も血や汚れでボロボロだった。

そして持ち上げられた瞬間にユウの左腕が動き殴りかかる

ガシッ

しかしそれはあっさりと受け止められる

「へ～まだ息が合ったんだ。てっきりさっきので殺したと思ったのに反撃までしてくるなんてね。どうやらＩＳとかいう機械が守ったようだね。まるで意思があるみたいだ。でも残念だけどその程度じゃ僕を破壊はできないよ」

ボキッ

そういうとユウの左腕をあっさりと折る

「ガッ・・・イ、イタイ・・・な、なんで・・・あなたが・・・そん・・・ざい・・・してる・・・の」

ボロボロな状態で敵に問いかけるユウ、しかし一夏の姿をしたものは

「へ～もしかして僕が何なのか気づいたのかい・・・って当然か君は何度も後ろのとは戦ったことがあるもんね。でもあいつが作ったのと一緒にしないでくれないかい、総称は一緒でも僕たちはあいつが作ったものより例え同じ固体でも優秀なんだからさ」

そのまま掴んでいる腕の力をさらにこめていく

メキメキッ

「さて、いい加減君を殺してその力を貰い受けるとしようかな。それじゃあ、サヨウナラ魂を縛られた哀れな魂君の力はあの人の力となって役立つよ」

ヒュッ

そしていよいよ止めを刺そうとしたその瞬間一筋の影が現れ上空から何者かが降ってきてそのまま一夏の姿をしたものを縦に切り裂いた

しかし、先ほどまで一夏の姿をしたものはまるで脱皮するように背中を突き破って別な姿を現す

その姿はまるでピエロのような服装をしていて身長は先ほどまでの2倍はあり、顔は人のものとは思えない歪な顔をしていた

「まったく、危ないな～突然乱入してくるなんて君は何者だい？」

突然の乱入者に対しても大して動じず余裕を持って問いかけるピエロの格好をしたもの（以下ピエロ）

「チッ　外したか」

対して乱入者は黒い髪をなびかせ、顔は眼だけをマスクで覆い体は黒いマントで全身を覆っていた。

また声の感じからは女性のようであった。

「簡単だよ、ただこの子を守ってあの人の手先モドキであるあんたたちをぶっ飛ばす存在さ。今はね。」

「ハッハッハッ、君のようなやつが僕たちを倒せると思っているのかい？」

声高らかに笑うピエロ

「問題ないさＡＫＵＭＡモドキであるあんたたちの元になった存在はある力でしか倒せなかったけどあんたたちはあれでできていない。なら普通に壊せるんだよ」

「・・・よく気づいたねどうやら君もイレギュラーのようだ。主が求めてるそいつとは違うようだけどね。それでも君程度が僕たちを破壊できるとでも？」

「そんなこと私には簡単だよ。（さてまだ生きてるね。君には悪いけどここは私に任せてもらうよ今のあなたじゃ動けないでしょうしね）」

ピエロに答えつつ小声でユウに話しかける女性

「（だ・め・・あれ・は・・私・・が・破壊します）」

「（そんな体じゃ無茶もいいところだよ）」

「（あの・・子を使えば・・5分くらい動け・ます・・・そのあい・・だに・・あい・・つ程度なら破壊できます）」

「（はあ～予想はできたけど相変わらず頑固だね～君は、なら今の私じゃあ傷をほんの少し直すことしかできないけどやらないよりはましでしょうね。でも、5分だけだよ）」

するとユウの傷が本当に少しだが回復する。

「傷が・・・治ってる。もしかしてあなたは・・・」

「それは内緒だよ」

「さて、話は終ったかい？」

「待っててくれるなんて意外じゃないの」

「君たち程度ならいつでも殺せるからね。当然僕の相手は君なんだろ黒いの？」

「残念だけど私じゃなくてあなたが痛めつけたこの子があなたの相手。私は周りの2体の相手をさせてもらうわ」

そう告げるとわずかに驚いた顔をするピエロ

「正気かい？もう虫の息のそいつに僕の相手させるなんて」

「この子がそれを望んだからね。それに油断してるとあっさり食い殺されるよ」

などと会話をしているとユウが右手を突き出し

「目を・・覚まして・・『ルナ』」

つぶやくと同時に体を光が覆いユウの最初のＩＳルナが起動した。

光が収まるとそこには上が黒く肩から先が少し出て背中が開いた着物の上を着て下はミニスカートにニーソックスを履き腰の部分にはロングコートの腰から少し上の部分のみが帯によって体に巻きついていた

また右手には大太刀が握られていた

「では・・・いき・・ます」

そういうと同時に残っている魔力を体に纏いピエロに肉薄するピエロも雪片を出して迎え撃つ

「では私もこいつらの相手をしますか」

そうつぶやく黒い女性の前には大型の黒い球体に顔がついた機械が砲身をこちらに向けていた

「・・・・・・・・・・・・・ら」

そして女性が何かをつぶやくと右腕から刃が飛び出た

それと同時に襲い掛かってくる無数の弾丸それを女性は時に避け時に右手の刃で切り裂きながら近づいていく

そのまま肉薄し敵のうちの片方に右の刃で一閃

だが一撃で壊れることはなく再び女性を銃弾の嵐が襲う

「一撃で壊れないとはオリジナルよりは確かに頑丈なようですね。ならば何度でも切りつけるだけです！！」

地に着くと同時に再び走り出し先ほどよりも速い速度で肉薄し再び右の刃で切り裂く

ただし今度は1回ではなく5回

今度は耐え切れず爆発を起こす2機のうちの1機

「まず1つ！！」

味方が倒されたことに気づき距離をとる残った敵

しかし、女性はしゃがみこみ足に力をためて一気に開放し残った敵に突撃今度は5回ではなく7回きりつけて完全破壊する。

「確かにオリジナルよりは硬かったですが、強さとしてはこのレベ

ルじゃ、やはり弱いですね。特定の力でしか壊せない分オリジナルのほうが厄介ですよ」

「え・・い・・・」

「チッ」

ぶつかり合う剣と剣

すでに打ち合いを始めてから3分がたっていた。

そしてお互いに攻め手に欠き膠着状態が続いている状況であった。

ユウは左手が使えないうえに体がボロボロであるために攻めきれず

ピエロもまた武器をだしたはいいが所詮映したものなので1，2回打ち合えば砕けるため攻め切れない。

しかも1度砕けた武器はまたすぐに出すことは不可能。

そして4分が経過したときユウが動く。

「（動けるのは・・あと・1分・・・危険だけど・・賭けに出ます）

」

そう思い相手が持っている武器を砕きそのまま相手の懐まで近づき剣を振り上げる。

「残念だけどまだこれがあるんだよね！！」

そういったピエロの左手は槍のように細くなっておりそれをユウのほうに突き出してくる。

「これでしねーーー！」

ユウに槍のような手が当たる直前

「『アラストール』」

剣の名前を叫ぶと同時に突き刺さる槍。

それをみてピエロは殺ったと思ったが次の瞬間ユウの姿が炎となってぶれた

「な、なんだってーーー！？」

炎と化したユウはそのままピエロを炎で包み込む

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁーーー」

そしてその真上から剣を構えたユウが一気に近づきピエロを真っ二つにした。

上空から炎をブースターの代わりにして一気に急降下、それは片手でも敵を切り裂くには十分だった。

「そんな・・・僕が・・・こんなやつに・・・すみません・・・z」

ドカーーーン

そのままピエロは大きな音を立てて爆発。

ユウも今までのダメージから音を立てて崩れ落ちるが倒れこむ前に女性に抱えられる。

「おっと、お疲れ様だったね。今はお休み」

これで今回の事件は終了・・・

「それであなたたちはこれからどうするんですか？まだやるというなら今度は私が相手になりますよ？亡国企業さん？」

・・・してはいないのであった。

女性が声をかけた方向には転生者４人・・・ではなくその４人を抱えた２人の人物がＩＳをまとって浮かんでいた。

「いや、今回は引かせてもらうぜ私たちの目的はこいつらの回収だ。それに特製の遮断シールドは解除しちまったから増援が来ると分が悪いんでな」

「私がおとなしく逃がすとでも？」

「おいおい、そっちのガキも重症だろ?あんたがそいつとどうゆう関係だが知らんが見た感じ放っておきはしないようだからな、その隙に逃げさせてもらうぜ」

「・・・・・・・・・・・・・・」

そういってシールドの穴から外に出て行く2人

それを追うことはできなかった。

そして女性の背後からは一夏たちや学園の教師たちがやってきて女性を包囲する。

「抵抗をやめてその子を放しなさい」（教師）（紛らわしいので学園側のみ少しの間表示）

「ユウを話しやがれ」（一夏）

全方向から浴びせられる殺気、しかし女性はまったく気にもせずに

「今頃の登場ですか、いくら不測の事態とはいえすべてが終ったあとに出てくるのは遅すぎると思いますよ?」

その言葉に反論できない周りの人物たち

「それにこの子を放せといいますが断らせていただきます」

「な、なんで断るのよ!?」↑鈴

「簡単ですよ。この子は重症ですので早く施設の整った病院に連れ

て行かないといけません。なのでこのまま私が連れて行くのが一番早いのでお断りします」

「そんなこと言ってどこかに連れ去るのが目的ではありませんの？」（セシリア）

譲る気がない学園側

女性が無理やり突破しようかと思っていると

『構わん！今は早急を要するためそのままそいつに行かせろ！』

スピーカーから鳴り響く千冬の声

「し、しかし・・・」

『そいつの目的がそいつならすでに教師が到着する前に離脱している。それに私の感だがそいつは信じられる』

「（もしかして私の正体に気がつきましたかね・・・いえ、おそらくこの子に対する私の接し方から判断したというところですか）」

「安心してください。この子を病院まで届けたら病院名や今回の事件の説明できる部分でしたら説明させてもらいますよ」

そういって飛ぶのではなく跳んで離脱していく女性

「ユウ・・・」

それを学園側は見守ることしかできず一夏のつぶやきだけがかすか

にこぼれていた。

第１６話　忍び寄る死　現れる黒い疾風（後書き）

ル「今回はユウの敵の目的が軽～く明かされましたね～別に敵の目的があれだけってことはないですよ・・・ホントウダヨ・・・」

ユ「何で片言なんですか？」

ル「うわぁ！？驚いた何でいるのさユウ！？」

ユ「いるに決まってるでしょうが！何でいないと思えるんですか？」

ル「だって意識不明の重体じゃん」

ユ「それを言ったら前回は生きてるかどうかもわからない状態だったんですが・・・」

ル「そういえばそうだね～ルージュさんうっかりしてたよ～」

バキッ

ユ「殴りますよ？」

ル「すでに殴られたんだけど！？」

ユ「それより解説を」

ル「まあいいか、転生者たちについてはこの話の元凶に専用ＩＳと操縦の才能あと少しの特殊能力をもらって送り込まれました。目的はユウを殺すこと。目的を達成すると報酬が元凶からもらえるけど

それはまだ秘密」

ユ「そういえば今回元凶らしき人物の手下が出てきましたね」

ル「あれの元ネタはD．〇レの兵器たちだよ。」

ユ「本当に元凶はあの人じゃないんですよね？」

ル「ちがうよ～あの人はＩＳ編においては絡んでくる可能性は完全に0だから安心して元凶はちゃんと別な人を用意してるから」

ユ「ほかの世界だと出てくる可能性あるってことですか」

ル「まあ、その辺は置いておいて～兵器の原作との相違点は別にイノセンスじゃなくても破壊可能、ウィルスも存在しないから攻撃されても即死はない。ただし原作より強化されてる。レベル１だったら頑丈になるくらいでレベル２は身体能力と固有能力の強化。３以降は秘密。でも所詮猿真似」

ユ「それでも十分脅威ですけどね」

ル「ＩＳ編の元凶の目的はユウの力を吸収することその辺は大元の元凶と少し被ってるね。当然それだけが目的じゃないはずだけどね」

ユ「自信ないんですか・・・それよりも途中で出てきた女性って」

ル「詳しくはいえないけど転生者だよ。ただし元凶は関与してないしユウとは関係があるけどね」

ユ「そうですか、あの力はやっぱり・・・」

ル「だめだよ～それ以上はネタバレだよ～」

ユ「そうですかわかりました。ではそろそろお別れですね。感想・誤字脱字報告・指摘などはいつものようにお待ちしておりますのでよろしければお願いいたします」

ル「どんなものでも感想は嬉しいからね。私的だろうと何だろうと覚悟はできてるからバッチコ～イだよ！！」

ル・ユ「「それではまた次回お会いしましょう」」

第17話　クラス対抗戦のその後（前書き）

注意今回ユウは出てきません。

というか完全に今回説明回なきがします。

そしてまた出てくるオリキャラ・・・たぶんこれ以上は味方側にはふえないと思う

ただし敵側は除く

それでは本編をどうぞ

第17話　クラス対抗戦のその後

Ｓｉｄｅ　千冬

～～ＩＳ学園地下～～

クラス対抗戦から一夜明け私は現在昨日学園に乱入してきた無人機について調査をしている。

先に言っておくと今日は学園は土曜で休みだ。

「どうだ山田先生?結果は出たか」

「はい、ついさきほどあのＩＳの解析結果が出ましたよ」

「そうか、どうだった」

パネルを操作してディスプレイに解析結果を表示させていく

「残念ながら解析を行ってもあの無人機がどのようにして動いていたかについてまではわかりませんでした」

「そうか・・・コアのほうはどうだった?」

「そちらのほうも調べてみましたが・・・どの国にも登録されていないコアが使われていました」

「やはりそうだったか」

そういってどこか確信のようなものを持って発言する千冬

「なにか心当たりがあるんですか？」

「いや、今のところはまだない」

「そうですか・・・」

「それにしても、昨日は無人機の襲撃に加え他にも謎の勢力からの攻撃、さらに謎の人物の登場。さて謎の人物は説明をするとは言っていたがいつになることやら」

「今は待つしかないんですね・・・」

そしてため息を吐く2人

その2人に背後から突然声がかけられる

「ため息をつくと幸せが逃げますよ？」

「「！？」」

突然かけられた声に驚いて2人が声がしたほうを振り返ると

そこにいたのは昨日の襲撃の際ユウを救いそのまま連れ去った黒衣の女性であった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　黒衣の女性

現在私はＩＳ学園の地下にいます。

目の前には織斑先生と山田先生がいますが私には気がついてはいません

え？よく織斑先生に気づかれないでいられるなって？

気配遮断は得意なんですよ、だってここに来るまで織斑先生の後ろについてきましたから・・・ちゃんと姿は見えないようにする装備を使ってますよ。

（そんなものをこの世界では持ってるほうがおかしいんだけどね）

なにか作者の電波を受信したような・・・

まあ、今はそんなことよりも織斑先生たちに話しかけるとしましょうかちょうど私のことを話していますしね。

２人がため息をついた今です！！（↑どうしてそのタイミング！？）

「ため息をつくと幸せが逃げますよ？」

「「！？」」

あれ？なぜか２人とも驚いてますね、何ででしょうか？

（誰でも急に声をかけられたら驚くってｗｗ）

うるさい作者（笑）ですね。

ちなみに私の格好は下は昨日と同じ黒いマントで眼にはマスクじゃなくてグラサンをつけています・・・どっちにしても怪しいですけどね。

「なぜ貴様がここにいる?」

ムッ・・・いつの間にか織斑先生が復活していたようですね

「それは簡単ですよ。ただ織斑先生がここに来るまでの道のりを姿と気配を消して後ろについていただけですから」

そういって姿を消してまたあらわしてみる

「そんなそこまで高度な光学迷彩が存在するなんて!?」

「しかしそれでは学園の防犯装置をかいくぐることはできないはずだ」

やはり織斑先生は鋭いですね

「まあ、これはただの光学迷彩ではない上にここに来る前に少し学園のコンピューターを掌握させてもらいましたからね」

「うそ!?」

「ありえん!?」

さっきから2人とも驚いてばかりですね

原因の大半は私のせいですがね。

「掌握してといっても私の姿を学園側が確認、記録できないようにしたくらいですので安心してください。もっとも時間さえあれば私の前にはどんな機械も無意味ですけどね」

「・・・それで貴様はここに何をしに来た。返答しだいでは今の発言も合わせてここで捕獲させてもらうぞ」

「怖いですね～。まあ、何をしにきたと言われても昨日の件について約束したように説明に来ただけなんですけどね」

「ならば昨日のことについて貴様が知っていることをすべて教えてもらおうか」

「さすがにすべては答えられませんよ。それにただで教える気もありませんし」

「貴様！！」

「まあ落ち着いてくださいよ～そちらが質問したことについて答えられることなら答えてあげますから～」

「チッ・・・わかったそれでいい」

ちょっ！？今この人舌打ちしましたよ！？本当に教師ですかね？

「その前にいい加減に貴様っていうのやめてもらえませんかね？言われてるほうはいい気がしないんですけど」

「それは貴様が名乗っていないからだろうがこちらはどのように呼べばいいかもわからないから貴様と言っているに過ぎん」

「あれ？名乗ってませんでしたか。では私のことは奏（かなで）とでも呼んでください。偽名ですがね」

「堂々と偽名というか普通・・・まあいいでは奏！貴様に答えてもらいたいことは５つ、無人機について・乱入してきた４人のＩＳ乗りについて・一夏の姿をしていた謎の敵について・貴様の正体・ユウの容態についてだ」

「多いですね～それにしても何で無人機や４人のＩＳ乗りについてまで聞いてくるんですか？その場にいたとは限らないのに」

「お前がユウを助け出したタイミングが良すぎるんだ。最初からみていたと思うのが妥当だろう」

わ～お。相変わらず鋭いですね～

「確かに最初からみてましたよ。でも助けに入る必要があるとは思ってなかったんですがね。」

これは本当に思ったこと。

それでも最後はあいつを破壊したあたりさすがなんだけどね。

「ではそろそろ質問に答えましょうか。１つ目の無人機については誰が何の目的で送り込んできたかは予想がつきますがお答えできませんね」

「なぜだ？」

「そもそも織斑先生も大体予想ついてるんでしょ？ならしゃべる気はありませんよ。これに関しては少し頭を使えば誰でも気がつきますからね事実として認めるかは別ですがね」

「そうかやはりあいつのようだな。答えられないならばもういい次にいけ」

「せっかちですね～。２つ目のあの４人についてですが彼女たちは最後に現れた２人も含めて全員亡国機業に所属しています」

「過去の亡霊がまた出てきたというのか」

「目的は織斑一夏の確保と邪魔となる存在簡単に言うとライセンス持ちの彼女を排除することでしょうね。まあ、彼女のことをイレギュラーなどと呼んでいたことから目的は別にありそうですけどね」

「その目的をお前は知らないんだな」

「ええ、残念ながら」

実際これは知らない、あのモドキとの会話からどっかの神が関係してるのは経験から予想がつきますが詳しくはわかりません。

ああ、いまさらですが私は転生者ですよ。

しかも、彼女とかなり関係のあるね。

あの子がいつ気がつくかはわかりませんがね。

（サラッと重要なことをいうのであった・・・）

「では、３つ目ですがあれはＡＫＵＭＡと呼ばれる存在を所詮はコピーしたものです。まあ、多少は強化されているようですがね」

「悪魔・・・？」

「違いますＡＫＵＭＡ。詳しくは説明できませんが単純に意思を持った強力な兵器だと思ってください」

「そ、そんなものが存在するというのか！？」

「まあ、標的は彼女と新しく目をつけられたと思われる私くらいでしょうね」

「だが危険だろう」

「よほどのことがなければ私が対処できますので平気ですよ」

「・・・・・そうか」

どうやら納得できていないようですがここは無理にでも納得してもらうしかありません。

「さて４つ目についてですが私の正体については残念ながらお教えすることはできません」

「なぜだ！」

「これに関しては絶対です。まあ、現在は彼女の敵ではないといっておきましょう。」

「その言葉信じるぞ。もし敵になった場合私が貴様を殺す」

「・・・肝に銘じておきますよ」

本当にあの娘は愛されていますね。

「では最後に彼女についてですが、その前に山田先生には一旦ここから出てもらってもよろしいですか？」

「なぜです？」

「やはり最初はご家族の方にのみ伝えたほうがよろしいので」

「でも・・・」

「すまないが山田先生頼む」

「わかりました」

そういって退室する山田先生

「ではお話しましょうかまず、搬送した病院は〇〇〇総合病院です。また医師の診察によると全治3ヶ月らしいですよ。」

「3ヶ月だと・・・いや生きていただけでも良かったというものか。だがあいつにとってはそれでもつらいだろうな」

生きてることに喜びはするがその後の後遺症などについて考えると素直に喜べない千冬であった。

だが次の瞬間奏は信じられないことを口にする。

「・・・実はそれは医師の判断であって、すでに彼女の体は全治１ヶ月ほどまで回復しています」

「なん・・・だと・・・。それは本当か!?」

「ええ、私の力を使ったので完全回復はさすがにできませんでしたが１／３までは回復させました。医者たちの記憶も改変してみんな全治１ヶ月だと思っていますよ」

「・・・何が目的だ」

「別に目的などありませんよ。」

「信じられんな」

「別に信じてもらわなくても結構ですよ。あ、方法については禁則事項ですので」

「・・・・・・・・・・・・・・・礼はいっておく。助かった」

意外ですねてっきりお礼なんか言われないと思ったのですが・・・

「それではそろそろお別れですね。またいつかお会いしましょう」

そういって姿を完全に消してどこかに消えた奏（偽）

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　千冬

わたしは奏が消えてからすぐに部屋の外にいた山田先生と合流して地上に向かっていた。

そして地上に向かってすぐにしたことはユウが搬送された病院への確認だった。

結果としてはあいつがいっていたことは本当だったらしく全治１ヶ月といわれた。

そのまま、山田先生とともに一夏にこのことを伝えに向かおうとしたのだが途中で同じ１年担当で３組の担任をしている先生に呼び止められてしまった。

「・・・・・というわけで織斑先生たちには昨日の件についてわかったことがあったらすぐに知らせてほしいと学園長がおっしゃっていましたので学園長室に向かってもらいたいのですが」

一夏は落ち込んでいるから早く知らせたいのだが仕方ない。

「そうですか・・・なら代わりに先生から織斑兄に連絡を頼みたいのですがよろしいですか？」

「あ～ちょっと私のほうも仕事が入ってて伝えられるかどうかわからないんですよ」

ならば仕方ないか誰か今のあいつは不安定だから早く伝えたほうがいいのだがどうしたものか・・・

「ん？・・・あれは・・・ちょっと待ってくださいね、織斑先生。お～い、上條（かみじょう）！！」

そういって先生は近くを歩いていた生徒を呼び止める。

「はい？何ですか先生？」

そういって近づいてくる生徒

「あ、織斑先生・山田先生こんにちは」

「先生この生徒はたしか・・・」

「ああ、この子は3組のクラス代表で一応織斑君とも認識がありますからちょうど適任だと思いましてね」

各クラスの代表者同士はすでにクラス対抗戦などの打ち合わせ的なもので顔は知ってる設定

ただし簪のみはＩＳ開発で忙しいため代理が出席

「え～っと知っているとは思いますが一応自己紹介をさせていただきますね。１年３組のクラス代表を勤めさせていただいております上條結（かみじょうむすび）といいます」

そういって黒髪をなびかせて挨拶をしてくる少女

「安心しろちゃんとわかってるからな。それよりも上條なぜ開発室のほうからやってきたんだ?専用機は持っていないはずだが」

「実は今日の朝に私の親が勤めている私自身もテストパイロットをしている研究所のほうから実戦データを取りたいといってかねてから開発していたＩＳを送ってきたんですよ。まあ、未完成ですのでこっちで調整しなきゃならなかったんですけどね」

「専用機ということか・・・そういえばお前は４組のやつと同じ日本代表候補生だったな」

「ええそうなんですよ。それで何か用事があって呼び止めたのではないですか?」

「ごめんごめん実は織斑先生からのお願いでね～～～（説明中）～～というわけなんだけど平気?」

当然なぜ怪我をしたのかなどの部分はぼかしております

「私としましては織斑先生がよろしければかまいませんが?」

「そうか、ではすまないが頼まれてくれないか。本来なら直接言いたかったんだが無理なのでな」

「はい、わかりましたお任せください」

そういって去っていく結、それを見送って千冬たちもそれぞれ移動していく

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

今俺は部屋の中で昨日の出来事を思い出してはショックをうけている。

箒は昨日の夜に部屋の入れ替えがあって別な部屋に移っている。

そして突然コンコンとドアが叩かれた

「一夏出てきてくれないか話があるのだが」

「わかった・・・今開ける」

ドアを開けるとそこには箒・雪奈・セシリア・鈴に加えてなぜか３組のクラス代表がいた。

「・・・それで何のようだ？」

「それは私たちも知らない。用件があるのは彼女らしいからな」

「あんたか・・・確か上條結だったよな」

「そうだよ織斑君、まあ、用件と言ってもただ織斑先生からの伝言を伝えるだけだけどね」

「伝言？」

「うん。～～～（容態等を説明中）～～～という具合らしいよ」

それを聞いて俺は床にひざをついて座り込んだ

「そうか、生きてたんだなよかった。本当に良かった」

「あと、後遺症の心配とかもいらないらしいよ。でも入院は1ヶ月フルに必要らしいし退院後もしばらくは車椅子生活になるだろうって」

「それでもあいつが生きてくれてるだけで俺は嬉しいんだ。千冬姉の代わりとはいえ伝えにきてくれてありがとう結」

「あれ?いつの間にか名前で呼ばれてる?」

「あ、急に名前で呼んで悪かったな。いやならやめるんだけど」

「別に平気だよじゃあ、私も一夏君って呼ぶね」

後ろの幼馴染たちがまたかと思ったのは言うまでもない

「ああいいぜ。それにしてもユウが生きてくれてて本当に良かったよ」

「・・・(ボソッ)やっぱりあの子は家族に愛されてるね。良かったよ」

結が何か言ったようだが小さくて聞こえなかった。

「何か言ったか?」

「何もいってないよ。それよりもお見舞いに行くなら今日じゃなくて明日にしろだって」

「そういえばもう夜なんだよな落ち込んでて気づかなかったぜ。それじゃあみんなで飯でも行くか。朝から何も食べてないし安心したら腹減っちまったよ。結も行こうぜ」

「そうだね～みんなで食べたほうがおいしいもんね。お言葉に甘えさせてもらうよ～」

そういって一夏たちは6人で食堂に向かうのであった。

（最後筒たち空気だが気にしてはいけない）

第17話　クラス対抗戦のその後（後書き）

ル「まさかの主人公の出番がなかった17話でした」

ユ「何で出番ないんですか!?」

ル「本当はお見舞いまで書こうとしたんだけど長くなって次回に持ち越しになった」

ユ　orz

ル「さて今回はまたふえたオリキャラについてです。何で増えたんだろ?増やす予定はまったくなかったのに・・・どうしてこうなった!!」

ユ「計画を立てないで書くからですよ」

グサッ

ル「お、おっしゃるとおりでございます・・・。ちなみに今回出てきた結は2人目の日本代表候補生です」

ユ「いいんですかそれって?」

ル「まあ、候補生だし複数いても平気だろうと判断しました。候補生が2人いる国はそんなに多くない設定ですけどね」

ユ「それにしても今回出てきた奏の正体って・・・」

ル「それ以上は残念ながらネタバレさ。ちなみに次回はユウのお見舞いにいきます。本来なら一夏が弾の家に行くのと同じ時間軸に家での出来事を書く予定だったんだけど今回入院させちゃったからね」

ユ「変えすぎじゃありませんか！？」

ル「いや～こっちのほうが面白いと思ってこっちを採用した。感想がないから評判はわからないけど・・・」

ユ「・・・ドンマイですよ」

ル「ちゃんと家族は出すから安心してね」

ユ「まあ、いいでしょう。では今回はここまでですね。いつものように感想・誤字脱字報告・指摘などは受け付けておりますのでよろしくお願いいたします」

ル「よろしくお願いします」

ル・ユ「「それではまた次回お会いいたしましょう」」

第１８話　入院　しばし休息する銀の姫（前書き）

遅れに遅れてしまった１８話です

・・・おかしいな活動報告には昼ごろに投稿と書いたのになぜ８時間以上遅れたのだろう・・・

まあ、遅れた理由は少し休憩しようと思ったらそのまま寝落ちしたからなんですけどねｗ

今日からはまたがんばって小説を書いていくぞーーー

ついでに言うと今回はずっとユウのターンです

第１８話　入院　しばし休息する銀の姫

～～病院の病室～～

クラス対抗戦から2日経ちここには対抗戦で大怪我を負ったユウが眠っていた。

本来であれば全治3ヶ月はかかるであろう傷ではあるが現在はある人物の力によって回復まで1ヶ月というところまで回復している。

それでも入院着の下は包帯が巻かれ左手はギブスのようなもので固定され右目は覆い隠すように包帯によって隠されていた。

ユウが入院してから家族に連絡はされたが目が覚めるまで面会などは謝絶されているため病室には誰もおらず時々医者や看護婦が様子を見にくるくらいであった。

現在の時刻は昼の１２時ちょうどお昼時のこの時間にユウは目を覚ました。

「こ・こ・は？」

目を覚ましたばかりで朦朧とする中ユウは辺りを見回した

「・・・ここは病院のようですね。なぜ私は病院のベットの上にいるのでしょうか？」

そのまま少しの間なぜここにいるのか考え込むのであった。

そして、しばらくして

「ああ、そういえば一夏の姿をしたピエロに切りつけられてそのあと銃弾の嵐をうけたんでしたね」

冷静に現在の状況を整理していく・・・普通起きてすぐにそんなことはできないものであるが何度も別世界で大怪我などを経験してきたため状況整理は割りと早い

「それにしてもいくら少し治してもらったとはいえあの傷では普通に病院に運んでは間に合わないと思うんですがやはりあの時助けてくれた黒い女性が助けてくれたんでしょうかね?それにしても彼女の正体はあれなんでしょうかね。そうだとしたら敵対しないことを祈るしかないですね・・・」

敵にならないことを祈りつつ次に自らの状態を確認しようとする。

「とりあえず体はまったく動かせませんね。左腕以外にも背中あたりの骨が折れているようですしヒビも入ってますね。それにしても、気を失う直前はもっと酷かった気がしますがきっとあの人が少し治してくれたんでしょうね。次にあったらお礼を言わないといけませんね」

「次はＩＳや能力ですね。」

そういって目を閉じて集中する

「・・・ＩＳはペヒシュヴァルツは私を庇ってくれたので酷いですねダメージレベルがＣを軽く超えてますよ。ルナも無理な起動がた

たってメンテナンスが必要ですね。魔力などもしばらく使えないようですしそのため能力は1つを除いて使えませんか・・・」

想像以上にユウの状態は悪かったようだ

「まあ、体が動かないならその1つも使えないんですけどね」

・・・

「お医者様から症状は聞いたよ。左腕及び他数箇所の骨折に何箇所かに入ったヒビ、さらには何箇所か筋肉の断裂があって大体全治1ヶ月にその後しばらくはリハビリらしいよ」

「そうですか、結構酷いですね」

「まったくユウは無茶ばかりするわね無茶をするなとは言わないけどその後に悲しむ人がいるんだから注意しなさい」

「うう、ごめんなさいお母様・・」

「まあ、無事でよかったわ。かわいいわが子が親よりも先に死んじゃうことほど親にとって悲しいことはないのだからね」

そういって優しく頭をなでるアイリであった。

「お姉ちゃん。早く良くなってまた遊んでね！」

「もちろんよイリヤ。早く治して心配を消し飛ばしてあげるから待っててね」

「うん！」

元気に返事をして満面の笑みを浮かべるイリヤ

「それで学校ではどうなの？まだ1ヶ月しかたってないけどどんなものか聞かせてくれないかしら？」

「そうだね目を覚ましたばかりということで一時間しか面会時間がもらえなかったからあまり聞くことはできないけど教えてくれない

かい？」

「じゃあ、初日から話しますね。一夏なんて初日から・・・・・・」

そういって嬉しそうに時間いっぱいまで家族で話をするのであった

～～一時間後～～

「おや？もう時間かいそれじゃあ残念だけどそろそろ帰るとするよまた明日来るからね」

「もう時間なのね。ユウまた明日話の続きを聞かせてね」

「バイバイ、お姉ちゃん明日学校が終ったらまたくるね～」

「はい、おとなしく楽しみにして待ってますね」

病室から出て行く家族を見守りながら再びベットに横になり眠りについた。

・・・・・・

そのまましばらくすると病室の外が少し騒がしくなってきたので目を覚ました。

「なんだか騒がしいですね・・・それにしても体を動かせないから起き上がることもできないので不便ですね。動くのは今のところ首だけですし」

すると突然病室の扉が開いた

「？」

不思議に思い首を何とか動かして扉のほうを見ると一夏・雪奈・箒・鈴・セシリア・本音・簪の7人がいた

そのうち本音と簪以外の5人はなにやら痛そうに頭を抑えていた。

「（・・・後ろに看護婦さんが見えたことから騒いで叩かれたというところですか、まったく）」

などと考えていると突然雪奈が・・・

「ユウちゃーーーん！生きてたんだね、本当に無事でよかったよーーーー！！」

そういって抱きついてくる。

しかしそれは今のユウの状態で耐えられるはずもなく

「ゆ、雪ちゃん!?いたi・・・・ガクッ」

「ユウちゃん!?ユウちゃんーーーーーー!?」

そのまま気絶してしまった。

～～10分後～～

気絶から復活したユウ、雪奈はというと簪と本音に説教をされていた。

「・・・なにをしてるの?・・・ユウちゃんは怪我をしてるんだよ・・・急に抱きついたらダメに決まってる・・・」

「ゆっきー?さすがにさっきのはダメだと思うよ?ただでさえ酷い怪我が余計酷くなっちゃうよ」

「ごめんなさい、おふたりの言うとおりでございます。私が悪かったです・・・」

少し目に涙を浮かべながら2人に謝る雪奈・・・少し気の毒に感じる光景であった・・・

「ねえ一夏あれとめなくていいんですか?」

「あの2人が怖くて俺にははっきり言って無理だ・・・」

「簪ちゃん、本音、雪ちゃんも反省しているようですしその辺にしてあげましょうよ」

とりあえず2人に落ち着くように言ってみるが果たして落ち着くかどうか

「わかった・・・ユウちゃんがそういうなら・・・この辺でやめておく」

「仕方ないな～ユンユンの頼みならこの辺にしておくよ～」

そういって雪奈を開放する2人

「ありがとーーー！ユウちゃん！おかげで助かったよーー」

そのまま事件の後の話を聞いていく

「それで私がいなくなってから何かありましたか？」

「いや口止めくらいで他には特に何もなかったぞ。」

という一夏に対して箒とセシリアが

「よく言ったものだユウが無事と聞くまで1人部屋にこもっていたではないか」

「そうですわ！わたくしたちがどんなに呼んでも反応しなかったのにユウさんの話になるとあっさり出てきたのですから」

「し、しかたないだろ、ユウのことが心配だったんだから！？」

2人の言うことに口ごもりながらも答える一夏

「・・・一夏。あなたまさか私がこんな怪我したのは自分の所為とか考えていたんじゃないでしょうね？」

「それはそうだろ俺の姿をしたやつがユウを切るし、あのとき俺が遮断シールドを壊せてユウを守ることができたならユウがこんな怪我することはなかったんだから」

あくまで自分の所為だという一夏に対してユウは

「ふざけないでください」

「な！？ふざけてなんかいない！」

「仮にあの状況で一夏たちがきていたとしたらおそらく今回よりも酷い状況になっていました。それに一夏は私よりも弱いんですよ？そんな一夏がやってきてもあのときの敵には勝てませんでした」

「そ、それでも俺はユウを助けたかったんだ！」

「なら・・・強くなってください」

「え？」

突然のユウのつぶやきに驚く一夏

「ですから強くなってください、といったんですよ。またあのような敵が出たときに一夏が私を守りたいと思うなら強くなって私の隣に立つくらいになってください。そしてみんなを守るんです」

「ユ、ユウ・・・わかったよ。俺今よりももっと強くなってユウやみんなを守れるように強くなってやるよ！」

決意を新たに強くなると決めた一夏

「ええ、楽しみにしてますよ」（満面の笑顔）

「／／／／／」

ユウの笑顔に顔を赤くしてあわてて顔を逸らす一夏

「？どうかしましたか？」

「い、いやなんでもないんだ・・・」

「？？？」

なぜ一夏が急に顔を赤くして逸らしたのかわかっていないユウ

結局のところユウも一夏と同じようにある意味天然なのであった・・・

ちなみに後ろのほうでは箒たち４人はユウに負けられないと思っておりその横で簪は自分も強くなると誓い本音はいつもどおりののほほんとした表情でみんなを見守っていた。

すると突然思いついたようにユウが言ってきた

「そういえば鈴ちゃんと喧嘩してたんじゃありませんでしたっけ？仲直りはしたんですか？」

「ああ、昨日の夜にユウが無事なのを聞いて落ち着いたときに昔の約束のことを思い出してな。そのときに謝ったら許してくれたよ」

「・・・・・鈴ちゃん色々とドンマイだよ・・・」

「まあ、その辺はもうあきらめたわよ・・・」

そういってため息をつく鈴、一夏はどうゆうことかわからないようであった

「他に何か変わったことってありますか？」

「俺たちからは特にもうないかな」

特に変わったことはない様なのでそのまま雑談をはじめるのであった。

～～1時間後～～

「おりむ～そろそろ面会終了の時間だよ～」

「え？・・・ほんとだもう時間だな。ありがとうのほほんさん」

「えへへ～お安い御用だよ～じゃあ、またね～ユンユン～」

「早くよくなってね・・・ユウちゃん・・・」

「ではまたなユウ。早くよくなることを祈っているぞ」

「いい？ユウ無茶するんじゃないわよ」

「それではユウさんごきげんよう」

「それじゃあなユウ、安静にしてろよ」

「今日は来てくれてありがとうございました。嬉しかったですよ」

みんなが帰っていって病室はまた静かになるのであった

・・・

第１８話　入院　しばし休息する銀の姫（後書き）

ル「以上今回は入院中のユウとお見舞いに来た方々についてでした」

ユ「本当によくあの怪我で生きてられましたね私・・・というか本当に１月で直るんですか！？」

ル「その辺はご都合主義さ」

ユ「・・・まあ、直るなら今回は良しとしましょうか」

ル「それにしても今回でやっと１巻の話が終ったよ。長かったなー」

ユ「最後の箒ちゃんのあれは無理やり感がありますけどね」

ル「そこは仕方ない。早くシャルやラウラを出したいからね」

ユ「ちなみに好きなキャラ的にその２人はどのくらいの位置にいるんですか？」

ル「２人はＢＥＳＴ７以内かな」

ユ「なんともまあ、微妙な順位ですね」

ル「原作ヒロイン５人の中じゃあ１位と２位なんだけどね」

ユ「その５人の順位は？」

ル「上からシャル・ラウラ・鈴・箒・セシリアかな、ＩＳのキャラ

はみんないいもんだよ～」

ユ「ということは次回その2人が出るんですか？」

ル「秘密だよ～あとユウは恋愛ごとに関しては他人のことなら割と気づくけど自分のことになるとかなりストレートに言われないと気づかないよ」

ユ「急にどうしたんですかまるで私のことが好きな人がいるみたいじゃないですか」

ル「こんな感じですね。・・・ちょっと百合要素でも入れようかな・・・」

ユ「作者が何か言っていますがそろそろ時間ですね。感想・誤字脱字報告・指摘などはいつものようにお待ちしております」

ル「感想などを下さると私のテンションが上がりそれを糧にしてより一層がんばっていきます」

ル・ユ「「それではまた次回お会いしましょう」」

第１９話　退院する銀の姫　そして２人の転校生（原作２巻突入）（前書き）

どうもお久しぶりです

今回は最初に１週間も遅れた言い訳をさせてもらいます。

ユ「言い訳は決定なんですね」

まあ、どんな理由にしろ遅れたからね。

遅れた理由としては２５日から風邪を引いてしまいまして全然執筆ができなかったんです。

ユ「ちょっとづつでも書けなかったんですか？」

うん、書こうとはしたんだけどね、熱と頭痛で頭が働かなくてね無理だったんだ

ユ「大変だったんですね」

だけどなぜか今回じゃなくて学年別トーナメントや福音戦のネタが浮かんでしまった謎・・・

ユ「本当に謎ですね！？」

とりあえず今回はだいぶ遅れましたがお楽しみください

あとＰＶ５００００超えたのであとがきでアンケートをとります・・・・今度こそ投票はいるといいなー

ユ「投票入れてくれると信じましょう！」

それでは本編をお楽しみください

第１９話　退院する銀の姫　そして２人の転校生（原作２巻突入）

～～６月頭の曜日～～

Ｓｉｄｅ　ユウ

「忘れ物はないわね。それじゃあユウ学園に戻っても今回のように無茶はしないようにするのよ？」

「お姉ちゃん無茶しないでね？怪我しちゃダメだからね？」

「２人とも心配しすぎですよ。もうあんな無茶はしませんので安心してください」

今私は自分の家の前で学園に戻る準備を済ませてお母様とイリヤちゃんの見送りを受けています。

ちなみにお父様は仕事らしいです。ご苦労様ですお父様・・・

あ、怪我のほうはもう治っていてリハビリも終ってますよ。

え？いくらなんでも早すぎやしないかって？

それは、あれですよ入院してから２週間くらいで魔法などの力が使えるようになったので自己回復力を上げて約３週間で全快させたんですよ。

そのあとは１週間とちょっとリハビリをしていました。

今の状態で使える魔法とかじゃ怪我は治せても落ちてしまった筋力などは回復できませんからね。

あいかわらず車椅子や松葉杖などは何度体験しても慣れないものでしたね。

とりあえず私はリハビリも終ったのでこれから1ヶ月ぶりにＩＳ学園に戻るところなんですよ。

「それではそろそろ行きますね」

「そうね、いってらっしゃい。何度も言うけど気をつけるのよユウ」

「お姉ちゃんいってらっしゃい。今度戻ってきたら一兄たちと一緒に遊んでねー」

「わかってますよ、それでは行ってきます」

「「いってらっしゃい」」

・・・

～～職員室～～

え～と、千冬姉様はいますかね？

・・・どうやら今はいないようです・・・あ、山田先生がいますね
なら先生に私が戻ってきたことを伝えてもらいましょう。

「あの～山田先生ちょっといいですか？」

「あ、はい、大丈夫ですよ」

声をかけられてこちらを振り向く山田先生

「あれ？アインツベルンさん？復帰まではもうちょっとかかるんじゃありませんでしたっけ？」

「実は想定よりも早く完治してリハビリも終らせたので今日から学園に復帰したんですよ」

「そうなんですか。ところで何か用件があって私に声をかけたんじゃないですか？」

「実は織斑先生を探しにきたんですけどいないようなので山田先生に代わりに私が復帰したことを伝えにきたんですよ」

「そうなんですか。わかりましたこのことは私のほうから織斑先生に伝えておきますね」

「はい、お願いします」

そういって職員室を出ます。

「え～と今の時間は5時半ですか食堂が使える時間までもう少しありますね。何をしましょうか」

これから何をするか考えていると偶然近くを通りかかったアリーナのほうから戦闘音が聞こえてきた

「誰かが模擬戦でもしているんでしょうかね?ちょっと気になりますし行ってみますか」

そのままアリーナのほうに向かっていくのであった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

・・・

アリーナの観客席には審判として「織斑千冬」が立っていた

模擬戦の状況は第3世代ＩＳの「ミステリアス・レイディ」を操る楯無がほとんど無傷でエネルギーも8割残っているのに対して結の操る第2世代ＩＳ「ラファール・リヴァイブ」は所々損傷していてエネルギーも残り半分ほどであった

「ほらほらどうしたの？あなたの力はこんなものじゃないでしょう？本気を出さないとこのままあなたの負けよ？」

笑いながら本気を出すようにいう楯無

「クッ・・・本気といわれてもいきなり模擬戦を挑まれてこっちはまだ困惑してるんですよ！！」

文句を言いながらもアサルトマシンガンを楯無に向けて放つがそれは簡単に避けられ逆にランスに装備されたガトリングガンがこちらに撃ち込まれる。

なぜこのような状況になったかというとそれは今から1時間と少し前にまでさかのぼる

～～1時間と少し前開発室にて～～

ここはＩＳ学園の開発室そこに1人の人物が自分のＩＳの開発を行っていた

「ふーやっと調整が終わりましたね。それにしても研究所の人たちはいくら時期が悪くて研究所で初期化とかができないからといって

デュノア社から手に入れたラファールを少し改造しただけで送ってくるなんておかげで1月たってやっと完成ですよ」

機体が完成して結が一息ついているとその背後で扉が開きそこにはある人物が立っていた。

「あなたが上條結ちゃんで合ってるかしら?」

「・・・合ってますけどいきなりノックもせずに現れた上に名前も名乗らないのはどうかと思いますが・・・」

そういってジト目で侵入者を睨みつける結

「それは謝るわ。でもそんなかわいい顔で睨みつけられてもかわいいだけで怖くはないわよ?」

「ふぇっ!?」

「それよりも自己紹介だったわね。私の名前は更識楯無この学園の生徒会長よ!」

かわいいといわれて驚いている結を尻目に自己紹介を始める楯無

「え?え?生徒会長?学園最強の人が私なんかに何のようですか一体?」

動揺しながらも用件を聞く

「あなたに聞きたいことがあるのよ結ちゃん」

「聞きたいこと?それは何ですか?あと結ちゃんって・・・」

「あら、いやだったかしら?」

「いえ、構いません。なんだかあなたにはだめと言っても無駄な気がしましたので・・・」

「酷いわねーそれで聞きたいことなんだけど・・・それよりも先にあなたの実力を見せてくれないかしら?1年のクラス代表の中であなただけが実力不明だから気になってね」

「・・・心の底からお断りしたいのですが「会長権限で却下します」・・・職権乱用もいいところですよ」

「せめて理由を聞かせてください」

「あら、理由ならさっき言ったとおりよ?」

「嘘ですね。いえ、嘘ではなく本音は別にあるといったところですかね」

「・・・よくわかったわね。やっぱりあなたは只者じゃないようね・・・」

顔は先ほどと変わらないが警戒心をむき出しにしているのがわかる。

「それじゃあ先にアリーナにいって待ってるわよ。もちろん逃げちゃダメだからね?あと私が勝ったら質問に正直に答えてもらうわよ」

そういって部屋を出て行く楯無であった。

そして部屋に残った結はというと

「どうしてこうなったんでしょうかね？」

そうつぶやき準備をしていくのであった

～～回想終了～～

そして現在アリーナ内には大きな爆発音が響いていた

爆発の発信源は結のラファール

爆発を発生させたのは楯無のミステリアス・レイディの武装の１つであるナノマシンで構成された水を相手の周りに散布してそこからナノマシンを発熱させ水を一気に気化させて相手を攻撃する『クリア・パッション』である。

爆発に包まれるラファールをみつつ楯無は

「あれ？まさかもう終わり？私の予想が外れたのかしら？てっきり彼女があの人だと思ったのだけれど」

などと考えていると観客席のほうから

「ちょっとーーーたっちゃん！？模擬戦とはいえなにクリア・パッションつかってるんですかーーー」

と叫んでいるユウの姿があった。

「大丈夫よユウちゃんただの模擬戦なんだからそこまで心配しなくても平気よ」

「いや、そういう問題じゃないですからね！？」

「そういえば退院したんだねーおめでとう」

「あ、ありがとうございます。・・・じゃなくてですね！？ってたっちゃん！」

ユウが驚きの声を上げたのでそちらのほうをみてみると先ほどの煙がはれた場所からラファールが姿を現した。

「へぇーあれを喰らってまだ動けるんだ。お姉さん驚きだよ」

「おかげさまで何とか無事ですよ。おかげで盾は壊れましたけどね」

「でも、もう一発耐えられるかしら？」

「さすがにもう一度は無理ですよ。まあ、その前に終らせますけどね」

そういうと結はディスプレイを表示させ何かのボタンを押し光に包まれた

「まさか一次移行！？訓練機じゃなかったの！？」

てっきり訓練機だと思っていた楯無は驚いていたそれはユウも一緒であったが唯一千冬だけは聞いていたので驚きはしていなかった。

そして光が収まるとそこには先ほどまでのネイビーカラーではなく
完全なブラックに染まったラファールが存在していた。

「さてでは行きますよ。『ラファール・リヴァイブカスタム？』！」

そう叫んで右手に大型の銃を出現させてそこからレーザーを連射する

「レーザー兵器！？だけどこの程度の攻撃当たらないわよ！」

そういってレーザーの嵐を避けていく・・・しかしそこに走る突然
の衝撃

「きゃあ！？」

衝撃の正体は大口径の銃弾だった

「そんないつの間に武器の換装をしたの！？」

結のほうをみると先ほどと同じ銃を構えた姿があった

「まさかレーザーと実弾を自由に撃てるというの！？」

「正解ですよ会長さん」

そして結は背中に黒いエネルギーの翼を広げて一気に楯無に近付き
両手を押さえつけて壁に激突させる

ドカーーーン

盛大な音を立てて壁にぶつかり合う2人楯無の両腕は結の両腕によ

って押さえつけられていた

この時点で2人のエネルギーは楯無は壁にぶつかった衝撃により一気に消耗しており結のほうも先ほどまでの攻撃でエネルギーはほとんど残っていなかった

「いったいわねーでもこの状態だと私がクリア・パッションを発動させればこっちの勝ちよ。一体どうするのかしら?」

「安心してくださいこれで終らせますから『コール　サヴァイシブ・クレイモア』」

武器の名前をコールすると同時に両肩に現れる装甲そしてその中には大量のベアリング弾

「な!?こんな至近距離でそんなものを撃てばお互いにエネルギーが!?」

「ええ、それが私の狙いですから」

「まっ・・・」

「発射!!」

そして炸裂するベアリング弾の嵐それは壁に跳弾し2人のエネルギーを一気に0にした

〜〜10分後〜〜

「うう〜ここは?」

結が目を覚ますとそこはアリーナのピット内だった

「目が覚めたか上條」

「先生・・・そういえば試合のほうは？」

「お互いにエネルギーが０になったからな引き分けだ」

「そうですか」

「あ、結ちゃんおきたんだ」

「・・・会長」

「やだなー会長なんていわないで下の名前で呼んでよねー」

「はぁーわかりました。それで楯無さん聞きたいことってなんですか？」

「あれ？答えてくれるの？」

「引き分けですから聞くだけ聞きますよ」

「実はねークラス代表戦の生徒が避難したときにあなたがどこにいたのかと思ってね」

「そんなことですかそれなら私は自分のクラスの人たちと一緒に避難してましたよ」

「それは本当かな？」

「ええ、本当ですよ。何で嘘をつく必要があるんですか？」

「そう、ならいいわ。迷惑かけてごめんね。今度何か埋め合わせしてあげるわよ」

「期待しないで待ってますよ・・・楯無さん」

そういってアリーナを出て行く結

残された2人はというと

「織斑先生どう思います？」

「そうだな今のところ敵対の意志はないようだから様子見で構わないだろう」

「わかりました」

そういうと2人もアリーナを出て行くのであった

・・・

「ああ、あなたが一夏が言っていた子ですか私は上條結です。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくね。あ、私のことはユウでいいから」

「では、私も結でいいですよ」

こうして2人は名前で呼び合ってそのまますぐに友達になるのであった。

「そういえば結ちゃんあのＩＳってすごいねー」

「いえいえ元がいいので私だけの力じゃありませんよ」

そのまま2人は食堂に向かい一夏たちと合流して怪我のことやいつの間にか仲良くなったことについて質問されるのであった・・・

・・・

「はい・・・パーティーのあと部屋で簪ちゃんと色々話したりもしましたから眠いんですよ・・・」

「とりあえず千冬姉の授業中に寝るなよ」

「私も死にたくないので眠りませんよ・・・」

お互いに苦笑いしていると教室のドアが開き先生が入ってくる

「静かにしろ！これよりＨＲをはじめるぞ。山田先生お願いします」

「は、はい。実は皆さんにお知らせがあります」

山田先生がそういうとクラスが騒がしくなるがすぐに千冬によって収められる

「静かにしろ！まったく山田先生続きを」

「わかりました。お知らせとはなんとこのクラスに転校生が２人も来るということです。それではお二人とも入ってきてください」

「失礼します」

「・・・・・・・・・・・・」

山田先生に呼ばれて入ってきた２人の生徒を見たとき教室の生徒は全員固まった・・・

なぜなら入ってきた１人が・・・男だったのだから・・・

ちなみにユウは別な意味で固まったのだがそれはまた次回・・・

余談だが同じ日に3組と4組にも1人ずつ転校生がきていたのであった。

第１９話　退院する銀の姫　そして２人の転校生（原作２巻突入）（後書き）

ル「やっと原作２巻にはいれたねー風邪引かなきゃもうちょっと早かったけど」

ユ「その話はもうあきらめましょうよ」

ル「そうだね、とりあえず今回はユウが退院してシャルたちが転校してきたところまでですが２人の出番は正式には次回からです」

ユ「これでメインヒロインは揃うんですね」

ル「やっと揃うよーそれにしても今回かいてて思ったんだけど」

ユ「何ですか？」

ル「今回の話ってユウが主役というよりも結と楯無が主役だった気がしたよ・・」

ユ「書いた本人がそれを言いますか！？」

ル「自分としては２５００～３０００字で今回済まそうとしたのになぜか５８００超えちゃったよ」

ユ「次回からはちゃんと私が主役なんですよね？」

ル「とりあえずユウが活躍できるようにがんばって書くよ」

ユ「そういえばなんでたっちゃんは結ちゃんにあんな質問をしたん

ですか？」

ル「そこは秘密だよ。まあ、気づく人は気づくだろうけど」

ユ「そういえば最後に他にも2人転校生がいるって言ってましたね」

ル「人数合わせ的な意味で追加してみたちゃんと出番はあるよ。学年別トーナメントとその前にもね」

ユ「どんな人なんですか？」

ル「ぶっちゃける作品のキャラを女性化させて突っ込んだだけ」

ユ「ぶっちゃけましたね！？」

ル「それではアンケートをとりたいと思います。と言っても内容は番外編を書くかについてなんですけどね

アンケート

1．ＩＳ世界での話（シャルかラウラとの出会い編を予定ただしありがち）

2．リリカルな世界（古代ベルカ時代の最後の戦争編かなりオリジナル入るけどもしくはＶｉｖｉｄ編これはなんとなく）

3．ネギまの世界（大戦編もしくは修学旅行編）

4．東方編

5．デジモンアドベンチャー編（たぶん０１）

6．スパロボ編（α以降ならかけるはずです）

7．その他（要望があればその作品を書いてください知っていれば書きます）

8．番外編書く暇あるならさっさと本編書きなさい！！

の８つですかね。ちなみに期限はちょっと長めに６月８日までです。回答のほうは感想のほうに書いていただくかこのあと書く活動報告のほうにお願いいたします」

ユ「なんだか３個くらいしか力をフルで使える世界がない気がするんですが・・」

ル「デジモンの世界も使えるようにするから安心」

ユ「そうなんですか・・・ちなみに各話の長さはどうなるんですか？」

ル「未定。長くなるかもしれないし短くなるかもしれないよ」

ユ「そこは長く書くと普通はいいませんか！？」

ル「がんばります！！」

ユ「感想や誤字脱字・指摘・アドバイスなどは受け付けておりますのでよろしくお願いいたします」

ル「あとアンケートにもご協力お願いします。まってます。」

ル・ユ「「ではまた次回お会いいたしましょう」」

第２０話　金髪の貴公子と銀髪の軍人（前書き）

今回は短いです

あとラウラの性格が改変されています

ユウに対して最初からデレてます

一夏に対しては原作ほどではないですが多少憎んでいます

ラウラ好きの人に怒られそうですけどね

第２０話　金髪の貴公子と銀髪の軍人

Ｓｉｄｅ　ユウ

教室の中にいる生徒たちは全員驚愕して固まっています。

それはそうですよねだって転校生のうち１人が男なんですから・・・

まあ、私が驚いているのは別な理由ですけどね

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。まだこの国には不慣れですけど皆さんよろしくお願いします」

「・・・男？」

硬直から復帰したクラスメートの誰かが口を開きましたね

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国から転入を・・・」

「きゃーーーーーーーーーーーー！！」

「男子！うちのクラスに２人目の男子よ！！」

「しかも美形で織斑君とはまた違ったタイプよ！」

なにやら周りのクラスメートが騒がしいですがとりあえず落ち着きましょうか

・・・・・・・・ふぅ・・・って落ち着くとか無理ですからね！？何であなたがここにいるんですか！？（絶賛混乱中）

そもそも男の格好して名前もシャルルっていう男の名前使ってますけどあなたシャルですよね！？

何で男装してるんですか！？・・・・・・まあ、とても似合ってますけど／／／／

本当にどういうことですか！？

前にフランスであったときはちゃんと胸ありまし兄弟がいるのか聞いたときもいないって言ってましたしあれは嘘を言っている感じじゃありませんでしたよ！？

あ、シャルが私に気づいてくれたのかこっちを向いて笑顔で手を振ってきてくれてますね。

やっぱりシャルの笑顔はかわいいですね～とりあえず手を振り返しておきましょうか

・・・・・だからーーー私のことに気づいてる時点でやっぱりシャルじゃないですかーーー

正体隠す気本当にあるんですか！？いくら男装してもそんなんじゃすぐにばれちゃいますってーーー　バシンッ

「何を考えているか知らんがとりあえず落ち着かんか！」

「お・・・落ち着きました・・・」

痛いです・・・でも少しは落ち着けましたかね。そういえばもう1人いました・・・よ・・・ね・・・

「他の連中も騒ぐな!!まだもう一人の自己紹介が終っていないぞ」

「・・・・・・・・・・・・・」

自己紹介が自分の番になっても黙り続けている銀髪で左目が黒い眼帯に覆われた少女

その姿を見てユウは再び固まった

「・・・ボーデヴィッヒ、挨拶をしろ」

なかなか挨拶をしない少女に対して挨拶を促す千冬

「はい、教官」

千冬に促されたボーデヴィッヒと呼ばれた少女は敬礼をして答えた

「私はもう教官ではないのだからここでは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

シャルに続いて今度はあなたですかーーー!?

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

再び沈黙が教室を支配する

「あ、あの、以上・・・ですか？」

「以上だ」

ラウーーーーせめてもうちょっと何か言いましょうよーーー！？

などとユウが本日2度目の混乱に陥っていると

一夏のラウラの視線が偶然合わさりそれに気がついたラウラが一夏に近づいていく

「確認するが貴様が織斑一夏か？」

「・・・そうだけど、あんたは一体・・・」

「そうか・・・貴様が・・・」

一夏のことを確認するとラウラは右手を挙げて一夏に平手打ちを喰らわせようと振りかぶる

ガシッ

しかしそこは原作と違いずっと鍛え続けてきた一夏その平手を片手で受け止める

「クッ、離せ！」

そういって左手のほうでも平手打ちをしようとするがそれも受け止められる

「離せ！離せ！離せ！離せ！」

まるで駄々をこねるように離せと連発するラウラ

「離したらまた叩いてくるだろだから断る！」

そのまま膠着状態が続いていたがラウラの目にだんだんと涙が浮かんできたので一夏は罪悪感に駆られて手を離してしまう

「う～～～、お、覚えていろ織斑一夏！貴様程度の力であの人を守れるはずがないんだからな！」

そういって自分の席に向かうラウラであった・・・

ちなみにユウはまだ混乱していた

「あー・・・これでＨＲを終了する！各人、急いで着替えて第二グラウンドに集合！今日は二組との合同ＩＳ模擬戦闘だ、遅れるなよ！」

千冬の掛け声とともに固まっていた教室の空気が回復しユウ以外は次の授業の準備を行う

「それと織斑兄同じ男子としてデュノアの面倒を見てやれ、あとアインツベルンはボーデヴィッヒの面倒を見てやれ」

「わかりました」

「・・・・・・」

一夏は納得したように返事をしたがユウは今だ混乱していて返事をしていない

そんなユウに対して当然千冬は

「アインツベルン返事をしろ！」

バシンッ

出席簿の一撃を繰り出すのであった

「ハッ・・・何かすさまじい物を見ていた気がするんですが夢でしょうか？」

「大体なんのことかの予想はつくが残念ながら夢ではない」

「やっぱり夢じゃなかったんですね・・・それで織斑先生何か御用ですか？」

「先ほども説明したがアインツベルン、ボーデヴィッヒの面倒を見てやれ」

「あーーそういうことですかわかりました」

「では早く次の準備をしろよ」

そういって教室を出て行く千冬とシャルルをつれて更衣室に向かう

一夏

ユウはそれを見送るとＩＳスーツに着替えるために制服を脱ぎだす

すると突然背後から誰かに抱きつかれる

「姉様ーーーーーーー！」

抱きついてきたのはラウラであった

「ちょ、ちょっとラウラいきなり抱きつかないでください！？」

必死にラウラを振りほどこうとするがラウラはそれを無視してユウの体を弄繰り回す

「むう・・・しばらく会えませんでしたが以前あったときよりも成長してますね。同い年なのにここまで違うとさすがに少しショックですよ姉様・・・」

「ら、ラウ？どこ触ってるんですか！？は、離してください！？」

そんな２人の様子を見て周りの女子たちは「女の子同士！？・・・それもまた」「銀髪美少女同士の絡み・・・」などと言っている

（そんなことよりも誰かラウをとめてくださいよーーーー）

しかしユウの心の叫びは通じることはなかった・・・

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

第２０話　金髪の貴公子と銀髪の軍人（後書き）

ル「以上今回はシャルとラウラのターンでした」

ユ「なんだかシャルの正体が最初からばれてる気がするんですけど」

ル「気づいてるのはあくまでユウだけだから平気さ。まあ、原作でも千冬は気がついてた気がしないでもないけどその辺どうだったんだろうね？」

ユ「それにしてもラウーの扱いが」

ル「せっかく同じ銀髪だしドイツにも行ったことがあるんだからユウの事をお姉ちゃんポジションにしてみた」

ユ「たしかにラウーが妹ならかわいいし構いませんけど急すぎません？」

ル「私の中でユウはお姉ちゃんポジションだから問題なし。それどころか色々な世界に妹的な存在はいるからねー」

ユ「どれだけいるんですか！？」

ル「さあ？ちなみに今回ラウラを書いていて「離せ！」のところと「うーーー」のところで涙目のラウラを想像して少し悶えた」

ユ「何ですかそれは」

ル「シャルとラウラはメインヒロインでも1位2位だからね。・・・

タグに百合入れたほういいかな？」

ユ「こら！？」

ル「まあ、今回はこの辺にしておきましょうか」

ユ「わかりました。それでは、また次回お会いいたしましょう」

ル「アンケートのほうの回答待ってまーす」

ル・ユ「「アリーヴェデルチ」」

第２１話　教師と生徒の模擬戦闘（前書き）

今回は模擬戦です

なぜかユウの出番がない・・・どうしてこうなった？

月詩様

感想とアンケートとへの回答ありがとうございました。

これからもがんばっていきます。

それでは本編をどうぞ

第２１話　教師と生徒の模擬戦闘

～～ＩＳ学園第２グラウンド～～

Ｓｉｄｅ　一夏

俺とシャルルが時間ギリギリにグラウンドに着くとセシリアと鈴が色々と突っかかってきたが最終的にそれは千冬姉の出席簿によって抑えられた

ちなみにユウとラウラはすでに列に並んでいたがユウはどこかやつれていて逆にラウラはどこか潤っていた

そんなユウを雪奈は同情したような視線で見るのであった

そして授業が始まるのだが列に並んだ後もセシリアと鈴は先ほど千冬に叩かれたことで俺を睨みながら文句を言い続けているんだが特に鈴がまるで呪詛のようにしゃべり続けてハッキリ言って怖い

「それでは今日からＩＳの実戦訓練だ。だがその前に模擬戦をやってもらう――凰！オルコット！準備をしろ！」

「な、なぜわたくしがそのようなことをしなければならないんですか！？」

「一夏のせいなのになんで私がやらなきゃいけないのよ！」

「理由は簡単だ専用機もちならすぐに始められるからだ。それと・・・（ボソッ）あいつにいいところを見せるチャンスだぞ」

「やはりここはイギリス代表候補生、このセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

千冬の一声で一気にやる気を出す2人

このときそれをみていた一夏は何で2人がやる気を出しているかわからなかったがそれをみてユウと雪奈は横であきれているのであった

「では対戦相手のほうだが・・・」

キィィィィィン・・・

ん？なんだか変な音がするなまるで空気を裂くような感じの音が・・・

「あああああーーー！？ど、どいてくださいーーーー！？」

気のせいか？ＩＳに乗った山田先生がこっちに向かってきてる気がするんだが・・・

《マスター気のせいではないですよ》

ですよねーってこのままだと危ないって！？

「白鳳！ＩＳ展開だ！」

《了解ですマスター》

そういって白鳳が白式を展開させるがそのときには山田先生はすでに目の前にいた

「クッ、白鳳！スラスター全開だ！」

とりあえず一夏は両手を前に突き出し山田先生を受け止めて背部スラスターを全開にして何とか勢いを相殺しようとする。

その甲斐あってか一夏は数メートル後退しただけで倒れるようなことはなかったが・・・

「ふう、何とか白式の展開が間に合ったな山田先生大丈夫ですか？」

「は、はい！私は大丈夫ですけど織斑君そのこの格好はちょっと・・・」

今の一夏と山田先生の状態は簡単に言うとお姫様抱っこの状態で抱えられている状況だ

「あ、すみません山田先生今すぐおろしま（ビュン）うお！？あぶなっ！？」

一夏が山田先生をおろそうとすると目の前をレーザーが通過していった

「ホホホホホ・・・。残念です。外してしまいましたわ」

レーザーを撃ってきたのは額にハッキリと血管を浮かべているセシリアであった

その横では鈴がガシーンと双天牙月を連結させそれを思いっきり振りかぶって一夏のほうに投げるのであった

「うおおおお!?何しやがる鈴!セシリア!」

間一髪体をのけぞらせてかわしながら2人に文句を言う一夏

しかし鈴の放った双天牙月は連結させることによってブーメランのように戻ってくるのである

のけぞってバランスを崩した上に2人に文句を言って体勢を崩したままの一夏にそれを避けるすべはない

しかしそれを山田先生が

「ハッ!」

ドンッ!ドンッ!

2発の弾丸を放ち、放たれた弾丸は的確に双天牙月の両端を弾きその軌道を無理やり変える

「大丈夫ですか?織斑君」

「は、はい大丈夫です・・・」

俺だけじゃなく鈴やセシリアそれに他の女子たちも山田先生が行ったことに対して驚愕して凍り付いている

そのときの全員の心の中は

「（本当にあれは山田先生なのか！？）」

という考えで一致していた（シャルルやラウラを除く）

「さていつまで惚けているつもりだ時間は限られているんだ。さっさとはじめるぞ」

「え？　山田先生と二対一で？」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ、今のお前たちならすぐ負ける」

負けるといわれた瞬間気に障ったのか2人の瞳に闘志の炎がたぎる。

「それではじめ！」

その掛け声とともに3人は飛び上がり戦闘を開始する

先制したのは鈴とセシリアで2人が攻撃を加えるがそれはあっさりと山田先生に回避または防がれる

「さて今の間に・・・デュノア山田先生が使っている機体について解説しろ」

「あ、ハイッ」

上空での戦闘を見ながら、シャルルが解説を始める

「山田先生が使っているのはデュノア社製の『ラファール・リヴァイヴ』です。第2世代開発の最後期の機体ですが、

省　　略　　！！

でも知られています」

シャルルの説明が終ると同時に上空では山田先生が射撃で鈴とセシリアを誘導してぶつかったところにグレネーを投擲して終了していた

負けた2人はというと負けたのをパートナーの所為にし合って喧嘩していた

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。次は織斑兄妹に模擬戦をしてもらう」

試合が終った後千冬姉はこちらを向いて俺たちに模擬戦をするようにいってきた

「「は、はい」」

突然の提案に俺たちは驚いてしまった

「では、はじめろ」

そういわれて2人は急いでＩＳを起動して空に浮かび上がる

「やるぞ雪奈！」

「わかったよ一兄！」

「行きます！」

こうして2度目の戦闘が始まった

開始と同時に山田先生はアサルトライフルを呼び出して2人を狙い打つ

それを2人は左右に避けて一夏はそのまま山田先生に向かって突撃して大型ソードを振るうがあっさりとかわされて逆にアサルトライフルで狙いをつけられるがその瞬間を雪奈が『白雪』のライフルからビームを発射し邪魔をする

その隙を突いて一端雪奈のほうに戻る一夏

「助かったよ雪奈」

「ただ一直線に突撃してもあたるわけないでしょ一兄」

「す、すまん」

「じゃあ、援護するから一兄は隙を見て切り込んで」

「わかった」

会話が終ると同時に雪奈は両手にビームピストルを呼び出して山田先生に向かって連射するそれと同時に腰の部分からミサイルを連射して弾幕を張る

それを山田先生はかわしながら隙を見て雪奈にもアサルトライフルを打ち込んでいく

そのうちの何発かが雪奈を掠める

「うう、あの状態で打ち込んできますか、さすがです。なら雪風機体制御お願いします」

《了解ですよ、マスター》

機体制御を雪風に任せてビームピストルからライフルに変えてビームと実弾を撃ち分けて連射していく

「やりますね織斑さん、でもその程度じゃ落ちませんよ！」

「山田先生、１人忘れてますよ」

「え？」

「はあああああ！！」

今まで隙をうかがっていた一夏が瞬間加速で一気に近付いて大型ブレードと雪片弐型のコンビネーションを喰らわせる

しかしその攻撃は山田先生が呼び出した盾によって防がれ逆にいつの間にか右手に呼び出していたショットガンを喰らう

「うわぁーーーー」

「まずは織斑君に落ちてもらいます」

そういって一夏に追撃をかけようとするが雪奈のビームバズーカにより再び止められてしまう

「なにやってるの一兄！相手は教師だよ」

「すまん油断した」

「まったくそれでまだ『零落白夜』は使える？」

「ああ、まだいけるぞ」

「それじゃあ、あれ《・・》をやるよ一兄」

「・・・わかった。行くぞ雪奈！」

「オッケー！」

そういうと雪奈が前に出て山田先生のほうに近付いてきた

「！？射撃型のＩＳを使う織斑さんが突っ込んできましたか・・・

なら！」

その様子を見てすぐさま山田先生はグレネードを呼び出して雪奈に向かって投げつける

それはそのまま雪奈に当たりそこから爆風が巻き起こる

そしてそれを見た山田先生は煙の中にいる雪奈に向かって追撃かけるべく突撃するが急に煙が晴れそこから一夏の白式が飛び出してくる

「うおおおおおお！！」

「！？なんで織斑君がこんな近くに！？」

驚きで反応が遅れた山田先生に一夏はシールドをクローモードにして捕らえて内蔵された短剣を打ち付ける

「きゃあああああ！？でも！？この距離ならこっちも！」

突然の奇襲に対してもそこは元代表候補生落ち着いてブレードを呼び出し隙のある左側から切りつけようとするが上空からのビームの連射によってブレイドとスラスターが破壊される

驚いて上空を見上げるとそこには無傷でライフルを構えている雪奈がいた

「うそ！？あの爆発で無傷なんですか！？」

「ごめんなさい山田先生実はこの両肩についてるやつってシールドなんですよ」

「そ、そうだったんですか・・・私の負けですね」

「『零落白夜』発動！切り裂けーーーー！」

そして一夏が『零落白夜』を発動させた雪片弐型できりつけて山田先生の機体のエネルギーは０になった

～～試合終了後～～

「すみません織斑先生。負けちゃいました」

「いや、山田先生はよくやってくれたよさすがに２戦連続だと疲れただろう。それにあの２人もコンビネーションができていたから仕方ないさ」

そういうと千冬は生徒たちのほうを向きなおし

「今の模擬戦でコンビネーションの重要性については理解できたな！凰とオルコットは今度はきちんと連携が取れるようにしておけよ」

「わ、わかりましたわ・・・」

「わかったわよ・・」

千冬の一声に鈴とセシリアは返事をするしかなかった

「それではこれよりＩＳを使った稼動訓練を行う専用気持ちを中心にグループを組め」

その一声でほとんどの女子は一夏とシャルルの下に集まるのであった

それをみながらラウラは戦力を分析して１対１なら問題がないと判断するのであった

そしてユウはそんなラウラをみながら心配そうに眺めていた

第２１話　教師と生徒の模擬戦闘（後書き）

ル「今回はユウが普通にいるのに最後にしか出てこない２１話でした」

ユ「何で私の出番がないんですか！？」

ル「本来なら今回の山田先生との模擬戦はユウがやる予定だったんだけどね」

ユ「じゃあ何でですか！？」

ル「雪奈の機体が全然戦闘してないのを思い出してここで活躍させてみた」

ユ「あ～～なら仕方ないですね」

ル「まあ、タッグのわりに一夏はほとんど何もしてないけどね。後短いし」

ユ「本来はもう少し進むんでしたっけ？」

ル「そ、本来なら実習終らせて１日の終わりまで書く予定だったんだけど全然行かなかった」

ユ「この調子じゃいつ学年別トーナメントが終ることやら・・・」

ル「まあ、オリジナル少し入れる予定だからもうちょっと先だね」

ユ「ではそろそろ時間ですね」

ル「感想や指摘などいつでも待ってまーす。あとアンケートの回答も絶賛受付中です。そちらのほうもよろしくお願いします」

ル・ユ「「それではまた次回お会いしましょう」」

第２２話　明かされる黒兔の目的（前書き）

相変わらずいいタイトルが思い浮かびません

・・・やっぱり文才無いからダメなんだろうな

それでは本編をお楽しみください

第２２話　明かされる黒兎の目的

Ｓｉｄｅ　ユウ

「専用機持ちは織斑兄妹・オルコット・デュノア・ボーデヴィッヒ・アインツベルン・凰だな。そこに山田先生を加えて８人グループになって実習を行う」

千冬姉様がそういうと同時に一夏とシャルの元に２クラス分の女子が集まりだした。

まあ、２人？しかいない男子の下に集まるのは当然ですよね

というかこのままじゃ実習が始まらない気がするんですが・・・

「まったくこの馬鹿共が・・・。仕方ない、出席番号順に１人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言ったとおりだ。それと各グループのリーダーは専用機持ちがやれ、いいな！これでもまだもたつくようならＩＳを背負わせてグラウンド１００周させるからな覚悟しておけ！」

千冬姉様がそういうと女子たちは蜘蛛の子を散らすように動いて一瞬でグループが出来上がった

そして、各グループに分かれた女子の反応はというと

「・・・織斑君と同じ班っ。名字のおかげね・・・」

「・・・セシリアかぁ・・・。さっきボロ負けしてたよね・・・」

「・・・凰さんよろしくね。後で織斑君のこと聞かせてね・・・」

「・・・デュノア君！わからないことがあったら聞いてね。あと実は私、今フリーなんだけど・・・」

「雪奈ちゃん、さっきの模擬戦すごかったよ。よろしくね・・・」

「ユンユンだ～よろしくね～あと～転校生のこと教えてね～」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

などといろいろしゃべっている。

ちなみに唯一無言のグループはラウーのグループですね。

あの子まだ他人とのコミニュケーション苦手そうですから仕方ないですね。

さて私のグループのメンバーですが・・・本音がいますね。

あの子他の子に比べてのほほんとしてますからすばやくやっていきますか。

さて使う機体は本音もいますし打鉄よりも操作性のいいラファールがいいですね

「それじゃあこれからＩＳを装着して起動と歩行をやりますね」

「「はーい×7」」

そういって実習をこなしていく

私は時々指示を出しながら訓練をしていると突然騒がしくなったのでそちらのほうを向くと一夏がなぜか箒ちゃんをお姫様抱っこでコクピットとまで運んでいた。

「（何やってるんですか一夏）」

それをみた一夏とシャルルのグループの女子はまたしても騒がしくなり千冬の出席簿アタックを受けたのは言うまでもない。

ユウのグループは特に問題もなく実習を進めていくのであった（本音がＩＳでこけたのは別として）

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、それぞれ格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散。」

無事に午前の実習を終らせた私たちは千冬姉様の説明を聞いていた。

ちなみに一夏の班はお姫様抱っこのトラブルがあったため時間ギリギリまで実習をしていたため午後の説明を受けるときは全力疾走した関係で全員息が切れてる状態だった。

そして昼休みになったので食堂に向かおうとすると一夏に呼び止められた。

「お、いたいたユウ！」

「？　なんですか？一夏」

「これから屋上で昼飯を食べるんだけど一緒にどうだ？」

「屋上で昼食ですかどうしたんですか？突然・・・」

「実は箒が弁当作ってくれるって話でさ、屋上で大勢で食べたほうがいいだろうと思ってな。声をかけたんだよ」

「・・・それで？大勢ということは他にも誰か呼んだんですよね？」

「ああ、他には雪奈と鈴、あとセシリアとシャルルだ」

「・・・・・相変わらずですね一夏・・・」

「なにがだ？」

「いえなんでもないです。残念ですけど少し用事があるので今回はちょっと無理ですね」

「そうか、わかった。それじゃあまたあとでな」

そういって去っていく一夏

「では私も用事を済ませるとしますか」
そしてユウも食堂に向かって歩いていく

～～食堂～～

私は食堂につくとすぐに目的の人物を探します。
いましたね、では私も食事を頼むとしましょうか
そして、食事を受け取って目的の人物に近付きます。
「相席失礼しますよ」
「誰だいきなり・・・ね、姉様!?ど、どうぞ」
「では失礼します」
「ね、姉様急にどうかしたんですか!?」
突然のユウの登場にびっくりするラウラ
「少し話をしにきただけですよ」
「は・・はなしですか?」
「ええそうです。まず1つめの聞きたいことですがなぜＩＳ学園に

転校してきたのですか？」

「そ、それは本国のほうで私の機体が完成したのでデータ集めをかねて転校するように言われたんです・・・」

「そうですか・・・ですが私が聞きたいのはドイツがどうのこうのという話ではなくあなた自身が何の目的があってここに転校してきたかが聞きたいんですよ？」

そういって今度は少し威圧しながらラウラに質問するユウ

「わ、私の目的は・・・織斑一夏を叩きのめして姉様を守ることです！！」

「どういうことですか？」

「昔教官に聞きました！姉様はあの事件のときにあいつを庇って大怪我をしたらしいではないですか！そのあとに織斑一夏が姉様を守ると誓ったということも」

「ああ、そういえばあの事件の後一夏がそんなこと言ってた気がしますね。ですがそれとあなたが私を守ることにどうつながるのですか？」

「姉様は教官が私のことを認めて鍛えてくれたように、私の存在を認めてくれて私のことを1人の人間として扱ってくれたうえに私に道を教えてくれました。それは私にとって光だったんです。ですからそのときに聞いた姉さま自身の話も含めて私は姉様を守れるくらい強くなると決めたんです」

「そうなんですかわかりました・・・でもそれだとなぜ一夏を叩きのめすことにつながるんです？」

「・・・姉様は先月全治一ヶ月の大怪我を負ったという噂を聞きました」

「・・・・・（おそらくあのときクラス代表戦が中止になったことをドイツから来た生徒が政府に報告してそのときに私が重症を負ったことも一緒に報告したといったところですか。まあ、詳しくは報告されていないようですがね）」

「否定しないということはやはり本当なんですね。そのようなことを聞いたので私は姉様を守ると誓ったくせに重症を負わせた織斑一夏が許せないんです」

「ちょっと待ちなさい！私が重症を負ったのが一夏のせいだとも限らないのになぜそう目の敵にするんですか！？」

「クラス対抗戦のときに何かがあったのは聞いています。そして勘ですが姉様の性格からあいつを助けるために無茶をしてその結果怪我をしたと思ったのです」

「・・・・・（あいかわらず勘が鋭いですね。怪我の原因は別として無茶したのはあたってますから）確かに一夏を助けるために無茶をしたのは認めますが怪我をしたのは一夏のせいという訳ではありません。あれは誰にも予想できませんでしたからね。ですから私が怪我を負った事を一夏のせいにして目の敵にする必要はないんですよ？」

「ですが実際姉様は大怪我を負っています。私は姉様を守ると誓っ

たくせにみすみすと大怪我を負わせたあいつが許せないんです！ですから私があいつに代わって姉様を守るんだということをわからせるために叩きのめすんです」

「はぁ、わかりました。一夏に勝負を挑むのは構いませんが、その結果どちらが勝とうと一夏のことは認めてあげてくださいね？」

「それこそ、あいつの実力しだいですよ姉様」

そういってわずかに微笑むラウラ

「あまり無茶してはダメですよ？あなたも私にとっては大切でかわいい妹の1人なんですから」

ユウがラウラのことをかわいいといって頭をなでると一気にラウラの顔が赤くなった

「わ、わたしがかわいい！？・・・う～～～そ、それでは失礼します姉様！」

そのまま走って食堂を出て行くラウラであった。

「？　風邪でも引いたんですかね？顔を赤くして出て行きましたけど・・・」

なぜラウラが顔を赤くして出ていったかわからないユウであった。

「それにしても私を守るですか・・・はっきりいって私って実はあの子達より強いんですけどね。それでも私はいつも誰かを守る立場でしたから逆に守られるというのも久しぶりで嬉しいですね」

そうつぶやいたユウは昼食を食べ終えて午後の授業のために食堂を後にするのであった。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

～～一夏の部屋～～

Ｓｉｄｅ　一夏

今日一日の授業が終わり一夏は新しくルームメートになったシャルルと一緒に自分の部屋に戻っていた

「じゃあ、改めてよろしくな、シャルル」

「こちらこそよろしくね、一夏」

ちなみに夕食のときに食堂で女子に質問攻めにあったために2人はすでにクタクタである。

そして現在シャルルは一夏が入れた日本茶を飲んでいる。

「久しぶりに飲んだけどやっぱり日本茶はおいしいね」

「あれ?シャルルは前に日本茶を飲んだことがあるのか?」

「うん、ユウちゃんが前にフランスに来たときに飲ませてくれたんだよ」

「そうかやっぱりユウとは知り合いだったのか」

「あれ？僕とユウちゃんが知り合いだって知ってたの？」

「知らなかったけどシャルル最初自己紹介したときにユウに向かって手を振ってたろ？それで知り合いかな～と思ったんだよ」

「へ～気づいてたんだ。一夏って意外と鋭いんだね」

「おい！意外とってなんだ意外とって！」

「あはは～ごめんごめん。あ、ところでシャワーの順番とかどうしよっか？一夏先に入る？」

「それはありがたいけどシャルルも先にシャワー浴びたいときがあるんじゃないか？ほら実習のあととか」

「ううん、僕はそんなに汗をかかないからすぐにシャワーを浴びなくても平気なんだ」

「わかったよ。でも使いたいときは遠慮せずにいってくれよな」

「わかったよ一夏。それと一夏って放課後にＩＳの特訓をしてるんだよね？」

「ああ、今日はできなかったけど、明日からはまた再開する予定だ」

「その訓練に僕も混ざっていいかな？」

「べつにいいぜ。俺はまだまだ下手だから手伝ってくれるやつがいると助かる」

「わかったよ。それじゃあ、一夏明日からよろしくね」

「ああ、よろしくな」

こうして明日からの特訓にシャルルという心強い味方が増えるのであった

第２２話　明かされる黒兎の目的（後書き）

ル「ラウラの目的が明かされた今回の話でした。・・・かなり無理やりな上に矛盾が出そうで怖いですね」

？「そこは文才がないのだから仕方ないな」

ル「あれ～？なんでユウじゃなくて君がいるのさ結？」

結「何でも用事があるらしくて代わりに私がきた」

ル「そうなんだ。ちなみに結の口調が違うのは理由があります。たぶんそのうち明かされると思います」

結「ところで」

ル「何か質問？」

結「１７話くらいでもうオリキャラは出ないとかいっていたのに３組と４組に転校生が来たんだが？」

ル「ドキッ！？　じつはね構想を考えてるうちにあるキャラを基にした２人を出したくなっちゃってね」

結「それで？今回で打ち止めか？」

ル「実は福音編でも３人出す予定・・・」

結「出しすぎだーーーー！！」

ル「これ以上は増えないはずだよ・・・たぶん」

結「今騒いでも仕方ないか。ところでラウラの目的が明かされたわけだが原作と違うな」

ル「原作との違いはユウがドイツにいたときにラウラを説得したから逆にあの事件のおかげで千冬やユウにあえて多少感謝してるよ。この小説ではクラス対抗戦でユウが大怪我したから一夏の代わりに自分が守るっていう意味での敵対だよ」

結「事件に感謝というのも少しおかしい気がするが」

ル「それほどラウラの中じゃユウの存在が大きいんだよ。詳しくは今やってるアンケートの結果次第かかなり後に気まぐれでやるかもしれないけどね」

結「気まぐれなのか・・・」

ル「そーなのだーｗｗ」

結「・・・・・・・・・」

ル「結さん・・・なぜ無言で両肩のクレイモアを展開してるんですか・・・？」

結「くだらないことをした作者を黙らせるためだ」

ガチャッ　ドドドドドドド

ル「ぎゃあああああ！？」

結「馬鹿は滅んだ。ちなみに前回の模擬戦で一夏と雪奈が最後にやったのはＯＯ１ｓｔのスローネ３機を相手したときに刹那とティエリアが使ったフォーメーションを参考にしたらしい・・・再現はできたいない気がするがな」

結「そろそろ時間のようだ。果たしてあとがきでのこれは解説になっているのだろうか？もしわからないところがあれば感想のほうに書いてくれ馬鹿が理解している分については説明させるからな」

結「では引き続き感想などは受付中だ。アンケートのほうも実施中なのでよろしければ協力のほうをお願いする」

結「ではまた次回に会おう」

第２３話　現れる３人目の転校生（前書き）

なんとか４日のうちに投稿できた・・・

本当は昼に投稿できたのにパソコンがフリーズして書いてた分が消えちゃいましたよ。

そのあとテンションが上がらずノロノロとかいてたら遅くなっちゃうし

やっぱりこまめに保存しないとダメですね

それでは本編をどうぞ

第２３話　現れる３人目の転校生

Ｓｉｄｅ　ユウ

シャルルとラウラが転校してきて５日たった土曜日

ＩＳ学園に無数にあるアリーナの１つ

今そこで白と黒、２機のＩＳが激突していた

周りの生徒たちは上空で行われている戦いを眺めているものがほとんどであった

すでに試合のほうは１０分ほど経過しており一夏のほうはすでに何度も被弾してエネルギーが少ないのに対してユウのほうはまったく被弾しておらずエネルギーも余っている

「くらえっ！！」

そういってビームマシンガンを連射してくる一夏

それを私はかわしながら隙を見て『アサルト・レイ』を放つ

一夏は放たれるエネルギー弾をシールドをつかって防いだりかわしながら右手に大型ソード『グラム』を構えてこちらに近づいてくる

私はそれを龍の爪を大剣形態にした『バルムンク』を呼び出して迎え撃つ

キンッ　カンッ　カキンッ

何度もぶつかり合う2つの剣

「前よりは動けるようになりましたがまだまだ私には勝てませんよ」

「確かにそうみたいだな。でもせめて一撃は当てる！！」

そういって今度は左手に雪片弐型を顕現させてこちらに突っ込んでくる

「（突っ込んできますか別にビットを使ってもいいんですがここはやめておきましょう）」

そう考えてユウは『バルムンク』を『シルブンク』と『ニベルンク』に分離させて再び一夏を迎え撃つ

「うおおおーーーー！！」

「はあああーーーー！！」

再び切り結ぶ一夏とユウ

一夏は『雪片弐型』で牽制しつつ『グラム』の威力の大きい一撃を何度も放つ、また隙を突いて『零落白夜』をいつでも叩き込めるように準備も怠らない。

それに対してユウは冷静な顔つきで一夏の斬撃を受け流したり弾いたりしていた。

受け流しているのは主に『グラム』による攻撃で『雪片弐型』からの攻撃は主に弾いていた。

「（クッ　ユウの実力は知ってるけど1発も当たらない上に受け流されるなんて！まだユウと肩を並べるには遠いのかよ！」

一夏が思考に陥ってできた一瞬の隙、それをユウが見逃すはずもなくその隙を突いて『雪片弐型』を吹き飛ばす。

「し、しまった！？」

「落ちなさい！一夏！」

そして『シルブンク』と『ニベルンク』から放たれるビームによる斬撃

それは一夏に直撃しそのまま一夏を大きく後ろに吹き飛ばす

それをユウは吹き飛ばされる一夏よりも早く移動して後ろに回りこみ上空に蹴り上げる。

「ゲホッゲホッ　ユウのやつ容赦なしかよ！」

急いで上空で体勢を立て直して吹き飛ばした張本人であるユウのほうを向く

そこには武器を粒子状態に戻して変わりにエネルギーの槍を持ったユウが居た・・・

「・・・・・なんだかデジャブを感じるな・・・じゃなくて！？

まずい今は前と違って『雪片弐型』がないんだぞ!?」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』!!」

無常にも放たれる一撃

「こうなったらヤケだ!一か八か『グラム』で切り裂く!!」

『グラム』を振りかぶり正面から激突する『グングニル』と『グラム』

みている誰もがこの時点で一夏がおちるだろうと予想していた・・・

しかしその予想は外れなんと一夏の一撃が槍を切り裂いた

「やった!賭けに勝ったぞ!!」

ユウに対して一矢報いたと思い顔をそちらに向けるとまるでそうなることがわかっていたかというような顔のユウと2本目の槍が存在していた。

このとき一夏は知らなかったが『グラム』にはビームやレーザーによる攻撃を弾くことができるコーティングがされていたのである。

そして放たれる2本目の槍それを一夏はもう一度『グラム』で切り裂こうとぶつける・・・が今度は拮抗することなく『グラム』があっさりと折れる。

「そ、そんな嘘だろ!?」

槍は一夏に直撃し残っていたわずかなエネルギーを0にする。

・・・

「代表決定戦で国家代表候補であるわたくしを倒したりＩＳに人工知能を搭載させたという話が広がって有名になったのですわ」

そ・・・そうだったんですか知りませんでした・・・

「あとは１年の中でもトップクラスの実力があるってことで注目されてんのよ・・・（ボソッ）他にもあるんだけどね」

？　鈴ちゃんが最後につぶやいた言葉は聞こえませんでしたがいつの間にか私が有名になっててびっくりですね

ふと一夏のほうに顔を向けてみると

「一兄大丈夫？生きてる？」

「ああ、何とか平気だよ雪奈。やっぱりユウは強いな」

「まったく男ならせめてユウに勝てないまでも一撃くらい与えられないのか！」

「そうはいうけどな箒お前なら一撃与えられるのかよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・（プイッ）」

「目を逸らすってことは箒も無理なんだな」

「馬鹿者！専用機持ちでも勝てないのに持っていない私が勝てるものか！」

「開き直るな！はぁーそれよりもユウ！」

そういってこちらに来る一夏

「武器が壊れちまったけどどうすればいいんだ?それとなんで『グラム』で『グングニル』を切り裂けたんだ?」

「武器に関しては後で修理して渡しますね。『グラム』に関しては後で白鳳にでも聞いてください」

「説明しないのかよ!!」

「こっちも疲れてるんですからいいでしょう。まったくこれだから一夏は一夏なんですよ」

「意味わからん!」

などと一夏と話して入るとシャルが声をかけてきました

「まあまあ、落ち着いてよ一夏。それにしてもあいかわらずユウは強いね」

「いえいえそれほどでもないですよシャル、一夏が弱いだけですから」

「ガハッ」

「あはは・・・相変わらずだね」

「それよりもシャルも模擬戦でもしたらどうですか?」

「そうだねそうしようかな」

「私はちょっとピットの方に行ってきますね」

そういって私はピットに向かいました

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

ユウがピットに向かってしばらくすると急にアリーナがざわつき始めた

「ねえ、ちょっとアレ・・・」

「ウソっ！？ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど・・・」

なんだかいやな予感がしますね

「一体なんなのでしょう？」

「さあ？わかんないわよ」

とりあえず全員でざわついてるほうに視線を送るとそこにはドイツ代表候補生であるラウラ・ボーデヴィッヒがいた。

今俺たちから少しはなれたところにシャルルと一緒に転校してきたラウラ・ボーデヴィッヒがいる

転校初日にいきなりひっぱたかれそうになったからな忘れたくても無理だ

「おい」

すると突然声がかけられた

「なんだよ・・・」

仕方ないので返事はしておこう

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

だろうなこいつは転校してきたときに千冬姉を教官といっていたおそらくだがあいつは千冬姉がドイツで教官を務めたときの教え子で第2回のモンド・グロッソで優勝できなかったのを俺のせいだと思っているんだろう

まあ、俺のせいで千冬姉が優勝できなかったのは本当だから反論で

きないけどな

それで俺が千冬姉の名前を汚したと思い代わりに教え子である自分が千冬姉の名前を守るとか言ってるんだろうな。

などと一夏は考えているが実際は違い思いっきり勘違いする一夏であった（ラウラの目的は前話参照）

ちなみに一夏はラウラがユウのことを姉と呼んでいることを知らない。

「ふん。ならば―戦わざる得ないようにしてやる！」

そういうと肩についていた大型レールカノンが火を噴いた

おい！こっちは今ＩＳのエネルギーが尽きてるんだぞ！それにこんなところでそんな武装使うなよ！

ガギインッ！

発射された弾は一夏に向かっていくがそれが一夏にぶつかることはなかった

横から割り込んできたシャルルがシールドで実弾を弾いたからだ

「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「貴様！」

「邪魔をするのなら貴様から排除する！」

ラウラはそういうと右手を前に突き出した

俺が何をしているんだと思っているとシャルルが

「機体が動かない！？まさかＡＩＣ！？」

「ほう、さすがに知っていたかだがこれで終わりだ！！うらむなら関係ないのに割り込んできた貴様自身を恨め！！」

そしてシャルルに向かって2発の実弾が発射された

俺の機体はエネルギー切れで動かせないし他のみんなはＩＳを展開していなかったせいで間に合わない！

「シャルルーーーー！」

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　？？？

私はさっきまでＩＳの特訓をある人物と行っていたのだがなにやら騒がしくなってそちらに顔を向けるとドイツの代表候補生と男でＩＳを動かせる人物が相対していた

「ムッ　あの2人なにやら言い争いをしているようだな。どうする

？」

とりあえず私は隣で一緒に訓練をしていた人物に話しかける

「別にどうという事はないだろう。見ろもう1人の男が砲弾を防いだようだ」

「確かにあれならば私たちが手を出すまでも・・・まずい！あれはＡＩＣか！？このままでは彼が！悪いが私は助けに行かせてもらうぞ」

さすがに危険だと思い私はＩＳを展開して向かおうとする

するとなぜか一緒に訓練していた彼女が背中のフライトユニットに乗っていた

「何をしている？」

「割り込むんだろう私もそれに一緒に行くだけだ」

「ならなぜＩＳを展開しない？君の機体の方が早いだろう」

「訓練中にあれを使ったせいでエネルギーがないそれにこの距離なら生身でも死にはしないさ」

「やはり無茶なやつだよ君は・・・では行くぞ！」

そういって2人の人物は騒ぎの場まで飛んでいった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　一夏

ラウラの放った2発の弾がシャルルに向かったとき俺はＩＳも展開せずにシャルルの前に立とうとした

しかしこっちに向かってきた弾が俺たちにぶつかることはなかった、なぜなら・・・

「切り捨て御免ーーーー！」

“桜花流　二の型　裂空”」

突如乱入してきた1機のＩＳと1人の人間によって弾が切られたからだ。

そしてその場に立っていたのは金髪を肩から少し出るくらいまで伸ばした女性と俺が知っているやつだった

「き、貴様ら何者だ！？」

突然の乱入者にラウラも同様を隠せないようだ

「私は1年3組所属　アメリカ代表候補生　グレイシア・エーカー」

「同じく1年3組クラス代表　日本代表候補生　上條　結」

「なぜ私の邪魔をする！」

「それは・・・『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』どうやら先生が来たようだな」

「チッ　覚えていろ織斑一夏！！」

そういって去っていくラウラであった。

「ありがとう助かったよえ～と？」

「気にするな、6月から転入してきたグレイシア・エーカーだ少年。呼び捨てで構わんぞ」

「そうかわかったよ、グレイシア。おれは織斑一夏だよろしくな。あと結もありがとうな」

「気にするな友達だろう？」

「・・・・・」

「？どうかしたか一夏？」

「そりゃあいつもと急に口調が変わったら驚くわよ」

そういって近づいてくる鈴・雪奈・箒・セシリア

「鈴かそういえばこの口調では話したことがなかったな」

「どうして口調を変えたんですの？」

「今度はセシリアか。ちなみに変えたのではなくこっちが素の口調

だよ」

「どういうことだ？」

「グレイシアに転校してきた次の日に言われてな。「友達ならば素の口調で話せ」とな」

「何で隠してたの？」

「別に隠してたわけではなく会ってすぐでこの口調では受け入れられないと思ったからだよ」

「そうなのか、まあ俺としてはどんな口調だろうと結は結だけどな」

「そうか、ありがとう」

これはきっとみんなも思ってることだけどな

「少しいいかな少年？」

結と話しているとグレイシアが話しかけてきた

「なんだ？それと一夏でいいぞ」

「そうか。だがここはあえて少年と呼ばせてもらう。それで話なのだが私も少年がやっている特訓に加えてほしい」

「別にいいけどどうしてだ？」

「実はこちらに来てすぐに君の戦闘の資料を見たのだがなぜか興味

を惹かれてね。それで一緒に特訓をと思ったわけだよ」

「そうなのかじゃあこれからよろしくなグレイシア！」

「ああ！よろしく少年！」

このとき一夏の後ろでは箒たちがまたかという思いだったのは言うまでもない

また戻ってきたユウが事情を聞きその後ラウラの部屋に行き部屋から悲鳴が聞こえてきたのは余談である

第２３話　現れる３人目の転校生（後書き）

ル「今回あとがきにはユウではなく今度は雪奈が来ております」

雪奈（以下雪）「どうも～雪奈で～す」

ル「はあ、今回は大変だった」

雪「ドンマイだよ～そういえば今回なんだか武器の名前出てきたね？」

ル「いつまでも名無しじゃかわいそうだと思ってね。名前の由来は大型ソードの『グラム』は北欧神話に出てくる武器からとりました」

雪「何で折れたの？」

ル「それは北欧神話で『グラム』が『グングニル』に折られるって書いてあったからせっかく技で『グングニル』あるから再現してみた」

雪「そうなんだ」

ル「『バルムンク』はニーベルンゲンの歌に出てくるので『グラム』を元とした剣らしくて『グラム』は元々１４０ｃｍ位の剣らしいからほとんど同じと思って名前つかってないこっちを使ったんだよ。『シルブンク』と『ニベルンク』の２つはジークフリートに剣を渡した人物らしくてそこから名前を借りた」

雪「元が同じでもずいぶん扱い違いますけどね」

ル「そこは気にしちゃだめさ。ちなみに他の武器も名前つけようか考え中」

雪「まあ、がんばってください」

ル「あと一夏がラウラが自分のことを襲ってきた理由を勘違いしているのは一夏の前でユウのことを姉様と呼ばないから関係を知らないためです」

雪「そういえば、3人目の転校生が出てきたよね～」

ル「グレイシア・エーカーはＯＯのグラハムさんが元です。詳しくはそのうち更新する設定集で書きます。そのときに結のことも書きます」

雪「ちゃんと書かないとダメだよ～？」

ル「ハッ！（なぜか逆らえない！？）ちなみに桜花流というのは上條家に伝わる流派の設定です。その理由もいずれ設定で書くと思います」

ル「ではそろそろ時間ですね。感想の方はいつでもお待ちしております」

雪「アンケートの方もまってま～す。締め切りは８日の日付が変わるまでですのでよろしくね～」

ル「雪奈さん？何でビームバズーカを構えてるんですか？」

雪「本編で出番のない腹いせ？」

ル「疑問系！？それにこの前あげたじゃない！？」

雪「とりあえずくらえ～」

ル「ぎゃあああああーーーー！？」

雪「ではまたおあいしましょうだよ～」

第２４話　暴走する黒ウサギそして始まる前哨戦（前書き）

タイトルどおり今回は最初にラウラが暴走します

そしてちょいエロがあります

まあ、エロか微妙ですけど一応Ｒ１５？かな

後この前ユニークアクセスが１００００超えました。

皆様読んでくださりありがとうございます。

・・・こっちも記念になんかやるべきなのかな？

それでは本編をどうぞ

第２４話　暴走する黒ウサギそして始まる前哨戦

Ｓｉｄｅ　ユウ

先週の土曜にアリーナで起こったラウラ襲撃事件から2日たち今は月曜の朝６時です。

ちなみに昨日は私から逃げ回るラウーに説教をしていたので自分のことはほとんど何もしていませんね。

え?何を説教したのかって?

あれですよ主に何故あんな人がたくさんいるところでいきなり戦闘行為をしようとしたのかについてや一夏と戦うにしても周りの人を巻き込まないようにするように言ったり一夏と戦うのはいいですが一夏と決着がつくまで関係のない人と戦わず一夏のみに専念しなさいなどｅｔｃ・・・ですよ。

・・・なんですか?その前に一夏と戦おうとするのを止めなさいって?

止める気はないですよ。だってラウーに戦うにしてもやりすぎないようにいいましたしいざとなれば私が止めますからね。それに一夏には実戦経験がまだまだ足りませんからちょうどいいんですよ

ではそろそろ起きるとしましょうか。

フニッ

「？？？」

何ですか今右手に感じた何やらやわらかい感触は・・・・・・まさか・・・

ギ・ギ・・ギ・・・

私がブリキの人形のように首をやわらかい感触がした方に向けるとそこには・・・

「ラウー！？何でここにいるんですか！？」

昨日寝るときにはいなかったラウラがいました

しかも、いつも身に着けている左目の眼帯と右太ももにつけている黒いレッグバンド（おそらくＩＳの待機状態でしょうけど）以外何も身に着けず全裸で寝ていたのです。

「うにゅぅ・・・姉様のにおい・・・クゥ～～」

グハッ（何故か吐血した音）

相変わらずラウーの寝顔はかわいいですね～他の人に対してももう少し愛想を持ってくれると義姉として嬉しいんですけどね～

・・・・・じゃなくてですね！？

「起きてくださいラウー！どうやってここに進入したんですか！？」

ユッサユッサ

何とかラウラを起こそうと大声を出して揺するユウであったがユウはあることを失念していた

そう！ここは学生寮であり2人部屋なのだ

当然大声を出せば同居人は起きてしまう

「・・・ん・・・朝からうるさい・・よ・・ユ・ウ・・ちゃ・・ん・・・」

「あ・・・簪ちゃんが起きちゃいましたか・・・（どう説明しましょう・・・）」

簪ちゃんが起きてしまったので起こしてしまったお詫びとこの現状をどうしようか考えてカンッ座視ちゃんがいるベットの方を見るとそこにいたのはなぜか打鉄弐型を展開し近接用の武装である『夢現』を装備して目からハイライトがなくなっている簪ちゃんでした・・・

「か・・簪さん？なんで打鉄弐型の武装を展開しているんですか？・・」

「どうしたのユウちゃん？急に『さん』付けで呼ぶなんていつも見たく呼んで？」

「ま・・まずは落ち着いてください！？」

「・・・何を言ってるのかなユウちゃんは？私は・・・チャントオチツイテルヨ？」

「それって絶対嘘ですよねーーーー!?そ・・・それにこれは気づいたらこの子がいたからなんでいるかは私もわからないんです!?ですから怒りを鎮めてください!」

「・・・トリアエズ、ユウチャン?O・HA・NA・SHIショウカ?」

ま・・まずいですよ、何故かわかりませんが簪ちゃんがとても怒っています。
しかも昔味わった管理局の白い悪魔並みの迫力がありますよ!?普段おとなしいのに何でこうなるんですかーー!?
いったいどうすればもとにもどってくれるんでしょうか!?
などと私が考えていると隣で寝ていたラウーが起き上がってこちらを見ています。

「あ・・・おきましたかラウー!早くなんでこんなことしたのか彼女に説明してください!!」

これでラウーが説明をしてくれれば簪ちゃんが怒りを抑えてくれる可能性が少しは・・・

ボ〜〜〜

「・・・ラウー?」

あれ?もしかしてまだ寝ぼけてるんですかね?

「姉様ーーー!」

そういって私に抱きついてくるラウー

「き、きゃーーー！？」

あまりの勢いにそのままベットに押し倒されます

いきなりのこの行動に簪ちゃんもフリーズしてますね

「ラ、らうー！？一体何をするんですか！？」

「姉様相変わらず綺麗ですね・・・」

あなた本当に寝ぼけてるんですか！？実は寝ぼけた振りしてるんじゃないでしょうね！？

そんなこと考えてるうちにラウーが私の胸を！？

「ちょ・・どこ触って・・ヒャンッ！？や、やめてくださいラウ・・アンッそ、そこは！？」

「ああ！涙目になっている姉様もかわいいですよ。それに姉様はここが弱いんですね」

現状：　ユウ：ベットの上に押し倒されて涙目

ラウラ：ユウの胸を揉んで首筋に甘噛み中

簪：フリーズ中

「ラ、ラウーいい加減に！？ヒャンッ・・・」

ううう、力が出ないです。ＩＳは机の上ですしこうなったらルナを使

って・・・

どうにかして状況を脱出しようと考えているとさっきまでフリーズしていた簪が復活する・・・ただし今度は2門の連射型荷電粒子砲『春雷』を展開させて・・・

「ユウちゃんのバカーーーーーーー!!」

「きゃあああーーーー!?」

そして発射される荷電粒子砲それはユウとラウラに直撃した。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　３人称

～～1時間後～～

あのあと騒ぎを聞きつけて駆けつけた千冬によって事態は収束し3人は仲良くありがた～いお説教を受けたのであった

ちなみに部屋のほうは簪が意図したかわからないが威力は最小限に設定されていたため多少荒れただけですんだ（まあ、実際はもっと酷いだろうがギャグパートということで）

「まったくこの馬鹿共が他の部屋に被害がなかったからいいものを一歩間違えば大惨事だぞ」

「「ごめんなさい・・・」」

「それで?ボーデヴィッヒは何故アインツベルンの部屋に侵入してあんなことをしたんだ?」

3人から話を聞いた千冬はその行為を行った理由をラウラに聞く

「そ、それは昨日姉様に説教をされたときに昔のことを思い出しましてそれに前に姉様と話したときのが拍車をかけて姉様分を補充したくなってしまいました・・・」

モジモジしながら恥ずかしそうに告げるラウラ

「ハァ〜今回は説教だけで済ませるが今度からは全員指導と反省文を書いてもらうぞ」

「「わかりました」」

「ではもう行け授業までまだ時間があるといって油断して遅刻などするなよ」

そういって部屋を出て行く千冬

「ごめんなさい姉様・・・」

「もういいですよ。それよりも食堂に行って朝食を食べましょう。行きますよ簪ちゃん、ラウラ」

「・・・わかった」

「え？私も一緒に行っていいのですか？あんなことをしたのに」

まさか自分が誘われるとは思ってなかったラウラが聞き返してくる

「あなたは私の妹ですよ？一緒に食事をとって何がおかしいんですか。それに朝のことに関してはもういいですよ」

「ありがとうございます姉様！！」

そう言ってユウの腕に抱きつきながらラウラは食堂に向かうのであった

それからしばらくしてラウラはある思いに気がつくのだがそれはまだ先の話である。

～～ＩＳ学園第１アリーナ～～

朝の騒動から少し時間が経ち今は１時間目の授業の時間だ

ここには現在１２０名を超える数がいる１年生が集まっている

「ではこれより１年生全クラス合同の授業を開始する」

『ハイッ！』

「本来であれば丸１日を使ってＩＳの機動訓練を行うのだが今回は

趣向を凝らして現在1年にいる専用機持ちで模擬戦をしてもらう」

千冬の突然の提案に驚きの声を上げるほとんどの専用機持ち達
声を上げていないのは結・ラウラそして4人目の転校生くらいである
そして真っ先にセシリアが抗議の声を上げる

「納得いきませんわ！！なぜ今月末に学年別トーナメントを控えてますのにそのようなことをしなければなりませんの！！」

「理由は今から説明してやるから少し黙れ」

千冬の威圧に耐えられずおとなしく静かになる専用機持ち達

「では説明するぞ。まず模擬戦を行うのは公平を規す為だ」

「公平をですか織斑教諭？」

思わず疑問を口にしたグレイシア

「そうだ。今までであれば各学年には平均2名ほど専用機持ちがいればいいほうだったが今年は何故か11名も専用機持ちがいるからな。去年までであれば人数が少ないためトーナメントの各試合で手に入るデータを使って対策を立てる生徒もいたが今年は数が多すぎてそれも難しいからな」

「ですがそれではわたくし達にデメリットしかないのでは？」

「デメリットばかりではないぞ。まず貴様ら専用機持ちも他の専用機のデータが取れるし誰が現時点で強いのかもわかる。それにこの模擬戦には何故か学園長も乗り気らしくてな全勝すれば学園長が常

識の範囲内でならなにか願いを叶えるといってきているぞ」

このことを聞いて専用機持ちは１１名中８名がやる気を出した

以下それぞれの心境（声には出ていない）

雪奈・鈴・セシリア・グレイシアの場合

「「「「一夏（兄）（さん）（少年）と同じ部屋にしてもらう！！」」」」

ある意味わかりやすい人たちであった

ラウラの場合

「姉様と一緒の部屋になって撫でて貰うぞ！」

かわいらしい願いである

ユウ・簪の場合

「「希少なパーツ（ＤＶＤ）の取り寄せってできるかな？」

欲があるのか微妙な願いであった

シャルルの場合

「この不当な扱いを何とかしてもらえるかな？」

微妙にネタバレな気がする願いであった

一夏・結・４人目の転校生の場合

「「「特に願いがないけどがんばろう」」」

それはそれでいいのだろうか？

「どうやら納得したようだなでは早速模擬戦を始めるぞ。一般生徒はトーナメントであたったときのために対策を考えたり操縦技術をしっかり見ておけよ」

「あの～織斑先生」

いざ試合を始めようとすると山田先生が千冬に話しかけてきた

「ん？どうかしたか山田先生」

「いくら専用機持ちでもお互いの名前を知らない子がいると思うので先に自己紹介とかどうでしょう？」

「それもそうだな。では１組から自己紹介をしていけ簡単でいいからな」

そういわれて順番に自己紹介が行われていく

「え～っと１年１組のクラス代表をしてる織斑一夏だ。よろしく頼む」

「同じく1組の織斑雪奈で～す。いまのところは学園所属ってところかな？」

「セシリア・オルコットですわ。イギリスの代表候補生を勤めておりますわ」

「シャルル・デュノアです。フランスの代表候補生を勤めてます」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「ユウナスフィール・フォン・アインツベルンです。所属は一応ＩＳ委員会になります」

「1年2組のクラス代表で中国の代表候補生の凰鈴音よ」

「1年3組所属、クラス代表で日本の代表候補生をやっている上條結だ」

「アメリカ代表候補生のグレイシア・エーカー。よろしく頼む」

「・・・1年4組の代表で・・・日本代表候補生の更識簪です・・・」

そして最後に自己紹介をするために出てきたのは薄い緑色の髪を腰の辺りまで伸ばした少女であった

「クリスティナ・アルタードです。所属は特別で企業ということになってます」

そうして最後の人物の自己紹介が終ると千冬が

「終ったなではルールを説明する。ルールは通常と同じくエネルギーが切れたら終了だがこちらで続行不可能だと判断しても終了させる。試合形式は勝ち抜きのトーナメントに近いものだが最後は3機でのバトルロワイアルだ」

そして近くにいた山田先生が

「それでは早速組み合わせを発表していきますね第1試合は・・・オルコットさんとアルタードさんです」

こうして1戦目の試合はイギリス代表と企業所属に決まった

はたしてこの前哨戦勝ち残るのは誰なのか?

第２４話　暴走する黒ウサギそして始まる前哨戦（後書き）

ル「今回はちょいエロ？があった２４話でした」

ユ「人に何してるんですカーーー！！」

ル「あ、ユウだ。今回はお楽しみでしたね」　ニヤニヤ

ユ「う～～～～～」（顔を真っ赤にしている）

ル「うわー真っ赤だよ。というわけで今回は暴走させてみました。もうこうなったらあのルートをまっしぐらですよ！！」（どのルートだ！）

ル「そして後半はオリジナル展開の学年別トーナメント前哨戦！」

ユ「何で前哨戦なんてやったんですか？」

ル「あ、復活した。理由は本編でも言ったけど一般生徒への救済措置かな」

ユ「救済になるんですかこれって」

ル「まあ、多少なりとも対策は立てれるでしょう。学年別トーナメントで生かせるかは別として」

ユ「酷いですね」

ル「まあ、単に一対一の戦い書きたかったんだけどね。トーナメン

トの方は原作どおりペアにするし」

ユ「結局ペアなんですね」

ル「原作と違って1回戦だけで終了ではないといっておこう」

ユ「そうなんですか。ところで結局この前哨戦はどのくらいやるんですか？」

ル「とりあえず9試合あるから1話につき1～2戦書く予定。あいまいなのは長さしだいだから」

ユ「そういえば最後の転校生が出てきましたね」

ル「やっと出せたよ。元キャラはある人物なんだ。詳しくはそのうちまとめて書く設定集で。あと本当は炭酸（コーラ）を出そうとしたんだけど断念したんだ」

ユ「何でですか？」

ル「だって炭酸ってイナクトかジンクスくらいにしか乗ってないから火力が足りない気がしたんだよ。だから別な人を出した」

ユ「哀れな炭酸ですね・・・」

ル「そういえば書き忘れてたけどすでにラウラの襲撃があったので本来なら時期的にシャルルの正体ばれてますけどこの小説ではまだばれていません」

ユ「ではそろそろ時間ですね。アンケートの方は締め切りが8日の

日付が9日に変わるまでですのでご協力よろしくお願いいたします。アンケートの方は活動報告か19話の最後をごらんください」

ル「これまた言い忘れましたが複数の回答も可能ですのでよろしくお願いします。感想や指摘の方も待ってますのでよろしくお願いいたします」

ル・ユ「「それではまた次回お会いしましょう！」」

第２５話　模擬戦第１試合　激突する青い雫と再誕（前書き）

今回は執筆時間の関係で１戦のみです

次回以降は２戦書けたらいいな～

あとアンケートの方は今日の日付が変わるまでですのでよろしければご協力お願いいたします。

それでは本編をどうぞ

第２５話　模擬戦第１試合　激突する青い雫と再誕

Ｓｉｄｅ　三人称

現在第１アリーナにはセシリアとクリスティナの２人しかいない

他の生徒や教員は観客席や管制室にいる

そしてアリーナに残っている２人もすでにＩＳを展開して試合開始の合図を待っている状態だ

そしてブルー・ティアーズを展開しているセシリアが口を開く

「それがあなたの専用機ですのね」

「そう、これが僕の専用機　再誕さ（リインカーネーション）」

そういったクリスティナの機体は両手両足さらには胴体の部分をほとんど紫の重装甲で覆い尽くしたものであった

ちなみに位置関係としてはセシリアの方が上空にいてクリスティナは地面の近くに浮いている

『では・・・試合開始！！』

「わたくしとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲（ワルツ）で踊りなさい！」

そういってセシリアは試合開始と同時に『スターライトｍｋ？』からレーザーを放つ

「開始直後の奇襲かい？そんなのあたｒ・・ガッ！？」

クリスティナはセシリアの放ったレーザーを機体を少しずらして回避したのだが回避した先にも何故かレーザーが迫っておりこちらはかわせずに被弾して地面に叩きつけられながら後方に吹き飛ぶ

『バリア貫通　ダメージ２９　シールド残量５７１　実体ダメージ極小』

それでもすぐに体勢を立て直してセシリアと向き合うと先ほどまでいたところの近くに自らが当たった攻撃以外に２つのレーザーによる攻撃の痕跡があるのがわかった

「いたた・・・まさか早撃ち（クイックドロー）が使えるとはね。データにはなかったから油断したよ」

「たった１回で私がやったことを見切るとはさすが専用機持ちといったところですわね。それにデータにないのは当然ですわ。ユウさんに特訓に付き合っていただいてつい先日できるようになりましたから」

「ユウというと彼女か・・・やっぱりあの娘はいろいろと厄介だね」

「あらユウさんのことを知っていらしたんですのね」

「ああ、彼女はいろいろと有名だからね。それじゃあそろそろこっちも仕掛けさせてもらうよ」

そういってクリスティナは右手に大型ブレードを左手にアサルトラ

イフルを展開する
その様子を見てセシリアも『ブルー・ティアーズ』を展開して警戒をする
「（さてクイックドローが使えるということはおそらく誘導兵器と通常武装の同時使用はできると考えていいだろうね）」
「（相手の出方はわかりませんが『ブルー・ティアーズ』で近づけないようにした方がいいですわね）」
一瞬の沈黙の後ブースターを吹かせて突撃する
それと同時に『ブルー・ティアーズ』と『スターライトｍｋ?』から放たれるレーザーの嵐
「やはり同時使用が可能だったようだね！」
そういってレーザーの嵐を機体の各部に搭載されたブースターを瞬間的に発動させて前後左右に動いて回避しつつセシリアに近づいていく
（イメージとしてはＡＣのクイックブースト）
「クッ　すばしっこいですわね。こうなったら！！」
中々当たらない様子を見てセシリアは弾道タイプの『ブルー・ティアーズ』をクリスティナに向けて発射する
「ムッ　ミサイルタイプの攻撃かい、ならこれだよ！」

自分に向かってくるミサイルを見ながらクリスティナは肩部に武装を呼び出してそこから何かを発射する

すると突然ミサイルはセシリアが狙った方向とは違う方向に飛んでいきそのまま地面に激突する

「なっ、制御が効かない！？まさかジャマーを搭載してるんですの！？」

「この機体は様々な状況を想定していろいろな武器が搭載されているからね。それとこの程度で隙を見せちゃだめさ」

そして今度はクリスティナがセシリアに向かってアサルトライフルを連射する

「その程度の攻撃あたりませ！？」

ドカーーーン

セシリアが攻撃を回避した瞬間に回りに浮かんでいた『ブルー・ティアーズ』が2機爆発する

再び驚愕するセシリアの一瞬の隙を突いてクリスティナは『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で懐まで一気にもぐりこむ

「しまっ！？」

気づいたときにはすでに遅く『スターライトｍｋ？』は左手に展開された5本の『レーザークロー』によって切り刻まれＩＳ本体も先ほど『ブルー・ティアーズ』を2機落とした『ガンブレード』によ

って切り裂かれそのまま右足で蹴り飛ばされてしまう

「きゃーーーーー!?」

そのまま地面に激突してしまう

「悪いけどまだ終らないよ!」

止めといわんばかりにいつの間にか両肩の横の部分に展開されていた大型レーザーカノンを発射する

それは残っていた2機の『ブルー・ティアーズ』も巻き込んで盛大に爆発する

ドゴーーーン

大きな音とともに煙が着弾点を中心に広がっていく

そんな中クリスティナは

「あれだけの攻撃を与えてもまだ試合終了の合図がないということはまだエネルギーが残っているということだね。それにさっきの攻撃のときビットを盾にして少しだけ威力を削いだみたいだね。さすが代表候補生といったところかな」

と考えていると煙が立ち上っている場所から一筋のレーザーが迫ってきた

しかしそれを横にブースターを吹かせてあっさりと回避する

「おかしいなレーザー兵器はすべて破壊したと思ったんだけど予備があったようだね」

そして煙が晴れるとそこには『スターライトｍｋ?』よりも小型のライフルを装備したセシリアがいた

「まだ・・・負けていませんわ!!」

右手に小型のレーザーライフル左手に『インターセプター』を装備してライフルを連射してくる

「悪いけどそろそろ終らせてもらうよ」

そういって再び連続でブースターを吹かせて小刻みに移動しながら近づいていく

そのまま至近距離まで近付き左手の『レーザークロー』と右手の『ガンブレード』で切りつける

クリスティナの予想では右手の攻撃は防がれるが左手の爪なら相手のライフルごと切り裂けると考えていた

・・・しかしその予想は覆され左手の爪は銃から剣になったそれによって防がれる

「!?驚いた僕と同じ銃剣かい・・・まさかそれも彼女からの贈り物かな?」

「そうですわ!ユウさんがわたくしに下さったものですわ」

「しかもその形・・・本当に彼女はいろいろと厄介だね！！」

「それはどういう意味ですの！？」

「なにそのままの意味さ！」

最初は拮抗していたが徐々にセシリアが力で押されていく

「くぅぅぅ！」

「中々しぶといねならこうするまでさ！」

そういって先ほどまで5本の爪に別れていた左手の爪が段々と1本の剣のように収束していきそれはそのままセシリアの銃剣を真っ二つに切り裂いてＩＳ本体に直撃する

「ああーーー！？」

「おまけだよ！！」

ガンッガンッガンッ

追撃といわんばかりにクリスティナは右手の銃剣を突き刺してそのまま引き金を引いて止めをさす

『試合終了　勝者　クリスティナ・アルタード』

それぞれがピットにいきその後観客席まで戻ってくるとセシリアの下には一夏たちが集まってきた

「うう・・・負けてしまいましたわ」

「どんまいだよ～セシリア～。それにしても相手は強かったね～最初以外ダメージ食らってなかったみたいだし～」

「ウッ！？」

さりげなくセシリアが気にしていることを言う雪奈であった

「まあ、多少は相性というものがあったんでしょうね。ジャマーも装備していましたし」

「ユ、ユウさんすみません、訓練に付き合ってもらいましたのに・・・」

「まあ、セシリアがレーザーを曲げれていたら話は少しは違っていたかもしれませんがね」

「グッ！？」

ちなみに今のユウの発言は完全にわざとである

「まあまあ、トーナメント本番で次に当たったときに負けないようにすればいいんだから今回は別にいいだろう？」

「い、一夏さ～ん（泣）」

「まったく一夏は馬鹿なの？たぶんだけど相手はまだ本気でやってはなかったと思うわよ」

「え！？それってマジかよ鈴」

「まあ、あくまで予想だけどね。安心しなさいセシリアもし私が当たったら敵はとってあげるから」

「そうはいうけど鈴ちゃんも勝てるとは限らないよね～」

「うっさいわよ雪奈！私は強いから問題ないのよ！」

「どちらにしろ彼女は強いですから大変でしょうけどね」

「ユウちゃんがそこまで言うなんて本当に強敵みたいだね」

「そうですよシャル。彼女は間違いなく1年の中でもトップクラスですよ」

一夏・雪奈・鈴・セシリア・ユウ・シャルルがそんなことを話して入ると千冬から次の試合の組み合わせが発表された

『では早速次の試合に移るぞ。次の組み合わせは　織斑一夏対グレイシア・エーカーだ。すぐに準備しろ』

「次は俺かそれじゃあ行って来るぜ」

「「「「「逝ってらっしゃい」」」」」

「・・・字が違う気がするんだが・・・」

「気のせいですから早く行ってください」

「何だか納得できねーー！」

そうして一夏はピットに向かっていった

第２５話　模擬戦第１試合　激突する青い雫と再誕（後書き）

ル「第１試合終了！！勝者はクリスティナでした」

ユ「セシリアが負けましたか・・・それよりも何だかいろいろとセシリアが・・・」

ル「チョコットだけ強化してみた主な強化点は１、クイックドローの使用　２、ビットとの武装の同時使用可能　３、武装１個追加かな」

ユ「エネルギー充填式の武器でクイックドローなんてできるんですか？」

ル「その辺は１発の威力を少し低下させて調節ということで」

ユ「ああ、だから原作で一夏がかすった攻撃よりもダメージが少ないんですね」

ル「そのとおり！何発まで撃てるかはまだ秘密だけどね」

ユ「では２の同時使用は？」

ル「だって同時使用できなきゃセシリアかビット無防備すぎるから彼女にはユウが退院してから約１０日くらいのユウ直々の地獄の特訓でクイックドロー諸共できるようにした設定」

ユ「鬼ですね」

ル「やったのユウだけどねー」

ユ「やらせたのはあなたでしょう!それで3つめの武器って・・・」

ル「ぶっちゃけOOのGNソード?のレーザー版」

ユ「・・・・・・」

ル「次はクリスティナの機体だね。まあ、武装に関してはビームクローくらいかな」

ユ「クイックブーストはどうなんです?」

ル「あれは使えたら面白いだろうという妄想からきたから今回は省略。ビームクローはぶっちゃけOOのガラッゾのをレーザーにしただけ」

ユ「OO好きですね。そういえばクリスは元になったキャラの武器使ってませんね」

ル「そこはネタバレになるからだめ。一応機体名にも意味は歩けど内緒」

ユ「そうですか。それにしても次回は一夏ですか勝てるんですかね?」

ル「それは次回をお楽しみにだよ。それではそろそろ時間ですね。前書きにも書きましたがアンケートの締め切りは今日の日付が変わるまでですのでよろしければご協力お願いします。複数回答も可能ですので」

ユ「そういえば疑問なんですが回答で複数の回答が同表だったらどうするんですか？」

ル「・・・・・・がんばって全部書かせていただきます・・・」

ユ「何だか間がありましたね。それでは今回はこの辺で失礼させていただきます」

ユ・ル「「次回またお会いしましょう」」

設定集４　主人公以外のオリキャラ紹介（一部除く）（前書き）

今回は設定集です

色々とご都合主義もありますが流していただけると幸いです

それとアンケートの募集は今日の日付が変わるまでです
１時間くらいの誤差でしたら受け付けると思います
アンケートの内容は活動報告か１９話のあとがきをごらんください
複数回答も受け付けております
同表だった場合はがんばって同表のやつを全部書きますのでよろしければアンケートにご協力くださいますようお願いいたします＞（―　―）＜

設定集４　主人公以外のオリキャラ紹介（一部除く）

奏（かなで）

・髪は黒く長さは太ももに届くくらいの長さ
・目の色はマスクやらサングラスをつけていたため不明
・黒いマントを身につけていて身体的特徴からは大体２０代前半の年齢と予想される
・ちなみに名前は偽名である

ユウが殺されかけたときに突然現れて窮地を救い敵を倒した後に病院まで運んでいった
相手との会話からどちらかというと味方側に属しているらしいがその正体は謎である
ちなみに転生者であるがユウと交わされた会話から彼女はその正体に心当たりがあるらしいが確証はない
また勘ではあるが敵の目的にうすうす気がついている

《能力関係》

身体能力
魔法などで身体強化しなくても弾丸程度なら軽くかわせるくらいの身体能力を持っている
またネギまの虚空瞬動らしきものも使えるらしくその力は計り知れない

魔法

現時点で使用しているのはユウに掛けた回復系の魔法のみ。それも傷が深かったため5分動かせるようにするのがやっとであった

？？？（名称不明）
奏がＡＫＵＭＡモドキと戦うときに何かをつぶやきその後右腕の肘から手首の間に現れた刃
切れ味は鋭く銃弾などは簡単に切り裂ける
他にも力があると思われるが不明

上條結（かみじょうむすび）
・黒髪黒目の典型的な日本人。髪は腰の少し上まで伸びている
・口調は出会った当初は普通の女子と変わらなかったが現在ではスパロボＯＧに出てくるキョウスケの口調を少し女性用に変えたもの
・容姿としては街を歩けばほとんどの人が振り返るレベル。ただし本人は特に容姿に関して気にしていない

１年３組所属でクラス代表を務めている
また簪と同じ日本代表候補生である
一夏たちとは千冬に頼まれてユウの容態を伝えに行った時から友達である（ご都合主義）
なぜか突然楯無と模擬戦をすることになり不利な状況から引き分けに持ち込むあたり技能は高い

専用機はラファール・リヴァイブ　カスタム？でカラーは黒
この専用機は元々デュノア社で開発されていたもので結の両親が勤めている研究所が彼女と最も相性がいい機体と判断して少しの第３

世代機のデータとともに取引を行って手に入れた（それでもデュノア社側はデータが足りず第3世代機は完成していない）
また機体自体はいろいろと暴走した結果第3世代機と同等の性能である
ちなみに両親は父親が生粋の研究者で母親はとある剣の流派の後継者でさらに科学者でもあるため結自身も機械いじりはかなり得意である

桜花流
結が使う流派で主に剣を使って技を放つが別に剣じゃなくても使用可能。ただしモノによっては威力が落ちる
技と技によっては組み合わせることができるものもある
今回は3つのみ記載する

一の型『閃』　剣を鞘に収めて抜き放ち相手に向かって斬撃を飛ばす技。ただしこれは移動しながら撃てるが単体だと威力が低くよくて牽制用。一応剣がなくても使用可能

二の型『裂空』　剣を鞘に収めて抜き放つ瞬間に特殊な振動を剣に与えることによってかなり切れ味の高い一撃を放つ技。これは特殊な振動を与えられればいいので居合いの形をとる必要性は実はない。これも剣がなくても使用可能。『閃』と組み合わせることにより斬撃を飛ばすことが可能だが距離に反比例して威力は落ちる

三の型『神速』　剣を鞘に収めて放つがこれは前の2つと違い必ず納刀しておく必要がある。その代わりその剣速は恐ろしく早くまさに神速である。『閃』と組み合わせるとすさまじい数の斬撃が恐ろしい速度で相手を襲う

グレイシア・エーカー

・ＯＯに出てくるグラ〇ムさんを女性にした感じ髪は肩から少し出るくらいの長さ
・性格に関してはまんまハムさん

１年３組所属のアメリカ代表候補生
ＯＯではガンダムにご執心だったがここでは一夏にご執心になる予定
その辺はたぶん次に書くと思う

専用機はカスタムフラッグ
高機動戦闘が得意でそのすばやい動きで敵を倒していく

クリスティナ・アルタード

・元キャラはＯＯのある人物だがまだ秘密ちなみに髪の色は薄緑（というか黄緑？）（これだけで誰かわかる気がするけどね）

１年４組所属で企業に属しているという変わった状況にいる
操縦の腕に関してはセシリア相手に初見で相性がよかったとはいえ１発しか攻撃を受けないですむほど高い

専用機は再誕（リインカーネーション）で様々な状況に対応できるよう様々な武装が多く搭載されている

設定集４　主人公以外のオリキャラ紹介（一部除く）（後書き）

今回は設定集となってしまいましたが

次回はいよいよ模擬戦の第２試合です

なるべく早く仕上げられるようにがんばって行きたいと思います

では感想・指摘などいつでもお待ちしております

それではまたお会いしましょう

第２６話　第2試合　高速機同士の戦い　そして第3試合　龍とモルガナ（前書

お久しぶりでございます
約１０日ほど更新できませんでした
理由としましてはリアルが忙しかったからなんですけどね

本当にタイミングが悪かったです

まあ、愚痴っても仕方ないんですけどね

それではお待たせいたしました２６話をお楽しみください

あ、あとあとがきにアンケート結果も載せてあります

第２６話　第２試合　高速機同士の戦い　そして第３試合　龍とモルガナ

アリーナ上空そこには白式を纏った一夏とフラッグ（カスタム機）を纏ったグレイシアがいた

「この前は助けてもらったけど今日は手加減なしで行かせてもらうぞ！」

「いいだろう少年！このグレイシア・エーカー。君の力しっかりと受け止めさせてもらう！！」

そして互いに加速しアリーナ中央で『雪片弐型』と『プラズマブレード』が激突する

「うおおおーーー！」

「はあああーーー！」

そのまま互いに切り結んでいく

『あわわ・・・ま、まだ試合開始の合図出してないですよ～（泣）』

『まったくあの馬鹿共が・・・』

山田先生が泣きながら放送を行い千冬はあきれ返っている

そんな２人の様子にアリーナにいる一夏とグレイシアは気づかずに

戦いを続ける

何度も切り結んでいるうちにグレイシアが隙を突いて一夏に蹴りを入れて吹き飛ばす

「クッ！？」

一夏は衝撃で吹き飛ばされてしまうがすぐに態勢を立て直しグレイシアの方を向くとグレイシアは一夏に対して『試作リニアライフルＸＬＲ－０４』を破壊力の大きい単発モードで放つ

それを一夏はギリギリのところで避け左手にビームマシンガンを出現させてグレイシアに向けて撃ち始める

「ムッ　かわすだけでなくそのまま反撃してくるか、やはり君は才能があるようだな。しかし！そう簡単に当たってやる気はないぞ少年！！」

そういって3次元軌道でマシンガンの嵐をかわしていく

それでもあたりそうなときは左手の『ディフェンスロッド』を回転させて弾いてゆく

それを見て一夏は右手に『雪片二型』、左手にショートブレードを展開して瞬時加速を発動させて一気にグレイシアに近づき2本の武器を相手に向けて振るう

（大型ソード『グラム』はこの間大破してまだ治っていない）

そんな一夏の行動に対してグレイシアは逃げるのではなく『プラズマブレード』を左右に展開してそれを迎え撃つ

そしてお互いの武器がぶつかり合う瞬間

「白鳳『零落白夜』だ！」

《わかってます『零落白夜』発動！》

一夏は零落白夜を瞬時に発動させてグレイシアの持っている『プラズマブレード』の片方のエネルギーを消し去って勢いそのままに本体も斬りつける

当然ここで『零落白夜』を発動させてくると思っていなかったグレイシアはそのまま一夏の一撃を受けて地面に向かって落ちていく

「よしっ！うまく行ったな。ナイスタイミングだったぞ白鳳」

《当然ですよマスター。私はマスターの補助をするために母様に作られたのですから》

「ああ本当にお前はよくやってくれてるよ」

一体何をしたかというとただ単に一夏が突撃する前に白鳳に『零落白夜』をいつでも発動できるように準備をさせておいて武器がぶつかり合う瞬間に発動させただけである

ちなみに何故普段からこのように使わないかというと一夏本人が使用する時には一端展開装甲を展開させてエネルギーを放出してから切りかかるため最初からエネルギーを放出しているため大きな出力で相手を攻撃できるが今回のように白鳳に瞬間的に発動させると大きなエネルギーを放出できないためエネルギーの消費量は普通に使うより少ないのだが『零落白夜』の威力は普通に使うよりも抑えられてしまうのである。

（簡単に言うと一夏が使う場合は一撃必殺、白鳳が使うときには今回のような奇襲や相手のエネルギー攻撃を避け切れなかったときの緊急用という感じ）

一夏が白鳳に対し感謝を述べていると先ほど落ちていったグレイシアのいる方向から笑い声が聞こえてくる

「フフフ・・・はーはっはっはっ！！　さすが少年だ、私が思ったとおり君はすばらしい存在だ。ここからが本当の勝負だぞ少年！！」

「望むところだ！！」

「では行くぞ！！」

そういうとグレイシアは機体の腰の部分に2つの砲身を展開させて一夏に狙いを定めて攻撃を放つ

「早いけどこの距離ならかわせる！！」

一夏は飛んでくる砲撃を距離が開いているためあっさりと回避するが回避した先には回避先を読んだグレイシアからの2発目の砲撃が迫っていた

「なっ！？回避先を読まれた！？」

「少年には実戦経験が少ないから回避先を読み取るのは簡単なのだよ」

一夏は2発目の攻撃を避けることができず直撃してしまう

「まだまだこの程度では終らないぞ少年！！」

直撃したことで動きが止まった一夏に対してそのまま連続で攻撃を加えていくグレイシア

大体5発くらい一夏に直撃すると一夏はわずかな隙をついて瞬時加速で何とか砲撃の嵐から脱出する

「はぁはぁ、さすがにきついぜこれは・・・白鳳残りエネルギーは？」

《それほど残っていません。あの攻撃はかなりの威力でしたから残ったのは『零落白夜』を全力で1回使用できる分しか残っていません》

「そうか。ならこれが最後の攻撃だ！」

そういって一夏は『零落白夜』を発動させて瞬時加速でグレイシアに向かって突撃する

それをみてグレイシアは

「面白いぞ少年！ならば私も乗るしかあるまい！！」

といい、同じく『プラズマブレード』を展開して一夏に向かって瞬時加速を行う

その行動をアリーナで観戦していた生徒たちは先ほど『プラズマブレード』はかき消されたのになぜそんな行動をとるのか不思議に思っていた

ただ1人、結を除いて・・・

「（まさか、ここであれを使うのかグレイシア！？わざわざ乗ってやる必要もないだろうにそこまで一夏のことが気に入ったか！）」

結はグレイシアと何度も訓練をしているためこれから彼女が何をしようとしているのかわかっていたがここで使うとは思っていなかったようである

そして2人の距離が詰まり一夏は『雪片弐型』を上段から思いっきり下に向けて振り下ろす

それをみて結以外の生徒はあの状態では防いでもエネルギーを消されて終了だと思っていた

「え？」

しかし一夏が『雪片弐型』を振り下ろした先にはグレイシアは存在せず攻撃は空振りに終ってしまった

「き、消えた！？瞬時加速中なのに一体どこに消えたんだ！？」

一夏は突然相手が消えたことに驚くが次の瞬間には突然影に覆われていることに気がついた

「まさか上！？」

影に気がついた一夏はすぐに上を向くがその行動はすでに遅くそのときにはグレイシアが一夏に向けてブレードを振り下ろしていた

「もらったぞ少年！！」

そのまま上空からの一撃は一夏に直撃して『白式』のエネルギーを0にした

『試合終了　勝者　グレイシア・エーカー』

そしてアリーナ内には勝者を伝えるアナウンスが響いていた

Ｓｉｄｅ　ユウ

模擬戦の2試合目が終ってアリーナの観客席に一夏たちが戻ってきました

「みんなわりぃ、負けちまった」

「一夏さんそれは仕方ありませんわ。武器が完全ではなかったのですから」

負けたことを謝る一夏に対して武器が完全ではなかったのだから仕方ないというセシリア

「いや、仮に武器が直っていてとしても俺はたぶん負けてたさ」

「一夏のクセにずいぶんといさぎいいわね」

「おい鈴！！俺のクセにってのはどういう事だ？」

「それにしてもグレイシアあんたさっきやったあれってどういうことよ？瞬時加速中に軌道変えたようにしか見えなかったんだけど？」

そうあれはどうみても瞬時加速中に軌道を変えたようにしか見えなかったんですよね
仮に2回瞬時加速をつかったならあのタイミングでは使うのが遅くてかわせなかったはずですからね
みんなも気になるようで近くにいたほぼ全員がグレイシアに詰め寄ります

「鈴！！無視するな！！」

「うっさい一夏！！」

「うるさいですわよ一夏さん！！」

「一夏静かにしてくれるかな？」

「一兄今から話し聞くんだから黙ってて！！」

「うるさいぞ一夏もう少し静かにできんのか！！」

鈴ちゃんに文句を言いますが逆にうるさいといわれて撃沈する一夏・・・哀れですねｗｗ
ちなみに上から鈴ちゃん・セシリア・シャル・雪ちゃん・箒ちゃんです。

ついでに他の人たちはというとラウーは興味ないといわんばかりに観客席の端っこの方に座ってますね・・・もうちょっと協調性を持たせないといけませんね

簪ちゃんとクリス（第2試合の間にそう呼んでいいといわれた）は苦笑いしながらこの光景を見ています。

そして結は・・・寝てますね。さっきまで起きて試合見てたのにいつの間に寝たんですか?そもそも普通寝ますか?まあ今はおいておきましょう。

「それでグレイシアさっきのあれは一体何なんですか?」

このままじゃ情報を得られそうにないので私が直球で聞きます。

「あれは私がアメリカにいたときに行えるようになった瞬時加速中に方向転換する技術だよ」

「そんなことが可能なのですか?」

「ああ、私が使った技法ならば肉体にそれほど負担を掛けずに方向転換が可能だ」

「そ、そんなこと可能でしたなんて・・・」

「し、知らなかったわ・・・」

瞬時加速中に方向転換が可能であると知って微妙にショックを受ける鈴ちゃんとセシリア。

まあ仕方ないですよね、普通体にとてつもなく負担がかかるからそ

んなこととしようとしませんからね。
それにしても今は関係ないですが鈴ちゃんは抱き心地いいですね～
（ユウの現在の状況：先ほどの話で落ち込んだ鈴に一瞬で近づいて鈴を抱きかかえている）
などと思っていると
『それではこれより第3戦目を行う』
千冬姉様の放送ですね次の相手は誰と誰でしょうかね？
『第3戦目の組み合わせは上條結と凰鈴音だ。両者準備をしてアリーナまで出て来い』
「って!?ユウこれから私の試合なんだから離しなさいよ!!」
むう・・・鈴ちゃんの番ですか名残惜しいですが離すとしましょう
そう思い本気で名残惜しそうに鈴を離すユウ
その様子をみていたある2人の人物はユウに対して冷たい視線を向けていた
「ブルッ!?　なんだか急に寒気がしましたね一体なんでしょうか？」
その視線の人物にユウは気がつかないのであった
Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

鈴が試合の準備を終えて『甲龍』を展開させアリーナまで出るとそこにはすでに機体を纏って空中に佇んでいる結がいた

「へぇ～結それがあんたの専用機なんだ」

「そうだこれが私の専用機『ラファール・リヴァイブ　カスタム？』改め『モルガナ』だよ。まあ、武装の一部は未完成だけどな」

「『ラファール・リヴァイブ　カスタム？』・・・装甲は黒いけどカスタム？ということはカスタム？であるシャルルの機体となんか関係あるわけ？」

「まあ関係はあるがそれは今は必要ないでしょ？」

「そうね確かに今は勝負に関係ないわね。それと武装が未完成でも手加減しないわよ結！！」

「それは望むところだ。たとえ武装が完成していなくても打ち貫くまでさ！！」

『それでは試合開始してください』

試合が始まると鈴はあらかじめチャージしておいた『龍砲』を相手に向けて2発発射する

それに対して結も負けじと右手に展開していた『オクスタン・ライフル』からレーザーを3発発射する

それぞれが放った攻撃は互いにぶつかり合い弾けて煙が巻き起こる
が結の撃った3発目のレーザーがその煙を吹き飛ばして鈴に向かっ
ていく

「甘いわよ！！」

しかしそれを鈴は『双天牙月』を連結させ目の前で回転させること
によって弾き飛ばす

「さすがにそう簡単にオープニングヒットをさせてはくれないかさ
すがだな鈴音！」

「当たり前よ！それにまだまだ行くわよ！！」

鈴はそのままチャージした『龍砲』を連続で結に向けて放ち続ける

「クッ　砲身も砲弾も見えないというのはさすがにやりずらいな」

「そういいながらも1発も当たってないあんたが恐ろしいわよ！！」

「確かにやりずらいが1対1ならかわしようがある」

このとき結はハイパーセンサーで鈴の目を見て発射のタイミングを
読んでかわしていた
武術を扱うものならではのかわし方である

「ああもう！いい加減当たりなさいよ！！」

「断るしそろそろこちらも行かせてもらう」

そういって鈴の周りを旋回して『龍砲』を避けながら『オクスタン・ライフル』を構えてレーザーと実弾を発射していく

それを見て鈴も結の攻撃をかわしながら攻撃を行っていく

そのまま互いに決定打を与えられないでいると

「このままじゃ倒せないわね・・・危険だけどやるしかないわ。見たとこ実弾の方は6発ごとにリロードが必要みたいで一瞬隙ができるから次のリロードのときに仕掛ける！」

そう考え鈴は『双天牙月』を連結させてチャンスを待つ

そして前回のリロードから6発目の弾が発射されたときに瞬時加速を使って一気に懐まで近づく

「はあああーーーー！！」

「ここで仕掛けてくるかだが・・・！」

近づいてくる鈴に対してリロードを終えた砲身を向けて1発放つがそれははずしてしまい鈴の左脇を通過する

「ッ！　しまった！」

「チャンス！！喰らいなさいーーーー！！」

そのまま懐まで近づいた鈴は『双天牙月』を上段から振りかぶって結に叩きつける

「あああーーーっ!?」

ドゴーーーン

そのまま吹き飛ばされた結は地面に激突しそこに鈴は追撃を加えようとチャージしておいた最大級の『龍砲』を放とうとする

しかし・・・

バキッ!

そんな音とともに背後から鈴と『龍砲』を衝撃が襲った

謎の衝撃とともに『龍砲』は損壊し先ほどまでチャージしていたエネルギーが『龍砲』とともに一気に爆発して鈴を吹き飛ばす

「きゃぁぁぁーーーー!?」

吹き飛ばされた鈴は結と同じように地面に激突してしまう

「うう・・・い、一体何なのよ!?」

突然の出来事に現状を理解できない鈴

何とか体勢を立て直して結びの方を見るとそこには鈴と同じく体勢を立て直した結がいた

「あんた一体何をしたのよ?」

あまりにも突然すぎて試合中にもかかわらず相手に聞いてしまう鈴
そんな鈴に対して結は口元を緩めながら答えた

「ただ銃弾を壁で反射させただけだ」

「な!?そんなこと簡単にできるわけないでしょ!!」

「普通ならばそうだが私は銃弾反射は元々できるのでＩＳの銃弾でも何とかなったわけだよ。まあ、ぶっつけ本番だったがな」

「こんな状況でそんな分の悪い賭けをするなんてあんた正気?」

「残念だが私は分の悪い賭けは嫌いじゃなくてね」

「そうなんだ、だけどまだ勝負はついてないわよ。そして勝つのは私!」

そういうと鈴は『双天牙月』を分離させて両手に持ち変える

「残念だが勝つのはこちらだよ『二天絶刀』来い!『月影』!『月華』!」

それに対し結は両手に2本の刀を呼び出し両脇に鞘をつけている

「「いくぞ!!」」

その瞬間互いに瞬間加速を使いぶつかり合う

「「はぁぁぁーーー!!」」

鈴は分離させた『双天牙月』ですばやい連激を放っていき結はその攻撃を2本の刀ですべていなしている

そのまま打ち合いを続けていると結がわずかに腰を落とした

それを見て鈴はチャンスと思いさらに攻撃を加えようと武器を振るうが・・・

「桜花流　三の型『裂空』！」

結が右足を振り上げて技を放ち鈴の持つ左手の武器ごとシールドを切り裂き一気に『甲龍』のエネルギーを削り取る

「ああーーー！？」

「これはおまけだ全弾もっていけ！！」

止めとばかりに隙ができた鈴に向かって両肩に展開した『サヴァイシブ・クレイモア』からベアリング弾をぶつける

当然あの状態からかわせるはずがなくすべて鈴に直撃して残っていたエネルギーを一気に0にする

『『甲龍』のエネルギー切れを確認　勝者　上條結』

ここに3戦目の勝者が決まったが観客席にいるユウだけはなにやら険しい顔をしているのであった

ル「以上第２６話をお送りいたしました。本当に遅れて申し訳なかったです」

結「まったく次からはなるべく早く上げるかお知らせとして書いておくべきだと思うぞ」

ル「そうなんだよね～でも今回は自分でもここまで後れるとは思わなかったよ。まあ、それは置いておきまして今回は最初にアンケートの結果発表です！」

結「今回は回答者がいてくれたんだったな」

ル「そうなんだよ例え少なくても感想をもらえるとやる気が上がるんだよ！！」

結「その割りに更新は遅かったがな」

ル「グハッ！　そ、それはいわないで・・・（泣）」

結「では早速結果発表と行こうか」

ル「アンケートの結果書くのは・・・１のＩＳ世界編と５のデジモン編に決まりました」

結「１はともかく５は意外だったな」

ル「そうだね。まあ、私としてはデジモン好きだからいいけどね。

ちなみにデジモン編は０１の時代を書く予定です。ＩＳの方はラウラ編書こうとしたんだけどちょっと問題がね」

結「？　何かあるのか？」

ル「書くのはいいんだけどありきたりな展開のものにしかなる気がしないんだよ。おかげでこのままラウラ編書くかギャグ話を書くか悩んじゃうんだよ。ちなみにギャグだと声優ネタや誰がどうなるかわかりやすい他のアニメキャラと交換くらいしかまだ思いついてない。こうなるとどっちがいいのやら・・・」

結「情けない作者だな。ちなみに記念話はいつごろ掲載するんだ？」

ル「大体今やってる模擬戦があと3話位で終るからその後に掲載するかシャルの男装ばれた後に掲載する」

結「ちゃんと掲載しろよ？」

ル「ちゃんとやりますから大丈夫です！！」

ル「ではここからは今回の解説をしていきます」

結「最初は一夏とグレイシア戦のグレイシアの機体だな」

ル「あの機体は簡単に言うとフラッグにインパルスを組み合わせた」

結「理由は？」

ル「１．あのままだと機体に威力が足りないと思った　２．あの換

装システムがあるから第3世代機に相当するということにしたかった　の2つかな。ちなみに通常状態がフォースに相当する設定」

結「次に瞬時加速のときの方向転換はまさか・・・」

ル「元キャラのハムさんのグラハム・スペシャルからいただきました」

結「やっぱりか」

ル「まあ、変形を方向転換に変えただけだけどね原作だと無理やりやると危険らしいしね」

結「次は私の機体だな」

ル「現時点で使える武装はスパロボのアルトアイゼンのクレイモアとステーク、ヴァイスのライフルと?本の刀だけだね」

結「なぜ刀の本数の部分を隠した?」

ル「ネタバレだからさ。と言っても模擬戦の間にわかるけどね。そしてトーナメントまでには残りの武装も完成させるよ。下手すると名前でわかるけどねｗｗ」

結「まあいい今回はこんなところだな。ではあとがきが長くなったが今回も読んでくれてありがとう」

ル「感想や誤字脱字・指摘などいつでも待ってます。そしてくだされば私のテンションが上がります」

ル・結「「（それ）ではまた次回お会いしましょう（会おう）！！」」

第27話　第4試合　雪と疾風　第5試合　銀の姫と「最強」の妹（前書き）

今回で1回戦?はすべて終了です

番外編のラウラの話が全然進まなくて遅くなりました

ごめんなさい

あとあとがきにちょっとアンケートがあるのでよければご協力をお願いします

それではどうぞ～

第27話　第4試合　雪と疾風　第5試合　銀の姫と「最強」の妹

Ｓｉｄｅ　ユウ

現在アリーナの観客席は先ほどの試合の興奮さめ止まない状況にあったが
そんな中でユウだけは試合の途中から一夏たちから離れた場所でその試合を眺めていた
その左目を目を普段の赤から白に変えて・・・

「（・・・あの刀ってどう見てもあれですよね？まあ、世界が違ってもあれが存在することは不思議ではないんですけど、さすがに驚きましたね。でもあの技はどう考えてもあれですよね？何で存在するんでしょうか？まあ、今は考えても仕方ありませんね）」

そこまで考えてユウは力を解除して自身の左目を白から元の赤に戻し一夏たちの元に戻っていった

そしてユウが一夏たちのところまで戻るとそこにはすでに鈴たちが戻ってきており鈴は一夏たちと結はグレイシアと話していた

「お？戻ってきたのか、途中からどこに行ってたんだよ？」

「なによユウ？あんた私の試合見てくれてなかったわけ？」

戻ってきたユウに対して一夏がいったことを気にして鈴が話しかけてくる

「いえいえ、ちゃんと見てましたよ鈴ちゃん。それにしても負けて

しまって残念でしたね」

「ウッ！？い、一々負けたこと穿り返さないでよ！ユウのクセに生意気なのよ！しかも胸大きいし！その胸少し位私によこしなさいよ！」

「いやいや！？それって一体どういう理屈ですか鈴ちゃん！？さすがに横暴すぎますよ。というか無理ですからね！？」

「う、うるさいわね。幼馴染なんだからそれくらいいいじゃないの！そもそも雪奈もだけど何で私の幼馴染は胸大きいのが多いのよ！！」

・・・鈴ちゃんすでに意味がわかりませんよ？

それとなぜか簪ちゃんの方から殺気が送られてくるんですけど気のせいですよね？

などと思っていると一夏が

「それにしても鈴を倒すなんて結のやつ強いんだな」

などと言ってきました。

一夏、今鈴ちゃんの前でそんなこと言ったら・・・

「あ、あんなの偶々よ偶々、私が最初から本気で行けば負けなかったわよ！」

「それって最初から本気で行かない鈴が悪かったんじゃないのか？」

・・・まったく一夏は本当に馬鹿ですねここは普通慰めるところじゃないですか？

とりあえず殴っておきましょう

バキッ

「い、いってーー！？いきなり何するんだよ！！」

「馬鹿なことしか言わない一夏に制裁を加えただけですよ」

「何だよいつ俺が馬鹿なこと言ったっていうんだよ」

「わかってないのがまた性質悪いですね・・・」

などと馬鹿一夏と話して入ると放送が入りました

『これより次の試合を始めますが時間が押してきているため第２アリーナも使って第４試合と第５試合を同時に行いたいと思います。なお試合の様子はモニターに表示させますので移動する必要はありません』

２試合同時進行ですか一体どんな組み合わせになるんでしょうかね？

『組み合わせは第４試合がシャルル・デュノアさんと織斑雪奈さん
第２アリーナでの第５試合が更識簪さんとユウナスフィール・フォン・アインツベルンさんです』

・・・簪ちゃんとですか確か機体が完成したといっていましたね。

油断はしないようにしませんとね。

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

～～第１アリーナ～～

アリーナ上空そこには雪奈とシャルがＩＳを展開して互いに向き合っていた

「そういえば他のみんなとは練習で戦ったけどシャル君とはまだやってなかったね～」

「そうだねまさかこんな形で雪奈とはじめて戦うとは思わなかったよ」

２人は互いに笑みを浮かべながら試合開始の合図を待っていた

雪奈の手にはビームピストルが２丁握られシャルルは右手にアサルトライフル、左手にシールドを装着している
当然互いにセーフティーははずしてある状態だ

『それでは試合開始してください』

「行くよ『白雪』！！」

「いくよ『ラファール・リヴァイブ』！！」

その声と同時に互いに武器を相手に向けて構えて引き金を引き合う

「乱れ撃つよ～」

「悪いけど落ちてもらうよ！」

雪奈は両手のビームピストルを連射してシャルルを攻撃していく
それに対してシャルルはその攻撃を冷静にかわしていきどうしても
避けられそうにないものはシールドで防ぎながらアサルトライフル
を雪奈に向けて放つ

しかし雪奈は放たれた銃撃が自身に迫ってこようとも避けようとす
るそぶりすら見せない

その行為にシャルルは少し驚くがそのまま攻撃を避けながら放ち続
ける

そして雪奈に銃弾が直撃する寸前に両肩についていたものが機体の
前までやってきて銃撃を完全に防ぐ

「！？」

予想外の出来事に一瞬動きが止まってしまうシャルル

雪奈はその隙を見逃さず

「隙ありですよ～」

前面に持ってきシールドを元の位置に戻しいつの間にか展開してい
たライフルを構えてその引き金を引く

「今度は狙い撃つよ～～！」

そういって放たれた攻撃をシャルルは避ける事ができずに盾で防ぐ。

ガキンッ！ガキンッ！

2発までは防ぐ事ができたがその直後にミサイルが8発飛んできてそのままシールドに直撃し機体を中心に煙に包み込まれる

「っ！威力は高くないけど周りが見えなくなった、目くらましが目的！？」

相手の目的が目くらましであることに気がついてこのままこの場にとどまるのは危険と判断して煙から一気に飛び出る

その直後に先ほどまでシャルルがいた場所をビームが通過する

「あ、危なかった、あのままあそこにいたら直撃だったよ」

そしてシャルルはそのまま先ほどのビームが飛んできた方向を見るがそこには大型の武器を構えた雪奈の姿があった

「高濃度圧縮粒子全面開放！大型ビームバズーカ　バーストモード目標を消滅させるよ！！」

そしてその声とともに発射口から放たれる圧倒的なビームの奔流それをシャルルは何とか避けるが左手のシールドが持ってかれてしまう

「ううん、なんて威力なんだシールドが一瞬で壊されるなんて「トランザム」・・・え？」

突然聞こえた声にそちらを振り向くと機体を赤く染めた雪奈がショートブレイドをもってこちらに向かってきていた

「は、はやい！？でも」

それでもシャルルはあわてずに得意の高速切替（ラピッド・スイッチ）ですぐさま近接ブレードの『ブレッド・スライサー』を呼び出して迎え撃つ

「喰らってください！」

「お断りだよ！」

剣と剣がぶつかり合うが数秒拮抗しただけでシャルルの持っているブレードは弾かれる

ブレードが弾かれて体勢が崩れたシャルルに一瞬で両手に展開したビームピストルの銃弾を撃ち付ける

「きゃーーー！？」

今の攻撃でさらに体勢が崩れたところに今度はライフルに持ち替えて一定の距離を保ってシャルルの周りを回りながらライフルを連射していく

「あはは！どうしたんですかシャルル君？こんなものですか？」

そういってライフルをしまい新たにショートブレイドを呼び出してそのまま地面に向けて切り飛ばす

ドゴーーーンッ

そのままなすすべもなく叩きつけられるシャルル

「うう、つ、強い・・・ここまでダメージを受けるなんて・・・」

何とか体勢を立て直そうとするがその前に雪奈が攻撃を放つ

「ビームバズーカ通常モード。これで終わりだよ～」

その一撃はシャルルに直撃し盛大な煙を上げる

「これで私の勝ちかな～。このまま勝って一兄と・・・」

勝利を確信して笑みを浮かべる雪奈

ここで一旦舞台は第2アリーナに移る

～～第2アリーナ　試合開始直前～～

アリーナにはすでに今戦う2人がＩＳを纏って待機していたしかし・・・

「か、簪ちゃん？な、何でそんなに機嫌が悪いんですかさっきまで普通でしたよね？」

「・・・怒ってなんかいない。ただ・・・ユウちゃんは私を置いて鈴とじゃれてたのが気に入らないだけ・・」

「それどう考えても怒ってますよね!?と、とりあえず落ち着いてくださいよ!?」

「・・私は落ち着いてる。とりあえず最初にその大きな胸を切り取って私のと交換をする・・・」

「こ、怖いですし、い、いってる事が無茶苦茶ですよ!」

「大丈夫・・痛くしないから・・・・・・たぶん」

「たぶんってそれ確実に痛いレベルじゃすまないですからね!?」

『それでは試合開始してください』

「・・ユウちゃん覚悟してね?」

「山田先生ーーーー!?もうちょっと空気読んでくださいーーーー!!」

ユウの叫びもむなしく試合は開始され簪の『打鉄弐式』の背中に搭載された2門の荷電粒子砲『春雷』のうち1門がユウに向けて放たれる

「ちょっ!?待ってくださいよ!?」

「・・待たない。試合はもう始まってるんだから」

突然の荷電粒子砲を上空に向かって飛ぶ事によって避けるが避ける先を読んでいたらしくもう1門の荷電粒子砲より追い討ちが放たれる

しかしその攻撃もあっさりと避けられる

「ああもう！こうなったら簪ちゃんには悪いですがさっさと終らせます！」

「ムッ、・・今の言い方にはさすがにカチンと・・来た」

「それはちょっと心が痛みますが今はおいておいて一気に行きますよ！」

「絶対に勝って・・言う事聞かせる」

「どういう理屈ですかそれは！？」

「ふふふ・・・ユウちゃん覚悟」

「絶対お断りです！！」

そういってユウは両腕に『龍の爪』展開させて荷電粒子砲を避けながら高速で接近していく

「！！・・さすがに速いね。・・けど！！」

それに対して簪は近接武器である長振動薙刀『夢現』を呼び出して迎え撃つ

「はああーーー！！」

「やああーーー！！」

ユウは目にも止まらぬ速さで爪を振るっていくがそれはすべて簪の薙刀によって刃や柄で流される

「クッ！やっぱり強いですね簪ちゃんはならこれです！！」

そういうとユウは両腰についている『ブレードビット』を飛ばそうとするが

「・・甘いよ」

それは射出前に『夢現』によって両方とも腰から切り離されてしまう

「うそ！？」

「隙あり！！」

そして驚いて動きの止まったところに薙刀の上段切りを放つ

「まだです！」

それをユウは両手の『龍の爪』をつめの部分をクロスさせることによって防ぐ

「残念でしたね簪ちゃん」

「・・フフフ」

防がれたというのに何故か笑みを浮かべる簪

「何がおかしいんですか？」

「残念だけど・・ユウちゃんは１つ忘れてるよ・・『春雷』はただの薙刀じゃなくて・・超振動する薙刀なんだよ」

「あ！」

「今頃思い出しても・・遅いよ」

ザシュッ

簪の持つ『夢現』はユウの『龍の爪』を切り裂きそのまま本体にダメージを与える

《機体損傷　実体ダメージは極小　戦闘に問題なし》

その直後与えたダメージを知らせる音声が鳴り響くがそのダメージは予想とは違いほとんど入っていなかった

「え？・・ど、どういうことなの」

全然ダメージが入っていない事に驚きの声を上げる簪

それに答えるようにユウが口を開く

「ふう～、危なかったですね。直撃もらえばさすがにこの子でも危なかったですよ」

「・・まさかあの距離で・・避けたの？」

「まあ、避けたというより皮1枚切られたといったところですかね」

「・・いくらユウちゃんでもあの距離からの予期せぬ事態ならかわせないはずなのに・・・」

「その理由は簡単ですよ。私はいつでも半歩下がれるように心構えてますからね。さっきは半歩後ろに下がってダメージを殺しただけです。この場合は半歩というかスラスターをちょっと吹かせたが正しいですがね」

「・・やっぱりユウちゃんは強いね・・でもわたしも・・負けない！」

「簪ちゃんにそういってもらえるのは嬉しいですが私も負ける気はありませんよ！」

そういうと互いに距離をとる

「ユウちゃんには悪いけど・・これで一気に・・終らせる」

先に動いたのは簪で『打鉄弐式』に装備されているミサイルポッド『山嵐』を展開させる

「（あれは一度に最大４８発ものミサイルを撃てるあの機体最大の武装！でもマルチロック・システムはおそらくデータが足りなくて現状では未完成のはずです。なら避ける事も簡単）」

などとユウは考えているがその考えは次の瞬間裏切られる

「行って『山嵐』」

その掛け声とともに４８発のミサイルが様々な軌道を描きユウに向かってくる

「ええーーー!?なんでそのシステムが完成してるんですか!?私が手伝っても３ヶ月はかかると思ってたのに～～」

４８発のミサイルに追いかけられながらも翼を広げて高速で回避していく

「・・やっぱり驚いてる。結の言った通りだよ」

「結ってあの子ですか一体何なんですか～～～!?」

色々と謎が多い結に対して色々と思う事はあるようだが今は試合中である

「ああもう数が多すぎますよ!こうなったら『バルムンク』!」

そう叫ぶと展開した大剣にエネルギーを纏わせてそれをミサイルに向けて放つ

ドドドドドッ!

その一撃によって半分近くのミサイルが破壊される

「次ですっ!」

そしてそのまま残りのミサイルに攻撃を加えようとするがその前にミサイルが爆発し煙の向こうから２つの光がユウに向かって飛んで

くる
それをユウはなんとか避けるが手に持っていた『バルムンク』は今の光に破壊されてしまう

「ッ！ミサイルを目くらましにして荷電粒子砲で攻撃するなんて考えましたね。でも私はまだ落ちませんよ！」

体勢を立て直して簪の方に向き直るとそこには再び『山嵐』を構えた簪がいた

「え？再装填早過ぎない？」

「これも・・結が協力してくれたおかげ・・だよ」

再び発射される４８発のミサイル

「また結ですかーーー！！」

再び叫んでミサイルとの追いかけっこが始まる

「（って本格的にまずいですよ。残ってる攻撃方法がエネルギー系か８基のビットしかないです。ミサイルにビット突撃させると使い捨てにもほどがありますし、こんな事なら早くあれを完成させるべきでした！！）」

そう考えてるうちにも迫ってくるミサイルの嵐

「とりあえず数を減らさないといけませんね『アサルト・レイ』」

高速で移動しながら追ってくるミサイルに向けて小型のエネルギー

弾を連射する

その攻撃によりミサイルは爆発していくがそんな中を簪の放った荷電粒子砲が再び迫ってくる

「しつっこいですよっ！！」

そういって身を翻しながら避けて右手にエネルギーを集中させてそれを一気に放つ

「まとめて消し飛びなさい『レーヴァテイン』！！」

広範囲に放たれたエネルギー波はそのままミサイルを破壊する

「ついでにこれはおまけです『グングニル』！！」

そして煙が漂っている中簪がいる場所に向けてエネルギーの槍を放つ

その一撃は煙を吹き飛ばし簪に迫るがなんと簪は驚く事に『グングニル』に向けて荷電粒子砲を放つ

「そんな事をしても一点集中型の槍はその程度じゃ破壊できませんよ」

「・・それは知ってる私の目的は別」

一瞬だけ拮抗したが槍は荷電粒子砲を消し去りそのまま簪に向かう

このときユウは確実に当たると思っていたがその予想はまた裏切られる

なんと簪は『グングニル』を避けたのである

「!?さっきの目的はわずかでも速度を殺すのが目的ですか・・なら爆発しなさい!!」

避けられたのは予想外だがすぐさま槍を爆発させる事によって追撃をかける

しかし簪はそれすらも予想していたかのように瞬時加速に入る

しかもただの瞬時加速ではなく『グングニル』というエネルギーの塊が爆発したときのエネルギーを利用した最大級の瞬時加速である

「いっけーーー!!」

「!!『レーヴァテイン』」

最大級の瞬時加速を行った『夢現』を構えた簪と再び『レーヴァテイン』を作り出したユウが激突する

しかし圧倒的速度で突っ込んできた簪と拮抗できるはずもなく2人はそのままアリーナの壁に激突する

「つぅ〜〜、なんて無茶するんですか一体!?」

「これぐらいしなきゃユウちゃんに勝てないからね」

壁に激突して互いにダメージはあるが武器はぶつかり合ったままであった

密着状態が続いたが簪が先に動いた

『春雷』を展開させてゼロ距離で砲撃を放とうとしているのである

「させません！！」

そういって『春雷』に向けて『アサルト・レイ』を放ち破壊する

「きゃああーーー！？」

「くううーーー！」

爆発の衝撃で2人の距離が空いてしまう

ユウはその隙を見逃さずに『レーヴァテイン』を開放し簪にたたきつける

「ああーーー！？」

直撃をもらい体勢を崩してしまう簪（威力は顕現させた時間に比例して下がっていく）

「これで・・・終わりです！！『エターナル・ブレイカー』！！」

その一撃は簪に直撃してこの試合に決着をつける

『勝者　ユウナスフィール・フォン・アインツベルン』

「とりあえず後で結に色々と聞かないといけませんね」

こうして第5試合は終了したのであった

舞台は再び第1アリーナへ

～～第1アリーナユウたちの試合が終る少し前～～

現在アリーナには機体の色が白に戻った雪奈が試合終了の合図を待っているところであった

「おかしいな～?試合終了と流れないという事はまだ終わってないという事だよね～あれが直撃して耐えられるとも思えないんだけど・・・仕方ないか～」

そういってミサイルをシャルルがいる方に向けて放つ

しかしそのミサイルが爆発する前に狙った地点からシャルルが飛び出してくる

「やはりまだ動けたんですね～流石代表候補生といったところでしょうか」

「最後の砲撃をシールドで防げなかったら僕の負けだったよ」

そういったシャルルの腕には先ほどまでとは違った盾が装備されていた

「だけどこのまま一気に終らせてもらうよ」

「残念だけど今度はこっちの番だよ」

そういってシャルルはマシンガンとライフルを呼び出してそれを連射しながら雪奈に向かっていく

「無駄だよ！私にはこれがあるんだから」

雪奈はそういってシールドを全面に持ってきてシャルルの攻撃を防ぐ

そうしているうちにシャルルは雪奈の近くまでやってきて肩に装備されたミサイルを発射する

「そんな攻撃効かないよ！」

当然その攻撃もシールドで防がれる

しかし煙が晴れたときシャルルは目の前まで来ていた・・・盾の中から６９口径のパイルバンカーを出現させて

「え？それってまさか・・・」

「確かにそのシールドは硬いけどこれに耐えられる？」

「急いで逃げなきゃ！」

「残念だけど遅いよ！！」

逃げようとした雪奈にパイルバンカー別名盾殺し（シールド・ピアース）を叩きつけてそのまま装填されているすべての弾を撃ち付ける

ドカンッ！ドカンッ！ドカンッ！ドカンッ！ドカンッ！ドカンッ！

最後の一撃が入ると同時に地面に向かって叩きつけられる雪奈

シールドは3発目のときに破壊されてしまった

「うう、まだ負けてないよ・・・」

そういって起き上がろうとするがそこにシャルルは

「ごめんね。これでおしまいだよ」

両肩にミサイルとグレネードキャノンを展開してそれを一斉に放つ

「いやーーー！？」

ドカーーーンッ

それは真っ直ぐに雪奈に向かい盛大な音を立てて爆発しエネルギーを0にする。

『勝者　シャルル・デュノア』

こうして次の試合に進む6人が決まったのであった

次の試合に進むメンバー

第1試合勝者　クリスティナ・アルタード

第2試合勝者　グレイシア・エーカー

第3試合勝者　上條結

第4試合勝者　シャルル・デュノア

第5試合勝者　ユウナスフィール・フォン・アインツベルン

試合なし　ラウラ・ボーデヴィッヒ

以上6名

第27話　第4試合　雪と疾風　第5試合　銀の姫と「最強」の妹（後書き）

ル「今回はこんな感じでございました」

ユ「やっと1回戦終りましたかそれにしても4戦目の最後って」

ル「原作2巻のラウラ倒すシーンと同じ風に書いた」

ユ「いいんですかそれって？」

ル「いいのいいのどうせ原作とはトーナメント違う風にするから。そうそう今回雪奈には武装の元になったOOのキャラ2人のセリフを言わせてみました。あとバズーカのバーストモードは1試合1回しか撃てません。理由としてはバーストモードが1回で通常の3回分のエネルギーを消費するためです。通常の方は1試合4回が限界」

ユ「ずいぶん制限つけましたね」

ル「そうしなきゃ強すぎるからね。第5試合は特に説明要らないよね」

ユ「待ちなさい！『打鉄弐式』についてはどうしたんですか！！」

ル「忘れてた（汗）。まあ、原作との違いはすでにマルチロックが完成していることくらいかな」

ユ「私としては所々出てきた結が気になるんですが」

ル「その辺は本編で語るよ～ちなみに今回2試合同時にやったのは

大体1試合に30~40分かかるとして準備含みで40~50分という事にして3試合で120~150分かかってしかも模擬戦が始まったのは9時半という設定なためこのままじゃ昼に食い込むと考えたためです」

ユ「一応考えてたんですね」

ル「まあ、必要だったかはわからないけどね」

ユ「次は2回戦ですか・・」

ル「いや違うよ」

ユ「え?」

ル「とりあえずあんな激しい試合してISの消耗も激しいだろうから次の日にまわす事にした」

ユ「まわしたとしても1日じゃ元に戻らないんじゃ?」

ル「そこはご都合主義さ。次回は小説内で2日遅れのあのイベントをやるつもりさ」

ユ「どのイベントですか!?」

ル「みんなは大体予想つくと思いますがギャグ多めで書くかもしれないのでじかいをおたのしみに~」

ユ「本当にこの人は」

ル「ちなみに戦闘中にユウがカリスマブレイクのようなものを起こすのは仕様です。そもそもこの世界でカリスマ発揮した気がしないけどねｗｗ」

ル「では今回ちょっとしたアンケートをとります。内容は学年別トーナメントのペアの組み合わせです！！」

ユ「って考えてないんですか！？」

ル「すでに考えてはいるんだけど読み手の皆さんにも聞いたほうが面白い組み合わせ出てくる気がしてね。
現在確定しているペアは
1．一夏・シャルルの原作ペア
2．ユウ・ラウラの銀髪姉妹ペア
です。
他のメンバーは箒・セシリア・鈴・簪・結・雪奈・グレイシア・クリスティナです。この中でこんな組み合わせ面白そうだな～、この組み合わせネタになるんじゃない？などと思うのあれば感想の方かこれから書く活動報告の方にお願いします。」

ユ「その割りに半分がオリキャラで選ぶの大変だと思うんですが・・・」

ル「やっぱり模擬戦だけじゃ各キャラの性格とかわからないかな？」

ユ「あれ？まさか模擬戦の目的って・・・」

ル「ハッハッハッ！何のことかな？ちなみに締め切りは６月２９日の０時にします。オリキャラの方が多い上に文才なくてキャラの性格出せてないかもしれませんがどうか皆さんご協力お願いいたしま

す＞（＿　＿）＜」

ユ「普通の感想などもお待ちしておりますのでよろしくお願いいたします」

ル・ユ「「それではまた次回お会いいたしましょう」」

ル「そうそう書いてませんでしたけど「のほほんさん」を入れてくれてもいいですよ？　チラッ　チラッ

第２８話　正体がばれる貴公子と結の秘密（前書き）

前回の投稿から約１０日ぶりの投稿になりました。

ユウ「遅すぎですよ」

ごめんなさい

・・・最近前書きで言い訳ばかり書いてる気がしますが今回の言い訳は

1．リアルが本当に忙しくて書く時間がほとんど取れなかった

2．デュノア社の社長の扱いをどうしようか悩んだ

3．暑くて帰ってきてもすぐに寝る

の３つです。

ユウ「1と2は仕方ないですが3はもうちょっとがんばりなさいよ」

暑いの苦手だから無理

本当に今回は書く時間は無かったですし社長の扱いも決めるのが大変でしたよ

まあ、その割りに今回まだ社長出てこないんですけどね

ユウ「ダメじゃないですか！？」

今回は1話にまとめようとしたら字数がいつの間にか1万字超えてしまったため
切りがいいと思われる場所で切らせていただきました。

今回はご都合主義が入っております

それでは本編をお楽しみください

第２８話　正体がばれる貴公子と結の秘密

Ｓｉｄｅ　ユウ

どうも皆様方こんばんわユウです

急な挨拶で「いったいどうしたんだ」と思う方もいるでしょう

ちなみに今の時間はすでに夕方です。

あの後（前話）の試合が終って午後から普通に授業をしたあとに放課後に試合で簪ちゃんに聞いた話について問いただそうと結を探し回ったのですが結局見つからなくていつの間にか６時近くになっています。

その間に一夏たちは今日の試合での反省などをしたり明日の試合に向けて機体の調整をしたりしていたみたいですが私は参加できませんでしたよ。

これも結のせいですね。

ちなみに何故今このようなことをしゃべっているかというと

・・・・・実は今目の前に洗面所でバスタオル１枚の姿でいるシャルとそんなシャルを床に押し倒している一夏、そしてさっきまで私が探していた結がいるんですよ

ちなみに私も含めて全員まるで氷のように固まって誰も動けません

・・・どうしてこんな状況になっているんでしょうかね？

え？とりあえず詳しく説明しなさいって？

何でそんなことをしないといけないんですか？

ま、まあどうしてもというなら説明して差し上げますよ

・・・わかりました。そこまで言うのなら説明してあげないこともないんですからね！・・・私にはこれは似合いませんね

それでは簡単に説明しますと

私が結を探して放課後の時間を潰す

←

一夏たち：今日の反省ならびに明日試合がある人は機体の調整を終える

←

時間になったのでアリーナから出てきた一夏たちと私が合流する

←

山田先生に一夏だけ呼び出される

←

一夏、シャルに先にシャワー入っていいと伝えシャルの部屋の前で別れる

←

私が無駄だと思いつつも結の部屋を訪ねてみる

←

すると結が部屋にいたのでまずは放課後どこにいたのか聞いてみると整備室にいたといわれてがっかりする私（そんな簡単なことに気づかないなんて）

←

そして話を聞こうとすると私の中の直感がシャルの身に危険が迫ったと知らせてきて部屋を飛び出る（このときに何事かと思った結もついてきました）

←

そのままシャルの部屋に突入

←

一夏がシャルをシャワールームで押し倒している光景を見る↑今ここ

こんな感じで目の前の状況になったわけですがとりあえず

「イチカ？ナニヲシテルンデスカ？」

「お、落ち着いてくれユウこれは事故何だよ！？」

「ハッハッハッ私は落ち着いてますよ？とりあえず死んでください！！」

そういって一夏に近付きシャルから引き剥がして鳩尾に一発入れて下から掌底を顎に入れてとどめはハイキックです！！

「し、白・・・」（何がとはいわない）

ブチッ！

「そんなに死にたいんですね。だったら望みどおり殺してあげますよーーー！！」

そのまま気絶している一夏に止めを刺そうとしますがその前にシャルに後ろから抱きつかれて止められます

「わわわ!?落ち着いてよユウ!僕は何もされてないからさ」

「・・・シャルがそこまで言うのでしたら」

仕方ないですがとどめはさせませんでした

ですが代わりに

・・・せ、背中にシャルのやわらかいものが

「そ、それよりもシャル、その当たったるんですが、あとその格好は・・・」

「え?わわっ!?わすれてたよーー!?」

そういってシャワールームに戻っていくシャル

それにしてもやわらかかったですね~

おや?シャルがシャワールームから顔を出してますね

「ユウの・・・エッチ」

「グハッ!?」

顔を赤くして微妙に涙目な上に上目遣いでその言葉は反則ですよシャルーー

そう思いながら私の意識は落ちるのでした

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　結

「なんだこの状況は・・・」

私の部屋に話を聞きに来たユウが突然走り出したので何事かと思って追いかけてみれば
そこにはタオル１枚のシャルルに押し倒している一夏がいた

私が驚いて固まっていると今度はいち早く回復したユウがかなりの速度で一夏を攻撃して気絶させるし
その後にシャルルの一言で血を吐いて気絶するしで全く意味がわからない・・・

「って結!?何でここにいるのさ!?」

・・・気づいてなかったのか
確かに気づく余裕があったとはいえないがそれは流石に傷つくぞ

「はぁー・・・シャルルとりあえず早く着替えてくれすぐに目覚めないとは思うがいつ一夏が目覚めるかわからないのでな」

「わかったよ・・・じゃなくて!!あのね結これはその・・・」

「・・・これとはこの状況のことか?それともシャルルが女性であったことについてか?どちらにしろまずはこの２人を運ぶから着替えてきてくれ話はそれからだ」

「・・・わかった。ユウをお願いね」

そういって洗面所に戻っていくシャルル

それにしても「ユウたちをお願い」じゃなくて「ユウをお願いか」

一夏のことは忘れているのか先ほどのことで頭にきているのか

どっちにしても一夏が哀れすぎる気がするな

とりあえずユウを背負ってベッドまで運んでおこう・・・一夏は引きずっても平気だろ・・・男だしな

（理由になっていないうえに扱いの酷さがかわらない気がする）（作者）

ムッ？なんだか電波を受信したような・・・気のせいだな

そしてユウたちをベッドに寝かせてしばらくすると着替えを終えたシャルルがやってきた

その服装はスポーツジャージであった

「あ、ユウたちをベッドに運んでくれたんだ・・・（ボソッ）しかもユウが僕のベッドの上にいるよ少し嬉しいかな」

小声でそういって少し顔を赤くするシャルル

「シャルル小声で言っているから聞こえないと思っているかもしれないけどバッチリ聞こえてるからな」

「う、嘘！？」

「ほんとだ、まあ、シャルルがどういう風にユウを思っているか知ってるから気にしないがな」

「な、何で知ってるのさ！！」

「そこは気にするな。それよりも・・・」

「僕が何で男装しているかってことでしょ？・・・実は」

「その辺はユウが起きてからの方がいいのではないか？まあ、私はそろそろ部屋に戻るが」

「ええーー！？戻っちゃうの！？そ、それじゃあ僕のことをしゃべりに・・・」

「安心しろそんなことはしないさ。そもそもしゃべる気ならはじめてあったときに気づいていたのだからもっと早くしゃべっていたしな」

「え？はじめから知ってたってどういうことなのさ」

「あっ！・・・・・・なんのことだ？」

作者：（ここでまさかのうっかり発動ｗｗ）

うるさいぞ作者黙っていろ！

「フフフ、ちょっとどういうことかＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩしない

といけないみたいだね」

そういいながら目のハイライトを消してこちらに迫ってくるシャルル

「落ち着けちゃんと教えてやるからまずは座って・・・嫌！やめて！きゃーーー！？」

最近の言動からは考えられないほどかわいい悲鳴を上げる結であった

作者：（普段は男っぽいしゃべり方だけど驚いたときや悲鳴はかわいい声で鳴くのですｗｗ）

～～5分後～～

「ふ～～すっきりした」

「ひ、酷い・・・」

そこには何故か服が少し乱れた結と少し艶々したシャルルがいるのであった

「それで？最初から知ってたってどういうことなのかな？」

「しゃべる！しゃべるからその黒い笑みを浮かべてこっちに近づいてくるな！」

「ムゥ～仕方ないな～それでどうしてなの？」

「とりあえずユウが目を覚ましてからでもいいか？2度説明するの

は面倒だから」

「ちゃんと話してくれるならそれでもいいよ」

こうしてユウが目覚めるまで雑談しながら時間を潰すのであった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

～～先ほどの２人の争いからさらに１０分後～～

Ｓｉｄｅ　ユウ

う、う～～ん・・・ハッ！ここはどこですか！？

・・・・・どうやら一夏の部屋ですね、何でここにいるんでしょうか？

・・・（少女考え中）・・・

ああ、思い出しましたなんだかシャルに何だか危険が迫っているような気がして一夏の部屋に行って一夏を気絶させてシャルの上目遣いにやられて吐血して気絶したんでしたね

「あ、ユウ目を覚ましたんだ。もう起きても大丈夫？」

「やっと起きたかおかげでこっちは酷い目にあったのに・・・」

「何か言ったかな結？」

「にゃ、にゃにも言ってないです・・・」

一体気絶している間に2人の間に何があったんですか!?

「それでシャルはわかりますけど何で結までまだ残ってるんですか？」

「・・・最初に自分で聞きたいことがあるっていってたじゃないか・・・」

「おお!そういえばそうでしたね。それでは早速・・・」

「待てどうせ一夏もいるんだからおきてから一緒に話したほうが2度同じことを言う可能性が少なくていい」

それもそうですねそれじゃあ早速一夏を起こすとしましょうか

ドスッ!

「・・・ハッ!?お、俺は一体何を!?」

「目が覚めましたかちなみに寝てた理由は私が気絶させたからです」

え?どうやって起こしたんですかって?簡単ですちょっと殴っただけですよ

そのときシャルと結は何か言いたそうでしたけどね

「なんでいきなり俺を気絶させたんだよ?」

「一夏忘れているようですね・・・（説明中）・・・というわけですよ」

気絶させた理由を一夏に話すとシャルに向かって土下座して

「ごめんシャルル知らなかったとはいえあんなことしちまって」

と言い出しました

それを見てシャルは

「だましてた僕も悪いんだしもういいよ一夏」

そういって一夏に対して微笑みます

シャルの笑顔はやっぱりいいですね～時々黒いですけど・・・ゾクッ！？い、今の寒気は一体なんですか！？

と、とりあえず気にしないで話を聞くとしましょうか

「それでは話を聞きたいのですがいいですか？」

「うん僕は平気だよ」

「私も平気だがおそらくシャルルの話は長くなると思うから先に私が質問を受けようと思う」

「？？？」

どうやら一夏は何故結が質問をされるのかわかっていないようですね。
しゃべってないから当然といえば当然なんですけどね

「わかりました。ではいくつか聞きたいんですが？構いませんよね」

「まあ、答えられる範囲でならいいぞ」

答えられる範囲でですか・・・

「では最初に今日私が試合したときに簪ちゃんがマルチロック・システムを使ってきたんですけどどういうことでしょうか？」

まずはこれからです

「？なんでそんなことを結に聞くんだ？簪に聞けばいいじゃやないか」

一夏はまだＩＳに詳しくないから知らないのも無理ないですね

「あのね一夏、マルチロック・システムは一応第３世代の技術なんだけどまだ試験段階のやつなんだよ」

「へ～。それで？」

「わからないんですか一夏。簪ちゃんはその試験段階の技術を完成させて使っていたんですよ。しかも私の予想ではデータ等が足りないため完成まで私が手伝ったとしても最低であと２～３ヶ月かかるはずだったんです」

「それと結がどう関係するんだ？」

「試合のときに簪ちゃんが結が関係しているようなことを言っていたので関係しているとふんだんです。それでどうなんですか？」

一夏に簡単に教えて私は結に問いかけます

「それは私があの子にマルチロック・システムのデータを渡したからだよ」

「そんなことはわかっています。私が聞きたいのはどうして渡したのかということと何故そのデータを持っているのかということです」

このときの私はきっと目つきがかなり鋭かったと思います。

それでも結は平然として答えました

「何故渡したのかというとこの間整備室で偶然あの子に会って苦戦してたみたいだから私の機体の中に入ってたデータを使わせてあげただけだ。そして何故持っていたかというと昔使ってた武装にマルチロック・システムを使ったのがあってデータも完成させてあったから持ってるだけだ。まあ、完成していることを知っている人はそんなにいないからユウたちが知らなくても仕方ないけどな」

私としてはそんな都合よく持ってるほうが怪しいんですけどね

「わかりました。今はそれで納得します。まだ聞きたいことはありますが次はシャルが質問していいですよ」

「・・・いいの？」

「ええ、見た様子ですとシャルも聞きたいことがあるようですしね」

「ありがとうユウ。それじゃあ結、僕からも質問いい？」

「ああ、構わないよ。そもそもちゃんと教えるってさっき約束したからな・・・」

？　何だか一瞬結の体が震えたような気がしますね。
私が気絶してる間に本当に何があったのでしょうか。

そう思っているうちにシャルが話し始めましたね

「じゃあ僕が聞きたいことは２つあるんだけどまず１つ目・・・結はなんで君はかなり性能が違うとはいえその機体を使ってるのっていうこと」

その機体というと確か『モルガナ』という名前のＩＳですかね

「・・・・・・・・・シャルルまさか何も聞いていないのか？」

「どういうこと？」

結から帰ってきた答えに私と一夏だけではなくシャルも疑問に思ったようです

「まあ、あんたが男装してここに通ってる時点で予想はしてたけどどうやら懸念が当たったようだな」

「それってどういうことです？結はシャルのことを何か知っている

んですか？」

私は思わず結に近づいて問いただそうとしてしまいました

「落ち着けその辺は後で話すから今は私の機体についてだろ」

「そうだよユウ、僕も気になるけど落ち着いて」

「・・・わかりました」

2人に落ち着くように言われて仕方なしに元の場所に戻ります

「では私が使っている機体だがあれはシャルルが想像しているとおり元は『ラファール・リヴァイブ　カスタム？』のデータに作られたものだ」

「やっぱりね。それでなんで僕が昔使ってた機体のデータを結が持ってるのさ？」

そういわれるとそうですねシャルが使っているのはカスタム？です。当然以前の機体とはいえデータは開発したところが厳重に保存しているはずです。

考えられるとしたら2つの可能性がありますが・・・

「もってる理由は私の機体を作っていた研究所とデュノア社で取引したからさ」

「取引？」

「研究所ですか？」

取引と研究所という言葉に私とシャルはそれぞれ疑問の声を上げてしまいます

「そうだ。まず研究所についてだがアルカディアは知ってるか？」

「「もちろん」」

「すまん、わからない」

「「「・・・・・・」」」

一夏もう少し勉強してください

「一夏アルカディアっていうのは世界で最初に第3世代機を開発したところなんだよ」

馬鹿な一夏にわかりやすく説明するシャル

相変わらず優しいですね～

「へ～そうなのか。それでそこと結が何の関係があるんだ？」

「それは今から説明するところですよ一夏」

「そうだ。順番に説明するとまず私の両親は2人ともそこの研究者で私自身もそこでＩＳの開発にかかわっている。ちなみにマルチロック・システムもそこで完成させた」

「「え？」」

結自身もＩＳの開発にかかわっていると聞いて思わず私と一夏は驚きの声を上げてしまいました。
そういえば前に自分のＩＳは自分で完成させたって言ってましたね。
と思っているとシャルだけが何かを考え込んで少ししてから口を開きます

「結がＩＳ開発に携わってるのはわかったけどそれだと『リヴァイブ』を何で持ってるのかの説明にはならないよ。あそこは第3世代機を持ってるはずなのにわざわざ第2世代に手を出してるんだから」

まあ、もっともですね。

「それには理由があってあそこで開発した機体と私の相性が合わなかったんだよ。私の扱いたい機体とあれは全く逆のコンセプトだったからね。それで私の考えに合っている機体を作ることにしたんだけど元にする機体で一番いいと出たのが昔デュノア社が発表した機体にたどりついたんだ。それで研究所がデュノア社と取引してデータを手に入れてその後色々改造してさらにあるシステムを組み込んで私の専用機にしたんだよ」

「あるシステム？」

「まあ、その辺は企業秘密だよ」

流石にそこまでは教えてくれませんか

「それで取引って一体何なの？」

「取引っていうのは簡単でデュノア社の『ラファール・リヴァイブカスタム？』の開発データとうちの研究所の第３世代機のデータを交換したんだよ。まあ、渡したといっても最初期の第３世代データだろうね。あれなら渡してもそれほど脅威にはならないから。他にも上の方じゃ取引があったみたいだけど詳しくは知らないよ」

「何だかデータの釣り合いが取れてないみたいだけどそれでいいの？あとそのデータの受け渡しっていつごろやったの？」

そうですよね。

流石に第２世代と第３世代じゃ釣り合いが取れないと思うんですよね

「その辺は上の人が他にも少し条件をつけたみたいだよ。それとデータの受け渡しはたぶん４月の中頃に行われたと思う。その後研究所で改造して私のところに送られて１月掛けて機体を完成させたから」

「そ・・そんな前にそんな取引が行われてたなんて僕が男装する意味なかったんじゃ・・・」

シャルがあまりのことに落ち込んでますね。

まあ、前に１度社長とは会いましたがあのタイプは自分の利益のために利用できるものは利用するタイプですからついでに一夏の機体データも手に入れてさらに自分の利益を上げようとしたんでしょうね。

本当にあの人は・・・いえあの家族はシャルのことをただの道具としか見ていないようですね（怒）

「はぁ～、とりあえずユウその殺気をしまってくれないかシャルと

一夏がおびえているぞ」

「あれ？殺気出てましたか。シャルごめんなさい」

次はもっと殺気を制御しないといけませんね

「いいよ、たぶんユウは僕のために怒ってくれたんでしょ。ユウは優しいからね」

うにゅ～／／／／

シャルにそういわれると照れちゃいますね／／／／

「あれ？俺に謝罪はないのか？？」

なにか一夏がいっていますが男なんですからそのくらい我慢しなさい！！

「なんだか理不尽なことをいわれた気がするぜ・・・」

なんだか一夏がｏｒｚの状態になってますが気にしないで行きましょう

「それで私があれを持ってる説明は以上だが他にも何か聞きたいことはあるか？」

「それじゃあ、僕が女だって最初から知ってた理由は何？」

「「ちょっとそれってどういうことですか（だ）！？」」

突然のシャルの発言に私と一夏は思わず声を荒げてしまいます

「じつは2人が気絶してる間に結がそんなことをしゃべったんだよ」

「どういうことですか？まさかシャルを脅すとかそういうことをしようとしてるんじゃないでしょうね」

そういって私は結に向けて尋常じゃない殺気を送りますがそれを結はなんということはないようにしゃべり始めます

「そんなことは考えてないから安心してくれそもそもそんなこと考えてたらもっと早く脅してるよ」

そういわれるとそうですね。
もしかしたらあの赤い人の家の呪い並みのうっかりでしゃべっちゃったのかもしれませんね。

「それで私がシャルの正体に気づいたのは先週の土曜にはじめてあったときに一目見て気がついたんだよ。大体は筋肉の付きかたでわかるからね。そもそも一夏の後に男のＩＳ操縦者として発見されたなら大体3～4ヶ月位で代表候補生になったということだがそんなことはありえないだろう。もしあったとしてもそれほどの腕があるならもっと大々的に発表されてもおかしくないからな。あとは調べてみたらフランスに登録されている代表候補生の中にシャルルなんてやつはいなかった」

「でもただ単にかなり前に見つかったけどそれを隠してたとかもあるんじゃないのか？」

おお、一夏にしてはまともなことをいいますね
私は最初からシャルのことを知っていましたから気になりませんが

知らない人ならそう思っても仕方ないですね。

「それだったらデュノア社の社長の性格と経営状態からして隠しておくのはおかしい。逆に派手に宣伝して広告塔にするか研究施設に送り込んでモルモットにするだろう」

どうやら結もあの社長に会ったことがあるみたいですね。
たしかにあの人ならすぐにそれをやるでしょうね。
だって自分の娘を道具としか思ってないんですから

「わたしがシャルルの正体を知っている理由はだいたいこんなところかな。他にまだ質問はある？」

そういわれてシャルの方を見るとシャルはもう質問が無いようで首を横に振っていました

「じゃあ私からもう1つ質問いいですか？」

「ああ、構わないよ」

「それでは何故結はあの技を知っていてしかも使えるんですか？」

ゾクッ！！

私がそういうと結から私に対してのみ強烈な殺気を送ってきました

「・・・あの技とは桜花流のことかな？」

顔は笑ってますが目が笑っていません

「そ、そうです・・・」

私は何とかその言葉を口にすることができました

「私としては逆に何故あなたが知っているかの方が気になるんだけどな。まあいい、あれは私の実家で受け継がれている流派だよ」

「じ、実家でですか？」

「そうだ。私の実家は特殊なんだが、まあ、更識家と同じだと思ってくれていい」

たっちゃんの家と一緒ですか

「そ・れ・で　何故ユウがあの技を知っているのかな？あれを詳しく知っているのは極少数なんだけどわざわざ質問してきたってことはユウは詳しく知っているようだしね」

そういってさらに殺気を送ってくる結

ど、どうしましょう！？

何だか質問を間違ってしまったようですよ！？

ここはなんて答えるべきでしょう、素直に別世界で私が作ってそのおかげで私も使えますって言ったところで信じてくれるわけないですし！？

というか下手するとそのまま消されてしまいます！？

などと私が返答に困っていると突然殺気が消えました

「ふ、ふぇ？」

思わず変な声を出してしまった上に若干涙目ですが今はそんなこと気にしてる暇はありません
というかここまで恐怖を覚える殺気ってすごく久しぶりなんですけど！？

「ああ、思い出したよ。そういえばユウの父親って切嗣さんだったね」

え？

「何でそこで父様の名前が出てくるんですか？」

「だってあの人は昔うちで桜花流をならってたって家の父親が言ってたのを思い出したんだよ。それにちょっと前に切嗣さんに直接そのことを聞かされたしね。忘れててごめんね」

父様何をやってるんですか！？
でも今は助かりましたよ！

・・・何だかご都合主義なきもしますが

「え、ええ。そうなんですよ！昔父様に習ったんですけどどこで習得したとかは聞いてなかったので使っていたのを見て疑問に思ってしまったんです」

「そうなんだ～だったら最初からそう聞いてくれればいいのに～。あの人が教えたなら私が心配することは無かったね」

「す、すみません聞き方が悪かったですよね」

な、何とかごまかせましたかね?
問い詰めるつもりが私が逆に問い詰められてしまいました・・・

「それじゃあ他にはもう質問は無いのかな?」

「ええ、私ももう無いです」

どうして父様が習ったのか聞きたいですが後が怖いですよ

「それじゃあ次はシャルルの話になるかな?」

そういわれて途中から凍りついていたシャルルと一夏が復活します

「う、うんそうだね」

「でも聞いて欲しくないのなら無理に聞かないしいざとなれば私と一夏は席をはずしてユウと2人きりにするけど?」

結はそういってますけどこの中で説明が必要なのってたぶん一夏だけなんですよね~

私は大体予想ついてますし結もデータを調べたって言ってましたから予想はついてるでしょう

「いや・・・ここまで着たからには3人には聞いて欲しいんだ」

そういってシャルはここにくることになった経緯を話し始めます・・・

第２８話　正体がばれる貴公子と結の秘密（後書き）

ル「今回はシャルが学園に送り込まれた理由を話す直前できりました」

ユ「一気に書いたほうよかったんじゃないですか？」

ル「ほらあんまり１話長くしても読むの大変かな～と思ってね。・・・後後半まだできてないし」

ユ「そっちが本音でしょうが！！」

ル「まあ、後半もがんばって早く書くよ。ちなみに今回は一夏の扱いが微妙に酷い気がしますがこれからもこんな感じで行くと思います」

ユ「鬼ですね」

ル「あと今回の結の説明はかなり無理やりです。というかまだ彼女には色々と秘密があります。あと家のことについては次回でも少し出てきますのでそのときに」

ユ「まだあるんですね。それにしても私でも本当に殺されるかと思うほどの殺気でしたよ」

ル「ちなみに桜花流に関しては本文に書いたようにユウも使えます。というか最初にあれを生み出したのはユウなんだけどね」

ユ「本当に驚きましたよ。まさかあれが存在するとは思いませんで

したから」

ル「今回はあの流派が前からあったことは書いたけどどうして存在するかはいずれ書くと思うよかなり先だけど」

ユ「そういえば結がラファール　カスタム?をもってた理由も明かされましたね」

ル「一応あれは次回の話に関係してくるんだよ」

ユ「そうなんですか・・・ちゃんと次話投稿してくださいよ?」

かなり殺気をこめた目でルージュを見るユウ

ル「は、ハイッ!わかっております!!」

ユ「では次はアンケートの結果ですね」

ル「・・・・・・え?」

ユ「え?ってまさか忘れてたんですか?」

ル「そんなこと無いよ?」

ちなみに作者はまじめにこれ書いてる途中に思い出しました

・・・暑さにやられたかな?

ル「といっても投稿が遅れたこともあって予想通り何もきてないんだけどね」

ユ「まあ、仕方ないですね」

ル「というわけでペアは私の独断と偏見で決めることになりました」

ユ「というわけですので今回はここまでです。感想や指摘等はいつもどおり受け付けておりますのでよろしければお願いいたします」

ル「暑さに負けないように次話はなるべく早く上げるようにがんばります」

ル・ユ「「ではまた次回お会いしましょう」」

第２９話　シャルの秘密そして社長の最後（前書き）

なんとか1週間以内に更新できました

と言っても遅いのには変わりないんですけどね・・・

とりあえず今回は前回の続きのようなものです

あといつものように無理やり&ご都合主義です

それではお楽しみください

第２９話　シャルの秘密そして社長の最後

Ｓｉｄｅ　ユウ

「それじゃあ話すね」

そう言いながらシャルは自分が何故このようなことをしていた理由を語り始めた

長いので簡単に要約するとこうです

生まれてからシャルは母親と２人だけとはいえ幸せに暮らしていましたが、２年前に母親が死んでしまいそれと時を同じくして父親が判明、しかもその人物はＩＳ関係の会社では大手であるデュノア社の社長だったのです。

ですがシャルは愛人の子供だったため、父の世話になるために連れて行かれた場所では、父親は自分を道具としてしか見ず、義理の母も自分を汚物でも扱うようにして接してくる。さらに父親の命令でＩＳ適正試験を受けてみると、なんと高いＩＳ適正を持っていたことが判明してしまい、デュノア社のテストパイロットとして登録され本人の意思とは関係なく代表候補生になるために訓練をさせられてそのまま代表候補生になったとか。

ちなみに私と会ったのはちょうどこのときらしいです。

私と会ったときは笑顔を浮かべてくれましたがフランス政府の紹介で社長と会うときは泣きそうな顔でおびえていましたよ。

あの後色々話を聞いて社長にもシャルを物扱いするなと脅してシャルを救ったと思ったんですがどうやら救えていなかったようですね。

それから訪れたデュノア社の経営危機。

それに直面した社長のとった判断は唯一の男性操縦者である一夏に男として近付きデータを盗むことだったらしいです。
そして時期を見て女であることを明かして籠城しろといったらしいです

ちなみにフランス政府はこのことを知らないらしいです。
どうやら書類が学園に送られる前にどうやってかそれを手に入れて改ざんしてから送りつけたらしいです。

・・・要約ささってますよね？

「・・・というわけなんだ」

すべてを話し終えるとシャルは暗い顔で落ち込んでいました
話を聞いた私はあの時シャルを救えなかったことを心の中で後悔し一夏と結も怒っているのか顔は普通でしたが怒気を放っていました。

「予想はしていたけど想像以上に酷い親だな」

「最低な親だな。子供は親を選べないっていうのに自分の子供だからって理由で道具にしていいなんてことはないはずだろ！」

ええ、あの社長が最低なのには同意しますよ。
私も別な世界で似たような扱いされたことがありますからシャルの気持ちは本当に理解できるんですよ。
まあ、そのときはシャルに「私の気持ちなんかあなたにはわからない！」って言われて殴られましたっけ・・・よく今みたいに仲良くなれましたね

それに一夏も両親には捨てられましたからよくわかるんでしょう、結はわかりませんがあの怒りは本物です。

「それで、シャルルはこれからどうするんだ？」

「どうって・・・時間の問題じゃないのかな。もとより僕のことを知ってるユウはまだしもさらに2人にばれちゃったから他の人にばれるのもそんなに時間かからないと思うよ。それにフランス政府も事の真相を知ったらきっと黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかだと思うよ」

「それでいいのか？」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方がないよ」

「・・・だったら、ここにいろ」

「え？」

そういうことですかたまには一夏もいい事言いますね

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

「それって・・・」

「そうですよシャル今一夏がいったことを利用すればここにいていいんですよ」

「そうだなそれに3年もあれば何かしらの対抗手段も考えられると思うよ」

「3人とも・・・ありがとう」

そのままシャルは泣きながら私たちにお礼を言ってきました

そしてしばらくシャルが泣き止むのを待っていると

コンコン

「「「「!?」」」」

突然部屋のドアがノックされました。
こんなタイミングで一体誰ですか!?

「一夏さん、いらっしゃいます?夕飯をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか?」

セシリアーーー!何でこんなにタイミングが悪いですか!?

「一夏さん?入りますわよ?」

まずいですよーー!?今のシャルの姿見たらどんなに鈍い人でも女であることがばれてしまいます!!

「ど、どうしよう?」

「と、とりあえず隠れろ！」

「で、でもどこに！？」

「く、クローゼットあたりに隠れてください！！」

「何を言ってるんだ！ここは普通にベットに隠れればいいだろう！！」

た、確かにそうです。

混乱のあまり冷静な判断ができなかったようです。

助かりましたよ結！

そしてシャルが隠れたと同時にドアが開かれました

「よ、ようセシリア！なんだ？どうした？」

「一夏さんがまだ夕食をとっていないようでしたのでお誘いに来たのですが何故ユウさんと結さんがいるのですか？」

「わ、私たちは一夏にシャルの具合が悪いって聞いてお見舞いに来たところなんだよ」

「そうですか。では一夏さん夕食の方はどういたしますか？」

「そ、そうだな2人には悪いけどちょっと行ってきていいか？」

「ええ、いいですよ」

「構わないよ、戻ってきたら私も食べに行くから」

「そうかじゃあ行ってくるよ」

そういって一夏はセシリアと一緒に部屋を出て行きました

「それじゃあ私もちょっと出ますね。結、シャルのことをお願いします」

「え!?ちょっとユウ!?」

後ろからシャルの声が聞こえましたが今はちょっと無視して行かせてもらいます

目指すはフランスのデュノア社です

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　シャルル

どうしようユウが何だか出て行ったけどすごく嫌な予感がするんだよね

「ねえ、結もしかしてユウって・・・」

「・・・たぶんその予想は当たってると思うぞ。方法はわからないけれどもな」

やっぱり！

「止めないと！」

僕は急いで駆け出そうとしたけど結に止められた

「結！そこをどいてよ」

「今のシャルルは具合が悪いことになってるんだぞ？私が行くからおとなしくしていろ」

「わかったよ、お願いね・・・」

「一応がんばるけど止められなくても文句は言わないでくれよ」

そういって結も部屋から出て行った

「これでユウが怪我しちゃったら僕は・・・」

そのつぶやきは誰にも聞かれることは無く一夏が戻ってくるまでただ待ち続けるのであった・・・

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　？？？

～～フランス　デュノア社の一室～～

来客用の部屋の中には2人の人物が対面して座っていた

「お昼前だっていうのに時間をとらせちゃって悪いですね。デュノア社長」

「いやいや、事前にアポはとってあったのだからからこのくらい問題は無いさ。それにあなたのところには機体データでお世話になっているからな。上條所長」

対面する人物のうち1人は金髪で年は４０過ぎといったところである。この人はデュノア社の社長であり、シャルルの父親である。

それに対してもう1人は長い黒髪を後ろで結っていて年は１０代後半から２０代前半の容姿をしていて名前を上條桜花といいアルカディィアの現所長で上條家の現頭首でもある

「それで今回は一体どのような用件なのですかな?」

「実は・・・ちょっと待ってどうやら予想外のお客様が来たようだからその子をちょっと迎えにいってきますね」

「予想外の客だと?一体誰だというんだ」

「まあ、私の離そうとしていたことに無関係じゃないからサクッと行ってここにつれてきますね。少し待っていてください」

「お、おい!ちょっと待ちたまえ!!」

しかし社長の声をさえぎって桜花は部屋を出て行くのであった

Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｓｉｄｅ　ユウ

ＩＳ学園屋上

「さてあの最低な親のところに行くとしますか『ルナ』」

そうつぶやくとユウの体は光に包まれその光が収まるとそこには『ルナ』を纏い１本の刀を持ったユウがいた

「さて久しぶりに使うとしましょうか・・・起きなさい『双龍黒牙』」

そうしゃべると手に持っていた刀は巨大な両手剣となりユウの手に収まっていた

そしてそのまま剣を構えて

「一気に飛びます！道を斬り開きなさい！」

そのまま何も無い空間を斬り裂くとそこには人が１人通れるような空間の亀裂が開いていた

「成功ですね。では行きましょう」

そのまま戸惑うことなく穴に入るとユウが入った直後に穴は消えてそこには誰も残されていなかった

～～フランス　デュノア社　屋上～～

「さて着きましたね。邪魔が入らないうちに社長とＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩしないといけませんね」

社長室のあるところは前回来たときに案内されているので知っている（現在は別な所にいるが・・・）

そしていざ社長のところに行こうとした瞬間・・・

「っ！？」

上空から突然攻撃されてとっさに持っていた大剣で防ぎ攻撃してきた相手の方を見る

「まさかこんなに早く見つかるとは予想外ですが邪魔をするのならたおｓ・・・」

しかしその先に映ったのは先ほどまで会話していてこの場所にいるはずのない人物の顔であった

「結なんであなたがここにいるんですか！？」

「私としてはここにあなたがいるほうが不思議なんですけどね。それと私は結ではなく上條桜花といいます」

「・・・桜花さんですか？それであなたが何故ここに？」

「ええ、そうです。ちなみにここにいる理由はおそらくあなたと同じですよ」

ユウの疑問に笑顔で答える桜花

「そうなんですか、それでいきなり攻撃してきたのは何故ですか？」

「その理由は変な気配を感じて屋上に来てみればあなたがなにやら物騒な気配を出していたからですよ」

「うっ　す、すみません・・・」

「まあそのことは置いておいて早速行きましょうか」

そういってユウの手を握って社内に向かって歩いていく

「それで桜花さんは結とどういった関係なんですか？」

「簡単に言うと私は上條家の頭首でアルカディアの現所長といったところかしら」

「ええーーーー！？」

私と年が変わらないように見えるのに頭首ですか！？・・・そういえばたっちゃんも更識家の頭首でしたね普段あんな性格でしたから忘れてましたよ。

ということは結のお姉さんか何かでしょうかね？とても似てますし

「さあ、着いたわよ」

などと考えているうちに目的の部屋に着いたようです。
そしてそのまま中に通され部屋に入るとその中にいた人物が驚きの声を上げる
「なっ！？貴様はアインツベルンのところの娘か！」
「お久しぶりですねデュノア社長。でも何故そのような言い方をするのですか？」
社長の意外な驚き方に一瞬眉を顰めるユウであった
「その理由はあなたのお母様がデュノア社に第3世代機のデータを渡したときにとあることを言ったからよ」
「え？どういうことですか？」
自分の知らないところで母親が関わっていた事を知って驚くユウ
「あなたのお母様は昔お世話になったことがあるのよ。他にもあの人が気まぐれでアイディアを出したものがＩＳの開発でとても役に立ってね。今回はそのときに出されたアイディアを元にした機体のデータだからその許可をもらったときにある条件を社長に直接いったのよ」
「・・・・・お母様ーーー！色々な意味でなにをしてるんですかーーーー！？」
母の破天荒ぶりに呆れるしかないのであった（笑）

「ちなみにそのときあの人が「これ以上あなたの娘を道具のように扱ったらあなたどうなるかわからないわよ。フフフ・・・」といって脅したのよ。そしてあの人がちょっとデュノア社が怪しいから確認してきてって言うから今回私が来たのよ」

そう言う桜花さんにはどこか哀愁のようなものが漂っていました

「・・・何だかすみません」

「・・・いいのよ。あの人に振り回されるのには慣れてるから」

本当にごめんなさいです！

それにしても何でお母様はそんなことを言ったんでしょうね

・・・・・あれ？確か取引が行われたのは４月の中ごろって結が言ってましたね。

私がシャルのことをお母様に話したのは３月の末ですね。

確かそのときにはシャルの不遇について色々と愚痴を言った記憶がありますね。

お母様のことですから話を聞いてすぐにハッキングでもしてデュノア社の現状やシャルの状況を調べたんでしょうね。

あの人機械系に関しては束姉様並に天才な上に親馬鹿ですから・・・

・・・もしかして桜花さんに迷惑掛けた原因って私でしょうか？本当にごめんなさいです！！

などと考えていると今まで黙っていたデュノア社長が口を開いた

「それで？上條所長はまさか私があれだけ釘を刺されてまだあやつを道具のように扱っていると考えているのかな？」

よくもそんな見え透いた嘘を言えますね！シャルのことを名前や娘ではなくあやつと言っている時点で怪しいじゃないですか！！
そもそも私は真実を知っているんですよ！！

そう思って私が身を乗り出そうとすると桜花さんに止められました

「（ユウちゃんには悪いけどもう少しだけ待っていて）ええ、あなたには悪いですがアイリさんがどうしてもというもので確認させてもらいに来たんですよ」

「そうですか。ならば思う存分に調べてくださって結構ですよ（あやつを男としてＩＳ学園に送り込んだ証拠は会社からは抹消しているしこのことを知っているのも私の側近の部下に妻くらいのものだくらいだ。フランス政府のＩＳ学園との交渉役には金をたっぷり払っているから学園が怪しんで政府に何か言ってきてもそいつがもみ消してくれるからばれることもあるまい。もし学園にハッキングでもすればばれるかもしれんがそんなこと篠ノ之博士くらいしかできまい）」

うわ～あの顔は絶対にばれるはずが無いって思ってる顔ですよ。
あれだけでもシャルを道具扱いしてるって認めてるようなものなんですが証拠が無いんですよね。
まあ、いざとなれば私が直接体に聞きますがね。

と思っていると桜花さんが口を開きました

「ああ、デュノア社長どうやら勘違いしているようですね」

「な・・に？」

？？？
どういうことでしょうかね？

「私はすでにあなたが彼女を道具扱いしてＩＳ学園に通わせているのを知っているのですよ」

！！！

「ば、馬鹿な！？そんなことハッキングでもしなければ不可能なはずだ！！まさか貴様ら！！」

お母様いくらなんでもハッキングはいけませんよ！？

「ハッキング？そんな行為はしていませんよ。だたアイリさんがＩＳ学園にいる織斑さん経由でこんなものを送ってきてくれたんですよ」

そういって机の上に置かれるのはＩＳ学園の１学年の生徒名簿のコピーでした
そこにはシャル本来の名前ではなく『シャルル・デュノア　性別：男』とかかれていました

・・・お母様、千冬姉様に何かしたりしてませんよね？

「何故そんなＩＳ学園の機密に関わるものがあるんだ！？」

「アイリさんいわくＯ・ＮＥ・ＧＡ・Ｉしたらあっさりと渡してくれたらしいですよ？流石にＩＳ学園の上層部も怪しいと思っていたんでしょうね。織斑さんがしゃべるとあっさりと用意してくれたら

しいですよ。というか逆にばれないと思えるのがすごいと思いますよ」

ああ、さすがに学園上層部も怪しいと思いますよね。
いきなり2人目の男のＩＳ操縦者が現れてしかも代表候補生なんですから

「学園のほうでもフランス政府に確認を取ってはいたみたいですがおそらくあなたの仕込んだ内通者あたりに妨害されたんでしょうね」

この社長ならそれくらいやってそうですね

「それで？何か言いわけはありますか？」

「ふふふ・・・このような証拠を出されたらいいわけもできまい。
そうだ！私はあやつを男としてＩＳ学園に通わせた！！」

遂に認めましたか！

「なんでシャルをあんなふうに利用したんですか！！あの子はあなたの娘なんですよ！！」

「ふんっ！所詮あやつは私が気まぐれで手を出して生まれた存在だ！私がいなければ生まれることも無かったんだから私の所有物をどのように扱おうと勝手だろうが！！」

「あなたは本当に最低ですね」

「本当にそうね。いくら親であろうと子供をそのように扱っていい分けが無いわ。まして子供は親を選ぶこと等できないというのに」

「貴様らには関係ないだろう?それにここで貴様らは死ぬのだからな!!」

屑(しゃちょう)がそういった瞬間に部屋のドアが開きそこから10人ほど人が入ってきました

「貴様らが死ねばすべて問題がなくなるのだよ」

「・・・この程度でIS操縦者をどうにかできると思っているのですか?」

「こんな狭い部屋でISなど展開すれば隣にいるやつも巻き込むことになるぞ」

たしかに普通ならきついでしょうけどあいにくと私の『ルナ』は翼を出さなければ問題ないんですよ!!

次の瞬間にはユウはISを展開して周りにいた男を6人気絶させる

「何だと!?ならばもう1人のほうを殺・・せ・・・」

屑は桜花さんを殺すように命令しましたがすでに桜花さんは自身の周りにいた男たちを気絶させた後でした

「ただの人間があっさりと5人気絶させただと!?」

これには私も少し驚きますね

「あいにく普通ではないので」

そういった次の瞬間には桜花さんは屑の後ろに回りこみ床に組み伏せていました

そういえば桜花さんは上條家の頭首でしたね。
なら当然桜花流も使えるんですよね～。
あれ使う人の錬度によってはＩＳも倒せますよ。
まあ、相手が地上付近にいればですけどね。

「は、離せ！私はまだ・・・」

まだこの屑は抵抗しますか、本当に馬鹿ですね

すると桜花さんがとてもいい笑顔で口を開きます

ああ、桜花さんあなたきっとＳですよね

「まだ抵抗しようとするあなたに朗報です。実は今までの会話はすべて皆さんに聞いてもらっていたんですよ」

「みんなだと！？どういう事だ！」

みんなとはお母様あたりですかね？

「実は今回のことはアイリさんだけじゃなくフランス政府にも頼まれてましてね。アイリさん以外にもフランス政府のお偉いさん方やデュノア社全体にも今までの会話は聞かれてたんですよ」

「な・・な・・・」

あまりのことに屑の顔がドンドン青くなっていってますね・・・いい気味です。

「ちなみにあなたと通じていた内通者とすでに確保したとの連絡が来ていますのでもう終わりですよ?」

桜花さんがそういった瞬間に部屋に警察と思われる人たちが入ってきて屑と周りに倒れていた男たちを連れて行きます。

そして、その後に政府の交換と思しき人が入れ替わりでやってきました

「ご協力感謝します」

「いえいえ、では協力した報酬は以前話したとおりでいいですね?」

「ハイッ!政府の方も今まで様々な不正を働いていた社長を逮捕できたのだし彼女も被害者だといっていますので彼女が了承すれば問題ないということだそうです。ただしコアの方は・・・」

「ええ、そちらに関してはきちんとお返しいたしますよ。発表の方は予定通り今月末でいいですね」

「そうですね、すでに逮捕は確定してますが膿みだしも含めて詳しく調査する時間も考えるとそのくらいになるでしょう」

「わかりました」

「それではまたいずれ」

そういって政府の人も去っていきます

とりあえずもう話しかけてもよさそうですね

「桜花さん最後の方の話は一体？」

「詳しく話すとね。今回の会談の目的は最初に言った通りなんだけどアイリさんとフランス政府が協同で頼んできたのよ」

「そうなんですか？」

「そうなのよ、話を聞いてたからわかると思うけどあの社長は前々から裏で犯罪に近いことをやっていたらしいのよ。だけど詳しく調査が今までできなかったの、だけど今回社長の娘をＩＳ学園に転入させたけれど送られてくるデータが妙に不自然だったらしくてねそれを怪しく思っていたところにアイリさんが今回のことを暴くに当たって政府の協力もあったほうがいいということで話を通したの」

「お母様本当に色々やりすぎですよ。まあ、大体わかりましたけどこれからシャルはどうなるんですか？」

私にとってはこれが一番大事ですよ

「彼女も今回の件については社長に強要された被害者ということになってて政府との交渉で彼女が望むなら私の研究所の方で引き取らせてもらうとになったのよ」

「それって大丈夫なんですか？」

「彼女が望んだ場合は研究所の職員の誰かの養子にしてもらって研

究所の方でテストパイロットをしてもらうことになってるわ。その場合あの子のＩＳはフランスに返還することになるでしょうね」

「シャルが望むなら気にしません。でもなんで今月末まで発表を伸ばすんですか？」

「理由としては表向きは詳しい調査のためなんだけど、他にもＩＳ学園で行われる学年別トーナメントが関係してるのよ」

「何でそこで学年別トーナメントが出てくるんですか？」

「だってもし今発表したら彼女が研究所に引き取られるのを選んだ場合すぐに機体を返さなきゃいけないのよ。代わりの機体を用意するのは研究所にまだコアがあるから簡単だけどそれだとコアと同調してなれるまでの時間が足りないから終るまで待つことにしたのよ」

「そうなんですかわかりました。色々とシャルのためにしてもらってありがとうございます」

「いいえ、気にしないでうちの連中もなんだかんだで乗り気だから。あ！あと今回の社長の処分とさっきの彼女を引き取るっていうやつユウちゃんの口から伝えてもらえないかしら？政府の方からも連絡が行くと思うけど親しい仲のあなたから聞いたほうが気持ちも楽でしょうしね。彼女から答えを聞く日にちは追って連絡するから」

「はいっ！わかりました」

「それじゃあ私はこれから日本に戻るけどユウちゃんはどうする？」

「私は自分で戻りますので」

「そう気をつけてね。また会いましょう」

「はい、またいつか」

そういうと桜花は去っていった

その後ユウは一目のつかないところにいって

「それじゃあ早速戻ってシャルに報告ですね！『ルナ』そしてそのまま　起きなさい『双龍黒牙』」

ＩＳを展開して来た時と同じように空間を切り裂いて学園に戻っていくのであった

・・・しかしユウは忘れていた。

シャルに今回のことを話すということはユウが何をしていたか話すということと同じである。

そのためユウのことを心配して待っていたシャルルによって手痛いＯ・ＳＨＩ・Ｏ・ＫＩを喰らうのであった

「ユウのバカーーーーー！！」

「シャル！？盾殺（シールド・ピアース）しは流石にまずいですってーーー！？イヤーーーー！！」

第２９話　シャルの秘密そして社長の最後（後書き）

ル「いや～今回も大変だったよ～」

ユ「社長をどう扱うか悩んだんでしたっけ？」

ル「なんとかシャルの本名を出さずに進められたよ」

ユ「そっちなんですか！？」

ル「まあ、隠す必要ない気がするけど一応ね。あと社長の扱いを悩んだのも確かにある。今回のような屑にするかただの親ばかにするかはある意味大変な２択だったよ」

ユ「それでも結局は屑にしたんですね」

ル「そのほうがこの後の展開を面白くできるからね」

ユ「私にとっては嫌な予感しかしませんが置いておきます。そういえば今回すごく久々に私自身の能力を使った気がするんですが」

ル「否定はしないよ。それでは解説を

能力の分類：斬魄刀

名称：双龍黒牙

開合「起きなさい〇〇」

詳細

重力を操る斬魄刀
始解は両刃の大剣で2本に分けることができる
普段はインパクトの瞬間に重力を操作して攻撃力を上げている
また刃に直接触れたものなら一瞬でも重くしたり軽くしたりが可能
これは刃から離れても有効であるが重力を操作したものに別なもの
が触れても触れた物質に重さの変化はしない
さらに重力を使い空間をゆがませることで空間と空間をつなげて瞬
時に移動することが可能（ブラックホールとホワイトホールみたい
な感じ）
重力の塊を相手に向けて放つことも可能
また、本来なら卍解も可能だが現時点では始解が限界である

とこんな感じですかね」

ユ「それにしても２９話でやっと１つですか」

ル「まあ、こういうのが使われる世界じゃないしねｗｗ。ほかに斬
魄刀は１０本あります。うち5本が元は原作と同じ（属性で分けて
はいますがね原作のまんまの属性だったりこれは無いでしょう～っ
ていうのもありますがね）今回の含みで残り6本はオリジナルです」

ユ「厨二病乙です」

ル「仕方ないじゃない！色々考えてたらこうなっちゃったんだから」

ユ「それで他の刀は使うことあるんですか？」

ル「未定」

ユ「・・・・・・」

ル「次は桜花についてです」

ユ「逃げましたね」

ル「桜花は一応本編で説明しましたがまだ色々と秘密を持っていますがそれはいずれということで、とりあえずめったに出てくることは無いです・・・たぶん」

ユ「まあ、今回はこんなところでしょうかね。それで次回は戦いの続きなんですよね？」

ル「いや5万ヒット記念でデジモン編をやる」

ユ「それって対戦が終った後にやるんじゃなかったでしたっけ？」

ル「その予定だったんだけどこの前アクセス数見たらいつの間にか１０万行きそうだったから先にデジモン編だけあげようと思ってね」

ユ「じゃあ、ラウー編は？」

ル「そっちは対決後に上げるのが確定してるんだ。ちなみにデジモン編はアドベンチャー０１の1話にそって行く形になると思います。今回はこの辺までですね」

ユ「それでは感想・誤字脱字・指摘などお待ちしておりますのでよろしければお願いいたします」

ル「ちなみに感想もらうと私のテンションが上がります」

ユ「何だか今さらですね」

ル・ユ「「それではまた次回お会いしましょう!!」」

5万PV突破記念　番外編1－1　デジモン編　ただし投稿時点で10万PV超

どうもお久しぶりでございます。
約2ヶ月ぶりの投稿となります。

遅れた理由としましてはリアルが忙しすぎて小説書く時間が取れなかったんです。
しかも一時期ネット使えない環境にもなりまして今月の中ごろに復活しました。
そのあとはたまりにたまってた小説読んでたら書くの忘れ・・・やめて石投げないで!?

とまあ最後は自業自得ですが何とかちまちまと番外編を書きまして今回投稿しました。（投稿しておいてあれですが実はまだ終ってないって言うね）

ちなみに今回の番外編は久しぶりに書きましたので文章がおかしいこともあります。
あと色々と暴走しております。

それではお楽しみください。

5万PV突破記念　番外編1－1　デジモン編　ただし投稿時点で10万PV超

・・・ナレーション?というか説明のようなもの?

?「デジタルワールド・・そこは・・・限りなく近く・・・限りなく遠いｓ「アウトーーー!!その言い回しは色々とアウトですよーー!!」・・・いきなりなんですか?というか何でユウがここにいるの?」

ユウ（以下　ユ）「作者のあなたが色々とまずい言い方をしていたので止めに来たんですよ!!」

作者（以下　作）「え～～、だってデジタルワールドのこと説明するのにこれなら簡単でいいと思うんけどな～～」

ユ「確かにある意味似たようなものですけど流石にさっきの言い方は色々引っかかります!だからもっとちゃんとした説明にしてくださいよ!!」

作「全く仕方ない娘だね～。わかったよ言い回しを変えてやることにするよ」

ユ「すでに色々とグダグダな気がしますが・・・」

テイク2

作「デジタルワールド・・・そこは現実に存在する地球からなんら

かの作用によって情報やデータが実体化した異世界である。デジタルワールドはデータで構成されているが特にネット上にあるわけではなく海等には魚等も存在する。

また、デジタルワールドにはデジタルモンスター略してデジモンという現実世界から実体化したデータのうち生き物であるものの総称である。

デジモンは「幼年期？」「幼年期？」「成長期」「成熟期」「完全体」「究極体」の６つの世代に主に分かれている。（例外として「究極体」は更なる進化をする可能性がある）他にもアーマー体やハイブリット体のように特別な存在もいる」

作「ふぅ・・・大体こんな感じだね」

ユ「最初が最初だったので心配でしたが意外と普通でしたね」

作「まあ、２回目だしね～。それにしてもあの口調は疲れたよ～」

ユ「何だか色々と台無しな気がしますが・・・」

作「まあまあ、気にせずに本編へＧＯ！さ！」

・・・

ブイドラモンのときに比べると攻撃力と防御力が飛躍的にアップしている。
また翼が生えたために空中戦にも対応できるようになり俊敏性もアップしている。

元々成熟期であるブイドラモンの時点で完全体に匹敵する力を得ていたが完全体になったことでさらに上の究極体にも匹敵する力を得ることに成功している。

必殺技は相手を切り裂く“Ｖウィングブレード”と自身のエネルギーを解放して敵を攻撃する“ドラゴンインパルス”の２種類である

「そうだよ～ユウちゃん～。それに選ばれし子供たちもいくらパートナーがいるとはいえそのままじゃ『あいつ』がいるから危ないよ～」　アムアム

アルに続くようにユウの頭に乗りながら答えるのはルナモンというデジモンで愛称は「ディア」である

“ルナモン”
成長期　データ種　哺乳類型デジモン

月の観測データから誕生したウサギに似た姿をしている哺乳類型デジモンでその耳は高い聴覚を有している。

性格は本来であれば臆病で寂しがり屋であるが何故かこのルナモン

はやんちゃである。
必殺技はティアーシュートである

「確かに『あいつ』がいるから危険だから手助けが必要なのはわかるんですけど・・ってディア！人の頭に乗って髪を噛まないでください！」

「え～～」アムアム

「コラ！・・・ってあれはまさか」

ユウがアルとディアと話しているとユウたちの進行方向から天へ向かって一筋の光が立ち上っていた

「・・・」プチッ

「うわ～あの光ってどう考えても・・・」

「・・なぁにが『そろそろ選ばれし子供たちがやってくるじゃろう』ですかーーーー！！連絡受けてから2日と経ってないですよーーーー！！」

「あわわわ・・ユ、ユウちゃん落ち着いて～～（泣き）」

「まさか私が1日でファイル島までいけると思ってたんですか！確かに1人なら着きますけどパートナーつれてなら着くわけないでしょうがーー！」

「ユウ！頼むから背中の上で暴れないでくれ！」

「アル」

「は、はいっ！？」

「（怒気を孕んだ声で）もっとスピード出しなさい」

「わ、わかりました！！」

「あははは。ゲンナイ次あったら覚悟しておきなさいよ」

その瞬間とある場所で老人がとてつもない悪寒を感じたとか感じなかったとか

何はともあれユウたちはファイル島へ向かって飛んでいくのであった

・・・

いまは凶暴なクワガーモンってやつをコロモンたちが急に姿を変えて一斉攻撃をして何とか倒したところだ

そしてそのままコロモン？たちがこちらに近づいてきた

「太一～～」

「お前たちすごいな！あんなでかいやつを倒すなんて」

“アグモン”
成長期　ワクチン種　爬虫類型デジモン

コロモンが進化した姿で成長したことにより爬虫類方ではあるが肉食恐竜のような姿になった。
その性格は勇敢であるが時々後先考えず行動することがある。

必殺技は口から高熱の息を吐き出し敵を攻撃するベビーフレイムである

そのまま俺がコロモン？と抱き合っていると一緒にファイル島にやってきたメンバーの1人である“武之内空”が突然大声を上げた。

「！？　太一！後ろ！」

そういわれて後ろを振り向いてみるとさっきの攻撃で倒したと思っ

ていたクワガーモンが再び襲ってきた。

“クワガーモン”
成熟期　ウィルス種　昆虫型デジモン

成長期の昆虫型デジモンが進化の道を外れて進化してしまったとされるデジモン
性格は凶暴であり敵になったものに対しては容赦をしない
必殺技は相手を切り裂くシザーアームズである

「「わぁぁぁ!?」」

俺とコロモン?は襲ってきたクワガーモンの一撃を何とか避けることができた。

しかし・・・

ピシピシ

クワガーモンのハサミが直撃した部分から段々とヒビが入っていきやがて砕けた。

ガコン

ちなみに俺たちが立っている場所はクワガーモンに追い詰められた

崖のうえでみんな端の方によっていた・・・ということは・・・

「「うわぁぁぁーーー!?」」×7

そのまま俺たちは崖の下に落ちていくのだった。

崖の下は川が流れているから運がよければ死なないだろうけどどっちにしろこのままじゃまずい!

デジモンたちは何とか俺たちを助けようとしてくれるがその行動も意味もなくドンドン水面が近づいてくる

俺たちはみんな覚悟を決めて目を閉じ衝撃に備えようと体を丸めた

・・・・しかしいつまでも水面に叩きつけられる衝撃がくることが無く不思議に思って目を開けてみるとそこは・・・鮮やかな朱に近い色の体毛をもった巨大な鳥の上だった

「危なかったですね。皆さん怪我はないですよね?」

突然のことに俺たちが呆けていると急に上から銀髪の女の人が降ってきて俺たちに声を掛けてきた

・・・何で上から降ってくるんだ・・・

・・・・

～～選ばれし子供たちが崖から落ちるほんの少し前～～

ユウたちがファイル島につき光の柱が上がった場所の近くで子供たちを捜しているとディアが突然

「ユウちゃ～ん、あそこに子供とデジモンたちが見えるよ～」

と言ってきたのでディアが指をさす方向を見ると崖の上に子供が7人とそのパートナーと思しきデジモンたちがいるのが見えた

「本当ですね。やっと見つけましたよ」

「うんうん、早く見つかってよかったね～」

「しかも見た感じもうデジモンとは打ち解けた感じだな」

その姿を見てユウたちがほっとしていると突然森の方からクワガーモンが現れて顔についているハサミで子供の1人に突然襲い掛かってきた。

「「「え？」」」

子供の1人は何とか避けたが崖がクワガーモンがはさみを突き刺さした場所から崩れ落ちてしまった。

「えぇぇぇぇーーー！？」↑ディア

「いきなり子供たち終了！？」↑アル

「あの子達は来ていきなり何をしたんですかーーー！？・・・じゃ

なくて！アル！あの子達を助けますよ！」↑ユウ

あまりの出来事に驚いてしまったがアルに急いで向かうように伝えます

「で、でもユウちゃん、アルじゃ全員を乗せられないよ！！」

そ、そうでしたーーー！！

アルじゃ体格的に乗せられて後1組です。

私が空を飛んでも私で1組助けてもディアは飛べませんから背中に乗せられるのはよくて3組、成長期のデジモンじゃ自分で飛ぶことはできても流石に子供を掴んで飛べはしないでしょうし数が足りません。

どうすれば・・『ウンディーネ』で水面を押し上げて『セルシウス』で凍らせる？　ダメです！氷の硬さで怪我する可能性があります。守護者を呼び出してそれぞれに救助させる？　無理です！風に特化した『翼』以外たぶん追いつきません。

ん？風？・・・風で押し上げる？　『シルフ』ならそれができますがまたデジモンが襲ってこないとも限りませんし・・・

・・・！！

そうです！！あの子なら大きさ的にも問題ないですしここからでも間に合うはずです。

（ここまでの思考時間約1秒）

「そうと決まれば・・・我が呼びかけに応えその大いなる姿を持ってかの子供たちを助けたまえ『アスカ』！」

私がそういうと背後に巨大な鳥が現れて子供たちの元へ飛んでいきました。

ちなみにアスカの大きさは本来よりも小さくしています。
まあ、それでも大きいですけどね。

「ふ～これで一安心なのかな？」

「どうでしょうね？そんなことよりもアルは子供たちの所についてもしばらくはいまのままでお願いしますね」

「ああ、わかってるよ。さっきのクワガーモンとかがまた襲ってこないとも限らないからな」

アルに警戒はしておくように言って子供たちの元に向かい、そのままアスカの上に降り立ちます。

「危なかったですね。皆さん怪我はないですよね？」

・・・あれ？なんだか皆さんの反応が薄いですね。どうしたんでしょうか？

（巨大な鳥が突然現れたり、人がいきなり上から降ってきたら普通驚くでしょ）

何か聞こえましたがスルーですね

（ｏｒｚ）

作者がなんだか沈んでいますが無視しているとゴーグルを頭につけた子供が口を開きます

「あんたたち急に現れたけど一体何者なんだ？そしてここは一体何

なんだ？」

ふむ、もっともな疑問ですね。
まあ、ゲンナイから特に何を教えるなとか聞いてませんしある程度なら教えても構わないでしょう・・・もっともしゃべるなといわれても仕返しにしゃべってたでしょうけど。

「ではまずは自己紹介からですね。まず頭の上に乗っているのはルナモンのディアです」

「よろしくね～」

「次に上空で周りを警戒しているのがエアロブイドラモンのアルです」

「うおっ！上にもなんかいたし！」

・・・気づいてなかったんですね。
哀れなアルですね～「うっさい！！」

「そして、あなたたちが乗っている子はアスカと言って他の2人とは違ってデジモンではありません」

「？デジモンじゃないってことは何なんですか？」

今度はパソコンを持っている子が聞いてきましたね。

「アスカはデジモンではなく精霊という存在です。まあ、今は特に関係は無いんですけどね。そして最後に私の名前はユウといいます。よろしくお願いしますね」

とりあえず自己紹介をしてスカートのすそを少し上げて挨拶をします。

似合わない？　ほっといてください！！

さてそんなことは置いておいて彼らと話すとしましょうか

「あなたたちも色々聞きたいこともあるでしょうがまずは・・・あなたたちのお名前を聞いてもいいですか？流石にわからないと不便なので」

私がこういうと子供たちも気づいたのか自己紹介をしてくれます。

・・・・・・少年少女あとデジモン自己紹介中・・・・・・・

「皆さんの名前はわかりました。それではあなたたちはここに来たばかりでしょうので何か聞きたいことがあれば応えられる範囲で答えますよ」

すると大きなメガネを掛けた背の高い男の子が動揺しながら少し大きな声で質問を投げ掛けてきました。

「そ、それじゃあここは一体どこでどうすれば元の場所に戻れるんだい！？」

「まあ、当然の質問ですよね。答えてあげますけど・・・少し待ってください」

子供たちにそう言って私はとあるデジモンに近づいていきます。

「ん～？おいらに何か用かユウ？」

“ゴマモン”
成長期　ワクチン種　海獣型デジモン

ゴマフアザラシの子供のような姿をしているデジモンで前足（腕）には大きな3本の爪がある。
全身を覆う白い毛は成長するにつれて段々と長く、茶色になっていく。

必殺技は小魚たちを突撃させて攻撃するマーチングフィッシーズである。

そしてそのままゴマモンを後ろから抱きかかえます。

「うわっ！？いきなりなにすんだよユウ！？てか胸が！？」

「ああ、もふもふです。ふかふかです。肉球？もぷにぷにです～」
（トリップ中）

「っておいらの話し全然聞いてない！？」

しばらくその状態が続いているとユウの頭の上に居たディアが大きく口を開けて

「いい加減もどってきなさ～い！」

ガブッ

「にゃーーーー！？」

盛大にユウの頭に噛み付いた。

・・・・・・しばらくお待ちください・・・・・・・・

ディアに噛み付かれてなんとか元に戻りました。

「いや～すみませんね。ゴマモンの抱きごこちがよさそうだったのでついやっちゃいました」

「なんでこれからこの子達に説明するのにユウちゃんは暴走するのよ～」

「私の中で可愛いが正義だからです！」

「というかおいらはいつまで抱きかかえられてるんだよ～？」

まったくゴマモンは何を言っているんでしょうね？話が終るまでこのままですよ」

「その話がいつまでかかるかわからないからいやなんだよ！」

「あれ？声に出てました？」

「“何を言って～”から声に出てたよ～」

おっと次からは気をつけないといけませんね。

「それにゴマモン？離すのは構いませんがそうなると次に抱きかかえられるのはパタモンですよ？」

「おいらはそれでもｈ「「ゴマモン！そのまま話が終るまでがんばってね！」」２人の薄情者ーーー！！」

ゴマモンがパタモンと子供たちの中で一番下のタケル君に見捨てられましたね。

では思う存分抱いておきましょう。

“パタモン”

成長期　データ種　哺乳類型デジモン

頭には特徴的な大きな耳がついておりそれを羽の代わりにして飛ぶことができるがその速度ははっきり言って歩いた方が速いくらいである。

また古代種の遺伝子を引き継いだデジモンの一体でもある。

必殺技は空気を吸い込んで圧縮したものを吐き出すエアショットで

ある。

「とりあえず、落ち込んでいるゴマモンは置いておくとしまして「おいておくなーー！」先ほどの質問に答えさせていただきますね」

「あれ？とうとうおいらのこと無視なのか？てか丈も黙ってないで助けてくれーーー！！」

「別に危害が加わるわけじゃないからそのくらい大丈夫じゃないかな？それに質問に答えてくれるんだしお礼はしないと」

「丈ーーーー！？」

ゴマモンドンマイですよ。
原因作った私が言うのもなんですけどね。

「では改めましてここは“デジタルワールド”と言って（以下この小説の冒頭参照）そしてデジモンとは（以下ｒｙ）という感じですね。そして、地球に戻る方法はありますが現在はとある連中のせいでこちらとあちらのつながりが絶たれているためすぐに帰るということはできません」

「そ、そんな～」×７

「安心してください。ピンチになったら助けてあげますから」

そういうと子供たちは「普通に助けてくれてもいいじゃないか」といった感じの目で見てきます。

「別に助けてもいいんですけどいつも私がそばにいると限りませんからあなたたちには強くなってもらわないといけませんからね。まあ、強くなってもらうといってもあなたたちではなくパートナーのデジモンたちにがんばってもらうことになるんですけどね」

「それって俺たちは何をするんだよ？」

デジモンたちにがんばってもらうと聞いてリーダー？っぽい太一君が声を掛けてきました。

「あなたたちのような、まあ私もですが、デジモンと一緒に居る人間とデジモンに大切なのは絆と互いを信じる心です。そうすれば人の想いにデジモンたちが反応してくれます」

「俺たちの想い・・・」

子供たちはそういうと少し考え込んでしまいました。

それにしても今回の“選ばれし子供”は7人と数が多いですね～ここまで多いのは初めてじゃないでしょうか？

・・・あれ？でも確かゲンナイが子供たちのサポート用に作ったあれはすでに持っている私用の試作品2つと何故か渡されたもう1つ以外にも8つありましたよね？ということは実際にはもう1人下手をすると2人増えるということですかね？

・・・どれだけ今回は大変なんでしょうか？

このように私も子供たちと同じように考え込んでいると背後の方か

らなにやら殺気のようなものを感じ振り返りました。

「ユウ！！」

するとアルも殺気を感じ取ったのか叫んできました。

「わかってます。・・・あれはクワガーモンですね。しかもなにやら怒っているようにも感じますね」

「「うっ！」」×7

なにやら後ろからうめき声が聞こえましたが今のので大体予想がつきました。

あのクワガーモンは先ほど子供たちを崖に落とした個体のようですね。

あの高さから落ちてほとんど無傷なところを見るとそれなりに強力な個体のようですね。

「ユウちゃ～ん、何か来たけどどうするの？アルに任せる？」

「いえ、ここに来るまでずっと飛行していましたから多少疲れてるでしょうから私が行きますよ」

そういうと上から「いや、俺まだいけるんだけど」とか後ろから「無茶すぎるでしょ！？」とか聞こえてきますが無視です。

クワガーモンには悪いですが私のストレス発散の捌け口にさせてもらいます。

そういって私は思わず笑ってしまいました。

ちなみに後でディアに聞いた話ですがこのときの私はいい感じに黒い笑みだったらしくみんな震えていたらしいです。

「フフフ、では行くとしますか、ラン、モード〈ナックル〉です」

「了解です！マスター」↑（作者は英語が苦手なためデバイスのセリフは日本語で表記します）

私の声にランがこたえると頭につけていた髪飾りが光私を包み込みます。

そして、光が収まると先ほどとは違う服装で両手に手甲をつけている私に子供たちが驚いていました。

「な、なんだ！？急に服が変わった！？」

「驚くのも無理はないですが、この説明はあれを追い払ってからですよ」

（ちなみに服装は本編でルナ起動時に着ている服の翼がないｖｅｒで手甲は手の甲から肘まで覆われているが重厚ではなく軽装な感じ）

そうこうしているうちに段々と近づいてくるクワガーモン。

「まずは景気付けに一発行きますか！ラン！アサルトソニック　収束　単発モード　魔力変換“雷”」

「収束及び変換完了しました。いつでもいけます」

「では行きます！アサルトソニック・・・ファイアッ！！」

掛け声とともに目の前に浮かんでいた魔法球を右手で思いっきり殴りクワガーモンに向けて放つ。

ヒューーーーーーン

「!?」

その攻撃は真っ直ぐにクワガーモンに向かうが当たる直前に危機を察知されてしまい体勢を崩しながらも避けられてしまう

「外れましたか。まあ、体勢を崩すのが目的でしたから気にはしません。ではアルこっちの守りは任せましたよ」

「ああ、任せろ（クワガーモンお前には同情するよ）」

「いってらっしゃ〜いユウちゃん。私はゴマモンで遊んでるからね〜」「またおいらかよ!」

後ろで何か聞こえますが気にせずに一気にクワガーモンに近付きましょうか!

そのままユウはアスカから飛び立ちクワガーモンの真上まで近づくとそのまま体を縦に回転させて体勢を崩したクワガーモンの体に踵落としを決める

「ギャッ!?」

突然の奇襲と体勢を崩していたこともあってそのまま直撃をもらい下の川に向けて叩きつけられる。

「一応奇襲は成功しましたが強化も何もしていない蹴りでは大してダメージは入っていないでしょうね」

その言葉を裏付けるように直後に川から大してダメージを受けたような感じがしないクワガーモンが現れる。

「シャーーーーー！！」

どうやら完全にキレたようで怒りに身を任せてユウに突撃をかける。

しかしそれをユウは空を蹴ることによりかわす。

「確かに動きは早いですがその程度ではいくらやっても当たりませんよ」

攻撃をかわされたクワガーモンはすぐさま反転し突撃を繰り返すがそれは悉くユウに避けられてしまう。

そのまましばらく攻撃を避けていたユウだが突然動くことをやめて空中に静止する。

「！？」

突然の行動にクワガーモンは一瞬疑問を覚えたが敵に攻撃が当たらないため例え罠であるとしても攻撃しなければチャンスは無いと考え2本のはさみを鳴らして今までで一番のスピードで必殺技による攻撃を仕掛ける。

『シザーアームズ』（実際ははさみで相手を挟み込んで攻撃するん

だろうけどアニメではただの体当たりである）

クワガーモンがすごいスピードで迫ってくるがユウは全く避けるそぶりを見せない。

そしてそのまま直撃すると思われた・・・がユウは左手で相手のはさみを上に弾きカウンターの要領で相手の無防備なお腹にこぶしを叩き込む。

「ラン！」

「カートリッジロード」　ガゴン　ガゴン

ユウの呼びかけにこたえるようにランから排出される2本の薬莢

「ゼロ距離　エターナルバスター！！」

そういって右手から放たれたゼロ距離砲撃は閃光がクワガーモンを貫き勢いそのままに崖に叩きつける

クワガーモンはそのまま崩れた崖に埋もれていった。

「ふむ、大体こんな感じですかね。多少のストレス発散にはなりましたしアルたちのところに戻るとしましょうか」

その場を離れようとユウが背を向ける

しかし突然クワガーモンの埋まっている場所にあった岩が盛大な声とともに吹きとんだ。

「シャーーーーーーーー！！」

ユウが岩がの飛んできたほうを見るとそこには体中にほんの少しの傷がついていたが目だった外傷のないクワガーモンであった。

「・・・あれ喰らってほとんどダメージなしってどんだけ頑丈なんですか？普通の個体なら確実にさっきの一撃でお腹に穴が開くはずなんですがね」

そういいつつもユウは右手に展開されている手甲の一部を解除してそこから何かを出現させ右手をクワガーモンに向ける
新たに出現させたものは形は多少違うが選ばれし者たちの持っている『デジヴァイス』にどことなく似ていた

「ん～データをスキャンしてみましたがやはり普通のクワガーモンと変わりませんね。まあ、平均値よりは多少高い程度ですがそれでもゼロ距離砲撃を受けてほとんど無傷ってどういうことなんでしょう？」

謎の現象にユウが首をかしげていると突然ランが口を開く

「え～っと、マスターとてもいいにくいことなんですけど」

「？、どうかしましたか？」

「実は・・・魔法の設定が非殺傷になっていたみたいです・・・」

「・・・・・・・・・ほんとですか？」

「は、はい」

「ということはあれですか？相手が今も動けるのは肉体的ダメージが無いので怒りでさっきのダメージを完全に忘れてしまっているということですか？」

「た、たぶんそうなると思います」

「仕方ないですね、気づかなかった私の落ち度です。それにまだストレス発散できると考えればいいですしね」

「そ、そうですね（というかどれだけストレスためてたんですか！？）」

2人がそのように話しているうちに再びクワガーモンが突撃をかけてくる。

「別に避けてもいいですがそれではつまらないですね・・・ここはあの娘を使うとしましょう。顕現　17騎士が一柱　『黒師　ミュール』　武装形態。さらにラン、モード〈大剣（ブレード）〉」

ユウの体が一瞬光それが収まるとそこには・・・

服装は変わらないが髪の色が銀から黒に変わり両手には先ほどよりも黒くなった手甲、両足には膝上まである黒のロングブーツ、そして右腕にはそれらの黒とは対照的な白く煌めく大剣下握られていた。

しかしクワガーモンはそんなこと関係なしに先ほどと同じように突撃をかける。

「馬鹿ですねさっきも同じように突っ込んできて反撃を受けたというのに・・・ああ、さっきは痛みは大きかったけど外傷はほとんどなかったから平気だと考えた口ですか」

ユウがそうつぶやいている間にも接近してきてついに凶悪なはさみがユウを捕らえたと思った瞬間・・・

パシッ

そんな軽い音とともにはさみの右側がユウの左手にあっさりとつかまれた。

「ギャッ!?」

あまりの出来事に動揺したクワガーモンだがすぐに両手を使ってユウに追撃をかける。

「遅い」

しかしユウは特に気にすることなく右手に持った大剣で袈裟切りを放ちクワガーモンの左のはさみと左腕を切り落とす

この時子供たちには結構キツイためアルがすぐさま大きな翼を使って子供たちには見えないようにしていた。

「ギャーーーー!?」

あまりの痛みにクワガーモンは叫び声を上げるがユウはそんなことお構いなしに右足でクワガーモンを上空に蹴り上げる。

「そろそろ落ちなさい」

次の瞬間にはその場にいたユウの姿が消え蹴り上げられたクワガーモンの上に現れ左手を振りかぶりそのまま動けない標的に向けて振り下ろした。

バギッバギッ

当たった瞬間クワガーモンの体からいやな音が聞こえるがユウはそんなこと気にもせず左手を振りぬきクワガーモンを森に叩きつける。

森に落ちたクワガーモンはすぐには止まらず森を破壊しながらある程度進んで止まった。

そんな様子を眺めながらユウたちは上空でなにやら話していた

「これで終わりですかね?やっぱり成熟期じゃたいしたストレス発散にはなりませんでしたよ。もっと数がいれば多少楽しめたでしょうけど」

「(さっきも思いましたがどれだけストレスためてたんですか)というかマスターそれってフラグじゃないですか?」

「・・・サスガニソレハナイトオモイマスヨ?」

「何で片言かは置いておきますが説得力は無いですよ？」

2人？がそのように話していると突然森の方から何かが飛び出してくる

「ほらランが余計な事言うから何か来ちゃいましたよ」

「私のせいですか！？どちらかというと最初に言ったマスターが悪いんじゃないですか！」

「むっ、主人のせいにするとはなってませんね。全く親の顔が見てみたいですよ」

「私を作ったのマスターですからね！？・・・というかあれほっといていいんですか？」

新たに現れた5体のクワガーモンを指差し？ながらランが疑問の声を上げる

「流石にそろそろ相手しますか。でも何でクワガーモンたちが集団で動いてるんでしょうかね？縄張り意識が強くて同じ種族でも平気で戦いあうというのに」

「あれじゃないですか、さっき倒したのがこの辺を統率するクワガーモンのボスでやられた仕返しとかじゃないですかね？」

「ですかね～とりあえずアルに指示だけ出しちゃいますか」

そういって再び手甲の一部を解除してデジヴァイスに似たものを今度は仲間であるアルに向け先の方から赤い線が延びてアルに向かっ

ていく。

「これでいいですね。あとは邪魔者を倒すだけです」

そしてそのまま向かってきているクワガーモンたちに向き合うのであった。

5万PV突破記念　番外編1－1　デジモン編　ただし投稿時点で10万PV超

ル「番外編1－1終了！」

ユ「いやいや！！終了ってすごい半端に終ってるんですけど！？」

ル「何故か知らないけど長くなったから分けてみた。ちなみにこの話は大体1万2千字くらいで戦闘シーン入るまでに約7500字、戦闘シーンで約4500字使っております」

ユ「何で戦闘の方が少ないんですか？」

ル「書きたいこと特に冒頭の説明とゴマモンとの件かいてたらこうなっちゃった。ちなみにゴマモンの件については完全に暴走した。だってゴマモン絶対抱き心地よさそうって昔からおもってたからね」

ユ「そもそもそれ以前にデジモンの話は第1話をやるっていってませんでしたか？」

ル「・・・実は構想してたシーンがほぼ第1話終了からっていうのを前話書いてこの番外編書く直前に気づいたんだ」

ユ「ほんとダメダメですね」

ル「ごめんなさい。
ちなみにユウのパートナーデジモンたちの戦闘力はディアがそれぞれの形態でアグモンたちが進化するのより少し強い程度です。
アルは自分がそのとき進化している形態の1つ上の形態の中位～上位の下のレベルなら倒せます。ただし闇というか暗黒の力を得たア

ニメのボスクラスの敵は除く」

ユ「どこの漫画版のゼロですか」

ル「まあ、漫画版のVテイマー参考にしたからね。違いは性格としゃべり方違うくらいだし。あとデジモンに関係するユウの現時点での持ち物は

・デジヴァイス・・・ただし太一たちのようなものではなくこちらも漫画版の腕につけるタイプ。追加としてこれからも進化の光が発生する。

・紋章とタグ・・・ゲンナイに試作品として預けられたもの（ただし本人がそう思っているだけで実際は完成品）。ユウが持つものはアル用の奇跡、ディア用の絆、？用の闇の3種類

・？？？（全10種類）

とまあこんな感じです」

ユ「？？？ってデジモン詳しい人ならすぐ気がつくんじゃないですか？それにパートナー2人なのに紋章3つある上に奇跡って」

ル「？？？にかんしてはめったに使う気ないけどね。紋章に関しては3体目出す気だったんだけど決められなかった。闇なのは光があるんだし対になるのがあってもいいだろうと思ってね。本編の敵が使うのとは別な力です。奇跡は01のラスト考えたら必要かと思ってね。え？02のキメラモン戦？それこそご都合主義ですよ」

ユ「ちなみにパートナー候補は？」

ル「ファルコモン・ブラックアグモン（以下Bアグモン）・ウィザーモンの3体！進化先はロスエボみたいになる」

ユ「ウィザーモン以外問題ありまくりですね！？」

ル「ちなみにウィザーモンの最終進化はベルゼｂ「何でですか！？」、だってロスエボでそうなるからね。完全体は変えるけど。あとどっちも好きなデジモンだしね。ファルコモンに関しては完全に好きだから選んだ。進化先は当然あいつ。Bアグモンは02の彼が好きだから救済的に考えてみた」

ユ「ほんと無茶苦茶ですね」

ル「アニメとは別物で書いてるからね。あとユウはデジモン世界初到達という設定」

ユ「意外ですね」

ル「あとユウが今回使った能力等は次回の方で詳しく載せたいと思います。ちなみに次回は今回よりもさらに戦闘がカオスになる予定です。おもに能力で」

ユ「予定ってまだ書き終わってないんですか？」

ル「戦闘シーンしかないからすぐ書き終わると思うけどまだ終ってないんだ。ちなみに使う能力を作品でいっておくと、ネギま・ナルト（瞳術のみ）・ブリーチ（斬魄刀とある人物）ですかね。あとは守護者と武器ですかね。

がんばって3日以内には書き上げたいと思うのでどうかお待ちくだ

さい」

ユ「無理なフラグですか・・・」

ル「そんなこといわないでーーー!?」

ル・ユ「「ではまた次回お会いしましょう」」

５万ＰＶ突破記念　番外編１－２　デジモン編　ただし投稿時点で１０万ＰＶ超

なんとか日付が変わる前には投稿できました。

本当にギリギリですけどね。

ネギまの呪文にルビ振ろうと翻訳サイト探してたらこれですよ！

しかも読み方わからなかったから結局断念したというオチ　ｏｒｚ

こんな感じですが本編をお楽しみください。

5万PV突破記念　番外編1－2　デジモン編　ただし投稿時点で10万PV超

前回のあらすじ

ファイル島上陸
クワガーモンフルボッコ？
何故かさらに5体のクワガーモンが！？
QB「意味がわからないよ」
それでは本編スタート！

ユウがこちらに向けて赤い光線を放ちそれを受け取ると頭の中にある情報が入ってくる。

「うわぁ、ユウのやつ相変わらず無茶苦茶だな」

「ユウちゃんはなんだって？」

アルがなにやら先ほど受け取った情報について思いをめぐらせていると右肩から声が聞こえた。

「なんだディアか、いやなさっきにユウから・・・・・・って送られてきてな」

「うわぁ～」

「こんなことしなくても倒せるだろうに」

「どう考えても遊んでるよね～」

そういうと2人はどこか遠くを見るのであった

少しはなれたところから5体のクワガーモンがこちらに向かってくるがユウはそれを全く気にしていないようであった

「さてせっかく5体に増えたのですからちょっと遊ぶとしますか」

「マスター性質が悪いと思います」

「気にしちゃだめですよ～。では早速　『顕現せよ　我に付き従いし守護者　我が呼びかけに応えたまえ　風・焔・闇・重・水・光・癒し』」

ユウがそうつぶやくと目の前に7つの光が現れてそこから7人の女性が順番に現れる

「風を司りし守護者『翼』。主様何なりとお申し付けを」

最初に現れたのは金髪の女性『翼』

「ユウ様お久しぶりです！！」

2人目は現れた瞬間ユウに飛びついた金髪の少女『綺羅（きら）』

「あー、闇と雷の守護者『零』・・・これって私ら要らないんじゃないですかユウ様？」

3人目はどこと無くやる気のなさそうな紫の髪の女性『零』

「・・・重力と大地の守護者『クロエ』・・・主何なりとご命令を」

4人目はどこか寡黙な女性『クロエ』

「水と氷の守護者『アクア』。お久しぶりですマスター」

5人目は水色の髪をした女性『アクア』

「あっ！綺羅ばっかりずるい！私もお姉ちゃんに会うの久しぶりなんだから」

そう言って綺羅同様抱きつく6人目に現れた銀髪の少女『アリア』

「き、綺羅ちゃん、アリアちゃん落ち着いて～～」

最後に現れた黒髪の少女『藍（あい）』は泣きそうにしている。

（ちなみに綺羅は焔・アリアは光・藍は癒しに該当します。なおここから一時的に括弧の前に名前をつけてお送りいたします）

翼「こらっ！綺羅、アリア、藍！名乗りくらいきちんとやりなさい！」

綺羅（以下　綺）「あいかわらず翼は固い。別に名乗りなんて今更

だよ」

翼「そういう問題ではありません!!あなたたちには守護者としての自覚は無いのですか!!」

アリア（以下　ア）「そうそう、そんなだから翼は生き遅れるんだよ」

綺「アリアいい事言う」

翼「（ブチッ）いい度胸です!3人ともそこに直りなさい!!」

藍「何で私までーー!?」

そのまま綺羅、アリア、藍は翼に追われるのであった。

ユウ（以下　ユ）「みんな仲がいいようで嬉しいですね～」

零「それで～ユウ様なんで私等呼んだんですか?こっち向かってきてるやつらなんて1人でも余裕じゃないですか」

クロエ（以下　ク）「・・・零のいうとおり俺たちはいらないと思う」

ユ「それはあれです。ちょっとしたゲームをやろうと思ったからです」

アクア（以下　アク）「ゲームですか?」

ユウが突然提案したゲームという言葉に疑問を覚えるアクアたち。

ユ「簡単なことですよ。こちらに向かっている5体のクワガーモン、それらを3分以内にあなたたちに倒してもらおうと思いましてね」

零「それって～ユウ様が楽したいだけで私たちにメリットが無いような気がするんですけど～」

ユ「メリットならありますよ。3分以内に倒せた人全員、何でも願いを聞いてあげますよ」

ユウがメリットについて言うと全員が動きを止め、綺羅とアリアがユウに向かって飛び掛ってくる。

綺・ア「「それ本当(ですか)!!ユウ様（お姉ちゃん）」」

ユ「ええ、倒せたらですけどね。でも2人ともいいんですか?」

綺・ア「「ふえ?」」

ユ「他のみんなはもう敵の元に向かっちゃいましたけど?」

そうなのだ、綺羅とアリアがユウに向かって飛び掛ってきたとほぼ同時に翼・零・アクア・クロエはそれぞれクワガーモンに向かって飛んでいったのである。

綺「みんなずるい!?」

ユ「あと時間のカウントもすでに始めてますよ」

ア「ちゃっかりお姉ちゃんも酷い!?」

綺「最後の1体はもらう！」

ア「綺羅にそれだけは絶対させないよ！」

そういいつつ2人は最後の1体に向かうのであった。

ユ「いや～なんだかんだ言ってあの2人は仲がいいですよね～」

ラン（以下　ラ）「何か違う気がするんですが・・・」

ユ「！？・・・ランいたんですか！」

ラ「何で私の扱いが酷くなってるんですか！？」

ユ「まあ、そんなことは置いておいて「置いておかないでください！」それよりも「無視ですか！？このやり取り確か前にも」藍は行かないんですか？」

藍「お、お姉ちゃん、私じゃどう考えても無理ですよ」

ユ「え？本気出したら守護者の中で1番強いのに何を言ってるんですかあなたは？」

藍「そ、そんなこと無いですよ～！？」

ユ「まあ、その謙虚なところが藍のいいところなんですけどね」ナデナデ

藍「にゃ！？ふ、ふにゃ～～」

ユウが藍の頭をなでると顔を赤くするのであった

ユウたちがいるところから少し離れたところで翼・零・クロエ・アクアの４人は5体のクワガーモンと対峙していた

翼「さてあなたたちにうらみは無いですが」

零「ご褒美が魅力的なんで」

アク「ここで散ってもらいます」

ク「・・・主のために散れ」

１人を除いてご褒美のためにやる気を出しているがその威圧感の前にクワガーモンたちは萎縮している
そして４人がそれぞれ飛びかかろうとすると後ろから綺羅とアリアが飛んでくる。

綺「みんなずるい」

ア「そうだよ私だってご褒美欲しいのに！」

先に行った４人に対してずるいといって抗議する２人であったが４人は特に気にした様子は無い

零「あ～、ユウ様があいった瞬間にゲームは始まってたんだからそこに気がつかない２人が悪い」

アク「そういうことです。遅く来た2人は余ってる1体をがんばって倒すといいですよ」

ク「・・・藍はこないか」

翼「人を生き遅れてるとかいった罰です」

翼・アク・ク「「「（まだ根に持ってたのか）」」」

綺「う～～」

ア「こうなったら綺羅よりも先に確保です！」

綺「させない！」

そういって綺羅とアリアはクワガーモンの1体に接近し攻撃を仕掛ける
それを見ながら残った4人もクワガーモンを1体づつ引き連れて離れていく。

翼「ではあまり時間はありませんので早くかかってきてくださいよ。速攻で終わらせますから」

「シャーーーー！！」

翼の挑発に乗ってクワガーモンは突っ込むがそれはあっさりとかわ

され逆に背中にけりを入れられて距離をとられる。

翼「そんなただ突っ込んでくるだけの技なんて地上にいる敵にならともかく空にいる敵になんてめったに当たりませんよ。そしてそのまま落ちなさい！　“悠久の時を巡る優しき風よ・・・我が前に集いて烈刃と化せ！”　『サイクロン』

翼が呪文を唱えると巨大な竜巻が発生しクワガーモンはあっさりとそれに飲み込まれてしまう。

翼「耐えられるとも思えませんが、出なさい『鳳翼機』武装形態！」

そういうと突然、鳥のようなものが現れ次の瞬間には鳥が鎌となり翼の手に収まっていた。

零「悪いけどだるいから黙ってなぶられてもらうよ『ライトニング』」

麗が無詠唱で呪文を唱えると一筋の雷がクワガーモンの上に落ちて相手の動きを封じる。

零「一気に行かせてもらうよ。多重詠唱“死の顎　全てを喰らいて闇へと還さん！”“天光満る処に我はあり、黄泉の門開く処に汝あり！来たれ！神の雷！”『ブラッディハウリング』『インディグネイション』」

詠唱が終ると同時に闇の塊が大雑把な円を描き身動きの取れないクワガーモンを喰らい尽くさんと襲い掛かりその直後に上空から先ほどとは比べ物にならないほどの巨大な一撃が降り注ぐ。

零「普通ならこれで終るんだけど、やな予感がするんだよね～。一応出しとこうかな『黒豹機』武装形態」

その掛け声とともに黒い豹が現れ槍となって零の手に収まる。

アク「遅いんですよ。“氷結は終焉、せめて刹那にて砕けよ!”『インブレイスエンド』」

突然現れた氷の槍をクワガーモンは何とか避けそのまま多少距離が空いたアクアに向かって再び突撃をかける。

アク「涎をたらしながら近づいてこないでください!はっきり言って気持ち悪いです!『フリーズランサー』」

クワガーモンの真上に氷塊が現れそれはそのままクワガーモンを押しつぶしながら川に叩き落す

アク「いつもより氷塊が小さかったですね。調子は万全のはずなので他に原因が考えられるとしたら・・・マスターですか。仕方ないですね『蒼狼機』そのまま武装形態に移行です」

呼びかけに応えるように蒼い狼が現れそれは2丁の蒼い銃となりアクアの両手に吸い込まれるように収まる。

ク「・・・・・邪魔。消えろ“無光なる最果ての渦。永遠の安息へと導け”『ブラックホール』」

そのたった一言でクロエに向かってきていたクワガーモンの目の前に強烈な重力場が現れてクワガーモンを容赦なく吸い込みその後盛大に爆発する。
しかしクロエはその爆発を眺めながら警戒は怠ってはいなかった。

ク「・・・主も面倒なことをしてくれる。『黒狼機』」

クロエがそうつぶやくと今度は黒い狼が現れてクロエの両手に鎖でつながれた巨大な2つの鉄球の姿になる。

その頃の2人で1体のクワガーモンを相手している綺羅とアリアはというと・・・

綺「アリア。私の邪魔しないで。あれは私の獲物」

ア「邪魔してるのは綺羅の方だよ!そっちこそあれは私の獲物だよ!」

クワガーモンそっちのけで喧嘩していたためクワガーモンもあまりの出来事に少しだけ呆然としたがすぐに正気に戻り綺羅とアリアに

襲い掛かる。

綺・ア「「邪魔!!」」

そういってあっさりと吹き飛ばされるクワガーモン・・・・・哀れである。

綺「もういい。アリアなんか無視してあいつを倒す“古より伝わりし浄化の炎　喰らえ”」

ア「させないよ!あいつを倒すのは私なんだから“輝く御名の下、この穢れた魂に裁きの光を降らせ賜え”」

綺「『エンシェントノヴァ』」

ア「『ジャッジメント』」

上空から炎と光の柱がクワガーモンに直撃し焼き尽くしていく

綺「これでご褒美は私のもの」

ア「何言ってるの!倒したのは私の攻撃だよ!」

綺「違う私の攻撃」

ア「私だよ!」

綺・ア「「・・・・・・」」

どちらが倒したかでもめて無言でにらみ合う2人

綺「直接戦って決める。『狐王機』」

ア「望むところだよ！『白豹機』！」

綺・ア「「武装形態」」

なんとも情けない理由で綺羅は九尾の狐、アリアは白い豹を呼び出し、狐は鋭い爪のような武器になり綺羅の両手に装着され、豹も手甲のようなものになりアリアの両手に装着される。

ここに守護者同士のなんとも情けない戦いが始ま・・・・・らなかった。

「シャーーー！」

なぜなら倒したと思っていたクワガーモンがかなりボロボロになりながらも生きていたからである。

綺・ア「「ええーーー！？」」

まさかの出来事に驚く2人その頃他の4人のところでもクワガーモンの叫び声が響いていた

その頃のユウたちはというと

ユ「そろそろ時間ですね。準備と行きますか」

藍「お、お姉ちゃんみんなに何かしたんですか？」

ユ「それほどたいしたことはしてませんよ。ただ技を使うときに威力が本来の半分以下にするようにしただけですよ。みんなのことだから派手にやると思うので気づきにくいですしね。まあ、最初から武器を使ってたらもう終ってたでしょうけどね」

ラ「流石マスター鬼畜ですね」

ユ「とりあえずランは後で御仕置きですね。それよりも服装はそのままで待機状態になっておいてください」

ラ「（自爆してしまいました）・・・わかりました」

そういうとユウの両手が光ってその光は頭に移動し髪飾りに戻っていた

ユ「でははじめましょうか。　アリ・アル・アリス・カルテット多重詠唱

“　契約により我に従え、高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻”

“　契約に従い、我に従え、漆黒の女帝。来れ、極限の闇、すべてを破壊せし翼。あらゆる命あるものに等しく死の絶望を与えたまえ”

『『千の雷』』
『『失墜せし楽園』』
術式固定　四肢掌握　魔力充填　闇の魔法　術式兵装『雷華闇姫（らいかあんき）』」
闇の魔法によって４つの魔法を取り込んだユウはその身に漆黒の雷を纏っていた（ネギま本編でデュナミスにやられて暴走したときの感じです。ただしあれよりは澄んでるというか、煌めいているという感じで綺麗です）
その姿を見て藍はどこか冷や汗のようなものを書きながら質問する
藍「・・・お姉ちゃん。そこまでする必要あるの？」
ユ「まあ、ここまでする必要は無いんでしょうけどもここまでやらないと私の気がすみませんからね。まあ、これの出番はすぐに終りますけどね」
そんなユウの返答に藍とランはどこか呆れる
ユ「では行ってきますね」
藍「気をつけてねお姉ちゃん」
ユ「大丈夫ですよ」
そういって一瞬にしてその場から消え去るのであった。

翼「まさか本当に耐えるとは、ですが時間が無いので一気に止めを刺させていただきます」

翼は自分の一撃に耐えた相手に対してとどめの一撃を放とうと一気に接近する。

相手は耐えたとはいえそこそこのダメージを負っていたため反応が遅れる。

翼「もらいましたよ！」

クワガーモンの命を奪うために翼の持った鎌が煌めきながら首筋に向かう
しかしそれは首をはねることなく空振りに終ってしまう

翼「！？　まさか避けられたんですか！？」

まさかの出来事に翼は混乱するが次の瞬間頭の中に声が響き渡る

ユ［時間切れですのでこれはもらって行きますね］

翼「主様ーーーー！？」

ついでに翼の叫び声も響き渡る

零「いやな予感的中ってね～。というかそろそろ時間か～」

攻撃を喰らってもいまだ健在のクワガーモンを見て零は時間だとつぶやく
その言葉通り次の瞬間にはクワガーモンの姿は消える

ユ［正解です。というわけで貰っていきます］

零「ユウ様絶対私らに勝たせる気無かったよね～」

そういうと苦笑いを浮かべながら零は藍がいる方向に飛んでいった

アク「やっぱりマスターのせいですか。他のみんなは技が派手だから気づきにくいですが私は氷塊の大きさで気がつくんですよね」

冷静に現状を観察しながら何故か手に持っていた銃の片方をクワガーモンに向けてそのまま発砲する
するとクワガーモンの真上に氷の壁が出現するが次の瞬間にはそれは砕け散りそれと同時にクワガーモンは消え何故か水柱が上がる

ユ［ア、アクア、あなた私に何かうらみでもあるんですか？］

すると念話でどこか痛みをこらえたような声でユウから連絡が来る

アク「何言ってるんですか？私がマスターにうらみなんてあるわけ無いですよ～」

ユ［もういいです。　グスン］

そのまま念話が切れるとアクアも藍の方に向かって飛んでいくのであった

ク「・・・・・・」

ユ［ってクロエ何してるんですか！］

クロエが何をしていたかというとクワガーモンが消える少し前からすでに藍の方に向かっているのであった

ク「・・・どうせこうなると思ったからさっさと戻ってる」

そういって再び飛んでいくのであった

ユ［なんか最近みんなが冷たい気がします・・・やっぱりしばらく呼んでなかったからですかね？］

それはずっと呼び出されなきゃそうなるよ（笑）

そのころ綺羅とアリアはというと

ア「何でまだあいつ生きてるの！？」

綺「どうせアリアがまじめにやらなかったから」

ア「私はまじめにやったもん！どっちかというと綺羅がまじめにやらなかったからだよ！」

綺「むっ、人のせいにするのはよくない自分の非は認めるべき」

ア「だーかーらー！私はまじめにやったよ！」

また喧嘩を始めているのであった

ちなみにクワガーモンは2人が喧嘩している間にユウによって連れて行かれていた

そして喧嘩してる2人はというと途中で正気に戻った翼に回収され先ほどのお仕置きの続きをされるのであった

ユ「では始めるとしましょうか」

そういったユウの目の前には翼たちが相手していた5体のクワガーモンがいた

ユ「では一気に行きますよ！」

次の瞬間ユウは雷と化し圧倒的なスピードで5体のクワガーモンを中心に球体を描くように移動しながら殴る蹴るを繰り返す

バキッ
ドゴッ
ベギッ
グシャッ

ユ「準備ＯＫできましたね」

様々な音を立てながら攻撃していくが突然攻撃をやめてクワガーモンたちから離れるユウ

ユ「術式起動　空間型捕縛結界」

そう唱えると先ほどまでユウが球体を描くように移動していたところが光、敵の動きを止める空間となって展開される

すでにボロボロであったクワガーモンたちにもはや破れるはずも無くただ為すがままにされる（万全でも破るのは不可能だが）

ユ「では消えてください。　術式固定　『雷の投擲』『千の雷』『闇の波動』。続いて術式統合　雷神槍『巨神殺し？　すべてを飲み込む常闇の槍』。それでは・・・サヨウナラ」

その名を呼ぶとともに腕に現れた漆黒に染まりし巨大な三つ又の槍

それをユウは思いっきり振りかぶり結界の中で動くことのできないクワガーモンたちめがけて投げる。

避けるすべの無いものにその槍をどうにかすることなどできるはずも無く中心にいた1体に突き刺さりそこから黒い雷と闇の波動が放たれまわりにいた4対にも襲い掛かる。

「「「「「ギャーーーー!!」」」」」

あまりの威力に5体は悲鳴にも似た声を上げるがそんなことなどお構いなしにユウはとどめの言葉をつむぐ

ユ「砕け散りなさい『黒龍雷迎』」

その一言で槍は結界内で爆ぜ中にいたものの命を刈り取る

その後結界が解かれ残っていた煙が晴れると中から5体のクワガーモンだったと思われる細かい（全部あわせてもクワガーモン半分くらいにしかならない大きさのもの）肉片が破壊された森に向かって落ちていった。

ユ「むぅ・・・まさか肉片が残るとは思いませんでしたよ。手加減しすぎましたかね？」

そういってユウは翼たちのところまで行きそのまま子供たちのところまで戻るのであった。

5万PV突破記念　番外編1－2　デジモン編　ただし投稿時点で10万PV超

ル「投稿から少し遅れた後書きの時間～」

ユ「本当に何をやってるんですか？」

ル「いや～自分でもびっくりでね。ラテン語探すのにあんなに苦労するとは思わなかったんだよ」

ユ「その割に成果は出てないですけどね」

ル「ぶっちゃっけ無理です。というわけで今回の解説から・・・まずは前回の分から

・アスカ・・・巨大な鳥の精霊だが大きさは変える事ができる。元ネタはテイルズオブシンフォオニアの光の精霊ルナの片割れ？できなもの。この作品では使う力は『癒し』これはルナが光属性の攻撃の部分を、アスカが回復の部分を使用する設定にしたからである」

ユ「この設定普通キャラ逆じゃないですか？」

ル「そこは初めて見たときなぜか不死鳥のイメージがわいたからだよ」

ユ「ああ・・・」

ル「次は

・エターナルバスター・・・リリカルな魔砲少女（誤字にあらず）の砲撃魔法と同一で遠近両対応。ちなみに名前はユウが永遠に等しい時間を旅していることから。魔力色は『銀』

・黒師『ミュール』・・・17騎士の1体で白師と対になるもの。詳しくは設定に追加予定
前回の分はこんな感じかな」

ユ「何だか一部説明になってないような気が・・・」

ル「そこは設定に追加する予定だからね。次は今回の分ですが一部簡略化です。

・守護者・・・今回は本編で出てきた3人以外が登場。ちなみに守護者自体の設定は『主を守る10の盾』です。その割りに全員攻撃重視ですがね。もちろん別に刃の方も存在する。今回出てきた7人はそれぞれユウが操る精霊と呼応しています。対応している精霊は炎・水・風・地・雷・氷・光・闇・重力・癒し10種類です。それぞれの設定は番外編が終った後に更新予定です。

ネギま関係（千の雷と闇の魔法の説明は除く今度闇の魔法については設定更新予定）

・失楽せし楽園・・・『千の雷』などの呪文と同系統のオリジナルの闇属性の呪文。闇が辺り一帯を覆いつくしあらゆるものを消失させる。

・雷華闇姫・・・『千の雷』と『失楽せし楽園』を闇の魔法で2種類計4つの魔法を取り込んだもの。見た目は本文で書いたとおりだが完全雷化と闇化ができる。

・空間型捕縛結界・・・球体のように相手を囲うように描いた魔方陣内に存在するものの動きを完全に止める。これを破るにはかなりの力が必要。

・巨神殺し？　すべてを飲み込む常闇の槍・・・巨神殺しに闇属性を付加したもので槍の先は三つ又に分かれている。

・黒龍雷迎・・・巨神殺し?に宿る魔力を開放するものその威力は本来計り知れない。ちなみに開放の呼び名は思いつかなかったです。

・・・今回は以上です。ちなみに書いてませんでしたがユウは呪文とかの詠唱は封印の開放が４より上なら全く必要ありません。今回は初めてなのでつけてみました。」

ユ「何だか途中で『番外編が終ったら』っていう気になる言葉が出てきたんですが？」

ル「・・・実はまだ番外編終ってないんだよね」

ユ「え！？」

ル「本当なら今回で終らせるつもりだったんだけど終らなかったからまだ続きます。たぶん次回こそ終るはずです。残りの戦闘シーンはそこまで長くならず本当に速攻で終わる予定ですので」

ユ「まあ、早く書いてくださいよ」

ル「そのとおりでございます。ではまた次回更新でお会いいたしましょう」

５万ＰＶ突破記念　番外編１－３　デジモン編　ただし投稿時点で１０万ＰＶ超

にじファンよ！私は帰ってきた！（投稿的な意味で）
にじファンよ！私は帰ってきた！（投稿的な意味で）
にじファンよ！私は帰ってきた！（投稿的な意味で）

大事なことなので３回いました。

とりあえず読んで下さった皆さんに一言言いたいことがあります。

投稿が遅れに遅れて申し訳ございませんでしたーーーー！ズサージャンピング土下座

遅れた原因としましては学校とか学校とか学校とか手術とかで書く時間がほとんど取れませんでした。
落ち着きましたのでこれからはもうちょっと早くなると思います。

ほんとすみません

それでは本編をどうぞ・・・あと何故か今回の話は１万３０００字超えてしまいました重ね重ねすみません

あと後書きに今後の更新予定も書いてますのでよろしければごらんください

５体のクワガーモンを倒して自分の守護者のところにユウが戻るとそこには戻ってくるのを待っていたといわんばかりに全員が揃っていた。

そのうち綺羅・アリアの２人は何故かボロボロの状態で不満げに頬を膨らませ、翼・零・アクアの３人はそんな２人ほどではないが少し不満な様子であった。

そして、藍は最初オロオロとしていたがユウが無事なのを確認するとホッとしたのか安心したというような顔をし、最後にクロエは我関せずといった感じで目をつぶって佇んでいた。

「みんな揃ってるね。まあ、綺羅とアリアがボロボロだけどそこは置いておくとして」

「「おいておくなー！」」

ユウの置いておくというセリフに２人は声をそろえて文句を上げる

しかしユウはそんな２人を呆れたような目で見ながら２人に対して言う

「まったく何を言ってるんだか、２人がボロボロなのは大方翼にさっきしゃべったことで制裁されたってところでしょ？なら完全に自業自得だよ」

「「う～～、う～～」」

言われたことに対してさらに文句を言おうとしたがまさにそのとおりであるため2人ともその場でうなることしかできないのであった。

そんな2人の姿を見ながらユウはため息を吐きながらしゃべり続ける。

「それにしても本当に2人とも仲がいいですね。「「仲なんて良くない！・・・まねするな！！」」・・・そんなに息ぴったりで言われても説得力ないよ？「「表出ろ！決着つけてやる！！」」そして人の話聞きなさいよ2人とも・・・」

目の前で喧嘩を始めた2人を眺めながら一瞬止めようとしたが、なんだかめんどくさくなったため放置することを決め他のメンバーに話しかけようとそちらの方を向いた瞬間ある気配を感じたため急に険しい顔になり翼たちに話しかける。

「みんな、気づいてる？」

「はい、それにしてもこの感じは・・・」

「気づいてますけど・・・これはまた面倒になりそうな気が・・・」

「まだいるんですか・・・」

「主、どうする？」

「と、とりあえず喧嘩止めないと～～！？」

上からユウ、翼、零、アクア、クロエ、藍の順番に応えていく。
ちなみに綺羅とアリアはいまだ喧嘩中のため気がついていない。

「相変わらず綺羅とアリアは1回喧嘩しだすと周り無視するね。・・・仕方ないから、みんなはそこのバカ2人の喧嘩を止めたらそのままアルやアスカがいるところまで行ってなさい」

「それは構いませんが、主様はどうするおつもりですか？」

「私はこの気配の元をたどって必要なら排除してくるよ」

そんなユウの言葉に4人はどうせ何を言っても無駄だろうと思いそそくさと喧嘩中の2人を止めるために移動を開始する。

しかし藍だけは移動せずに心配そうな顔をしてユウに声をかける。

「お、お姉ちゃん、何だか心配だからわたしもついていくよ」

「全く藍は心配性だね。私なら大丈夫だからみんなのところにいって。それとも私の力が信じられないの？」

「そ、そうじゃないけど、お姉ちゃんの場合そういっていつも怪我とかしそうになるから心配になるんだよ～」

「うぐっ、た、確かに何故か色々と不測の事態が起きて怪我しそうになる時はあるけど今回は大丈夫だから私を信じなさい」

そういいながら頭をなでて藍に合流するように促す。

「う～、じゃ、じゃあもし怪我したりしたらあれを使ってお仕置きするからね！」

そのような言葉を言い残して藍は他のメンバーの下に飛んでいく

しかし藍の言葉を聞いたユウはというと・・・

「ちょっ！？あれって下手したら私でもやばいやつじゃないの！？ってもうあんなところまで行ってるし！何で藍はこんな時だけ不吉な言葉残していくのー！？」

「どう考えても自業自得ですよ」

ユウの叫びとランの突っ込みはむなしくも空に響いて掻き消えるのであった。

「それでマスターさっきの気配を探しに行かなくていいんですか？早くしないと面倒になるんじゃ？」

「あー、確かにそうだね。さっさと気配するところまで行って確認して必要なら排除して戻りますか」

ランの呼びかけで正気に戻ったのかユウはそういうと気配を感じた方に向かって飛んでいくのであった。

《少女？移動中》

ピチューンッ

「なんだか失礼なことを言われた気がする」

一瞬のうちに謎の気配がしたところについたユウは空中であたりの探索を始めた。

「う～ん、特に怪しいところは無いような気がするけど・・・可能性があるとしたらあそこかな？」

そういってユウが視線を向けるのは前々回に自身が吹き飛ばしたクワガーモンによってできたえぐられた森とその先にあるクレーターであった。

「ガァァァァァ！！」

「！？」

突然鳴り響く獣のような咆哮、そしてその咆哮がやむとともに森から飛び上がる１つの赤い影、それは先ほどまで相手していたクワガーモンであった。

・・・ただしユウが吹き飛ばした時にあった傷等は完全に消えていた

「さっきから感じていた気配はこいつのだったのかな？でもさっき戦った時はここまで大きなかんじでは無かったのに・・・それに傷も消えて・・・っ！？この光！まさかっ！」

先ほどとは違う気配のクワガーモンについて疑問を覚え原因について考えていると突然目の前のクワガーモンが光だしその姿を変えて

いく、まさしく進化の前兆である。

クワガーモンは前々回ユウに吹き飛ばされた直後は瀕死に等しい状態であったが、前回バラバラにされた他のクワガーモンのデータを喰らうことにより傷を回復させたのである。
しかもそれだけではなく今回他の同種の個体を喰らうことにより進化に必要なデータならびに力が偶然にもたまってしまったのである。

そして光が収まるとそこにいたのは全身が灰色で覆われたクワガーモンより大型になった完全体デジモンのオオクワモンであった

“オオクワモン”
完全体　ウィルス種　昆虫型デジモン

オオクワガタをモデルにしているといわれている昆虫型デジモンでクワガーモン種の正当な進化の形とされている。
このデジモンと対になるとされているアトラーカブテリモンは騎士道精神を持っているのに対してオオクワモンは破壊衝動が強化されより凶暴になっている。

必殺技はシザーアームズΩ（オメガ）である。

「オォオォオォオォオ」

オオクワモンはその姿を現すと辺りを少し見渡した後にユウのほうを向きその姿を視界に納めると咆哮を上げて猛スピードで突撃を始める。

「っ！進化したばかりでもボコボコにされた相手は覚えてるって事ですか！」

「来ますよマスター！」

「問題ないよ！こんな直線的な動きなら簡単にかわｓ！？」

こちらに向かってくるオオクワモンの突撃をかわした直後ユウを突然の衝撃が襲う
オオクワモンが速すぎた為避けても軽いソニックブームが起きてしまいそのせいでバランスを崩してしまったのである

そして突撃をかわされたオオクワモンはというとすぐさま反転しユウに向かって再度の突撃をかける

「チッ！なんともめんどくさくなったね！」

「どうするんですか？マスター？」

「面倒だから燃やす！“天照（アマテラス）”発動」

そう叫ぶとユウの左目が赤から黒へと変わりその視線を突撃してきているオオクワモンへと向ける
するとオオクワモンの目の前の空間が歪みそこから敵を燃やしつくさんと黒炎が相手に襲い掛かる

しかし・・・

「！」サッ

オオクワモンは破壊衝動に駆られながらも持ち前の本能によって危機を察知し黒炎が体を覆いつくす前に無理やり進路を変え被害を最小に抑える。

わずかに体についた炎もそのスピードによって消し去りその黒炎を放った本人であるユウに対して表情が読み取れれば獰猛な笑みを浮かべていたであろう雰囲気をまとって3度突撃をかける

しかしその突撃は相手に届くことは無かった

「射殺せ『神槍』」

「！？」

その声とともに突如伸びてきた刃がオオクワモンの左半身に直撃しそのまま吹き飛ばす

完全体になり頑丈になっていたため腕が切り落とされるようなことはなかったが衝撃を殺しきることはできずそのまま地面に叩きつけられる。

ドゴォォォォンッ

派手な衝突音とともに再び抉られていく森の木々、しかしオオクワモンはそんなことは気にせずにすぐに体勢を立て直し自らのターゲットである少女？の方を向く

その視線の先に映ったのは先ほどまでとは違う黒い着物を着て、鞘も柄も鍔も何も無いまるで出刃包丁のような形をした巨大な刀身のみの刀『斬月』を構えているユウの姿であった。

「やっぱり“天照”は完全体以降には本能で感じ取るせいか当たらないね。・・・成熟期にすらあたらないこともあるけど。まあ、それは置いておいて喰らえ“月牙天衝”」

その声とともに振り下ろされた刃からオオクワモンに向かって巨大な黒い斬撃が飛びそのまま直撃する。

その様子を眺めながらユウは“斬月”を体の前に持っていき地面に向かって水平に構える。

「どうせ始解じゃたいしたダメージは与えられないだろうからこのまま一気に行くよ!卍解『天鎖斬月』」

更なる力を使うために新たな刀の名前を叫ぶユウであったが一瞬大きな風があたりに吹いたかと思うとすぐに止み刀にも何も変化は起きないのであった。

「へっ!?」

予想外の出来事に思わず間抜けな声を上げてしまったユウだが敵がそんな隙を逃すわけが無く先ほどの一撃でたいしたダメージを受けることの無かったオオクワモンが突撃してくる

「ちょっ!?た、タンマ!待ちなさいって!てかなんで卍解使えないわけ!?」

卍解が使えないことに混乱し待ったを掛けるが敵が待つはずも無く全速力で逃げ出す羽目になるのであった

ここにデジモンと人間の奇妙な鬼ごっこがはじまったのである

・・・・・大体2分ほど経過・・・・・・

ユウとオオクワモンとの鬼ごっこは互いに飛行速度が同等であったため最初と距離はほとんど離れることは無かった

そしてそのやり取りの最中ユウのデバイスのランがあることを告げる

「マスター！何で卍解ができないかの原因がわかりました！」

「本当！それで何でなの！？」

「そ、それが・・・リミッターが4までしか解けてなくてそれが原因で卍解が使えなかったみたいです」

「はぁ！？何を言ってるんですか！私はちゃんと5段階目ま・・で・・・（汗）」

そこまで言って言葉につまり額から汗を流すユウ

そんなユウに対してランは冷たい声で

「忘れてたんですね？」

と言ってくるのであった。

「てへっ　すっかり忘れてた」

「このうっかりマスターーーー！」

「失礼な！私をどこぞの肝心なところでうっかりミスをする一家と一緒にしないでください！」

「そういいますけどマスターって結構こういううっかりしますよね？」

「プイッ（視線を逸らす音）」

「視線を逸らしても無駄ですよ」

「さあ！仕切りなおしと行くよ！」

「この人無かったことにしようとしてるし」

「まずは動きを止めようか！縛道の六十一“六杖光牢”」

そのように唱えるとオオクワモンの周りに６つの帯状の光が現れそのまま胴体に向かって突き刺さる

それは一瞬敵の動きを止めたがすぐに罅が入っていく

「ほら追加だよ！縛道の六十三“鎖条鎖縛”！もう1つおまけに縛道の七十九“九曜縛”！ラスト！縛道の七十五“五柱鉄貫”」

その詠唱を動きを止めていたオオクワモンに止めるすべは無く次々に命中していく

最初に鎖が巻きつき、次に体の縦方向に8つ、胸に1つ黒い球が現れ縛っていく、そして最後に空から5つの五角柱が降り注ぎ地面に突き刺さって5体を封じていく

「これだけやっても今の状態じゃたいした時間稼ぎにはならないからさっさとやりますか」

カプッ

動きを封じたオオクワモンを尻目に自らの指を噛みそこから血を流しながら言葉をつむぐ

「“我が血をもって我にかけられし第5の封印を解き放ち今ここに力を解き放て”」

言い終わると同時に光が放たれ辺りを覆う

そして光が収まるとそこには姿は変わっていないが先ほどまで常に持っていたわけではない刀を黒い着物の腰につけたユウがいた

それと同時に柱が砕けてそこからオオクワモンが現れる。

「今度はさっきのようには行かないよ。だから・・・少しは耐えてね？」

「ガァァァァ！」

先ほどのユウの行動により頭に血が上ったらしく先ほどよりも鋭い一撃でユウに襲い掛かる

「シャァァァァ」

左右の腕についている鋏のようなものを使い連続で攻撃してくるオオクワモン

「・・・・・・」

それに対しユウは最小限の動きで空振りさせたときの衝撃さえ苦にせずにかわし続ける

「シャァッ！シャッ！シャァァァ！」

右、左と繰り出す攻撃をかわされながらもわずかにバランスを崩したところに頭を前に突き出しその強靭な顎の力でユウに噛み付こうとするがその攻撃は体を後ろにそらすことによってかわされそのまま両手を地面につけた形からバネのように跳ね上がりオオクワモンを蹴り上げる。

「ギャッ！」

しかしそこは完全体すぐさま体勢を整えて敵の方を向くのであった

だがユウは相手がこちらを向くわずかな瞬間に腰にあった刀に手をかけて言葉を紡ぐ

「蹴散らせ『群狼（ロス・ロボス）』」

そう唱えた瞬間先ほどまで黒かった着物は真っ白になりその両手には銃が握られていた

その光景にほんのわずかに動きを止めてしまうオオクワモン

当然そんな隙を逃すはずは無くそのまま銃を相手に向けて容赦なく引き金を引く

「“無限装弾虚閃（セロ・メトラジェッタ）”」

銃口から放たれるのは無数の青い閃光

その名のごとく無限とも思えるほどの光の奔流に敵はなすすべも無く飲み込まれていくだけであった。

銃撃が止んだ後そこにあったのは両手と左足が吹き飛び顎の鋏の部分も消え去っている完全に虫の息のオオクワモンの姿であった

そしてその近くにいるユウのところでは

「・・・よくあれで生きてられるな。ああ、ユウが加減したのか」

「まあね、最後はあれでとどめさそうと思ったからね」

「・・・敵に同情するぜ」

「行っておくけどここまでボロボロにしたのはあんたの力だからね。わかってるのスターク？」

「・・・」

今ユウと話しているの男の声の正体は『コヨーテ・スターク』先ほど使った『ロス・ロボス』の元々の使い手である

彼というか彼らは元々別な世界の人物であったがとある出来事によりユウの魂と一部が融合してしまいこのように会話したり力を使ったり呼び出したりできるようになってしまった。

「だんまりしちゃうんだ。まあ、いいやとりあえず力解除するから戻っておいて」

「へいへい、わかりましたよっと」

そのような会話をしていると先ほどまで白かった着物が黒く戻っていた

そのまま地面に倒れ付しているオオクワモンの前まで近づくと脇差ほどの長さしかない刀を向け

「卍解『神殺槍（かみしにのやり）』」

と、唱えると刀身がオオクワモンの体に突き刺さる

「ちょっとしつこかったけど楽しめたから最後は普通じゃない方法で殺してあげるよ」

そういって刺さっていた刀身が元の長さに戻る

しかしその刀身には近くで見ればわずかにだがかけているのがわかる

「この刀身の内側には相手を内部から破壊する毒があるんだよ。それじゃあね、“死せ(ころせ)『神殺槍』”」

「ガッ!?ギッ!?ジャァァァ!」

ユウは毒の影響で苦しむオオクワモンを気にせずみんなと合流するためにそのまま空に飛び上がる

※ちなみ戦いの様子はユウが神槍でオオクワモンを叩きつけた辺りから他のメンバーには見えていません

しかし、ユウが空に飛びあがった直後異変が起きる

ドゴォォォン

先ほどまでいた場所で起きたなぞの爆発

突然の出来事に驚きながらも爆発の起こった場所を見るがそこには何もいなかった

しかし、次の瞬間ユウは自分は動いていないのに視線がずれるのを感じた

「え？」

そんな気の抜けた声を上げた瞬間に目の前に移ったのは自分の体が上半身と下半身に分かれている状態であった

その後ろには４足歩行の体勢で背中から腕のようなものを生やし顎には３対の鋏のようなものを携えた先ほどまで戦っていたオオクワモンに酷似したデジモンだった

「・・・（なに・・あれ？）」

「オォォォォォッ！！」

そんな雄たけびを上げているデジモンと自らのパートナーデジモンが激突するのを見上げながらユウは落ちていくのであった

・・・ユウがロス・ロボスでオオクワモンを撃ち抜いてるちょうど

その頃選ばれし子供たちがいるところでは・・・

ドドドドドドドドドッ

「全くユウのやつ派手にやってるな」

「ほんとだね～ストレスでもたまってたのかな～？」

「ディアちゃんそれは何か違うと思いますよ？」

上から順にアル・ディア・翼である。

この3人（1人と2匹？）は激しい爆音の中でも平然と状況の推測をしている（推測なのは姿が見えないため）

ちなみにディアは翼に抱えられてます

他のメンバーはというと

まず選ばれし子供たちとそのパートナーは全員耳を塞いでアスカの上で丸くなってます

翼以外の守護者はというと綺羅とアリアは翼による仲裁のおかげで絶賛気絶中

藍はそんな2人の治療

零・アクア・クロエの3人は何故かダウト中

「・・・5」

「ダウト！」

「・・・残念」

「にゃーーー！？」

「本当にクロエはこのてのゲーム強いな～」

ついでにアクア絶賛連敗中

他の連中は無視してアルたちはというと

「それにしても時間かかってるな」

「そうだね～」

「きっと主様の悪い癖でも出てるのでしょう」

「仕方ない、俺ちょっと迎えに行ってくるよ」

「それなら私が行ったほうよくないでしょうか？」

「いやどうせユウのことだから帰りは自分で飛ばないだろうから運ぶ意味でも体でかい俺の方いいと思うんだ」

「それもそうですね。ではお願いしますね」

「いってらっしゃ～い、お土産よろしくね～」

「「いやすぐそこだから（ですから）」」

「てへっ♪」

そんなやり取りをした後アルはユウがいるとこに向かうために翼を広げて飛翔する

ユウのところに向かって少しすると銃声が止み森からユウが飛びあがってくるのが見えた

「お、いたいた。ユ！？」

どうやらたいした怪我も無いようで安心して声を掛けるがそれは次の瞬間起こった爆発によってさえぎられる

ドゴォォォン

「は？」

そして音が止んで再び前を向くとそこにはオオクワモンに似たデジモンが自分のパートナーが真っ二つにされ地面に向かって落ちていく瞬間だった

「ユウーーーー！！」

それを見た瞬間アルはパートナーの名前を叫びながら勝利の雄たけびのようなものを上げていた敵デジモンにむけゼロ距離から必殺技

を叩き込む

「Vウイング！ブレーーードーーー！」

必殺技は敵に直撃しそのまま森に向けて叩きつける

しかしアルはそんなのには目も向けずユウの元に飛び地面に落下寸前だった彼女を抱きかかえる

「ユウ！大丈夫か！死ぬんじゃない！」

上半身だけになったユウに向かって必死に呼びかけるアル。
だが怪我の状態は一般人ならどう見ても致命傷クラスのものである。
・・・あくまで一般人にはだが

「う・さ・、・・・とで、さけ・・い」

息も絶え絶えな状態で何とか声を上げるユウ

「っ！しゃべるな！今あいつのとこに連れて行くから！」

「わ・しに・・・れが・・か・いい、“イザナミ”」

ユウがイザナミと唱えると右目に縦に一本左右から斜めに一本づつの文様が浮かびそこから盾の線が消えるが何も起こらない

「クッ、・・切れ・・な・『聖母マリア』」

今度はまた別なことを唱えると頭上から光が降り注ぎそこからお話の中に出てくる聖母のような格好をした女性が現れる

「『聖母』呼びかけに答え参上しました。ってどうやらそのような事言っている場合ではないようですね。そこのあなた少し離れてくださいませ」

「わ、わかった」

流石のアルもあまりにも神々しいため少し萎縮している

「まったく、あれほど無茶はしないでくださいといいましたのに、こんな大怪我をして『彼のものの傷を完全に癒したまえ』」

女性がそういうとユウが光に包まれ真っ二つに分かれていた体が一瞬で元の状態に戻る

「すげぇー」

「ふぅ、たすかったよマリア。ありがとうね」

「それはいいですが力はすべて回復にまわしましたから今の状態じゃ何も残ってませんからね」

「わかってるよ。まだ敵もいるからそのまま封印も解除して、あなたならすぐできるでしょ？」

「はぁ、わかりました。けど無茶はしないでくださいね」

女性はそういってユウに手をかざしてなにやら呪文を紡ぐと消えたがそれと同時にユウから先ほど戦っていた時と同等の力があふれ同時に一対の翼が背中から現れた

その様子を見ながらアルは苦笑いしながら声を掛けてきた

「はは、相変わらずすごいな。それで？もう平気なのか？」

「うん、大丈夫。まあ、魔力とかは本来のこの段階の最大量の半分しかないけどね」

「いや、それでも十分だろそろそろ俺が吹き飛ばしたあいつも戻ってくるだろけどどうする？」

「もちろんお返しはしないとね。さっきは不意を突かれたけどもうへいｋ・・え？」

「ん？どうかしたのか？」

突然様子がおかしくなったユウに心配そうに声をかけるアル

そんなことをしているとアルに吹き飛ばされたあいつが戻ってきた

「ガァァァ！」

「チッ、戻ってきやがったかどうするユウ！」

「ごめん、ちょっとお願いしていい？」

「わかった！俺に任せろ！」

そういって謎の敵と向き合い少しにらみ合ったかと思うと次の瞬間には両者は激突していた

ギシギシ

敵はその強靭な顎をアルに向けて挟み込むように突撃しアルはそれを真正面から受け止める形で拮抗している

「うぉぉぉ！」

「シャァァ！」

少しの間続いた拮抗しかし敵はそれを破るために背中に生えている鋏を使いアルに攻撃を仕掛けようとする

「させるかーー！Ｖブレスアローー！」

それに対しアルは自身の１つ前の形態ブイドラモンの必殺技を近距離で放つことで距離をとろうとするが

「ガァァァ！」

「なに！」

敵はひるむことなくそのまま攻撃を放ってくる

まさか全くひるまないとは思っていなかったアルはわずかに反応が遅れてしまい攻撃はそのまま直撃するかと思われたがその直前にアルの背中に何かが乗り声が掛けられた

「よくも色々とやってくれたな、とりあえずの礼だ喰らっとけ！“千の雷”」

ほぼ0距離で放たれた1撃にいくら硬くとも耐えることはできず敵はわずかに距離を開けてしまう

「チッ、こめる魔力が足りなかったか」

「あ、あのユウ・・さん?」

先ほどと雰囲気が違うユウに恐る恐る声をかけるアル

「ん?どうかしたか?」

「もしかして・・・入れ替わった?」

「ああ、ちょっとあいつにイラッと来たから無理やり変わってもらった」

オオクワモン（仮）を指差しながらごく普通に応えるユウ?であった

「そんなことよりアル!あいつ狩るぞ。力落ちてないだろうな?」

「（ムカッ）　おいおい、誰に言ってるんだよ。そっちこそずっと引きこもってて腕なまってないだろうな?」

「上等だ!腕がなまってないとこ見せてやるよ」

そういってユウ?はにやりと笑うのであった

今この場にいるユウは確かにユウではあるが先ほどまでのユウとは違う存在
ユウという魂に宿る8つの原初の存在の1人である
それぞれに本来の名があるがそれはまたいつかのお話
ちなみにテンションが上がった時に口調が変わるのとはまた別

そしてユウが笑った瞬間に飛びかかってくるオオクワモン（仮）、しかし攻撃が届くことは無く

「人が話してる時に邪魔すんな！『咸卦法』“貫殺・居合い拳”」

逆にユウからカウンターをもらうがギリギリで横に避けることで多少えぐられるだけですんだが直後に上空から

「俺のことも忘れるなよ！」

という声とともに“Vウイングブレード”が襲い掛かって来るが今度は背中の腕で何とかガードする。

その様子を見ながらユウは次の攻撃の準備をする

「魔力・気・霊力・妖力・神力、5式同時融合！“咸卦法　無の型”！」

ユウが使う5つの力を1つに融合することによって強大な力の塊となって使用者を包み込む

「ｓｅｔ　ｕｐ」

そういった瞬間右手に白い銃、左手に黒い銃を握ったユウの姿があった

「魔力装填　『撃ちぬけ！必中せし魔銃（アイン・ベシュティムター・シュラーク）』」

ドドドドドン

一瞬のうちに放たれた６発の弾丸は様々な角度から敵に向かっていく、

そのうちの４発が敵の腕と背中の結合部に当たり、

残りの２発は胴体にわずかに空いていた甲殻と甲殻の間に突き刺さりその衝撃でわずかにだが動きが止まりアルの一撃を抑えていたガードも下がりそのまま攻撃が直撃し完全に動きを止めてしまう

「ガッ！？」

「アル！」

「おう！」

ユウの掛け声にあわせるように攻撃を加えたアルはすぐさまその場から飛び立つとその影から今度は左手に持った黒い銃を相手に向けているユウの姿があった

「『撃ち貫け！すべてを貫きし魔銃（ダス・アインディリンゲン）』」

白い銃に続き黒い銃からも６発の弾丸は先ほどとは違い銃口から真

っ直ぐにオオクワモン（仮）に向かっていく

その弾丸が相手に接触するとその場所から敵の肉体を抉っていく

「ギャァァァ！？」

予想外のダメージで思わず叫び声を上げる

その隙を2人は逃すわけがなくアルは一瞬のうちに相手の懐に入る

「おらっ！」

そして持ち前の脊力を使ってオオクワモン（仮）を蹴り上げその巨体を宙に浮かせる

その直後空中に先回りしていたユウが両手にそれぞれすべてが真っ黒な刀と真っ白な刀を振りかぶりそのまま切りつける

「我が力を吸いすべてを破壊せよ！『黒耀刀“雛桜”』！魔を調伏せよ！『白耀刀“白蓮”』」

振り下ろされた強烈な一撃は相手の羽の部分を切り落とす

しかし相手も今度はひるまずに逆に背についている腕をユウに向かって振るってくる

「チッ　そこから反撃してくるか！『守天』」

予想外の反撃にもあわてることなく左手に握っていた白い刀を瞬時に消し次の瞬間にはその手にナイフを呼び出していた

そのナイフは周囲に盾のようなものを展開して攻撃を防ごうとするがわずかに勢いを削ぐことしかできずあっさりと砕け散る

その隙にユウは身をひねり攻撃をかわすが完全には避けられず攻撃が左腕に直撃しいやな音を立てて骨が砕けていく

バキバキッ

敵の手はそれだけでは終らずもう1つの腕も使って追撃を行ってくる

「クッ！（体勢が悪くて雛桜じゃ攻撃はできても防御には使えない。だったら！）来い『マリィ』！」

その名を呼んだ瞬間雛桜が手から消え代わりに右腕から巨大な刃生えそのまま腕を振りぬいて迫ってきていた腕にぶつけて弾き飛ばす

衝撃で互いの距離は開くが敵はすぐに距離をつめようと身をかがめるがその前にアルが行かせまいと立ちふさがり両者は再び激突する

その様子を眺めながらユウは自分の状況を確認する

「（左腕は完全に折れてるな。強さとしてはアルと同等、すなわち究極体の下位から中位クラスってとこか・・・）とりあえず来な『アラストール』！」

そう言った次の瞬間に現れたのは身の丈ほどもある大型の刀であった

そして、それを構えながら相手に隙ができるのを待つ

ドゴッ　バキッ　バキッ

「オラオラオラッ！」

「シャァァァ！」

殴る殴る殴る！

腕を振るう振るう！

アルとオオクワモン（仮）は互いに壮絶な殴り合いを続ける

相手を殴り飛ばそうとするアルの拳と相手を切り裂こうとするオオクワモン（仮）の鋏が衝突し弾けあう

「チッ（威力は互角か、昆虫型だけあって甲殻は硬いな・・・ッ！この感じは！）」

その様子に思わずアルは舌打ちするが何かを感じ取り、敵との距離を一気に縮める

「オォォォォ！吹っ飛べーーー！！」

バキバキバキッ！

そして、相手の足を掴みその巨体を持ち上げジャイアントスイングの要領で振り回しそのまま勢いをつけて放り投げる

「ユウーーー！今だ！」

「さすがアルだ！俺がやることをわかってるじゃないか！神鳴流奥儀！“極大雷鳴剣”！」

ドガァァァン

オオクワモン（仮）に襲い掛かる巨大な落雷は倒すまではいかずとも高電圧な一撃によって相手の動きを一時的に封じる

「も1つおまけだ！神鳴流奥儀！“斬岩剣　参の太刀”！」

そう言うと刀から小さな球体が放たれ、一直線に敵に向かったかと思うと突如球体は広がっていき敵を包み込んだかと思うと内部で凝縮された気が一気に爆発する

「ラスト！神鳴流終の型！“四（死）の太刀　陽”！」

爆発による衝撃と煙が晴れる前に再び放たれた一撃は先ほどと違い最初から相手を包み込んだかと思うと一気に圧縮され球体の中に存在するものをすべて飲み込み破壊する

ドガァァァンッ！

あまりの衝撃に当たりは再び煙に包まれる

そんな中アルがユウに声をかける

「やったのか？」

「いや、かなりのダメージは与えただろうけど倒してないだろう」

「え？あれだけやってまだ生きてるのか？」

「まあ、見た目は派手だったけど元々“参の太刀”と“四（死）の太刀は”居合いからじゃないと本来の威力は発揮できないから上にその威力上に支える腕にもかなりの負担がかかるからこの折れた状態の左腕じゃ本来の威力は出ないんだよ」

「ああ、そうなんですか・・・」

色々な意味で呆れて声も出ないアルであった

ブワァァァッ！

「ガッ・・アアーー！」

そんな会話をした次の瞬間、煙が晴れそこから現れたのは甲殻のほとんどボロボロになり背中にあった腕も片方が消滅し顎の部分についてきた3対の鋏のうち2対が砕け散っている敵の姿であった

「やっぱり生きてたか」

「まあ、ボロボロだけどな」

「さて、そろそろ終らせるとするか」

「そうだな、とどめは任せるぞ！ウォォォォ！」

アルが声をあげ感情を急激に高まらせた瞬間、自らを構成する0と1のデータを高速で書き換えることにより爆発的なエネルギーが発生しその体を聖なる光が包み込む

「く・ら・え！ドラゴンインパルス！」

そのまま圧倒的スピードで突進し相手を地面に叩きつけたかと思うと次の瞬間には上空に敵もろとも飛び上がり空中に敵を放り出し何度も突進を繰り返す

その光景を眺めながらユウも準備を始める

「さてアルががんばってる間にこっちも準備するか・・・アリ・アル・アリス・カルテット　多重詠唱破棄“千の雷”×3　解放　固定・・・ふぅ、とりあえずこれは置いておいて・・・ハァッ！」

ゴキッ！

何の音かというとユウが折れた左腕を無理やりもとの方向に戻した音である。

「いっつ、あとは固定して痛み止めの魔法でも掛けて・・・よし、これでOKだ。あとは来い『破働弓』そして、装填“千の雷”×3」

さきほど固定しておいた千の雷を弓に装填し準備を整えると背にはやした翼をひときわ輝かせながらアルに向かって声を上げる

「アル！」

「了解だ！後は任せたぞ！」

そんなわずかなやり取りでアルはユウがすることを理解しオオクワモン（仮）をさらに上空に吹き飛ばし吹き飛ばした本人は一瞬のうちにユウの隣まで移動する

それをまってユウは折れた左腕を無理やり上空に向け構えると真名を唱える

「『穿て　破慟弓　フェイタル・アロー』」

その直後に上空に向けて放たれる強大な力の奔流
それは圧倒的速度で敵にぶつかり触れたものを消滅させた

シュウウウウ

ボキボキッ

その衝撃はすさまじくユウの折れていた左腕は再びありえない方向に曲がる

「つっ！？　流石にきつかったか」

そして１つの戦いが終わりみんなの元に戻る前に少し休息する２人

「いやーやっと終ったな」

「ほんとにな。てか今回の戦いってどう考えてもファイル島のボス

であるあいつと戦うよりも厳しいものだった気がするな」

「・・・否定できないな」

「あー疲れた。とりあえず戻ったら互いに藍に怪我治療してもらわないとな」

「そうだねー・・・あれ？」

「ん？どうかしたのか？」

「いやな、確か藍のやつ戻ってきた時に怪我してたらユウにお仕置きするって言ってた気が・・・」

「・・・・・・・・・魔力封印」

その一言でユウの背中に生えていた羽は消え去る

「ってユウ！？」

「俺はまた魂の奥底の方に戻るからあとよろしく！」

そういって目を閉じるとユウの雰囲気が先ほどまでと変わる

「うわぁ・・・ユウお気の毒様」

「ハッ！？ここは！？って左腕が痛い！？なんで！？どうして！？てか折れてる！？」

ユウは目を開けると左腕が折れていたことに驚きパニックに陥って

しまう

そんなユウに対して何があったか説明を始めるアル

「（古竜種説明中）」

「・・・それって私悪くないよね！？とりあえず私はお仕置き受けたくないからあの人を呼び起こす」

そういってユウは再び目を閉じて座り込む

・・・5分たったあとそこにあったのは地面に手をつけて“ｏｒｚ”のポーズをとっているユウの姿であった

「負けた・・・というか幻想空間とはいえ宝具全開の上に隙間のない魔力弾の奔流は酷いよ・・・グスッ」

「あー、ドンマイ。後悪いけど」

ガシッ

そういってユウを肩に担ぎ翼を広げるアル

「ちょっ！？何するの！？」

「いい加減みんなのとこに戻ろうと思ってね」

「待って待って待って！今の状態で藍のとこにいきたくないよーー！」

「あきらめてくれ」

「いーーーやーーーーー！！」

ユウの叫びもむなしくそのまま空を飛んで仲間の下に戻っていくのであった

戻った後にユウが藍からとてつもない折檻を受けたのは言うまでもない

可愛い顔して藍が最凶なのであった（ピチューン）

５万ＰＶ突破記念　番外編１－３　デジモン編　ただし投稿時点で１０万ＰＶ超

今回はユウがお仕置き中のため作者のみです

今回使った技などの元ネタ
天照・イザナミ：ナルト　イザナギではないのは使用者が女性のため
神槍・斬月・ロス・ロボス・その他縛道：ブリーチ
聖母マリア：私の救世主様
咸卦法・千の雷・神鳴流奥儀：ネギま
アラストール：灼眼のシャナ
マリィ：Ｄｉｅｓ
その他：オリジナル
・・・こうして書き出してみると結構使ったなー
詳しい説明は設定集に追加します。

ちなみに今回出てきたオオクワモン（仮）はオオクワモンＸです。
ぶっちゃけＸ戦は神殺槍の毒でＸプログラムの変わりにＸ化させたかったからです。ブリーチの藍染とギンのやり取りを参考にしました。

あとちょっとした裏話
当初の予定ではアルの出番はなくユウ１人ですべて戦う予定でした。
でもそれだとデジモン出した意味無いと思い最後はアルとのコンビで戦う風に書き換えました。・・・おかげで余計時間かかりましたがね。

今後の更新予定
設定集の追加↓新たに守護者用の設定集の追加
↓本編の模擬戦準決勝↓決勝

↓ユウとラウラの出会い
↓１０万ＰＶ記念
の予定です。

ちなみに１０万ＰＶ記念は確定が「ＩＳキャラで遊戯王やってみよう」です。
といっても決闘するのはＩＳキャラは一夏だけですがね。
他は遊戯王の原作キャラの予定で全４話です。

後考えてるのはユウが主役なのでＣ３編、デジモン編の続き、トリコ編、シャナ編、東方編、Ｆａｔｅ編、ＦａｔｅＺＥＲＯ編、なのは編（シリーズは未定）、ハンターハンター編、テイルズ編、のびハザ編、オリジナル編、ですかね。
そしてＡＣｆａのオリ主（首輪つきのことじゃないよ？）をＡＣｆａのキャラと一緒にＩＳの世界に放り込んでみたというありきたりな組み合わせです。
・・・書く時間なかったくせにネタだけは無駄にあふれてくる謎の現象（笑）

まあ、この辺はもし読者様の要望があれば書くといった感じになります。

こんなかんじですかね。
あ、感想書いて下さる方いれば私はテンションが上がります。

ではまた次回お会いいたしましょう。

設定集　守護者等（前書き）

はい、また投稿が遅れてしまいました。
本当にすみません

ちなみに今回は簡単に言いますとパソコンが・・・・・・・・・いかれました
それで修理に出したりバックアップとってなかったから必要なもの修復してたら時間かかりました
ちなみに私はパソコンそれほど詳しくないので余計時間かかりました
次回こそ早く上げれるようにがんばって行きますのでよろしくお願いします。

設定集　守護者等

守護者ならびに十刃一覧表

守護者

守護者について
全員女性（なのは組以外のメンバーについてはかなり昔に設定の枠組みを考えたためどうしてこうなったかはすでに忘れました）
全員やろうと思えば使う呪文はすべて無詠唱可能
作者が忘れていて設定が後々追加される可能性あり（ただし人数は増えない）

第一の守護者
夜天の守護者『リインフォース・アイン』

見た目：１８くらいになったユウで違いは眼が両目とも赤いこと
一人称：私
ユウの呼び方：ユウ
性格：ユウの敵になるものには容赦しないが味方には甘い
　普段は冷静なのだが暴走すると主であるユウを着せ替え人形にしたりいじり倒したりしてユウで遊ぶ人第１号（忠誠心？そんなのは鼻か（ｒｙ）
　あと若干戦闘狂

元は夜天の書の管制人格だが製作者のユウが死亡した時に一緒になってついてきた人その１

使う魔法は原作においてアイン自体が使ったものとはやて並びにリインフォース・ツヴァイが使った攻撃系の魔法を使用。だが他にも様々な世界を一緒に渡った関係で他の世界の魔法や技術などを多数覚えている

武器は杖のシュベルト・クロイツと夜天の書でそれを使った遠距離砲撃戦が得意

ユウとユニゾン可能な人第１号

ちなみにアインはユニゾンしてもユウに変化なし

あとユニゾンはユウ専用

第弐の守護者

鳳翼の守護者『翼』

見た目：２０代前半くらいで地面に届くか届かないかというほど長い金髪

一人称：私

ユウの呼び方：主様

性格：話し方は少し硬く冷静沈着

　暴走するとユウで遊ぶ人第２号

　自分には可愛い系が似合わないと思っているのでユウを使って満足している

風を司る守護者の１人でメンバーの中では参報的な役割を担っている

普段は冷静なのだが守護者の中では見た目的に一番の年上なのでそのことに関して触れると怒り狂う（主な犠牲者は綺羅とアリア）
みんなのお母さｎ（血塗られていて見ることができない）

リインフォース・アイン、ツヴァイ、アギト、藍以外の翼を含む６人の守護者は基になった動物の形態が存在する。なお動物の時は全員サイズ変更可能
翼が基にしたのは『鳳凰』で本来の姿は巨大な鳥である
小さくなったときは肩に乗る程度の大きさの鳥になる

戦闘においては通常時は風を主体にした魔法や技を使っていく
また、上記のように動物を基にした者たちにはそれぞれの基にした動物と同じ形をした機械（機獣）を持っていて解放時はその機獣を武器に変え戦う

機獣の形：鳳凰
名前：鳳翼機
武装：大型の鎌
さらに解放すると普段の風の力に加え若干の炎の力と風と炎を組み合わせた爆発の力を使うことができる

第参の守護者
黒の守護者『クロエ』

見た目：２０歳くらいで黒髪黒目で長さは肩にかかるかかからないか程度

一人称：我
ユウの呼び方：主
性格：寡黙であまり必要以上のことはしゃべらないが守護者以外に対する面倒見はいいほう。守護者に関しては色々とあきらめている。
ユウに対する忠誠心はとても高い
かなりの戦闘狂
他のメンバーのように暴走はしないが止めもしない人

重力と地の力を使用する守護者（ただし地に関してはおまけ程度）
ここにおける重力は単に重量の操作を行うだけにはとどまらず引力並びに斥力までも操ることができる

基になった動物は大型の黒い狼
小さくなると見た目犬だが本人は気にしていない

戦闘においては重力系の魔法を使用することができるが本人は接近戦の方が得意である
自身を軽くしてスピードを上げたり、攻撃が当たる瞬間に重さを操作して威力を上げたり、敵の攻撃を斥力で弾いたりと色々と酷いただし同系の能力者には無意味

機獣の形：黒い狼
名前：黒狼機
武装：両手首に装着される形の大型の鉄球

第四の守護者
闇の守護者『零』

見た目：１８歳くらいで髪は紫で長さは肩に少しだけかかっているくらい
一人称：私
ユウの呼び方：ユウ様
性格：普段はどこかやる気がなく、だるそうにしているがやる時はやるタイプ
　こんなでも忠誠心は高い

闇と雷を使用する守護者
ユウの使う闇の魔法のように完全雷化はできないが思考加速並びに反射速度の強化などは力を使用している間は常に行われている

基になったは豹
小さいと見た目は黒猫（猫って可愛いと思います）

戦闘時は一撃離脱で相手の隙を突いていくスタイル

機獣の形：豹
名前：黒豹機
武装：大型の槍

第五の守護者
水氷の守護者『アクア』

見た目：１５歳くらいで水色の髪に長さは背中の真ん中くらいまで
で普段はポニーテールにしている

一人称：私
ユウの呼び方：マスター
性格：普段は冷静だが苦手なものを見ると全力で叩き潰す（例：蜘蛛とかＧとかｅｔｃ・・・）

水と氷を使用する守護者
水と氷は互いに互換性があり、水を氷にしたり氷を水にしたりが可能

基になったのは小型の蒼白い狼
最初から小型のため見た目犬と変わらない

戦闘時は空気中の水分を操って攻撃または空気中の水分を直接凍らせることで相手の動きを止めたりしてから攻撃をする
水辺においてはそのすべてが武器となる
さらにやろうと思えば相手の体内の水分並びに血液を操作することも可能

戦闘以外にも血液を精製して藍と共に怪我人の治療を行うことが可能

機獣の形：大型の蒼い狼
名前：蒼狼機
武装：２丁の銃
武装時の銃は銃口から直接攻撃を放つこともできれば任意の空間から放つことも可能

第６の守護者
蒼天の守護者『リインフォース・ツヴァイ』

見た目：ＶｉＶｉｄに出てくる姿と一緒
一人称：リイン
ユウの呼び方：ユウちゃん（本編より変更修正済み）
性格：ＶｉＶｉｄと変わらず

ユウが作ったユニゾンデバイス第２号
位置的にアインの妹
なのは本編とは違いアインと同時製作
夜天の書が攻撃魔法を扱うなら蒼天の書は補助系や捕縛系の魔法を専門として扱う

戦闘時は蒼天の書を浮かばせて戦う
しかしその魔法特性により攻撃はせず完全に後方支援専門になっている

第七の守護者
焔の守護者『綺羅』

見た目：１０歳くらいで髪は腰くらいまで伸びた金髪
一人称：私
ユウの呼び方：ユウ様
性格：明るく元気一杯で表裏はほとんどない
　少しばかり猪突猛進型

焔を扱う守護者

基になった動物は九尾の狐
小さいときの尻尾は１本のため普通の狐と変わらない
ちなみに動物時はユウの頭の上に乗る権利をめぐり毎回アリアと喧嘩する

同じ守護者のアリアとは大体喧嘩する仲ではあるが思いもしないところで息が合うことが多々ある
ユウのことになると翼たちとは別の意味で暴走する人第１号

戦闘時はその小柄な体系を生かしてすばやい動きで敵を攻撃していく

機獣の形：九尾の狐
名前：狐王機
武器：両手に装着されるタイプの鋭い爪
武器を使用すると焔の色が赤から蒼に変わり威力がさらに上がる

第八の守護者
光の守護者『アリア』

見た目：１０歳くらいで髪は腰くらいまで伸びた銀髪
一人称：私
ユウの呼び方：お姉ちゃん
性格：綺羅とほとんど同じ性格

光を扱う守護者
ただし回復と自らの体を光として光速で移動などはできない

もとになったのは白い豹

同じ守護者の綺羅とは喧嘩が絶えないがその理由は実は同属嫌悪に近い
というか人間時の姿かたちは綺羅とアリア共にそっくりで違いは髪の色と呼び方、後は基になった動物くらいである
これは姉妹という形で人間時の体を作られたからである
また性格もほとんど同じなため喧嘩にばかりなる
ユウはどうしてこんなに喧嘩ばかりするのかと頭を悩ませている
ユウのことになると翼たちとは別な意味で暴走する人第2号

戦闘時のスタイルは綺羅と変わらない

機獣の形：白い大型の豹
名前：白豹機
武器：両手に装着される形になる手甲

第九の守護者
剣の守護者『アギト』

見た目：ＶｉＶｉｄに出てくる時と同じ
一人称：ワタシ
ユウの呼び方：姉御
性格：ＶｉＶｉｄと変わらず

ユウの作ったユニゾンデバイス第3号
なのは本編とは違いほかの2人のユニゾンデバイスと同時開発

魔法はあまり使えないが様々な剣や武器を扱うことができる
戦闘時は様々な世界の武器たちを使って接近戦を主体に戦っていく

第十の守護者
癒しの紡ぎ手『藍』

見た目：１４歳くらいで髪は黒のロング
一人称：私
ユウの呼び方：お姉ちゃん
性格：引っ込み思案で人見知りで心優しい
扱うのは癒しと守りの力（ただし傷は癒せるが失った血液までは回復しない）

守護者の中の唯一の良心にして実は守護者最強な娘
怒らせてはいけない人Ｎｏ．１

戦闘においては完全な後方支援型だが真の力を解放すると守護者の中では最強になる

武器：？？？（攻撃用）
　　？？？（防御用）
　　？？？（回復用）

？？？（藍が守護者の中で最強である所以の力）

十刃

設定
十刀とユウの出会いは原作とは違うＩＦ設定なブリーチの世界である
性格が違う人がいる
基本みんな見た目は人間と同じで体に穴は開いていない
身体能力や帰刃に関しては原作と変わらない（能力は一部のキャラが変わっている）
普通に現界は全員可能
ユウを呼ぶ時はほとんどのメンバーが呼び捨て
ユウは十刃の能力を顕現させることも可能

今回の設定では変更点のみ書き出し並びに出てきたメンバーのみ

第１十刃
コヨーテ・スターク

見た目・性格共に原作とおおきな変更は無し
普段並びに戦闘時にはやる気のない言動が見えるが油断はしない

帰刃：『群狼（ロス・ロボス）』

解放すると狼のコートを羽織り両手に拳銃を持っている
原作との相違点はリリネットがいる必要がないところと2丁拳銃で打ち出せるものに黒虚閃（連射可能）が加わっているくらいである

全く予定にない番外編　衝動に駆られてついやっちゃいました　コードギアスの

タイトルのとおり急にコードギアスの話を書きたくなって書いちゃいました

本編？全く進んでおりません（キリッ　（っておい！）

次の話の内容とかは頭に大体できてるんですけど何故かコードギアスを書けという啓示がありまして・・・ああ、ごめんなさい！石投げないでー！

そ、それではどうぞー

神聖ブリタニア帝国

その国は巨大な繁栄を極めた帝国である。
そこは後の歴史に様々な名を残す者を善悪問わず多数輩出した偉大な帝国である。

神聖ブリタニア帝国９８代皇帝にして、「不平等においてこそ競争と進化が生まれる」という持論を持ち世界の３分の１を支配した『シャルル・ジ・ブリタニア』

「行政特区日本」の設立を唱えながらも式典の会場に集まった日本人を虐殺したとされる「虐殺皇女」『ユーフェミア・リ・ブリタニア』

神聖ブリタニア帝国第９９代唯一皇帝にして世界征服を成し遂げた後公の場で殺害された「悪逆皇帝」『ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア』

「悪逆皇帝」の妹ながらも兄の死後、話し合いによって世界に平和をもたらそうとした人物『ナナリー・ヴィ・ブリタニア』

・・・だが、これから紡がれる物語は同じ世界に起こったことだが本来の歴史とは違った流れを歩む可能性を持った１つの小さな物語である

物語の始まりは神聖ブリタニア帝国が世界の3分の1を支配する時代よりもはるか昔、本来なら存在するはずのなかった1つの小さな奇跡がきっかけで紡がれていく

今は荒れ果ててしまった大地

そこは数日前まで優秀な王が治め美しい城下町には王や王の家族、民の笑顔や笑い声の絶えることがなかった場所であった

しかし今では美しい城下町は破壊され、もはやこの土地には生きる者など誰もいないといっても不思議では無いほどの人々の死体で埋め尽くされていた

このような惨劇が起こった理由はほんの少しの運命のいたずらだったのかもしれない

この国の王は若くして王位に付いたが元から持っていた才覚とカリスマ、そして特異な力によってすさまじいスピードで領地を安定させていった。

青年の願いは自らの家族（大切な人）が安心して暮らせるようにするというありきたりだが誰もが持っているだろう当然の願いであった

しかし、そんな優秀な王であったが特異な力を手に入れた代償なのか神の悪戯なのかはわからないが青年にたった一つにして最大の惨劇が降り注いでしまう

青年が１７のとき、青年が治める土地にはとある蛮族がたびたび攻めてきていた

そして、惨劇の引き金が引かれてしまう

たびたび攻めてくる蛮族たちはその日全勢力を持って彼の土地に攻め入ってきていた

そこで彼は王として兵士たちの前に立ち、これから行われるであろう全面戦争に向けての演説を行った

その内容は避難のために城に来ていた民たちにも聞こえるものであったが最後の一言を言った事により彼を取り巻くすべてが変わってしまう

「今城に攻めてくる蛮族たちを皆殺しにしろ！」

この一言を言い放った直後あたりは一瞬だけ静まり返ったが

『オォォォォォ！！』

すぐに雄たけびを上げてこの演説を聴いていたすべてのものが我先にと戦場に向かって走り抜けていく

その中には青年が守ると誓った母と妹の姿のあった

「ま、まて！何故兵士以外の民まで戦場に向かっていくんだ！？ま、まってくれ！みんなーーーー！」

青年の叫びもむなしくすべての者は戦場に向けて走り去ってしまった

その後を青年は追いかけるが戦場で見た光景はすさまじいもので声を失ってしまうほどであった

あるものは武器を取り敵に切りかかる

またあるものはその辺にあるものを武器として手にもち敵を攻撃する

明らかに兵士とは思えない者達が戦場で武器を振るう様に敵も最初は呆然と眺めていたがすぐさまハッっとし反撃を行っていく

当然兵士でもなんでもない民たちは勝てるはずもなく次々と切り裂かれていく

しかし人々は腕だろうが足だろうがいくら切り落とされようと関係

ないといわんばかりに敵にむかっていく

武器がなければ素手で、その素手も使い物にならなくなったら今度は口を使って敵を皆殺しにするために向かっていく

その光景はまさに地獄絵図と言ってもいいものであっただろう。

そしてこの戦いが終ったあとその場にいるのはただ呆然と立ち尽くすしかできない青年だけであった・・・

それからしばらく経ち

「なんでだ！どうしてこんなことになった！」

ドンッ　ドンッ

ただ1人生き残った青年は地面に拳を叩きつけてただこの惨劇を嘆いていた

「これは私への罰だとでもゆうのか！？応えろ“〇〇”ーーー！」

ザリッ

青年がそういうと先ほどまで誰もいなかったはずの場所に1人の少年が現れ彼に話しかける

「残念ながらそれは違うよ、これは罰でもなんでもない。強いて言

うなら・・・運が悪かっただけだよ」

淡々と応える少年・・・しかし、少年の瞳はどこか悲しげな色をしていた

そんなことに気がつくこともなく青年は言葉を投げかける

「偶然？この惨劇が偶然だとでもいうというのか君は！！」

視線だけで人を殺せそうな眼で少年を睨みつける青年

しかし残念ながら目の前の少年は不老不死であった

「そうだよ、残念ながらこの惨劇が起こったのは君の“ギアス”が暴走してしまったからなんだよ・・・」

「私の・・・ギアスが・・・暴走？」

“ギアス”とは様々な異能の力が発揮する王の力である

発現するギアスは人によって様々であり、その人物の心のあり方によって変わるとも言われている

しかしその力には代償が存在し使い続ければ力のＯＮ・ＯＦＦができなくなってしまう

そしてこの青年に発現したのは「絶対尊守」の力

これは青年の声を聞いたものに１度限りだがどのような命令でも下すことができるものである

これによって青年は王となったのだが
皮肉にも同時にこの力によって今回の惨劇を引き起こしてしまったのである

告げられた事実に再び呆然とする青年

「僕もちょっと予想外だったんだよ。まさか、こんなタイミングで暴走を起こすなんて思ってなかったからね。それで?君はこれから一体どうするんだい?」

呆然とする青年にこれからどうするのかと問いかける少年

「わ、私には、もう・・・生きる意味が・・・ないよ。だから○○。頼むから私を殺してくれ」

自らの生きる意味を失ったから殺してくれという青年

しかし、少年はそんな言葉を無視するように告げる

「だめだよ。そんなのは許さない!君には僕との契約をまもってもらわ無いといけないんだからね」

「し、しかし私はもう・・・」

「そんなの関係ないよ」

断ろうとする青年にそれは許さないと告げる少年
そして次に告げられたのは予想外の言葉だった
「だから君には・・・時が来るまで眠ってもらうよ」
「え？」
唐突に告げられた眠ってもらうという言葉に唖然とする青年
「いっておくけどこれは決定事項だ。というわけで早速だけど・・・お休み」
「まっ！？」
バタッ
少年が手をかざすと青年は急に倒れ、深いとても深い眠りについてしまう
そして次の瞬間には青年の姿は霧のように消えてしまった
その様子を見ながら少年は
「ごめんね。でも君が次に目覚める時はきっと君を必要としてくれる人たちがいるはずだから新しい生きる目標を見つけてくれることを親友として僕は祈ってるよ」
優しげな微笑を浮かべながら空に向かって言葉を投げかけると荒野

を歩いていくのだった・・・

今ここに「狂王」は眠りに付きはるか未来において彼らは再び出会うことになるのであった

少年が青年を深い眠りに付かせた後しばらく荒野を歩いていく

「やっぱり生存者はいないみたいだね。1人くらい生き残ってるかとも思ったんだけど無駄足だったみたいだね。帰ろうかな」

そういって少年が踵を返そうとした時背後から物音が聞こえた

カランッ

「!?　生き残り?いや、きっとただの風だね。」

そのまま移動を再開しようとするが再び聞こえた音に思わず振り返る

カラッ　カラッ　コロンッ

「!　風じゃない!?生き残りか!」

そのまま急いで音の発信源に向かって走っていく少年

そして、死体をどかし生存者の確認をすると、そこにいたのは・・・

「っ！この子は！生きていたのか！？」

黒い髪の7，8歳くらいの少女が生きも絶え絶えながらもなんとか生きていたのであった

～～～とある民家～～～

少年が少女を助け出し自らが住んでいる家に運び入れてから1時間ほど経っていた

「本当に驚いたね。まさか、彼の妹が生きているとは思わなかったよ・・・これは悪いことしたかな？」

少女の正体は先ほど少年が眠りに付かせた「狂王」の実の妹で先の戦いで他の人たちと共に死んでしまったと考えていたからである

「しかも、どういうわけか・・・ギアスまで発現してるし」

この家に運び込まれた時の少女は瀕死の状態だったが今ではたいした治療を行っていないにも関わらずに命に関わる傷は消え去ってしまっているのである

「まあ、これからのことは彼女がおきてからかな」

そういって少年も眠りの世界に落ちていくのであった

・・・・・数日後

少女が目を覚ましたため今まで起こったことを説明していると不意に少女からお礼を言われた

「ありがとうございます」

「なんだい急に？」

突然お礼を言われたことに疑問を感じる少年

ちなみに助けてもらったお礼はすでに聞いているので彼に思い当たるものは無いそのためお礼の理由を聞くと

「お兄様を助けてくれたことだよ」

と返してきた。

「助けたんじゃない。彼は僕と契約してるから勝手に死なれちゃ困るからだよ」

「あはは、そういうことにしておくね。それに、生きていてくれるならそれだけで私は嬉しいんだもん」

「（まるで、僕の心の奥がのぞかれてるみたいだね、さすが彼の妹かな？）それで？君はこれからどうするんだい？」

少し照れくさそうにしながらこれからの方針についてたずねる少年

それに対して少女は・・・

「そうだね～。それに関してはお願いがあるんだけど・・・」

「お願い？」

「うん。お願いはね・・・・・私もお兄様と同じように眠りに付かせて欲しいということ」

「え？」

まさかのお願いに思わず呆然としてしまった少年

そんな彼にお構いなしに少女は告げる

「お母様がすでにいないのであれば私にとってはお兄様がすべてなの。だから、お兄様に合える可能性があるならそれに賭たいんだ」

「・・・眠りについても彼と同じ時代に目覚めるとも限らないし、下手したら一生寝たままの可能性もあるんだ。それでもかい？」

「うん」

そう応える彼女の眼には８歳とは思えないほどの力強さが宿っていた

それを見て少年はため息をつきながらも応える

「はぁーー。本当に君たち兄妹は変なところで似てるね。わかった、ただしその傷が治ってからだよ？」

「ありがとうーー。大好きだよーー！」

そういいながら抱きついてくる少女

「まってくれ！そんなことされると君の兄に殺される！」

「あははー」

「確信犯か！？」

このあと少女は傷を治し兄とは別の、遺跡では無いが特別な力が働いている場所で彼女を眠りに付かせるのであった

その近くにただ一文

“この子の眠り覚ますもの彼女の幸せを願うものであらんことを”

という文章を残し。

本来の歴史において現れることのなかった2つの存在により本来の物語がどのように変わるか知る者は誰もいない

しかし、その存在は小さいながらも物語に確実な変化を与えるであろう

２つの存在が眠りに付いた時はるか未来
神聖ブリタニア帝国　帝都　ペンドラゴン　謁見の間

そこには3人の人影があった

1人は神聖ブリタニア帝国第９８代皇帝『シャルル・ジ・ブリタニア』

もう1人は大柄な男で帝国最強の騎士“ナイトオブワン”の称号を持つ『ビスマルク・ヴァルトシュタイン』

最後はそんな2人の前で目覚めたばかりの黒髪の少女

「目覚めたか。自分の名前はわかるか？」

「・・・サクラ」

今このときより新たな歴史の1ページが刻まれるのであった。

全く予定にない番外編　衝動に駆られてついやっちゃいました　コードギアスの

というわけでギアス編でした。

今までロスカラのライさまを主人公にしてきた作品はあれどまさかその妹を無理やり参戦させた作品は無いでしょう。

まあ、資料が存在しないので完全にオリキャラなんですけどねｗｗ

ちなみに予告って書いてますが連載するかは微妙です（というかＩＳ書かないと）

まあ、気晴らしにやる可能性は否めませんが（ＩＳ×ＡＣｆａの方も書きたいなー）

あ、ちなみにギアスの話だけで言うと何故か最終決戦までの戦闘シーンの大まかな設定は頭にあります。

ただし文才がないので文にしようとするとかなり時間がかかるというｗｗ

というわけで次回こそは本編更新・・・・・・できたらいいな～

では、感想とかまってまーす

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5881s/

魂を縛られし者　IS編

2011年11月29日02時02分発行